THE KAIZO

改造

七月号

1922

星より星への通路

賀川豊彦著

第十二版

エメラードの如く、清く透徹した氏の詩筆を通じて、宗教的感激を語り、人生を語り、惱み多き青春の憧憬を大地に愬へ、蒼天に輝く星と隔てなく語る。そのふくよかな章句は慈母より餞せらるる愛餅の如く、我々の腦裏に一句、一字も洩れる所なく溶け込む。本書は「死線を越えて」の別篇の如く、傍篇の如きものであれば「死線」の讀者は必讀して戴きたい有益にして滋味に富める書籍です。初夏の天地に本書の生誕は慥に意義ある清凉さを人生に齎らし得ることでありませう。

◇◇定價金貳圓◇◇書留送料金拾八錢◇◇

東京芝愛宕下町一ノ一

◇改造社◇

振替東京八四〇二番



サンエスの文具國

萬年筆の名稱は記憶し難いほど多くあります其中で群峰を抽んずる富岳の如く聲價も信用も嶄然として聳ゆるは**サンエス**であります麗はしきその名よ！世に普ねき其高き譽れよ！

筆の王者サンエス

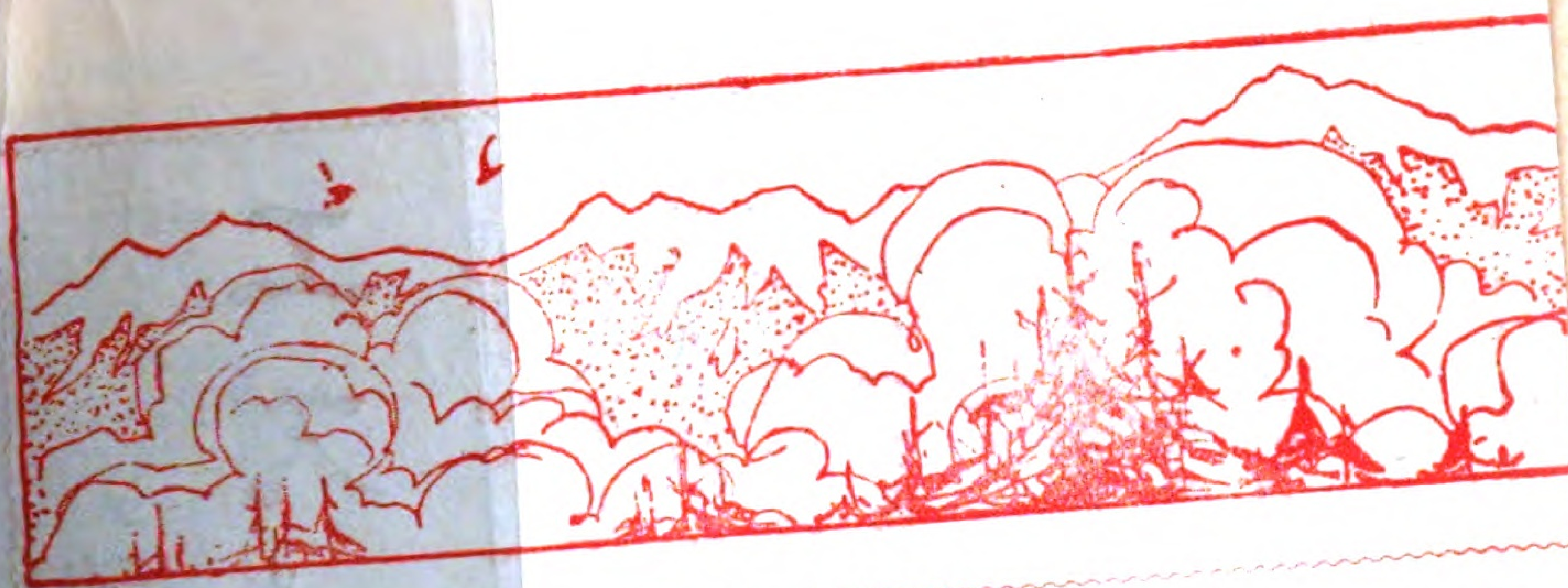
東京～～細沼株式會社～～大阪

福岡―名古屋―金澤―札幌



改造七月號目次





超然内閣批判

創作

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

賀川豊彦著

死線を越えて

厨川

賀川豊彦氏の『死線を越えて』と『太陽を射るもの』を讀む。藝術品といふよりは、むしろ藝術品の maixm であり素材であると云ふ感じがする。眞の藝術品とするには、まだあの上に滿身の力をこめた磨きをかけ、精錬を加へねばならぬ。しかし私はあの書物が數百版を重ねて、多くの人々の心に、情熱と感激とを傳へ得た事を深く喜ぶべきだと思ふ。酒を飮んでぶら〳〵して遊惰の日を送つてゐる小說家が、小手先きの器用で書きあげた作品よりも、生活そのものを眞劍な藝術としてゐる人の提供した素材やヌトリクスの方が、より多く人の心を動かすのは當然なことだ。唯だあの『死線を

ガンヂイと眞理の把持

文學博士 鹿子木員信
饒平名智太郎

印度革命の靈ガンヂ
ガンヂ評傳及其思想と運動

改造社編

燃ゆるが如き熱情と、鐵火辭せざる勇氣を以つて印度三億の生靈を率ゆるガンヂの至高至純の生活は全く神靈の實在に就ての感激を深からしめる、彼はレニンと共に世界に於ける二大人傑だ、彼が「眞理の把持」によりて人類を率ゆる勇氣、誠實、正義は全く人類の到達し得る最高、最遠の基本愛だ。

第六版

◇四六版上製函入◇
◇定價貳圓卅錢◇
◇送料拾九錢◇

改造社

◇東京芝區愛宕下町◇
◇振替東京八四〇二◇



══((改造七月號))══

總理大臣と町役人との話

國民の殆んど總てが、高橋内閣の倒潰に、加藤内閣の成立に冷々たるは、それはなぜでらうか、我々はその理由のある所を審に研究して、民心の歸處に深甚の注意を拂はねばなるまい、そこには議會政治に對する失望と、現實政治家に對する何等の期待と興味なきに依るものである。

加藤内閣の成立に、獵官者と、その一族の緣邊者外にどこの誰が、萬腔の熱意を以つて迎へたらう。

我等は第二黨たる憲政會に、政權が赴かなかつたことを以つて非立憲とか、憲政の逆轉とか云ふほど間ぬけではない、それは今の政黨者流が何等、人とか、社會とかを憂ふるお人柄でないことをあまりに信じ過ぎるからである、黨利、私利のほか皆目分らぬ連中だからである。民衆からは夙くの昔見離されておることを知るが故である。

それから、秉公持平とかの延長に似た現内閣を、ありがたくも頂戴して不平もなげなる國民を見てはその不見識さに驚かされる。

仲繼内閣――[illegible]院内閣――選擧までの内閣――官僚内閣――と稱せらるゝだけ新味なき現内閣にかけるお信心、お願は唯の一つもないが、錦を妻妾に誇り得る、ただそれのみを以つて滿足する大臣がありとすれば、その人一人は眞に幸福かも知れぬ。

我々は、華族内閣とも稱すべき人々によりて、どれ程の仁慈の雨が陋巷に濺ふかを考へるとき、始めて自分には眞の人間の血が流れていたことを氣強くさせた。今の大臣連にそんな思ひに心を痛める殊勝人がいるだらうか。

殆んど總ての大臣が、小さき局長とも見ゆるとき、我々はその人に國士らしき期待を繫ぐことの襟度なきを憾むゝのである。

内閣が更つたからとて、我々には町役場の傭書記が交迭したときの響しか與へぬ、傭書記が交迭したとて仰山に喋ぐこともあるまい。我々は、我々の躍動すべき天地が、日一日と近づきつゝあることを意識すると共に、又彼等の天地が刻々蹙まつて行くことをヒシ〳〵と心に感じさせる。



嘘の効用

末弘嚴太郎

一

吾々は子供の時から、嘘を言ふてはならぬものだといふことを、充分に教へ込まれて居ます。恐らく、世の中の人々は——一人の例外もなくすべて——嘘は言ふてはならぬものと信じて居るでせう。理由は兎も角もとして、何となく皆さう考へて居るに違ひありませむ。「嘘」と云ふ言葉を聞くと、吾々の頭には直ぐに、「狼が來た〳〵」と屢々、嘘をついた爲め、段々と村人の信用を失つて、終には本統に狼に喰はれて仕舞つた羊飼の話が自然と浮び出ます。それ程、吾々の頭には嘘を言つてはならぬと云ふことが、深く深く教へ込まれて居ます。

所が、それ程深く刻み込まれ、教へ込まれて居るにも拘らず、吾々の世の中には嘘が澤山行はれて居ます。已むを得ず言ふ嘘、已むを得るに拘らず言ふ嘘、密かに言はれ陰に行はれて居る嘘、大つぴらに行はれて居る嘘、否時には法律に依つて保護された――從つてそれを否定すると刑罰を受けるやうな恐しい――嘘までが、堂々と天下に行はれて居る程、此の世の中には、種々雜多な嘘が無數に行はれてます。

實を言ふと、全く嘘をつかずに此の世の中に生き長らへることは、全然不可能なやうに此の世の中が出來て居るのです。

其所で、吾々お互に此の世の中に生きて行きたいと思ふ者は、此等の嘘を如何に處理すべきか、と云ふ極めて重大な而かも頗る困難な問題を解決せねばなりませむ。何にしろ、嘘をついてはならず、さらばと云ふて、嘘をつかずには生きてゆかれないのですから。

二

私は法律家です。ですから、專門たる「法律」以外の事柄については――坐談でならば兎に角――公に、さも先覺者乃至專門家らしい顏をして、意見を述べる氣にはなれませむ。法律家は「法律」の範圍内に止まる限りに於てのみ「專門家」です。一度其範圍を越へると直に「素人」になるのです。無論「專門家」だからと云ふて絶對に「素人考」を述べてはならぬと云ふ法はないでしやう。けれども、その際述べられた「素人考」は特に「專門」のない普通の「素人」の意見と何等擇ぶ所はない。否、「專門」と云ふ色眼鏡を通して、物事を見勝ちであるだけ、其意見は兎角一方に偏し易い。從つて普通の「素人」の意見より反つて實質は惡いかも知れない位のものです。而かも世の中の人々は、不思議にも「專門家」の「素人考」に向つて不當な敬意を表します。普通の「素人」の「素人考」よりは大にプレスチージュを有つ譯

です。例へば、世の中には無名の八公熊公にして、演劇に關する立派な批評眼を供へて居るものがいくらも居ます。所が、何々侯爵とか、何々博士とかが少し演劇に關して「素人考」を述べると、世の中は直にやれ劇通だとか、芝居通だとか云ふて變に敬意を表し、本人もいゝ氣になつて堂々と意見を公表などします。侯爵や、博士の癖に芝居のことも人並に解る珍しい男だと云ふ位ならば兎も角、其男がさも「專門家」らしい顏をして「素人考」を臆面もなく述べるのを聞くとき、又、世の中の人々が之に特別の敬意を表するのを見るとき、私は全く不愉快になります。かくの如きは、實に一種の「不當利得」に外ならないと私は考へてます。併し世の中の「專門家」はとかく此點を間違へやすい。世の中の人々も、普通に其同じ間違を繰返へして「專門家」の「素人考」を不當に尊敬します。私は全く變だと思ひます。

私は法律學者です。ですから「法律」及び「學問」についてだけは兎も角も「專門家」として意見を述べる資格があるのです。だから今玆に「嘘の効用」と題して嘘を如何に處理すべきかと云ふ問題を考へるにしても、議論は無論之を「法律」及び「學問」の範圍内に限りたいと考へてます。一般の道徳乃至教育等に關する問題として、如何にも「玄人」らしく意見を述べることはどうも私の柄ではありませむ。

「法律」の上で、又「學問」一般について、「嘘」は善かれ惡かれ色々の働きをして居ます。それを考へて見ることは、獨り「法律家」にとつてのみならず、一般の人々にも可成り興味あることだと思ひます。殊に私は、私の「法律」及び「學問」に對する態度を明かにするが爲めには、此「嘘の効用」に付いての、私の考へを述べることが極めて重要であり、少くとも大に便利だと考へて居るのです。それが、私の此稿を起すに至つた主たる動機です。

三

私は先づ法律の歴史の上に現はれた色々の「嘘」を二三例示したいと思ふ。そうして其「嘘」が實際上如何なる働き

をしたかを考へて見たいと思ひます。

法律とか裁判とか云ふことを考へると、吾々は、直きに大岡越前守を思ひ起します。そうしてかれこそは、裁判官の理想、名法官であると考へます。今日吾々の世の中に行はれて居る裁判が兎角人情に適しないとか、人間味を缺いて居るとか、又裁判官が沒常識だとか、化石して居るとか云ふやうな小言を耳にする度に、吾々は大岡裁判を思ひ起します。そうしてあゝ云ふ人間味のある裁判が欲しいと考へます。

然らば、大岡越前守がかくの如くに賞讃され、否、少くとも講談や、口碑にまで傳へられるほど、其昔に於て人氣があつたのは、果して何故でしやうか。私は、不幸にして此點に關する學問的に精確な歷史的事實を知りませぬ。所謂、大岡政談の中に書かれて居る事實のすべてが、眞に大岡越前守の業績であるかどうかに付いて、毫も正確な智識を持つて居ませむ。併し、私にとつてそれはどうでも差支ないのです。縱令、あの話の全部が大岡越前守の眞實行つた仕事ではないとしても、あれが所謂大岡政談となつて今日にまで傳はつたと云ふことは、如何に當時の人々が、あの種の裁判を歡迎したかを明かに證據立てるものです。ですから、私が今之れから云ふ所の、大岡越前守は實は大岡政談に現はれた大岡越前守を指すのであつて、それが歷史的眞實と合致するや否やは毫も私の意としない所です。

大岡越前守の裁判は、何故に人情の機微を穿つた名裁判だと云はれるのであらうか。一言にして云ふと、それは「嘘」を上手につき得た爲めだ、と私は答へたいと思ひます。嘘は善い事だとか、惡い事だとか云ふ論は暫く別として、大岡越前守が嘘つきの名人であつたことは事實です。そうして上手に嘘をつき得て褒められた人です。大岡政談を讀むで御覽なさい。當時の法律は、如何にも嚴格な動きのとれないやかましいものであつた。それをビシ〳〵嚴格に適用すれば、萬人を戰慄せしむるに足るだけの法律であつた。而かも當時の裁判官はお上の命令である所の法律を濫りに伸縮し

て取扱ふことは出來ぬ。法律は動くべからざるもの、動かすべからざるものであつた。此法律の下で、人情に合致した人間味のある裁判をやることは極めて困難な事柄です。而かも大岡越前守はそれを敢てしたのです。而かも瀆職にもならず、世の中の人々にも褒められながらそれをやり得たのです。

然らばどうしてそれをやり得たか。其方法は「嘘」です。當時の「法律」は嚴格で動かすことが出來なかつた。法を動かして人情が適合することは不可能であつた。其所で大岡越前守は「事實」を動かすことを考へたのです。ある「事實」があつたと云ふことになれば、「法律」上必ず之を罰せねばならぬ。さらばと云ふて罰すれば人情にはづれる。其際裁判官の採り得べき唯一の手段は「嘘」です。あつた「事實」をなかつたと云ひ、なかつた「事實」をあつたと云ふより外に方法はないのです。そうして大岡越前守は實にそれを上手にやり得た人です。

併し、之と同じ手段に依つて裁判の上に人間味を現はしたのは、獨り大岡越前守のみに限るのではなく、恐らく到る所の裁判官は——無論時代に依り場所に依つて多少程度の差こそあれ——皆均しく同樣の手段を採るものゝやうに思はれます。例へば、ローマの如きでも、畸形兒を殺した母をして殺人の罪責を免れしむるが爲めに裁判官は屢々 monstrum の法理を應用したと謂はれて居ます。

ローマでは、縱令人間の胎から生まれたものでも、それが畸形兒で充分人間の形を備へて居ない場合には、法律上稱して monstrum（鬼兒）と云ひ、之に與ふるに法律上の人格を以てしなかつた。此考はローマに於ては極めて古くから存在したやうであるが、後のユスチニヤン法典中にも法家パウルスの意見として Digestorum Lib. I. Tit. V. de statu hominum L. 14 中に收められて居る。所で或る母が子を生むで見るとそれが醜い鬼子である。そう云ふ子供を生かして置くのは家の恥辱でもあり、又、本人の不幸でもあると考へて、母は密に之を殺して仕舞つた。やかましく理屈を云へ

ばそれでも矢張り一種の殺人には違ひない。併しさらばと云ふて其母を殺人の罪に問ふことは裁判官の人間として到底堪え難い所である。社會的に考へても極めて愚なことです。其處で裁判官は何とかして救つてやりたい、其救ふ手段として考へ付いたものが、此 monstrum の法理です。母は子を殺した。併し殺したのは人にあらずして monstrum であつた。從つて罪にはならぬ。と、かう云ふ理屈を以て憐むべき母を救つたのだと云ふことです。

今日の發達した醫學の目から見れば「人」の胎から「人にあらざるもの」が生まれる譯はどうしてもあり得ないのでしやう。併しさらばと云ふてローマ人は馬鹿だ、無智だと笑つて仕舞ふのは野暮です。成る程、それは不合理でしやう。併し兎に角之れで人の命が救はれたのです。そうして當時の人は多分其裁判官を賞讃したに違ひありませむ。又吾々は、徳川時代の御目付役は「見て見ぬ振をする」を以て大切な心得として居たと云ふことを聞きます。合理的にやかましく云へば、苟も犯罪を發見した以上、御目付役としてはすべて之を起訴せねばならぬ譯です。所が、それを一々起訴すれば反つて世人は承知しない。其結果「見て見ぬ振をする」即ち「嘘をつく」を以て御目付役の美徳(?)とされて居たものです。所が此同じことは獨り舊幕時代にのみ限らず、明治大正の世の中にも行はれて居る。刑事訴訟法が今年改正になりました。其以前には特に明かな規定がなかつたに拘らず、學者の多數は所謂「便宜主義」O,portunitätsprinzip と稱して、犯罪を起訴するや否やは檢事の自由裁量に一任されて居るものだと主張し、司法官も亦其考を實行して居たのです。「便宜主義」と名を付ければ如何にも嚴しくなるが、實を云ふと御目付役の「見て見ぬ振をする」のと同じことです。所が今度の新刑事訴訟法第二七九條では遂に之を法文の上に現して「犯人ノ性格、年齢及境遇並犯罪ノ情狀及犯罪後ノ情況ニ因リ訴追ヲ必要トセザルトキハ公訴ヲ提起セザルコトヲ得」と規定するに至つた。謂はゞ「嘘」を公認した代りに「嘘つき」の規準を作り、其結果「嘘から眞」が出來た譯なのです。諸君は試みに司法統計の中「要

見殺」の部を開けて御覽なさい。今の檢事が此點について如何に多く「見て見ぬ振り」をして居るかを發見されるでしやう。

四

英米の法律には「名義上の損害賠償」nominal damages と云ふ制度があります。一體損害賠償は、讀むで字の如く、實際生じた損害を賠償させることを目的とする制度ですから、縱令權利侵害があつても、實際上何等の損害がなければ損害賠償の義務は發生しない譯です。其所で、例へば我國に於ては、甲が乙の所有地内に無斷で侵入した場合に、乙から損害賠償請求の訴が起されても、其無斷侵入の結果事實乙が何等の損害をも蒙つて居なければ、不法行爲の成立要件を缺くものとして乙は敗訴せざるを得ない。無論唯合理的に考へれば、乙には何等の損害もないのだから、之が賠償を求むべき何等の權利なきは當然である。けれども、甲が乙の權利を侵害したと云ふ事實だけは確實です。其點に於て甲は惡いに違ひないのです。ですから權利侵害はあつたが何等の損害がないからと云ふ理由で敗訴し、其結果名目上兎に角敗けたと云ふことになり又同時に、敗訴者として訴訟費用を負擔せしめられることは、乙にとつて極めて不愉快なことに違ひありませむ。乙は「賠償はとれずともいゝ。併し敗けたくはない」と、かう考へるに違ひないのです。此際若しも名目上だけでも乙を勝訴たらしめることが出來たら、彼れはどれだけ喜ぶでしやう。

英米法の「名義上の損害賠償」は實に此場合に於ける乙を救ふ制度です。苟も權利侵害があつた以上、其所に必ずや何等かの損害がなければならぬ。其損害の象徴（シムボル）として裁判所は被害者に例へば金一錢を與へるとする。そうすれば被害者は縱令金額は一錢でも兎に角勝訴したことゝなり、名目上は勿論實利的にも訴訟費用の負擔を免れると云ふ利益がある。實際損害の立證は立たぬ。併し權利侵害があつた以上必ず損害があつたものと看做して、それを一錢と云ふ有形物

の上に象徴する所が此制度の妙味であつて、「嘘」の効用の著しい實例の一つです。

現在、我國の法學者は一般に偏狹な合理主義に捉はれて「損害なければ賠償なし」と云ふ原則を絶對のものと考へ、「名義上の損害賠償」の如きは英米獨特の不合理な制度、到底吾國に移すべからざるものだと考へて居ます。けれども若しも吾國に此制度が行はれることになつたならば、法律を知らぬ一般人の裁判所に對する信頼はどれだけ増大するであらうか、又不法行爲法がどれだけ道徳的になるであらうか、私は切にさう云ふ時期の至らむことを希望して居るのです。併しそれには先づ一般法學者の頭腦から偏狹なる合理主義を驅逐して、もつと深奥い「合理に依つて合理の上に」出づる思想を植付けねばなりませむ。

五

次に、歐米諸國の現行法は大體に於て協議離婚を認めて居ませむ。離婚は法律で定めた一定の原因ある場合にのみ許さるべきもので、其原因が存在しない以上は縱令夫婦相互の協議が成立しても離婚し得ないことになつて居るのです。此點は我國の法律と全く違つて極めて窮屈なものです。併し如何な西洋でもお互に別れたいと別れ話の決つた夫婦が、さうおとなしく附着き合つてる譯がありませむ。如何にバイブルには「神の合せ給へる者は人これを離すべからず」と書いてあつても、お互に別れたいものは別れたいに決つてます。其所で、夫婦の間に別れ話が決まると、お互に隱し合はせて計畫を立てた上、妻から夫に向つて離婚の訴を起します。裁判官が「何故に？」と訊く。妻は「夫は彼女を虐待せり、三度彼女を擲てり」と答へる。すると裁判官は被告たる夫に向つて「汝は原告妻の云ふ所を認むるや？」と訊く。其處で、夫は「然り」と答へる。かくすることに依つて裁判官は欺かれて、離婚を言渡す。若しくは事實の眞相に付いて疑念を抱きつゝも尙離婚の判決を下すのである。ですから、西洋でも實際に於ては當事者双方の協議に依つて離婚が

行はれて居る。而して其際使ふ道具は一種の「嘘」一種の芝居です。

法律は人間の爲めに存するものです。人間の思想社會の經濟的需要、其上に立つてこそ初めて法は眞に行はれるのです。嘗ては、社會の思想や經濟狀態と一致した法であつても、其後社會事情が變はると共に法は事實行はれなくなる。又立法者が社會事情の眞相を究めずして無暗な法を作つた所が、それは事實到底行はれない。離婚は惡いものだと云ふ思想が眞實社會に現存して居る限り、協議離婚禁止の法律も亦嚴然として行はれる。併し一度其思想が行はれなくなると、法文の上には如何に嚴重な規定があつても、實際の需要に迫まられた世人は「嘘」の武器に依つてどんどんと其法律を潜る。其極こと甚しきに至れば法あれども法なきと同じ結果に陷るのです。

同じことは官吏の責任の硬化現象からも生じます、役人と雖も飯を食はねばなりませむ。妻子も養はねばなりませむ。矢鱈に免職になつては妻子と共に路頭に迷はなければなりませむ。或る下級警察官吏が偶々或る場所を警戒する任に當つて居た。其際一人の無法な男がをどり出て爆彈を懷中し爆發遂に自殺したと假定する。成程、其男の場所柄をも辨へない無法な所作は、非難すべきものだとしても、偶々、其場所で警戒を命ぜられて居た役人をして絶對的の責任を負はせる理由はない譯です。其役人が責任を負ふや、否やは其役人が具體的な其場合に於て、警備上實際に懈怠があつたかどうかに依つて定まるので、偶然其場所に居合はせたと云ふだけの事實を以て絶對的に定まるものではない。所が、現在吾國に行はれつゝある官吏責任問題の實際は此點が極めて形式的に取扱はれては居ないであらうか。停車場が雜踏した場合に、驛長が如何に氣をつけても中には突き飛ばされて線路に落ちる人もあらう。其際驛長が最善の注意を怠らなかつたとすれば、彼には何等の責任もない譯です。責任は偶々其突き飛ばした人乃至は雜踏の原因を作つた人々にある譯です。然るに今の實際では其際驛長なり、驛員なりの中から必ず所謂「責任者」を出さなければ濟まさないのではないで

じやうか。

責任は、自由の基礎の上に初めて存在する。規則に依つて人の自由を奪ふとき、最早其人の責任を問ふことは出來ないのです。然るに、萬事を規則づくめに取扱ふ役所なり、大會社なりは使用人の責任までをも規則に依つて形式的に定めやうとします。其結果責任は硬化し形式化して全く道德的根據を失ひます。

所が、役人も生きねばならぬ。妻子を養はねばならぬ。其役人が自由を與へらるゝことなしに責任のみ形式的に之を負擔せしめらるゝとき、彼等は果して默して其責任に服するであらうか。否、此際彼は必ずや形式的責任の發生原因たる「事實」を僞り「事實」を隱蔽して、責任問題の根源を斷たうとするに決まつて居ます。即ちかれは「嘘」をつくのです。

右の例を引いた私は、決して最近吾國に起つた何等か具體的の事件について具體的の判斷を下した譯ではありませむ。併し、現在吾々が屢々「官吏の嘘つき」と云ふ事實を耳にするのは本途です。若し、それが事實とすれば、其根源の何れにありやを考へることは重大問題ではないでしやうか。私は其原因を「責任の硬化」にあるのだと考へます。

親が全く子の要求を聽かずに、親の考へ通り嚴重に育て上げやうとすれば子は必ず「嘘つき」になります。

六

以上に述べた二三の例を見たゞけでも、「嘘」が法律上如何に大きな働きをして居るかゞ解るでしやう。

先づ第一に、大岡裁判の例やローマの monstrum の話を聞いた方々は、法制が餘りに嚴重に過ぐる場合に「嘘」が如何に人を救ふ効能のあるものであるかを充分理解されたことゝ思ふ。さうして、如何な正直者の諸君も、成程「嘘」も中々馬鹿にならぬと感心されたに違ひありませむ。殊に、一國内の保守的分子が優勢な爲めに、法令が移りゆく社會

人民の傾向を充分に追隨することが出來ず、其結果「社會」と「法令」との間に溝渠が出來た場合に「法令」をして兎も角も「社會」と調和せしむるものは唯一「噓」あるのみです。世の中ではよく裁判官が化石したとか、沒常識だとか申します。併し、如何に化石し如何に沒常識であつても兎も角「人間」です。美しきを見て美しと思ひ、甘きを食つて甘しと思ふ人間です。ですから、眼のあたり被告人を見たり、其云ふ所を聽いたり、色々と裏面の事情などを知つたりすれば、「法」は如何あらうとも兎も角「人間」としてあゝ處分せねばならぬから裁判せねばならぬと考へるのは、裁判官の所爲として正に當然のことだと云はねばなりませむ。其際、若しも「法」が伸縮自在のものであれば兎も角、若しもそれが嚴重な硬直なものであるとすると、裁判官は必ず「噓」に助けを求めます。あつた事をなかつたと云ひ、なかつた事をあつたと云つて、法の適用を避けます。さうして「人間」の要求を滿足させます。それは是非善惡の問題ではありませむ。事實なのです。裁判が「人間」に依つて爲されて居る以上永久に存在すべき事實なのです。

又、役人の噓つきの例を聽かれた方々、西洋の離婚の話を讀まれた方々は、「法」は現在多數の人々殊に司法當局の人々が考へて居るやうに、萬能のものではないと云ふことを充分に氣付かれたことゝ思ふ。「法」を以てすれば何事をも命じ得る、風俗道德までをも改革し得ると云ふ考は、爲政者の兎角抱き易い思想です。併し「人間」は彼等の考へる程、我慢强く、且從順なものではありませむ。「人間」の出來得ることには大體限りがあります。「法」が合理的な根據なしに其限度を越えた要求をしても、人は決して安々とそれに服從するものではありませむ。若しも其人が、意思の强固な正直者であれば「死」をし賭しても「法」と戰ひます。又若し其人が利巧者であれば——之れが多數の例だが——必ず「噓」に救を求めます。そうして「法」の適用を避けます。ですから、「法」が無暗と嚴重であればある程、國民は噓つきになります。卑屈になります。「暴政は人を皮肉にするものです」。併し暴政を行ひつゝある人々は、決して國民の「皮肉」や「噓

つき」や「卑屈」を笑ふことは出來ませむ。何故なれば、それは彼等自らの招く所であつて、國民も亦彼等と同様に生命の愛すべきことを知つて居るのですから。

兎に角、「法」が一度社會の要求に適合しなくなると、必ずや其處に「嘘」が効用を發揮し初めます。事の善惡は後に之を論じます。併し兎も角それは爭ふべからざる事實です。

七

人間は大體に於て保守的なものです。そうして同時に規則を愛するものです。馬鹿々々しい程例外を嫌ふものです。例へば、茲に一の「法」があるとする。所が世の中が段々に變つて其「法」に當てはまらない新事實が生まれたとする。其際執らるべき最も合理的な手段は、其新事實の爲めに一の例外を設くることであらねばならぬ。それは極めて明かな理屈である。併し人間は多くの場合其合理的な途をとらうとしない。何とかして其新事實を古い「法」の中に押し込まうと努力する。それが爲め事實を曲げること——即ち「嘘」をつくこと——すら敢て辭しないのである。

ですから法律發達の歴史を見ると、「嘘」は實に法律進化の仲介者たる役目を勤めてるものであることが解ります。英國歴史法學派の創始者 Sumner·Maine は其名著「古代法」の中に於て、又獨逸社會法學派の鼻祖 Ihering は不朽の大著 羅馬法の精神」中に於て、此事實を指摘して居ます。そうして幾多の實例を古代法律の變遷現象中に求めて居ます。併し此現象は決して獨り人智未開な古代にのみ限つた事柄ではありませむ。文明が進歩して極めて合理的に思惟し行動し得るやうになつたとうぬぼれて居る近世文明人の世の中にも、其事例は無數に存在するのです。

例へば「過失なければ責任なし」と云ふ原則は、ローマ法以來漸次に發達して殊に第十八世紀末葉此方、全く確立するに至つた原則です。現に、我民法にも歐米諸國の法律に於ても此原則が明かに採用されて居ます。けれども、最近物

質文明の進歩、大工業の發達と共に、使ふ本人にとつては極めて便利ではあるが他人にとつては極めて危險な厄介な品物が可成り澤山に發明されました。又一般文化施設の必要上どうしても使はねばならぬ——否少くとも使へば便利ではある——が其結果兎角他人に損害を與へ易いものが澤山發明されました。自働車、汽車、大工場、貯水池、瓦斯タンクの類が即ちこれです。此等の品物は極めて便利です。けれども、同時に危險なものです。殊に此等の品物の利用に因つて損害を與へられた人々が、從來の「過失なければ責任なし」との原則に從つて、自ら加害者の「過失」を立證するにあらずむば損害賠償を求め得ないものだとすると、多數の場合に事實上賠償請求の目的を達することが出來ない。例へば、先日深川で瓦斯タンクが爆發した。會社は不可抗力だと稱し、被害者は會社の過失だと云ふ。若しも被害者が損害賠償を請求したければ會社の「過失」を立證せねばならぬと云ふのが、從來の原則です。併しタンクは爆發して既に、跡形もない今日被害者は果してそんな立證が出來るでしやうか。それは全く不可能であるか、又は少くとも極めて困難です。而してそれは自働車に依つて轢き殺された人、貯水池の崩壞によつて殺されたり財產を失つたりした人々にとつてすべて全く同じことです。其所で近世の社會は從來の「過失責任主義」に對して「無過失賠償責任」の原則を要求するに至つたのです。

立法者としては適宜に其新要求を容るべき新法令を制定すべき時が來たのです。「過失」のみが唯一の責任原因ではない。其外にも賠償責任の合理的原因とするに足るべき事例がある。それを基礎として正に新しい法律を制定すべき時が來たのです。學者は動きました。立法者も多少動きました。獨逸を初め諸國に於て制定された自働車責任法は其實例の一です。けれども諸國の立法者が遲疑して進ます、又獨逸の學者が紙上に無過失責任論を戰はせて居る間に、事實上一大躍進を遂げた者は佛蘭西の裁判所です。

佛蘭西の裁判所は、本來主觀的であるべき「過失」の觀念を客觀化せしめました。此れ〳〵の場合には當然過失あるものと客觀的に決めて仕舞つて、主觀的な本來の意味の過失如何を問はなくなりました。無論口では「過失」と謂つてゐます併し其所謂「過失」は實は「違法」と云ふことゝ大差なくなりました。かくして獨逸の學者が、正面から堂々と無過失責任の理論を講究し論爭してる間に、佛蘭西の裁判所は無言の裡に其同じ目的を達して仕舞ひました。而して其際使はれた「武器」は即ち「嘘」です。佛蘭西の裁判所は「嘘」を武器として新法理を樹立したのです。

同じことは吾國現在の裁判官も屡々之を試みます。其最も顯著な一例は、去る大正九年九月一日の大審院判決に現はれた事實です。事件の大要は次の通りです。或る人が妻子を故郷に遺して渡米したが、充分に金を送つて來ないので、妻は他人から二三十圓の金を借りて生計の用に當てた。然るに貸主が返金を請求した所、妻は「民法第十四條に依ると妻は夫の許可を得ずに借財をするを得ないのだから」と云ふて借財契約を取消して返金を拒絶した。此場合民法第十七條に列擧した事由の何れかが存するならば、妻は夫の許可を得ないでもいゝ。從つて右の契約は取消し得ないことになるのだが、生憎と本件に付いてはさう云ふ事情もないので、形式上はどうも妻の言ひ分を採用せねばならぬやうであつた。所が裁判所は「夫ガ出稼ノ爲ニ、妻子ヲ故郷ニ殘シテ遠ク海外ニ渡航シ、數年間妻子ニ對スル送金ノ途ヲ絶チタルガ如キ場合ニ在リテハ、其留守宅ニ相當ナル資産アリテ生活費ニ充ツルコトヲ得ルガ如キ特別ノ事狀ナキ限リハ、妻ニ於テ一家ノ生活ヲ維持シ子女ノ教養ヲ全ウスルガ爲メニ、其必要ナル程度ニ於テ借財ヲ爲シ以テ一家ノ生計ヲ維持スルコトハ、夫ニ於テ豫メ之ヲ許可シ居リタルモノト認ムベキハ條理上當然ニシテ、斯ク解シテ始テ其裁判ハ悉ク情理ヲ盡シタルモノト謂ハザル可カラズ」と云ふ理由で、妻を敗訴せしめた。此場合、妻が許可を得て居ないのは事實なのです。併し得て居ないとすると、結果が惡い、と云ふ譯合で、裁判所は「許可」を擬制して仕舞つたの

です。即ち事實許可はないのだが、表面上之れありたる如くに裝ひ、それを飾るが爲めに「條理上當然」とか「悉ク情理ヲ盡」すとか云ふやうな言葉を使つたのです。此判決が出たときに、我が國自由法運動の最も熱心な代表者たる牧野博士は「之れこそ民法第十七條の例外が裁判所に依つて擴張されたものだ」と解され、之と反對に吾國に於ける佛蘭西法派の大先輩たる富井博士は之を難じて「第十七條の例外が擴張されたのではない、裁判所は事實許可があつたと云つて居るのだ」と言はれた。吾々は此小論爭を傍觀して、其所に外面に表はれた文字や、論理の以外に、兩博士の心の動き方を見ることが出來たやうに思はれて非常に興味を感じたのです。「見て見ぬ振りをする」フランス流の扱ひ方と、それを合理的に扱つて進化の階梯にしやうと云ふ自由法的の考へ方との對照を見ることが出來たのです。

八

かくの如く、歷史上「嘘」は可成りの社會的効用を呈したものであります。現在も亦同じ効用を現はして居るものと考へることが出來ます。それは人間と云ふものが、自らは極めて合理的だとうぬぼれてるに拘らず事實は案外不合理なものだと云ふことの證據です。

併し純合理的に考へると、「嘘」はいかぬに決つてます。あつたことをないと謂ひ、なかつたことをあつたと云ふのは極めて不都合です。ですから、一般に極めて合理的であり、從つて一切の「虛僞」や「妥協」や「傳統」を排斥せむとする革命家は、殆ど常に「嘘」の反對者です。法律制度として一切の擬制を其中から排斥しやうとします。其例は今度のロシヤの勞農革命後の法律に付いて多く之を見ることが出來ます。例へば、一九一八年九月十六日の露國法律に於ては養子制度の全廢を規定しました。而して其理由書には「親子法に於ては、我等の第一法典はあらゆる擬制を排斥して、眞實ありのまゝの狀態、即ち實際の親子關係を直ちに表面に現はした。之れ單に言葉によつてのみならず、事實に依

つて人民をして眞實を語ることに慣れしめ、彼等を各種の迷信から解放せむが爲めだ」と云はれて居るさうです。ですから、法律の中に「擬制」が澤山使つてあることは合理的に考へて餘り喜ぶべき現象ではなく、寧ろ其所に法律改正の必要が指示されてるものだ、と考へるのが至當です。併し人間が案外不合理なものである以上、「擬制」の方法に依つて事實上法律改正の目的を達することは極めて必要なことです。イーエリングは上記の「羅馬法の精神」中に於て此眞理を言ひ現はすが爲め「眞實の解決方法未だ備はらざるに先立つて擬制を捨てよと云ふのは恰も松葉杖をついた跛行者に向つて杖を棄てよと云ふに均しい」と云ひ、又「若しも世の中に擬制と云ふものがなかつたならば、後代に向つて多大の影響を及ぼした羅馬法の變遷にして、恐らくはもつて遙か後に至つて實現されたものが少くないであらう」と云つて居ります。

併し、「擬制」が完全な改正方法でないことはイーエリングも認めて居る通りです。「擬制」の發生は寧ろ法律改正の必要を、否法は既に事實上改正されたのだと云ふ事實を暗示するものとして、之を進歩の階梯に使ひたいのです。殊に嘘つきには元來法則がありませむ。ですから、裁判所が此方法に依つて世間の變化と法律との調和を計らうとするに際して、若しも「嘘」のみが其唯一の武器であるとすれば、裁判所が眞に信頼すべき立派な理想を持つたものである場合の外、世の中の人間は到底安心して居ることが出來ませむ。假りに又眞に信頼すべき立派な理想の持主であるとしても、之のみに信頼して安心せよと云ふのは、名君に信頼して專制政治を許容せよと云ふに均しい考です。フランス革命の洗禮を受けた近代人がどうしてか能く之を受け容れましやう。彼等は眞に信頼し得べき「人間以外」の或る尺度を求めます。保障を求めるのです。

更に又、若しも法が固定的であり、裁判官亦硬化して居るとすれば、法律の適用を受くべき人々自らが「嘘」をつく

に至ると上述の通りです。而して之れが決して喜ぶべき現象でないことは明かです。子供に「嘘つき」の多いのは親の頑迷な證據です。國民に「嘘つき」の多いのは、國法の社會事情に適合しない證據です。其際、親及び國家の採るべき態度は自ら反省することでなければなりませむ。又裁判官の此際採るべき態度は、寧ろ法を改正すべき時が來たのだと云ふことを自覺して、愈々其改正完きを告ぐるまでは「見て見ぬ振り」をし「嘘」を「嘘」として許容することでなければなりませむ。

九

人間は「公平」を好む。殊に多年「不公平」の爲めに苦み抜いた近代人は何よりも「公平」を愛します。「法の前には平等たるべし」。之れが近代人一般の國家社會に對する根本的要求です。而して所謂「法治主義」は實に此要求から生まれた制度です。

法治主義と云ふのは、豫め法律を定めて置いて萬事をそれに從つて切り盛りしやうと云ふ主義です。謂はゞ豫め「法律」と云ふ物差を作つて置く主義です。所が元來「物差」は固定的なるを以て本質とするものです。「伸縮自在な物差」それは自家撞着の觀念です。例へば、ゴムで出來た伸縮自在の物差を使つて布を賣る呉服屋があるとしたら、恐らく何人も之を信用する人はないでしやう。同じやうに國家に法律があつても、若しもそれが無暗矢鱈に伸縮したならば、國民は必ずや據るべき所を知ることが出來ないで、不平を唱へるに決まつてます。

所が、それ程「公平」好きな人間でも、若しも「法律」の物差が少しも伸縮しない絶對的固定的なものであつたとすれば、必ずや又不平を唱へるに極まつてます。人間は「公平」を要求しつゝ同時に「杓子定規」を憎むものです。從つて一見極めて矛盾した我儘勝手なことを要求するものだと云はねばなりませむ。併し、假りにそれが實際に「矛盾」で

あり「我儘勝手」であるとしても、人間はかくの如きものなのだから仕方がありませむ。而して人間が斯くの如きものである以上、其所に行はるべき法律は其「矛盾」した「我儘勝手」な要求を充し得るものでなければなりませむ。何故なれば、吾々は空想的な「理想國」の法を考へるのではなくて、現實の人間世界の法律を考へるのですから。

然るに、從來法を論ずる者の多數は人間を解してかゝる「矛盾」した「我儘勝手」なものだと考へて居ないやうです。其結果、彼等の或る者は、苟も人間が「法の前に平等」たらむことを希望する以上同時に伸縮自在の「法」を要求してはならぬと主張する。而して現存の「法」が或る具體的の場合に之を適用すると普通の人間の眼から見て如何にも不當だと思はれる場合でも、「それは法である適用されねばならぬ」と云ふ一言の下に其の法を適用して仕舞ふ。其態度は如何にも勇ましい。併しかくの如くに勇ましくも斷行した冷くして固きこと鐵の如き彼等は、果して内心に何等の不安がないでしやうか？　否、彼等も亦人間です。美しきを見て美しと思ひ、悲しきを聽きて悲しと思ふ人間です。必ずや、かくして人を斬つた彼等の心の中には「男の涙」が流れて居るに違ひない。若しも流れて居ないならばそれは「人間」ではありませむ。「法」を動かして「裁判」を製造すること恰も肉挽器械の如きものたるに過ぎませむ。我々はかゝる器械をして「人間」を裁くべき尊き地位に在らしむることを快しとしませむ。

然らば、心中「男の涙」を流しつゝ斷然人を斬る人々は如何？　私は其人の志を壯なりとする。併しながら同時に之を愚なりと呼ばなければなりませむ。何故なれば、若しも「法」が全く伸縮しない固定的なものであり、又之を運用する人間が之を全然固定的なものとして取扱つたとすれば、世の中の「矛盾」した「我儘勝手」な人間は必ずや「一體法は何の爲め何人の爲めに存するのか？」と云ふて「法」を疑ふでしやう。そうして其中の正直にして勇氣ある者は「法」を破壞しやうと計るでしやう。又彼等の中の利巧にして「生」を愛する者共は密かに「法」を潜らうと考へるで

しやう。「法」を潜つてゞも「生」きなければなりませむから。

彼等の中の正直にして勇氣ある者は能く「嘘」をつくに堪えませむ。「嘘」をつく位ならば「命」を賭しても「法」を破壞しやうと考へます。彼等は「嘘」をつかずに生きむが爲めに又子孫をして「嘘」をつかずに生きることを得しめむが爲めに「法」を破壞せむと計ります。而して「法」を固定的なものとして考へ、固定的なものとして取扱はむとする人々の最も恐れてる「革命家」は實に此種の「正直にして勇氣ある人々」の中から出るのです。

又それ程正直でないか、又は勇氣のない多數の利巧者は「嘘」をついて「法」を潜らうと計ります。「法」が固定的で、或る事柄が「有」る以上必ず適用されねばならぬやうに出來て居る以上、「有」を僞つて「無」と云ふ以外「法」の適用を免れる方法はない。「生」を熱愛する人間の此方法に救を求むる、事や實に當然なりと謂はねばなりませむ。「法」を固定的なものとして考へ固定的なものとして取扱はむとする人々はかゝる結果を好むのでしやうか？ 否、彼等の最も憎み嫌ふ所でなければなりませむ。併し彼等が如何に憎み嫌つても「生」を熱愛する人々の「嘘つき」を止めることは事實上不可能です。彼等が此否むべからざる人生の大事實に氣がつかないのだとすれば、それは極めて愚だと謂はねばなりませむ。

大河は洋々として流れる。人間が其河幅を狹めむとして右岸に鐵壁を築く。水は鐵壁に突き當つて之を破り去らむとする。而かも、事實それが不可能なことに氣付くとき水は轉じて左岸を衝く。そうして其軟い岸を蹴破つて滔々と流れ下る。此際右岸の鐵壁上に眠りつゝ太平樂を夢む者あらば、誰か之を愚なりとせぬ者があらうか。世の中に「自由法」なることを主張するものがあります。そうして又「自由法否なり」として絶對的に之に反對する人もあります。其「反對」する人々は大河を塞き止め得た夢を見て自ら「壯美」を感ずる人々です。而かも實は左岸の破り去られつゝあるこ

とに氣の付かない人々です。それ等の人は、すべからく書齋を去り赤煉瓦のお役所を出でて、現實を現實として其生まれたまゝの眼を以てありのまゝを直視すべきです。たいして骨を折ることは要りませむ。直に對岸の破壊せられつゝあるのに氣が付くでしやう。所が彼等の中にも利巧者があります。口では「法は固定的なものだ」と主張しつゝ實際上之を固定的に取扱つて「壯美」を味ふだけの勇氣のない人々です。彼等は、從來の傳統(トラヂイシヨン)乃至獨斷(ドグマ)に捉はれて口先では法の「固定」を說きます。併しそれを行ひの上に實現することが出來ない。然らば彼等は其矛盾した苦しい瀬戸際を如何にして潜り抜けるか？　其際彼等の使ふ武器は常に必ず「嘘」です。

無論、裁判官——殊に保守的分子の優勢な社會又は法治國に於ける裁判官——が、かゝる態度を採ることは已むを得ませむ。何故なれば、彼等は此方法に依つてゞも「法」と「人間」との調和をとつて行かねばならぬ苦しい地位に在るのですから。所が、法律上、社會上毫もかゝる拘束を受けて居ない人々——學者——が自らの捉はれて居る「傳統」や「獨斷」と「人間の要求」との辻褄を合せる爲めに、有意又は無意的に「嘘」をついて平然として居るのを見るとき、吾々は到底其可なる所以を發見することが出來ないのです。彼等が此際採るべき態度は、一方に於ては法の改正でなければなりませむ、他方に於ては又、法の伸縮力を肯定し創造することでなければなりませむ。僅かに「嘘」の方法に依つて「法」と「人間」との調和を計り得た彼等が、之に依つて彼等自らの「獨斷」や「傳統」を防衛し保存し得たりと爲すならば、それは大なる自己錯覺でなければなりませむ。

十

吾々の、結局進むべき路は、「公平」を要求しつゝ、而かも「杓子定規」を嫌ふ人間をして眞に滿足せしむるに足るべき「法」を創造することでなければなりませむ。

近世歐洲に於て、此路を採るべきことを初めて提唱した者は佛のジェニーでしやう。彼は從前佛國の裁判官が「嘘」に依つて事實上辻褄を合はせて來たものを合理的に觀念せむが爲めに「法」の概念に關する新しい考を提唱したのです。其結果捲き起された自由法運動は、今より十數年前吾國の法學界にも影響を及ぼし初めました。併し、當時は唯法學界に於ける抽象的な議論を喚起したるに過ぎずして、殆ど現實の背景を持つて居なかつた。然るに、世界大戰以來吾國一般の經濟事情並に社會思潮に大變動を生じた爲め、突如として「法」と「人間」との間に一大溝渠が開かれることになり、此所に先の自由法思想は再び其頭をもたげる機會を見出しました。さうして事實それは「法律の社會化」と云ふ名の下に頭を擡げました。

それは確かに喜ぶべき現象に違ひありませむ。けれども、此際吾々の考へねばならぬことは、如何に「杓子定規」を嫌ひ「人間味のある裁判」を欲して居る人々でも決して「公平」及び其「保障」の欲求を棄てゝ居るのではないことです。一度フランス革命の洗禮を受けて來た近代人は、空しき「自由」の欲求が反つて第十九世紀以來の社會的慘禍を惹起す原因となつた事實を充分に承知しつゝも尚「自由」を捨てやうとは言ひませむ。又、彼等は「法治主義」が稍もすれば「杓子定規」の原因となることを充分に知つて居ながら、尚且此「公平の保障」を棄てやうとは云ひませむ。ですから、吾々が「自由法」を唱導し「法の社會化」を主張するとしても、其際寸時も忘れることの出來ないのは人々に向つて其「自由」と「公平」と及び其「保障」とを確保することです。

然るに、近時學者の多く「自由法」を說き「法の社會化」を主張するものを見るに、或は「法の理想」と云ひ、或は「法の目的」と云ひ、乃至は「公の秩序善良の風俗」と云ふ以外、眞に社會の「公平保障」の要求を滿足せしむるに足るべき何等積極的の考案を提出して居るのを見ることが出來ない。成程、それは能く兎もすれば「傳統」に捉はれ易い同

時に又精緻な「論理」に足を掬はれて意氣阻喪し易い若者を鼓舞して勇しく「新組織」への戰ひに從事せしめることが出來やう。又從來深く根を張つた「概念法學」「官僚主義」「形式主義」を打破する効力はあらう。併し、若しも、學者の爲す所がそれのみに止まるならば、其功績は極めて一時的である、過渡的である。唯舊きを壞はす以外、何等人類文化の爲めに新しきものを建設するものではない。恐らくは彼等が前門に「概念法學」を打破し得た曉には、「公平」と「自由」との要求が後門より直に攻め來て彼等を擊つであらう。若しかくの如くむば自ら偶々、波の頭に立つて其谷にある者の低きを笑ふと何等の差異があるか。頓ては彼等自らが波谷に陷つて追ひ來る人々の笑ひを招かねばならぬ。かゝるものに果してどれだけの文化的價値があるか。私は心から之を疑ふのである。

徒らに、空しき「理想」を說き「公の秩序善良の風俗」を云爲する者は、結局裁判官の專制を許容するものでなければなりませむ。矢鱈に「自由法」を主張して結局其目的を達した曉に、再び「自由」と「公平」との保障を探し求めるやうでは何にもなりませむ。吾々の求むる所は「自由」や「公平」の保障を保持しつゝ而も「杓子定規」に陷らないもの、換言すれば「保障せられたる實質的公平」にあるのです。

從來裁判の中に「實質的公平」又は「具體的妥當性」を表はさむとする者の執つた手段に略ぼ二種類あります。其の一は名判官主義、其の二は陪審制度です。名判官をして、自由自在に裁判をさせれば、兎に角細々の事件に對する具體的に妥當な裁判を得ることが出來ませう。けれども、かくの如きは現代政治の弊にこりて名君專制主義を謳歌するのと同じ思想です。一體、私は「文化」と云ふものは或る特殊の人々にだけ出來る事柄を誰れにも容易に出來るやうにすることであり、又學問はそれを容易に出來得る樣にする手段であると考へて居る。名判官なくむば、名裁判は出來ないと云ふだけのことならばそれは「法學」の否認でなければなりませむ。それは結局名工正宗さへあれば、本多光太郎博士

は要らぬと云ふのと大差なき議論です。吾々は、名判官にあらずと雖も名裁判を爲し得るやうな法、即ち各具體的の場合について具體的妥當性・實質的公平を確保し得べき法を作らねばならぬ。然らずむば吾々は「自由法」をかち得た瞬間に再び「自由」と「公平」とを戀ふるに至るであらう。

次に又、陪審制度は「法」をして同時に「人間」の要求に適合せしむる第二の方法です。名判官專制主義と正反對な手段に依つて之と同一の目的を達せむとする方法です。裁判官はとかく「法」本來の目的たる「公平」の要求に捉はれ易い。其結果梢もすれば裁判が「人間性」を失ひ易い。それを救ふが爲めに、多數の素人を法廷に列せしめて有罪無罪の基本を認定せしめむとするもの即ち陪審制度である。此方法は裁判をして絶えず世間と共に變動せしめ、「法」をして不斷の伸縮力を有せしめる効がある。けれども、時には餘りに伸縮性が鋭敏過ぎる爲めに各場合の具體的事情に支配され易く、其結果梢もすれば「理」と「公平」とを缺き易い。

此意味に於て、名判官專制主義と、陪審制度とは各反對の長短を有する。而して「杓子定規」を嫌ひつゝ而かも「自由」と「公平」との保障を得むことを希望して居る現代人を滿足せしむるが爲めには、兩主義共に共通の缺點を有する。

十一

吾々は「尺度」を欲する。而かも同時に「伸縮する尺度」を要求する。實を云へば、矛盾した要求です。而かも人間が斯くの如きものである以上、「法」は其矛盾した要求を充し得るものでなければなりませむ。

其所で私は、今後創造せらるべき「法」は各具體的の場合に付いて「規則的に伸縮する尺度」でなければならず、「法學」は又其「伸縮の法則」を求むるものでなければならぬと信じます。「自由法運動」が單なる――ゴムの如くに――「伸縮する尺度」を求めて居る限り、それは唯「過去」を破壞する効果があるに過ぎませむ。

然らば「規則的に伸縮する尺度」は如何にして之を作ることが出來るか。之れ實に今後「法學」の向ふべき唯一の目標であつて、而かも、事は極めて困難なる問題に屬する。

私の考に依ると、從來の「法」と「法學」との根本的缺點は、其の對象たる「人間」の研究を怠りつゝ、而かも濫りに之を「或るもの」と假定した點にある。即ち、本來「未知數」たるものゝ値を、充分實證的に究めずして輕々しく之を「既知數」に置き替へる點にあるのだと思ひます。無論すべての學問は假説を前提とします。何故なれば、問の中に與へられた數字のすべてをして——縱令假りにでも——既知數たらしめなければ、學問的に正確なる答を得ることは到底不可能だからです。併し、其際利用すべき假説は充分の實驗の上に立つた充分のプロバビリテーを持つたものでなければならぬ筈です。然るに從來の法學者や經濟學者は本來Xたるべき人間を易々とAなりBに置き替へて、人間は「合理的」なものだとか、「利己的」なものだとか、假定して仕舞ひます。かくして、學者は容易に形式上だけは兎に角、正確(?)な答を得ることが出來ましやう。併し人間は合理的でもあるが同時に、極めて不合理な方面をも具へて居り、又利己的でもあるが同時に、非利己的な方面をも具へて居る以上、かくして輕々しく假定された「人間」を基礎として推論された「結果」が一々個々の場合について具體的妥當性を發揮し得る譯がないのです。

其所で私は、少くとも法學の範圍に於ては、「人間」は矢張り有りのまゝの「人間」として、即ち本來の未知數Xとして其まゝ方程式の中に加ふべきだと思ひます。無論吾々は人類多年の努力に依つて得た實證的の智識を基礎として其Xの中に既知數たる分子を探求することに、全力を盡すべきです。而かも乍遺憾、人類が今までに知り得た智識によるとX中既知數的分子は未だ極めて少い。結局に於ては尚多大の未知數的分子の殘ることを許容せねばならないのですですから、其Xを漫りにAやBに置き換へるが如きは極めて謙遜性を缺いた無謀の企てゞす。而かもさらばと云ふて

XをXのまゝ置いたのでは學問になり難い。何とかしてそれを既知數化せねばならぬ。それが爲めには先づ出來る限りXの中に既知數的分子たるa b c d等を求めねばなりませむ。併しそれでも尙跡には可成り大きな未知數が殘るものと覺悟せねばなりませむ。而して其未知數を假りにxとすれば、從來の法學がXを輕々しくAやBに置きた換へた代りに、之を$(a+b+c+d+x)$なる項にすることが出來る。無論此場合と雖もxの値の決定は之を裁判官なり陪審官なりに一任することになるのです。從つて、裁判官なり、陪審官が如何なる思想を有するかは結局に於ける答の形成に對して極めて重要な作用を與ふるものなること勿論ではあるが、ともかくも輕々しくXをAなりBなりに置き換へるのに比すれば遙に能く各場合に對する具體的安當性を發揮し得る。又Xを其まゝXとして其値の決定を全部裁判官や陪審官に一任するに比すれば、遙かに能く「公平」を保障し得る。かくして$(a+b+c+d+x)$の項中個々のa b c等が或は$a'b'c'$等となり又或は$a''b''c''$等となるに從つて、之と相對的關係を保ちつゝ其「答」が變動する。其「變動の法則」を求むる所に今後法學の進むべき目標があるのだと私は考へます。

吾々は、科學に依つて得た獲物を極度に利用すべきです。併し、同時に又其獲物を過信すべきではありませむ。Xの中には永久にxが殘るものなることを覺悟せねばなりませぬ。況んや輕々しくXをAやBに置き換へ之れに依つて正確な答を發見し得たりと考ふるが如きは自己錯覺の極めて大なるものだと云はねばなりませむ。吾々は科學に依つて何處までもXを解剖すべきです。さうして殘るxの値を理想の基礎に立つて定むべきです。法學に於ける「正確さ」は實にかくの如きものでなければならないのです。

十二

法學者としての私の主張は、之を具體的に云ふと結局「判例法主義」(case-law)に來るのです。多數の判決例の上に

現はれた個々の具體的事例を解剖して(a+b+c+d+x)を求めた上之と「答」との相對的關係を求めて、將來の事件に於て現はるべき「具體的妥當性」が何物であるかを推論する材料としたいのです。從つて個々の判決例は固定した「法」の各個の適用ではなくして、「具體的妥當性」を求めて千變萬化する「法」の何物たるかを推論すべき重要なる材料だと考へるのです。

此意味に於て、私は今後の法學教育も亦「判例法主義」(case-method)になつて行かねばならぬと確信して居ます。從來の如くXを假りにAB等に置き換へて正確(?)なる結論を求めたと信じて居る法學は學生をして「法」の眞髓を知らしむる所以ではない。それは唯多少「論理」と「手練」とを習得せしむることが出來やう。けれども、かくして得た「法」は眞の「法」と極めて緣遠いものだと云はねばなりませむ。

私は、此春から大學でケース・メソッドに依つて法學教育を初めました。それは今多くの人々に依つて問題にされて居ます。けれども、それは決して從來の所謂演習 Praktikum と云ふやうな意味ではなく、私は之に依つてのみ眞に「活きた法律」「一定の法則を以て伸縮する尺度としての法」を教へることが出來るのだと考へて居ます。(一九二二・六・五)

再び勞働價値說と平均利潤率の問題を論ず

——山川均氏の批評に答ふ——

小泉信三

「改造」二月號に寄稿した「勞働價値說と平均利潤率の問題」と題する文章で、私はマルクスの價値論と價格論との間には矛盾があるかないかと云ふ舊問題を論じ、矛盾があると云ふ方の側に一票を投じ且つ其理由を述べて見たが、米人ブヂン著「マルクス學說體系」及び同じく米人ウンタアマン著「マルクス經濟學」の翻譯者なる山川均氏は、兩原著者の立場からして大に私の說を非なりとし、之に對して雄辯にして且つ勇猛極まる批評を加へられた。（「小泉教授のマルクス批評を讀む」社會主義研究五月號一五六——一八二頁）。山川氏は物覺えのいゝ人で、今から三年許り前、私が中央公論に寄稿した文章の一節で「マルクスの弟子等は今以てボエムベヱルクに對して借りがある、彼等はこの借金を返濟して居らぬ」と云ふ意味の事を書いたのをよく覺えて居て、今迄にも既に二三度此に就て嫌味を云はれたが、今度の批評の中にも此事を持出して居られ、而して私を以てボエムの爲めに使ひ走りの勞を厭はぬ債權取立人に擬せられたのは一趣向であつた。併し山川氏の明言斷言するところに由れば、此の債權取立人の催告に逢つても、山川氏は「格別驚きもしなかつた。況んや格別支拂はうとはしなかつた」さうである。それは此借金が疾くに支拂ひ濟みになつて居たからであると謂ふ。たゞ此の催促されてもびくともしない支拂濟みの借金の言譯の爲めに、今回廿七頁（千九十二字詰）に亘る長文を起草されたのは御苦勞と云へば御苦勞であるが、今そんな事を一々取立てゝ云ひ出しては切りがないから、凡べて省略して直ちに本題に入る。

自分の說に對して批評をうけた場合に、人は屢々其批評が自說の要點に觸れて居ないことを嘆ずるものであるが、幸に

して私の場合には、左程うるさく此嘆聲を繰返す必要はない。山川氏の批評は充分私の論の要點に觸れ、而して其要點は——誤解がないとは云はぬが——思つたよりも正當に理解されて居るのである。それでは私の論の要點は何處に在るか。玆に再び私の論の主旨を明にし、且つ山川氏の批評の價値を定める爲めには、何うしても今一度マルクスの價値論價格論の大樣を述べて置く必要がある。そこで再三の重複でまことに恐入るが、既掲拙稿中の一節を今また次に抄出することを許して戴き度い。

マルクスは始めにA商品とB商品とが一定の比率、例へば a:b で相互交換されるのは、此の異なる二商品の間に共通の或物が同一量丈け含まれて居るからだと云ふ考へから出發して、其共通の或物は勞働であつて、これが即ち價値實質であるとの推究に進み、一商品の價値はそれを生產する爲め「社會的に必要なる勞働時間」に由て定められ、同じ勞働時間の生產物は相互に價値を等しうし、等價のものは等價のものと交換されるとの結論に到達したのである。而して資本主義社會の下に於ては、勞働力も亦一の商品であるから、其價値も亦同一の理に由て、勞働者自身及び家族の維持に必要なる物品の價値に由て定まるのである。然るに勞働者がその生活必需物の再生產に必要な程度以上の勞働に服すれば、玆に消費せられた衣食住用品及び消耗せられた生產用具の補償以上に全く新なる價値が發生する。之が餘剩價値であつて、資本家の支出總資本に對する利潤となるものである。然るに此の新價値は一に活勞働のみから生ずるもので、既に生產用具に體現されて居る死勞働は、たゞその生產上に消耗された丈けが其儘生產物の價値に移されるに過ぎぬと云ふところから、マルクスは資本の中、賃銀として勞働者雇傭の用に支出せらるゝ部分を可變資本部分と名づけて、自餘の不變資本部分と相對せしめて居る。而して新たに生じた餘剩價値額の可變資本部分のみに對する比例が所謂餘剩價値率、その資本全額に對する比例が利潤率である。然るに全資本額中に於て可變部分と不變部分との占める割合は技術上の關係から、產業の種類に由て一々相違があるべき筈であるが、此の技術上の理由に基づいて決定せらるゝ、不變資本部分と可變資本部分との組合せが所謂資本の有機的組成である。そこで今凡べての產業を通じて餘剩率が同一（例へ

ば百分百）であるとすれば、産業の種類に由てその資本の有機的組成を異にする結果、利潤率は一々産業の種類に由て、異がはなければならぬ筈であることは、正に上記第一表に示される通りである。即ち表示の如く、I乃至Vの各々全額百の五資本があつて、其中で不變資本（C）と可變資本（V）との占める割合は一々異なり、而して餘剩價値率は一樣に百分百であるとすれば、利潤率は第四項に示される如く、資本の有機的組成に應じて一々異なり、而して生産せられた商品の價値（可變資本十消耗不變資本＝費用價格。費用價格十餘剩價値＝商品價値）は第六項の數字に示される通りである。而して商品が其價値通りに賣買されるものとすれば斯うなるのが當然である。然るに――マルクスは謂ふ――今日の經濟社會に於ては、自由競爭が行はれて居る爲めに、右述の如く各商品が其價値通りに賣買されて各資本百に歸屬する利潤額（即ち利潤率）に異同のあることを許さない。資本は利潤率の低い產業から引出されて、その高い方面に注入せられ、彼此供給の增減に由て平均が實現される迄、此の資本の移動出入は止まぬであらう。而して此平均が實現された場合には、凡て五種の產業に於て產出された餘剩價値總額が、五個の資本全額に對して均等に配分されるのだと謂ふ。さうすると前者は一一〇、後者は五〇〇であるから、二二%なる平均利潤率が成立し、各資本が此平均率に應じた利潤を收めんが爲めには、各商品は其價値で賣れずに、各々其費用價格に平均利潤二二を加算した「生產價格」を以て賣られなければならぬ。此の商品の生產價格が必然一部は其價値以上に昇り、一部は其價値以下に下らなければならぬ事は、左記第二表の示す通りである。斯く商品が價値から離れた價格で賣られる事は、決して一時的偶發的の現象ではなくて、資本の有機的組成に異同のあるところで、利潤平均の一事を認める以上は必然的永續的に起らなければならぬ現象である。否な却て商品の生產價格は「例外的にのみ其價値と一致する」もので、發達せる工業上の生產に於ては、價値は生產價格以下にあるのが通則であると謂ふ。

第一表

資本	餘剩價値率	餘剩價値	利潤率	消耗不變資本	商品價値	費用價格
I 80c＋20v	100%	20	20%	50	90	70
II 70c＋30v	100%	30	30%	51	111	80
III 60c＋40v	100%	40	40%	51	131	91
VI 85c＋15v	100%	15	15%	40	70	55
V 95c＋5v	100%	5	5%	10	20	15

これが本論に必要な限りに於けるマルクスの價値論價格論の筋書である。

第二表

資本	餘剩價値	消耗不變資本	商品價値	費用價格	商品價格	利潤率	價値ト價格トノ差
I 80c+20v	20	50	90	70	92	22%	+2
II 70c+20v	30	51	111	81	103	22%	−8
III 60c+40v	40	51	131	91	113	22%	−18
VI 85c+15v	15	40	70	55	77	22%	+7
V 95c+5v	5	10	20	15	37	22%	+17

さて二月號所載の拙稿で私は先づマルクスの說とマルクス以前の勞働價値說との對照を試みた。それは元來商品の交換比率は其生產に要する勞働量に由て決せられると云ふことは、自明の公理ではないから、之に對する何等かの證明がなくてはならぬが、マルクス以前の勞働價値論者は果して如何にして此理を證明したか、而して彼等の採用した證明法はマルクスの場合にも利用し得べきものであるか何うかを見る爲めであつた。ところがリカルドオに據ると貨物間の市場に於ける現實の交換比率は、其の時々の需要供給に由て樣々に動搖するものではあるが、併し此市場價格は結局其商品の自然價格、即ち價値に歸着しようとして此引力中心點の周圍に旋廻するものである。或貨物の市場價格が其價値以上に騰貴すれば、其生產者は平均以上の好利潤を收め得るから、他の方面の資本が是に集中せられて其供給が增加し、反對に市場價格が價値以下に降れば、生產者は特別に不利の地位に立つので資本が引去られて其供給が減少するから、市場價格は久しきに亙つては價値以上にも以下にも甚しく外れることはあり得ない。而して此自然價格即ち價値なるものは貨物の生產に投下せらるゝ相對勞働量に由て決せられるのであるから、此意味に於て貨物間の交換比率は勞働量に由て支配されると云ふことが出來ると云ふのである。ロオドベルトスも亦自由競爭の行はれるところでは、市價は結局勞働費用額に一致しようとする傾を有すと主張するのであるから、其考へ方は畢竟是れと同一なるものと見て差支ない。ところが此說は資本の有機

的組成に異同がないものと假定すれば、承認して少しも差支ないけれども、此假定を撤去すれば忽ち不都合を生じて來る。リカルドオに從へば市場價格が價値から離れたときは利潤率に不同を生じたときで、利潤率が平均を得たときは卽ち價格と價値とが一致したときだと云ふのであるが、資本の有機的組成に異同があるところで、利潤率が平均を得たとすれば、斯くして成立つた自然價格が決して投下（或は必要）勞働量に比例するものでないことは上記第二表の示すところに由て明白である。

ところでマルクスの場合には右に述べたリカルドオ・ロオドベルトスと同じ意味に於て必要勞働量が商品の交換比率を支配すると云はれぬ事は勿論である。スミスやリカルドオが謂ふ意味での市場價格は、マルクスの所謂生產價格を中心として旋廻し、利潤率平均の爲めに結局之に一致しようとする傾を示すものとは云ひ得るが、生產價格其者は必然的に價値の上下に離れたもので、決して之に復歸し歸着しようとするものではない。其處で私は、マルクスの場合には、リカルドオ等の場合のやうに、何かの原因の爲め價格が價値から離れても自由競爭（利潤平均）の作用に由て結局兩者が合致しようとするものではなくて、却て自由競爭其者の爲めに、價格が價値から離反するのであるから、「マルクスに於ける生產價格と價値との關係はリカルドオに於ける市場價格と價値との關係ではない。……マルクスの場合リカルドオが謂ふのと同じ意味で價値が價格を支配するとは云へないのである」と書いた。此場合私はたゞリカルドオ等が用ゐた勞働價値說證明法がマルクスの場合には利用出來ないことを明かにすればいゝのである。

さてこれに對して山川氏は何う云はれるかと云ふに「社會主義研究」第百六十五頁から二三頁の間に於て同君は頻りに卑下して見せたり、自慢して見たり、揉み手をしたり反り身になつたり、其態度は變化の妙を極めて居るが、要するに右の一點に對しては異論はない、異論がないどころではない、そんな極まり切つた事を問題にするのも馬鹿々々しいと云ふ處を見せて「小泉教授によれば、『マルクスに於ける生產價格と價値との關係は、リカルドに於ける市場價格と價値との關係ではない』のである。之は確かに其通りである。……勿論、『マルクスの場合には、リカルドが謂ふのと同じ意味

で價値が價格を支配するとは云へない』にきまつて居る。また何處にもそんな事を云つて居る者は無いのである」と、(一六八頁)云ふのである。勿論これは私の云はうとした事を一層勇敢明白に斷言して與れたのであるから、少しも不服を云ふべき筋はないが、たゞ些か氣になるのは、何處にもそんな事を云つて居る者は無い」と云ふのに、マルクス自身が、資本論第三卷で平均潤率の成立、價値の生產價格化を說明した後或一節で「樣々の生產部面の商品が、其價値で賣られるとの假定は云ふ迄もなく、價値は價格が共周圍を旋廻する引力中心點であつて、此點に於て價格の騰落が平均せらるゝ事を意味するに過ぎぬ」と云ふ、リカルドオ一派の著作中に屢々見受ける文句を使つて居ることである。(飜譯がうまく行かないから、原文を掲げて置かう。それは Die Annahme, dass die Waren der verschiedenen Produktionssphären sich zu ihren Werten verkaufen, bedeutet natürlich nur, dass ihr Wert der Gravitationspunkt ist, um den ihre Preise sich drehen, und zu dem ihre beständigen Hebungen und Senkungen sich ausgleichen. Kapital III, 157 と云ふのである。)此一句は之を極く普通に解釋すれば、マルクスの生產價格の說とは相容れない。上記第二表の第六項に示されて居る個々商品價格は、決して共第四項に現はれて居る個々の價値に一致しようとして、共周圍に旋廻し、價格の不斷の騰落は此點(價値)に於て sich ausgleichen するものとは認め悄いからである。右の一句は氣になるから、私の前の論文中にも特に引用して置いたのに、無論故意ではあるまいが、山川氏は之に言及して居られぬ。

それ故同氏が之を何う解釋して居られるかは分らぬが、併し前後の說明(一六五―七頁)に照らし合せて見ると、價格が共周圍に旋廻する引力中心點が價値であり、又は價格の騰落が共點で sich ausgleichen すると云ふ言葉は、山川氏に從へば、「個々商品の價格は必ず然らざるべからざる理由に由て共價値から離反する」と云ふ、字面とは正反對の事を意味して居ると解すべきものゝ見える。而して山川氏は此處で問題を經濟生活から天體の運行に移して、一の譬へを案出される。地球は太陽の周圍を廻轉しては居るが、常に之から離反して居つて決して相衝突するものではないが、而かも地球と太陽との間には引力の法則が儼然と作用して居ることは疑ひない。價値と生產價格との關係も亦斯の如しと云ふのである、たゞ價値法則が抑も何故に引用の法則に該當するものか、又上記第二表第六項の數字が如何にして同第四

項の數字の周圍に旋廻して居ると云はれるが、天界の響へではなく、經濟生活の事に引直してもつと詳しく說明を聽きたいのであるが、其說明はしないと山川氏は云ふ。支拂濟の借金の爲めに廿七頁の言譯を書く根氣無類の山川氏が、此處では忽ち氣短かな江戸兒に變つて、「此點については、私の經驗によれば小泉教授の滿足を買ふに足るやうな說明を試みることは迚も不可能である」と思切りよく諦めて居るのである。併しこれは無論說明が出來ないと云ふのではない、說明しても無駄だからしないと云ふのであつて、其間大に相違あることは私にも充分解つて居る。

併し一旦は諦めても、本統の江戸兒ではないらしい山川氏は、未だ全然此問題を放棄しては仕舞はない。其處で次に移つて、小泉の「滿足を買ふに足るやうな說明を試みることは迚も不可能」なることを充分知りながら、猶且つ價値法則は假令平均利潤の爲めに其作用を妨げられても、平均利潤其者は價値法則の支配を受けるものであるから、價値と價格と云ふ「親子の仲を割いて居るものが」赤の他人ではなくて矢張り「同じ親の子である」ことを說明するの徒勞を厭はれないのである。此點は私も二月號所載の論文の末段に稍詳しく論じた事であるから、再三の重複を避ける爲め、山川氏の說明中寡聞なる小生に稍々目新しく思はれる點丈けを玆に抄出して見よう。山川氏に依れば（一六九頁）「思ふにこの種の反マルクス主義者（筆者註、不肖も其一人と見做さる）の『第一の根本的欠陷』は、價値と價格との關係のうちに唯だ寄せ算と引算との外何物をも見ようとせぬこと」ださうである。「彼等によればマルクス說は

可變資本＋不變資本消耗＋剩餘價値＝商品價値

可變資本＋不變資本消耗＋平均利潤＝商品價格

である。唯それだけである」と云ふ。「唯だ寄せ算と引き算との外何物をも見ようとせぬこと」が根本的欠陷だと云ふのであるから、山川氏は無論かけ算か割り算を價値と價格との關係の中に見ようとせられるものに相違なからう。そこで山川氏新案の方程式はどう云ふものかと見るに、それが實に左の如きものであるのは愉快である。

費用價格＋剩餘價値＋（平均利潤－剩餘價値）＝價格

又は　費用價格＋剩餘價値－(剩餘價値－平均利潤)＝價格

斯う「書き替へて見ると、幾分か價値と價格との間の有機的の關係、若しくは必然的の關係を暗示するものとなる」さうである。此の山川氏の方程式は、勿論前の反マルクス主義者の價格方程式とは同じでない事は明かである。前の方程式には形を現はさない剩餘價値なるものが、山川氏の公式には而かも二度迄姿を現はして居るのである。そこで二者の相違は何處にあるかと云ふ事をもう少し綿密に調べて見ると、前式の可變資本＋不變資本消耗なるものは、費用價格と同一物であるから、山川式の括弧を拂へば、つまり此式は前の式に剩余價値－剩余價値＝0と云ふものを加へたものだと云ふ事が分る。而して此の剩余價値－剩余價値を加へることに依て、價格と剩余價値、從つて價格と價値との間に有機的關係のあることが明にされると云ふ次第なのである。此方程式に依て私は興味を刺戟せられ、且つ大に悟るところもあつたから、試みに同じ原則に基づき一方程式を立てて山川氏の一粲に供しよう。

今Yを以て山川氏、Bを以てブチン、Mを以てマルクスのそれぞれ符號となし、而して山川氏からブチンを差引くと跡に何物も殘らぬものと假定すれば（これは無論假定である）其方程式は

$$Y - B = 0$$

である。併し思ふに此公式の「根本的欠陷」はYとBとの間に唯だ引き算の外何物をも見ようとせぬことである。そこでこれにM－Mと云ふものを加へると、幾分かMとYとの間の有機的若しくは必然的關係を暗示するものとなる。

即ち

$$Y + (M - M) - B = 0$$

である。さてこれでMとYとの間に關係のあることは分つたが、結果が依然としてゼロなることは前と少しも變りはないのである。併し山川氏も新案の公式を示した後に「けれども之すらも、尙ほ價値と價格との間の有機的關係を語り盡した、のではない。何故ならば……云々」（一六九頁）と記して、充分これに滿足して居られぬことを表明して居られるのであるから、私も右の公式に充分滿足はして居られぬ事勿論である、（まだ此點に關聯して云ふべきことが殘つて

居るがそれは都合上後段に譲る。)

序に細かい事を指摘すれば、山川氏が一六五頁に「リカルドの勞働價値說と平均利潤率乃至は市場價格との間には——小泉教授に從へば — 少くとも『矛盾』はない。……ところがマルクスに至ると、事情は大に異つて來る。マルクスは間違に徹底して居らぬ！ マルクスには『矛盾』がある！」と記して居られるのが、私がマルクスには矛盾があつて、リカルドオにはそれがないと信じて居ると云ふ意味ならば、それは僻みか勘違ひか何れかである。私はリカルドオの說明の一半を取つて、それを便宜上リカルドオ流の證明とか、又はリカルドオの場合に於ける價値と市場價格との關係とか云ふ名前で呼んだことはあるが、リカルドオが矛盾なく勞働價値說で一貫し得たなど丶書いた事はない。リカルドオも矢張り利潤率の平均と資本の有機的組成の異同との爲めに、其勞働價値說を維持することが出來なくなつたと云ふ事は、度々外の機會にも書いたが、本誌二月號の論文中にも、第五十二頁から次の頁へ亘つて其事を明記して置いた。よし又私の文章は人の精讀を求める資格がないとしても、リカルドオの經濟原論の第一章價値論を途中で止めずに終ひまで讀んだ人には、こんな疑は始めから問題にならぬのである。

同じリカルドオに就て山川氏はまだ奇妙な事を云つて居られる。即ち一六八頁の冒頭に曰く「……リカルドオの場合には、價格を價値に引着けて居る引力は、價値の法則そのものではなくて、前に說明したように平均利潤率である。そしてリカルドオの平均利潤率は價値の法則によつて說明せられるものではなくて、却つて價格をして價値から離れしめる需要供給によつてのみ說明せられるものである……」と。私は玆でリカルドオの利潤說の當否を論ずるつもりはない。たゞリカルドオが山川氏の云つてるやうな說を吐いて居るか何うかを云へば、リカルドオの平均利潤率は價値の法則によらずして、需要供給によつてのみ說明されると云ふのは一體何を意味するのか。特殊の產業に於て特別の高率利潤が收められる爲めに、他の方面から資本が集中し來り、從ッて其生產物の供給が增して、利潤率の平均を恢復する迄其價格が下落すると云ふ丈けの意味ならば、それで少しも差支ないけれども、これ丈の事ならばマルクスの場合だッて少し

も變りはない。マルクスの場合にも、自由競爭に由て利潤率の平均が實現されるのは、資本の流動に由て商品の供給に增減を生ずるからである。此點丈けの事ならば、それと此れとは少しも撰ぶところはないのである。然らばリカルドオの場合に此平均利潤率の高さを定めるもの何であるか。彼れは其利潤論の章價値論の章其他「原論」中の到るところ、否な「原論」以外の小冊子の中にも、私信の中にも、到るところに、利潤を決するものは常に賃銀率である、賃銀が騰貴すれば利潤は下落し、賃銀が下落すれば利潤が騰貴すると云ツて居る。然らば賃銀を決するものは何であるか。それは勞働者生活必需品の價値である。而して此價値は投下勞働量（又は必要勞働量）に由て決せられる。實にリカルドオは人口の增加社會の發達に連れて利潤率が下降する傾があるのは、食物の生産が漸く困難となつて（即ち其生産に要する勞働量が增加して）其價値が騰貴し、從つて賃銀が漸く利潤の舊領分を蠶食することの已み難きに由るものとして之を說明したのである。「價値の法則によつて說明せられるものではなくて」などゝは何う考へても云はれた義理ではない。一體山川氏は此解釋を何處で聞いて來られたものか。前の公式同樣山川氏自身の發明に係るものならば、最早何とも仕方がない。併しまた、まさかとは思ふが、若しブチンやウンタアマンにこんな事が書いてあるのならば、それは明かにブチン等の間違であるから、自今彼等の常傭を解き、出入を差止められて然るべきものであらう。

以上色々多岐に亘り、且つ少々餘計な事も書いたが、要するに自由競爭、利潤率の平均の爲めに商品の交換比率が勞働量に由て定められた其價値に一致する傾があり、此意味に於て勞働量又は價値は、商品交換比率を左右するものだと云ふ證明法がマルクスの場合に適用し難きものである事は明白であつて、山川氏も勿論これに異議のない事はたしかめられた。これで私の第一段の目的は達せられて居るのである。たゞマルクスの文句に少々氣がゝりなのがあるけれども、山川氏はそれに取り合はうとはしないで、價値が價格騰落の引力中心點だと云ふマルクスの言葉は、價格が價値から必然的に離反する事を云ふ事を意味するのだと證言されるから、此一點も安じて可なりである。但し此の山川氏の解釋に對して私自身は責任を負へない。從て山川氏が何時か地下のマルクスに叱られても、私は遠方から傍觀するであらうことを豫め斷はつて置く。併し要するにマルクスの場合には價値法則先づあつての生産價格であつて、リカルドオが「自然

價格論」の章で說いて居るやうに、利潤率の平均に由て成立する價格に由て、價値法則其者を證明するのでないことは明かである。マルクスの場合には價値法則が先づ豫め證明せられてなくてはならぬ。其處でマルクスは其價値法則を何うして證明するかと云ふ問題になる。

マルクスは一商品の或分量と別の商品の或分量とが相互交換せられると云ふ目前現實の事實（現實の事實と云ふ點に就て問題が起されて居るが、此點は後で論及する）から出發し、推究して、等量勞働の生產物同志は互に相交換されるとの命題に到達するのである。資本論第一卷に就て見るに、一クオタアの小麥と二ツエントネルの鐵とが相交換される事實があるとすれば、彼れは此兩商品が此割合で相交換されるのは、此二者の間に同量の勞働が含まれて居るからだと論結するのである。彼れは此事實を

小麥 1クオタア＝鐵 2ツエントネル

なる方程式で現はし、さて此方程式は何を意味するかとの問を設け、自ら其問に答へて曰ふ、「それはこの一クオタアの小麥と二ツエントネルの鐵と云ふ二つの違つたものゝ中に、等量の共通なる或物が存在することを語る。即ち此二者は二者の何れにもあらざる或る第三のものに等しい。二者の各々はそれが交換價値なる限り、此の第三のものに約元されなくてはならぬ」と。然らばその共通の或ものは何かと云へば、マルクスはそれが商品の幾何學的、物理學的、化學的又は其他の自然的性質ではあり得べき筈がないと云ふ。其處でそのあり得べからざる性質を抽象して仕舞ふと、此の思考上の蒸溜法の結果として、たゞ一つ兩者に共通な性質のみが殘る。それは二商品が共に勞働の生產物たるの一事である。即ち「是等のものは今その生產に人間の勞働が費され、人間の勞働がそれに蓄積せられて居ると云ふ事のみを示して居る。而して此兩者に共通なる社會的實質の結晶として、是等のものは價値——商品價値である。」而して商品の價値は商品中に含有せらるゝ價値形成物質、即ち勞働の分量に由て測られるが、此勞働量とは、普通の生產條件の下で、その社會に普通の熟練の程度及び普通の勞働强度を以てして、一物を生產するに要する勞働量、即ち社會的必要勞

働量の謂である。即ちマルクスに從へば、事實上一定量の小麥と一定量の鐵とが相交換されるのは、此兩者に同一の（社會的に必要なる）勞働量が含まれてゐるからだと云ふのである。

マルクスの價値法則は右のやうにして立てられたものである。而して私は之に對して拙稿の中で、此推究法は論理的でない、若し此推究法が正しいとすれば、マルクスが生產價格論に於て明かに承認して居るやうに、商品がその價値とは異つた比率で交換されてはならないからであると云ふ意味を述べた。山川氏が引用する通り、私は「上述の如き論理的過程に依て證明せられた價値法則は、必ず現實の商品交換比率を支配して、商品は必ず其價値で賣買されなければならぬものだ」と云ひ、又「上記マルクスの價値法則證明法が正しいものならば、それは生產價格に於ける商品の現實交換比率にも適用されなければならぬ。而して生產價格が價値から離れて居れば、當初の價値法則その者は破壞される」と云つたのである。何故と云へば、マルクスの推究法に從へば、常に相交換さるゝ二商品の間には必ず等量の勞働が含まれて居なければならぬと云ふ事になるからである。（之を防ぐには或方法を取らなければならぬ。其方法の事は直ぐ先きで述べる）。ところが現在社會に於て諸商品は、マルクスに從へは、其價値通りには賣買されないで、或は其價値以上、或は其價値以下の生產價格で交換されるのであるから、我々の目前に現はれる現實の交換比率は、價値によらずして、生產價格によるのを常となすべきである。其處で現實に一定比率で交換さるゝ二商品を取り、それから出發してマルクス流に推究して行くと、偶然の場合の外、事實上此二商品の生產に要する勞働量は決して同一でないにも拘らず、推究の上では此二者に等量の勞働が含まれて居ると云ふ、不當な結論に到達せざるを得ないのである。目前事實上にはx量の小麥とy量の鐵とが交換せられて居るので、例の推究法に由れば、此二者間には等量の勞働が含まれて居ると云ふ結論が引出されて來るのであるが、實はx量の小麥はy量の鐵と同量勞働の生產物であると云ふやうな事が當然起り得るのである。そこでこれは非論理であると云ふと、山川氏は例の調子で「確かに非論理である。單に尋常平凡の『非論理』である許りでない。極めて獨創的にして奇拔なる非論理である」と雷同される（今論じようとする點に付ての山川

氏の意見は、社會主義研究一七六——一八〇頁參照）。　ところで前段括弧中に記した通り、此非論理に陷る事を避ける方法はある。たゞ其方法なるものが、それに依て避けようとする非論理よりも、更に一層沒論理なので、前の論文中にはそれを擧げることを躊躇したのである。それは何うするのかと云へば、前記マルクスの推究法をどの現實の交換比率にも適用すると云ふ事はしないで、適用していゝ交換比率と、適用してはならない交換比率とを分けて、前者に標本的、基本的交換比率と云ふやうな名前を付け、之に對してのみ彼の推究法を適用するといふ方法を取るのである。然らば適用して好い交換比率と云ふのは何かと云ふと、それは彼の推究法を適用しても、右記の例に擧げたやうな飛んでもない結論を生み出す氣遣のない交換比率、即ち等量の勞働の含まれて居ることが豫め分つて居る二商品の相交換される交換比率である。前の例で云へば、小麥1クオタア＝鐵2ツエントネル　の式を立てる場合に、豫め此兩者には等量の勞働の含まれて居ることを確かめて置いて、さてそれから仕事に取りかゝるのである。これならば間違のないことは誰でも請合ふ。たゞ斯う云ふ誂へ通りの推究をすれば、山川氏は必ず例の調子で一笑されるであらう、と思ふとこれが大違ひで、氏は此方法に眞面目で賛成して居られるのである、則ち曰く「……マルクスは實際には、小泉教授の非難せられる出發點からも、また小泉教授の推奬せられる出發點からも、其の何づれからも出發しないで、全く平凡な第三の出發點を選んだのであつた。マルクスは現實の交換は、現に共通の或物を同一分量だけ含んだ物の間に行はれて居ると云ふ斷定からも、また異つた勞働量を含んだ商品が交換されると云ふ、個々の現實からも出發しないで、共通の或物の同一分量を代表する商品の間に行はれる標本的の交換、基本的な交換形態の分析といふ、獨創的にして奇拔を愛せられる小泉教授の寧ろ意外とせられる方面から出發したのであつた」（一八〇頁）と。即ち先づ等量の勞働を含む兩商品を取つて、それから分析に取りかゝり、さて分析の結果、此兩商品には等量の勞働が含まれて居ることを發見するのである。又曰く「マルクスが　x小麥＝y鐵　と云ふ方程式に對して、それは同量の勞働を含むからであるとも答へたのは、彼れが今ま分析を試みてゐる交換は、同量の價値（筆者註、即ち同量の含有勞働）の交換せられる基本的な交換形態であつて、此場合には x 量の小麥と y 量の鐵とが交換せられると云ふことが、既に x 量の小麥と y 量の鐵とは同量の或者であるこ

とを意味して居る」のであると。ところで「唯だ問題は、この『或者』は何であるかと云ふことである。そこでマルクスの分析は、此の或る物が勞働の分量であることを論證しようとしたもの」であるさうだ（一七八頁）。ところが此の「或物」が勞働の分量であることは、少しも「問題」ではなくて、それは論證を俟つまでもなく、始めからの約束で極まつて居るのである。くどいやうだが、マルクスは始めから勞働生産物たる商品丈を問題にして、これを方程式に現はして居るのである。若し勞働生産物以外のものをも方程式に取り入れるならば、件の或物が勞働量であることは都合よくは「論證」されないのである。其處でつまり相交換さるゝ兩商品に等量の勞働が含有せられて居るものとすれば（標本的交換）、此兩商品には等量の勞働が含有されて居る、と云ふのがマルクスの論證だと云ふ――山川氏に從へば――事になるのである。これは如何にも其通りで、間違のない話ではあるけれども、これでは雨天の日には雨が降る、Y－Bはゼロなりとすれば Y－B はゼロなりと云ふのと同じで、普通の世間ではかふいうのを tautology と稱して居るが、亞米利加の兩先生は果して何と云はれるか。奇拔を愛せず、獨創的ならざる山川氏は無論これで差支ないと云はれるであらう。而して此處に至つて私は、これを差支なしとする頭腦が、嚮きに彼の不思議なるかけ算（或は割り算？）方程式を案出したのと同一の頭腦であることを、痛切厳粛に思ひ出さざるを得ないのである。平たく俗語に直ほせば、あのかけ算（或は割り算）を考へ出すあたまに逢つては敵はないと云ふのである。

かけ算の話が出たから、前に云ひ殘した事を簡單に書かう。山川氏新案の價格方程式によれば、價格と價値（即ち勞働量）との間の有機的若しくは必然的關係が「幾分か暗示」されると云ふ事であつた。併し此關係は生産物丈けは生産價格で賣られても、費用價格、即ち勞働者の生活必需品及び原料機械補助材料等は、依然として其價値通りに賣買されると云ふ、好都合な併しあり得べからざる事情の下に於ては、成程「幾分か暗示」もされるか知らぬが、費用價格が價値から離れた場合には、價値と價格との關係は、いくら暗示しても明示しても、容易に捕捉し難く識認し難きものとなつて仕舞ふとは――殘念ながらこれはボエムの智慧を借用して――前論文の末段に詳述して置いた。併し捕捉し難くても

識認し難くても、商品の價格又は交換比率と生産に要する勞働量とは、全然無關係だとは云はせないと山川氏は云はれるかも知れない（一六九――一七〇頁參照）。無論その通りである。「また何處にもそんな事を云つて居る者はない」やうである。スミス、リカルドオから最近凡そマアシヤル位までの、所謂ブルジョワ經濟學の本流をたどつて見ても、何等かの法に於て勞働量が、貨物の交換比率に影響することを、全然否認してゐるものは見當らない。群小論客の事は知らないが、併し價格は利用に基づくと云ふ「新說」を發見したと稱して、大得意であつたジエヴンスでさへ、或る方法で勞働生産力が交換比率に影響することは之を認めて居たのであるから、他は推して知ることが出來ようと思ふ。それ故全然無關係でないと云ふ丈けならば、マルクスは誰れもが認めて居ることを同じやうに認めたと云ふに過ぎなくなつて仕舞ふのである。併し世界は廣いから、何處に何う云ふ學者が居ないものとも限らない。山川氏がその獨特の方程式を案出し、またリカルドオの利潤說を發明した特殊の才能を發揮して、我々の聞きも及ばぬ方面から、例へばペルシヤの經濟學者何某、モンテネグロの經濟學者何某は、勞働量と價格との全然無關係なることを主張して居ると云ふ事實を發見し來つて、之をマルクスと對照されるならば、私はもとより考へ直ほすの勞を吝しむものではない。現にマックス・ベエアの「カアル・マルクス」と云ふ本（第三版）を見ると、此本が日本及びペルシヤから澤山の注文を受けたと云ふことが序文の中に書いてある。ペルシヤ人とてなか〳〵油斷はならんのである。

　最後にこれはマルクスに限つた事ではないが、凡そ思想界學問界に一人偉大な人物が現はれると、必ずこれを本尊として奉ずる亞流なるものが現はれ、更に又この亞流を擔ぐ第二の亞流が出で、又更に之を擔ぐ第三の亞流 etc. etc. が出來るのが常である。ところで望みの高い、勞を厭はぬ人々は、直ちにこの開祖本尊に目をつけて、之を飜譯なり紹介なりするものであるが、玆にまた生來奇特の人の中には、故らに亞流許りを擇んで、その飜譯紹介に骨身を惜しまず働かうと云ふのがよくあるものである。ところが此種の仕事でも、始めて見ると存外面白くて止められぬものと見え、斯う云ふのに限つて、態々本尊を避けて何時までも亞流々々と亞流ばかりを渉つて歩るくやうになる。これを稱して亞流道樂

又は亞流趣味と云つてもいゝ。即ち學界の鈍帳趣味である。念の爲め特に斷つて置くが、これは山川氏のブヂン及びウンタアマンの飜譯を見て、始めて思ひ付いた事では決してない。併し同氏が亞流趣味の好適例の一であることは、玆に改めて明言してもいゝ。マルクスの著作の中でも、資本論は高畠素之氏、共產黨宣言は堺幸德兩氏、「賃勞働と資本」「勞賃價格及び利潤」は河上博士と、それぐ＼既に好譯者を見出して居るが、まだ此外にも大部なものには「餘剩價値學說論」短かいものでは樣々の小冊子が大分殘つて居るのであるから、山川氏と雖も今後何時宗旨をかへて、此中のどれに手を着けられぬものとも限らないが、少くも今日までの事實に就て見れば、同氏は我が社會主義學者中最も亞流趣味の濃厚な人で、故らにマルクスの錦繡を避けて、まがい物寄切れの類を拾ひ集めるのに、特殊の趣味と技倆とを有する人であつた。（山川氏の予に對する批評文廿有七頁の中、他の色々の人の文句は引用せられて居るのに、マルクス自身の句が一つも引用せられてないのは、偶々同氏の趣味を露呈するものであらう）。何故こんな餘計な事を玆に書くかと云ふと、凡そ思想史上の通則として、亞流は本尊よりも單純偏狹頑固で融通の利かぬことを常とし、又さうなるのが當り前であるが、今資本論眞物の飜譯に沒頭せらるゝ高畠氏が、屢々マルクシズムの或部分に對しては存外無遠慮な批評をへて居られるのに、ブヂンの取次人たる山川氏が却て堅法華の立場を守り、偶々これに反對するものがあれば、地口で茶かして、態ざとせゝら笑ひをして見せると云ふやうな態度に出られるのは、みなこれ亞流毒の中毒症狀ではないかと思ふからである。（六月六日）

社會道德の再評價

室伏高信

一

凡ての問題は、その窮局において、超自然へと導かれる。われ〱が立ちとどまつてゐる凡ての地點は、たゞ世界の中心への一つの歩みであるに過ぎない。その各々の歩みは二重の歩みである。半ば地上的で、半ばトランツエンデントである。われ〱は現在と未來と、生と死と、現實と夢とのために、等しく心を勞するのである。人々は善を欲する。未來を信んずる。正義を望む。日常の俗惡な生活のうちにもわれ〱は等しく永遠（ダス、エヴキゲ）を崇拜する。かくして人間は不斷にトランツエンデントの世界に生活するのである。（註一）

（註一）　Walther Rathenau, Zur Mechanik des Geistes oder vom Reich der Seele, S. 9

われ〱が眼を上げて絶對を眺める時には、時間と空間とによつて條件づけられてゐるものは人々の想像のうちに往來することはなく、從つて人々は時間と空間とから自由である。これに反して、われ〱が「現象の舞臺」（ヒユーネ、デア、エルシャイヌング）に入つてゆく時には、人々はたゞ行爲するために舞臺に載せられる。智的思想がそこを支配し、時間と空間と運動とが規律する。この現象の舞臺を照らす光が倫理なのである。智の羈絆のほかなるトランツエンデントの王國から、現象の舞臺を照らす光を、倫理と名づけるのである。（註二）

（註二）　Derselbe, Von kommenden Dingen, S. 183

靈の立場からすると現象世界は一つの比喩である。そこはわれ〱がドラマトルクの意思に從つて、われ〱の運命を

創造し且つ經驗する舞臺なのである。智的觀察からするとトランツエンデントの世界は一つの登昇（アウフスチーグ）なのである。この二つの觀察の間における「無差別の地點」がわれ〲の道德的ゾルレンなのである。こゝに結合の必要がある。こゝには現象世界を全然自己目的として見ることもできないし、また全然遊戲として見ることも許るされない。經驗が智に教へ、そして高き原由を示すのである。（註三）

（註三） Kommenden Dingen, S. 164

二つの世界の結び合せの必要は倫理の必要である。われ〲のうちに陰暗な、朦朧としてゐるものを認識するために倫理が必要とされるのである。だから倫理とは法則ではない。規則ではない。忠告ではない。それは認識と評價とである。（註四）

（註四） Mechanik des Geistes, S. 188-9

二

現象世界とトランツエンデントの世界とはこれを混交してはならぬ。われ〲は現實生活を不動のトランツエンデントの思想でもつて攪亂してはならないとともに、先驗の王國を地上の秩序をもつて侵してはならない。現象の世界における智的考察からすると、われ〲は靈の始めを登昇並に進化として考察することが權利と義務とである。しかし先驗的考察からすると靈の存在には始めもなく終りもない。

經濟的、歷史的または社會的事物の考察は、それが常に現象の舞臺に働くものであることを忘れてはならぬ。凡ての觀察者は實生活を嚴格に考量し、そしてその關する範圍では科學や進化をその能力の範圍において信んじなくてはならぬ。しかし目的の問題が舞臺に登場すると、道德の觀念が指導者でなくてはならぬ。勿論科學や進化を附隨物だといふのではないが、しかしそは飽くまで決定的要素ではない。要求は、潮の干滿に響く星の力のように、遼遠の距離から[illegible]せてくる。

疑もなく利害もまた信仰を創造する！　自由貿易上の利益は彼等の實業上の思想を自然神教の形式で結晶させることができる。權力者は神と通ふことができる。自己の利益と衝突する確信をもつものがこの世界に一人もないといふことは人のよく知るところではないだらうか？　しかし、それなら世界の方向、その精神的意欲は、雜多な先驗化された利害のもとに立つ力の對角線に委せられべきものなのであらうか？

人間の意識のうちに交錯する全時代、全地方の古るめかしい評價系統は、指導的な、普遍的な根據と世界觀とを欠いてゐるために、指導的の原理となることはできない。

西歐人の民衆意識と美的觀念では、ゲルマン的な勇氣(ムート)と恐怖との極性が評價する。卽ち勇氣を示す性質のものが尊ばれ恐怖(フールヒト)を示すものは惡德として輕蔑されたのである。凡ての暴力的行動も、それが公明正大と正直と、勇氣とに結合してゐるものでさへあれば恕せられ、そして虛僞、狡猾、僞瞞の臆病は輕蔑される。非難は卑怯の非難であり、名譽は勇氣である。決鬪においての勇氣は犯則の名譽を救ふ。智慧や、精力や、信仰や、慈悲などは問題外である。そは有用なこともありまた有害なこともあるが、しかし決して決定的の評價原理ではありえない。詩においては勇氣と眞摯との性質が人々の同情を惹く。小說の主人公は懶惰で、空想的で、亂暴で、愚で、無知で、利己的であつても尙ほ讀者の稱讚を贏ちうることができる。しかし若し彼の性格が臆病と虛僞と狡猾とを示すものであつたとしたら、決して小說の中心として役立つことはできないのである。

しかしまた勇氣に對する尊敬とともに、人の心のうちには、慈悲や、智慧や、または中世獨逸人の心もちとは全く沒交渉な族長的理想への、東洋的の尊信をも見出すことができたであらう。

しかし前世紀の間に、智的評價の新傾向が創造された。技術への精神的能力、天才への直觀的能力の增大とが決定的のものとなつて、そして倫理的條件から解放される。

新らしい評價の極性(ポラリテート)が舞臺に登つて民衆の意識を動かした。機械化された思想は成功(エルフォルグ)を尊ぶのである。ブルヂョア的な功利主義が社會的評價の基準となつた。虛僞や、貪慾や、狡猾や、嘲笑や、誹謗や、惡意や、無慈悲や、高慢や、虛

榮や、忘恩や、吝嗇や、怠慢や、淫蕩や、粗野は、ブルヂョア的な成功と矛盾しない限りにおいて承認される。勤勉や、精力や、意思の力や、決意や、技倆や、頓智や、思慮深いことなぞが稱讃され、そしてそれが成功を齎らした時に大に喝采される。これが今日の半意識的、意識的、合法的、社會的な人間評價の總目錄なのである。

私は既に絶對の世界と「現象の舞臺」とについて語つた。絶對を中心とする精神、トランツエンデントの精神の職分は見えざるものに奉仕することである。それは我儘や快樂のためにでなくて、彼の使命と責任とを充たすがために現象世界を支配する。これに反して現象を中心とする精神、地上の精神は世界によつて、物質によつて、喜びと悲しみとによつて支配される。それは知識と所有との爲めに、生活と快樂とのために、權力と支配とのために戰ふ。かゝる精神の情調は貪慾と恐怖とである。それの力は純粹の分析的智力である。この狹隘な、非先驗的な力から世界像（ヴエルトビルト）と道德的敎義とを創造しようとする絶望の企が、在來の凡ての哲學の內容なのである。

有目的的智力の基礎のうへに樹てられた凡ての倫理は功利主義に終局するのである。就中主知的精神のうへに立つ實踐倫理と宗敎とは功利的（ウテイリツシ）である。ともに取引の相互利益(do ut des des Handelns)以上に出でることはできないのである。

トランツエンデントの精神は倫理上の取引ではなくて倫理的狀態なのである。それは規則を知らない。それは彼があるよりもより幸福なものを望みもしないし、またその方法をもつてはゐない。

先驗的の王國――そこから倫理の光が發してくる――は、最早や智の版圖ではない。そこへ導かれる精神の力は、人間の靈のうちに、そして靈のうちにのみ存在する。智や、論理や、數學の表なぞによつて、あらゆる世界を解明することのできるものであると臆斷したことが、凡ての哲學の誤謬であつたのである。（註五）

（註五） Komm nden Dingen, S. 163-173

三

靈は若く、智は非常に古るい。智は人間以前（ホールメンシリツヒ）の發生である。人類はこの學校の中で年老いた。幾代も幾代も、人類は

その思惟形式と功利的教義とによつて浸透されてきたのである

純智の遺産のうちで最大なものは歐羅巴的科學の創造と、そして機械的世界時代におけるそれの質量化とである。內部的と外部的の諸狀態、人民の凝集、相對抗する人民階級の相互作用、直觀的及び智的精神の闘爭が、この運動をもちきたすために協力したことは勿論である。こゝに時代の機械化が遂げられたのである。

われ／＼が機械化と名づけてゐる外的な世界現象は、內的に、機械化それ自身と同樣な感情、時代及び世界精神を作はないではゐない。それの感應が權力渴仰であり、それの發光が好奇心、知識渴仰、黃金崇拜、批評癖、懷疑、誹謗慾なのである。

それは先驗主義の拒否である。それは道德的觀念の死滅である。人間は自己目的ではなくて手段と墮する。事物はそれ自身目的ではなくて單なる手段に墮する。勞働も、教育も、藝術も、文明も靈の喪失を特質とするのである。人も、物も、哲學も、文學も、藝術も、社會も、制度も、機械化の犧牲に强要されるのである。一言にして蔽せば死せる生活(ein totes Leben)なのである。(註六)

(註六) Kommenden Dingen, S. 175, 176, 185, 187; Mechanik des Geistes, S. 37-46

試みに街頭に立つて見る。心ある人は店頭の裝飾を見るに忍びないであらう。實に忌はしい、粗野な嗜好に媚びるために製造された、愚鈍で有害な、無用で、脆いものが、注意深く店頭に並べられ、立派に市場に飾られ、そして高價を要求されてゐるのを見るであらう。數百萬の人間がこうした品物を造るために、運搬するために、賣るために、その機械と原料との供給とのために、奴隷のような務めに服することが眞實且つ可能であらうか？、他の數百萬人がこうした忌はしい物を獲得するために、また更に他の數百萬人がそれを獲得しえられないがために、奴隷化されることが眞實で且つ可能なのであらうか？、また人々はこうした貨物をどうしようといふのであらうか？ 彼等は家のうちにそれを蓄積し、必要以上に消費し、身體に纏ひ、頭髮や耳に結び、ポケットに容れ、古物商の手に賣却し、競賣場や質店に廻し、そして最後に亞弗利加へ輸出するのである。かくのごとき貨物飢餓、商品渴仰をもつて文明人は何を志すのである

か虚飾(シャイン)、然り虚飾に過ぎないのである。それは立派に見えるに相違ない。人が何處かで華美な品物を見る、同樣のものを欲しがる。同樣のものが無くても同樣に見えるものを欲しがる。或人は印象を、或人は嫉妬を思ふであらう。人々は實際にあるよりも富裕に見へることを欲するのである。何となれば富は直に名譽であるからである。

婦人の生活は今や全く機械化によつて浸透され盡した。ブルヂヨア婦人が家庭勞働をしなくなつたのは一世紀も前のことである。分業の結果は、紡織や、衣服の供給や、燈火、食物の供給が婦人の手から離れた。庭園や田園の仕事も婦人の手から離れた。そしてたゞ家計と教育と庖厨のことだけが殘された。富の增大はブルヂヨア婦人を、勞働の代りに文化の位置へと置き換へた。高い階級の間では社交(ゲゼリツトカイト)が始まつてきた。工場と家庭との分離は行はれた。勞働時間は長くなり、實業家、官吏、學者は、終日を家庭外で費すようになつてきた。

人々の生活のうちには、外部的と內部的の領域が創造された。男は外部的領土で働き、そこに生活の資料を稼ぎ、そしてそこを支配する。女は內部的領土で働き、家庭生活の秩序と行政とを支配する。女は家庭の主人となり、行政家となり、また買手となる。男が儲け、女が消費する(デア・マン・エルヴルブト・ディ・フラウ・ガープト・アウス)。」昔の時代には、衣服や家具を、極めて稀にのみ家婦が買ふことがあつた。職匠は、男主人と取引をするのほかはなかつた。今日では殆んど絕對的に、婦人だけが買手である。店舖や、街頭や、市街電車は婦人で滿たされてゐる。貨物を用命し、勘定をし、準備し、整調し、計測するのは婦人なのである。

過去八十年間における職業藝術(ベルフリツヒクンスト)の戰慄すべき衰亡は、單なる機械工業のためではなくて、また實に買手としての婦人の責任である。婦人は手工的技術、有用、純粹、特に標準と藝術とに理解を欠く。更に婦人は意思の確定と斷定の獨立性とに缺乏する。婦人は偶然的な刺戟に動かされ、外見や、安賣りや、商人の辯舌や、僞瞞的な計算やによつて影響される小賣商のあらゆる醜惡面は買手としての婦人の責任である。投機商がこの弱點に乘じて活躍する。婦人が文化の主たる鑑賞者である以上、藝術家もまたその嗜好に投ずる。劇場も、コンツエルテも、繪畫陳列所も、講演室も、みな婦人の領土である。書物や雜誌やの主もな讀者も、若しくは藝術家の友も、鑑賞家もみな婦人である。ローマン派以後の文學上の空虛なセンチメンタリズムは、主として婦人應接間(ターメンザロン)の最初の產物である。二人の偉大なる自由精神、シヨウペンハウ

エルとニーチエとが新婦人に反對したのは思ふにこうした經驗の結果である。

十九世紀の間に一つの婦人文明が築かれた。婦人は家庭の敎居から驅逐され、文化の重荷を擔ひ、社會上の金錢的な仕事を課せられ、そして男子の職業においてと同樣な活動的な雜務へと登せられた。そしてわれ〳〵の時代は男性的婦人の時代へと導かれた。買手としての活動や、街頭の生活や、自定やによつて、婦人の母性的方面が閑却されて、賣女的な傾向が増大してきた。現代文明の不愉快な産物は贅澤女（ルクスステイフ）である。限りなき饗應、富の誇示、これが現代婦人文明の課する義務なのである。それは無精神の享樂であり、更にそのこと自身が職業でもあり一つの生活でもある。その生活は豪奢な室、召使ひ、化粧、衣裝、肉體上の心配、浪費、厚遇、「貴賓」によつて滿たされる。競馬や、遊戲や、墮落した藝術やが話題を占める。敎育や家事上のことは雇人に任せられる。そして一生に二度か三度痲醉劑のもとで分娩するのが彼女の唯一の義務である。

機械化文明の世界では、こうした婦人の生活が肯定もされるし、或は賞讃もされる。下層社會の女は勞働し、賣淫する。若しくは男性的な職業のために戰ふ。時代の機械化は婦人の本質に影響した。貪慾となり、虛榮を誇り、人の眼を眩惑することを望み、巧言令色となる。われ〳〵はその隣人への婦人の嫉妬のために、往來における媚態のために、日夜何百萬マークを犧牲としつゝある。店頭に賣られてゐるものは如何なる貨物であるか？　煙草と酒とのほかに、無用な忌まわしい、弱々しい、婦人用の貨物が陳列される。他人が買ふから私も買ふ。流行するから買ふ。安いから買ふ。販賣術が上手だから買ふ。上流の家で見たことがあるから買ふ。

虛榮（アイテルカイト）は致命的な弱點である。彼は彼自身の生活を要求する。それは人間の創造的生活と相並んで、第二の生活を形成する。そこには孤獨や、自己犧牲やの時間はなく、眞理や必要への尊敬は喪失され、人や物はそれ自身目的であるとは考へられることなく、たゞ目的への手段と化する。

時代の機械化に特有な、新らしい思惟形式、研究の方法、行動の法則が、科學に、技術に、經濟に若くは政治に、少數者の獨占狀態から發展して、文明の國民的傳統となる。今日は政治においても經濟においても、若しくは科學において

も無數の智能が存在する。そして强い人格と、善き直觀的才能とが欠乏する。思想のうちにも行動のうへにも堪えられないほどの同一物の陳列に滿つる。教育によつては到達することのできないと思はれる方面でも、ある程度の智的發展の標準は萬人によつて到達される。藝術上の仕事においてさへ、教練によつて一定度の熟練が遂げられてゐる。ありふれた繪畫、人氣ある小説とは、普通の教養、普通の摸倣的能力の産物である。直觀的才能は、オッサのうへに、ペリオンを積み重ねた昔の希臘の巨人にのみ許さるるもののごとくに見える。(註七)たゞ物が序列され、死せる生活が連らなる。時代の機械化は人間のあらゆる生活に浸透したのである。

(註七) Kommenden Dingen, S. 176, 192-197.

理性が智的精神を支配し、そして基督以前においてのように、それは再び評價の任務を哲學に與へた。しかし哲學は耳を傾けられはしなかつた。數世紀の間、世界は機械化(メカニジールンク)の未前の發展に忙殺されてきた。科學も、テクニックも、資本も、交通も、憲法も、戰術も、階級も、生活法も、藝術もみな世界の人口過剩と國民の積み重ねとのために適用されなければならなかつたのである。勝ち誇れる分析術は人類のうへに目標を課するといふ最後の歩みを歩んだ。印刷屋が詩人を、彩色家が畫家を、機關士が旅客を、砲術士が軍事司令官を指揮するやうに。

忠實に且つ傷ましくも、哲學は四散した絲を集め、永遠の方向と、法則と命令とを定めようと努力した。空しい努力であつた!、哲學は批評的問題の形をとり、概念と世界と、神と實在とを疑ふことを知つた。それにもかゝわらず純粹理性のもとに、一つの簡單な前提に盲目であつた。卽ち思惟・計量及比較の智力と、數學の表及び質問とが、永遠の精神に與へられた唯一の力であるか否か、そして人間的神性的の浸透のために殘るものであるかどうかといふの前提を閑却したのである。從つてそれは主知的哲學(Intellektualphilosophie)から脱することはできなかつた。それは波動説の主張者が曲線と作圖とをもつて諧音を説明しようとするに等しい誤謬であつたのである。また測候家が氣象圖で春の夜明けを示すことが出來ると考へるに等しい誤謬であつたのである。實に哲學は何故に數學的及論理的術語で人間の微妙な感情の動きと憧憬とを説明することの出來ないかを見ることができなかつたのである。何故に觀察と觀念の分解とが人間の

最高の體驗に適用の出來ないかを見ることが出來なかつたのである。(註八)

(註八) Ebenda, S. 223-8

四

私は既に現代において何がわれ〱の痛切に知らなくてはならないことであるかを述べた。私はまた智的精神の本質が如何なる人間的發光のうちに表現せられるかを述べた。智的精神、智的哲學、そして機械的秩序!、人間のエゴツエントリツシな思想と感情とのうちに表現される不安と地上の拘束、野心と虚榮、多辯と虚僞、所有慾と智識崇拜、利害感と官能的享樂、恐れと喜び、Ethos からでなくて法則からの指導、非先驗的精神の大きな流が現代を蔽ふてきた。トランツエンデントローヂツクカイト!

魂の喪失は現代の一大特質である。機械化の前に、人の魂は飢餓に惱むのである。ゼーレンローヂイツクカイト!現代文明は魂に飢えてゐる。魂を喪失した「死せる生活」が現代を支配する。

しかし魂の飢餓は魂の回復すべからざる死滅ではない。資本主義の爛熟が資本主義の黄金國への道ではないやうに、魂の飢餓は、魂の夜明への道である。今日は魂の黎明の時代である! 智的精神の時代が破綻してそれの果實が熟した魂からの最初の射光が智的世界と機械的秩序を照らさうとしつゝある!

丁度封建主義が崩壞しつゝあつた時のように、古代希臘の文明が衰滅しつゝあつた時のように、昔の羅馬帝國がよろめきつゝあつた時のようにわれ〱の時代は、「終り(アインエンデ)」であるとともに、「また始め(アインアンファング)」である。そしてわれ〱の時代の未前の喜びのためには、それは外部的征服からではなくて、内部的の深みから、再生が進む。

新らしい哲學とともに、新らしい社會道德が起りつゝある。動機において、評價において、目標において、社會道德の再生の日が來りつゝある。われ〱の時代の凡ての純粹な精神のうちに、われ〱の希望の各々が、無意識の間に實現されつゝある。

今の歐羅巴には、お互に相知らないが、しかも眼の開いた、少くも一千の人がゐる。彼等は新らしい評價（フェルトング）の尺度をもつてゐる。水晶を透すように、運命の觀察が透映する。口と眼とだけが彼等に語るのではなくて、額と、姿態と、手とが語る。進歩の繼續、新時代の萌芽は、われ〳〵が文明世界の像を、直觀の力によつて寫し出す時にのみ、詩人的幻想の反射鏡によつてのみ見ることができるのである。（註九）

（註九） Mechnik des Geistes, S. 37-39; Kommenden Dingen, S. 65, 169-170, 212, 230

五

新社會道德の指導光線（ライトビトラール）は放棄（Entausserung）である。貨物への奉仕の放棄、權力の源泉としての事物の放棄、門閥的利己心の放棄、外部的生命の重要事への努力、ソリダリテ、共同體への讓歩、不正及び不道德の要求の拒絕、精神的及び道德的權力への責任の支配。重ねていふ、われ〳〵は買ふことのできる享樂を放棄せねばならぬ。われ〳〵勞働によつて、若しくはその他の方法によつて得たる利得の大部分を放棄しなくてはならぬ。われ〳〵は僅小の仕事や責任によつて目的を遂げられるような凡ての競爭場を放棄しなくてはならぬ。われ〳〵はまた家族的な經濟上の永續的特權を放棄しなくてはならぬ。

それ等の經濟的領域における放棄の根本的要求は、勿論反對の動機を伴ふに相違ない。官能性、野心、蓄積慾、家族的自負、人間性についての不完全な理解と評價能力の缺乏、國家及社會的感情の缺乏がそれである。

人間性への同情ある理解は、人間を輕蔑もしないし、買被りもしない。最大の必要事は、人間運動の主要動力、人間の心のうちにおけるほんとうの善力（Die guten Mächte）と惡力（Die böse Mächte）とが何であるかを把握することなのである。

善力はいふ「俺は創造し且つ實在することを意欲する」と。惡力はいふ「俺は所有し且つあるべく思はれることを意欲する」と。

お前は何を所有することを望むか?、その第一は何がお前を滿足させるかの問題である。それから貧乏を緩和するもの、官能の慰安、勞働の短減、自由の廣大。それが增大すればするほどよい。若しも官能と怠慢とが放恣でないならば若しもお前の求むる自由が內的平衡をえてゐるならば多く問ふことの必要はないであらう、若しも凡ての人々がそれ等のものの喪失に不滿でないとしたら、世界の苦しみの三分の二を減ずることができるであらう。

お前はこのうへに何を望むか? 安全を保障するものを。できるだけ長く、未來のうちに豫想することのできるだけ長く、これ等の貨物からの享樂を保障するものを。何故?未來のためへ心配と、未來を恐れるからである。

今日の社會制度のもとで、病人と老年とが無慈悲にも閑却されてゐる以上、老年と病氣とを憂へることは賢明であるに相違ない。今日のやうな富裕な時代において、老年や病人を保護することは容易なことである。しかもわれ〳〵はこゝに最初に地獄の臭ひを知る。凡ての害惡、太古の禍の根源、動物性の遺物、あらゆる高尙と卑賤の血液との分野である恐怖を見る。

お前は充分に持つ。お前は保障をも持つ。この上にお前は何を欲するか?お前は他人が持たないものを欲する。他人に感心を與へ、嫉妬を起し、尊敬をもたらし、權力を與へるものを欲する。何故にか?何故であるかは知らない。

ほんとにそうである。人はそれが何のためであるかを知らない。何となれば野心も、蓄積欲も、支配欲も、權力への意思も、同じ謎(レートセル)の解釋であるからである。人間性のうちにおけるこの最闇黑面は、われ〳〵が最早やそれを疑問とはしないで、自明のこととして受取るほどに、普遍的で、根深くて、底知れぬほどのものなのである。

われ〳〵は野心や、權力渴仰や、嫉妬や、虛榮欲やへの嗜好と、創造し、組織する意思の力、支配することによつて奉仕し、奉仕することによつて司掌するものと混同してはならない。指導において平安とより高き法則をもたらすところの責任の有機的の力、必要な秩序のために捧げられる犧牲の力、と混同してはならぬ。後者は責任 (V.rantwortung) と名づけ、前者は權力渴仰 (Machtgier) と名づける。權力渴仰は如何にして起つたか?また何故にその名において奴隷制度がもちきたされたほどに、權力渴仰が人間の社會生活を支配したのであるか?

民族、人種、または遺傳についての研究家は如何にかくのごとき渇慾が單に臆病な人間や種族の産物であるかをわれ〳〵に示すであらう。何となれば被壓迫者が迫害のもとに立つてゐる時には、他日地位轉倒し、その壓迫者を足にて踏みにじることを想ふのが唯一の希望であるからである。同樣にして、虐待される小供には野心の才能が發展する云々。

社會の研究家は答へるであらう。われ〳〵が機械化と名づけてゐる世界現象は、一つの内部的感情、時代感情及び世界感情をもつて應ずる。飛ぶもの、泳ぐものには、飄翔、浮泛の感情が起る。機械化の功果は權力渇仰であると。

われ〳〵は權力渇仰は凡ての先驗主義の實際の拒否であるといふことを確定すれば充分である。われ〳〵が現實と名づけるもののうちに凡ての存在の總計を認める人にとつては、所有することと支配することのうへに、幸福の神が宿ると想ふ。丁度小供がその手に星や蝶を掴むことを望むように。しかし、現象以上の存在を信ずるものは、かくのごとき破壞的な遊戯に耽ることはできない。彼にとつては、所有はそれが義務と保護との以外のものであるか、またはしかあることを望む場合には、破壞を意味する。權力はそれが責任以外のものであり、またしかあることを望む時には、腐敗を意味する。彼は彼の神聖なエネルギーが夢の欲求のために空費されてはならないことを知つてゐる。

肉體的快樂と官能的貪婪とを離れて、所有とは何か？それは人が罪とならずに動かし、制縛し、破壞することのできる物、または同樣に動かし、制縛し、破壞することのできる他の物と交換することのできる物の目錄である。死せる生活がかくのごとき事物によつて導かれる。生ける生活は、これ等の事物が創造的に、管理的に、責任とともに用ゐられる時に生れる。そしてこの場合には、所有〔ヴイクツーム〕の性質を失ふ。そして寄託物（anrertrautes Gut）と化するのである。それは製造者によつて創造される、がしかし彼に屬することを求めはしない。それは所有者に屬するが、しかし彼の物ではない所有の觀念はつまらぬものとなり、森は村にではなくて森に住む人に、風景は地主にではなくて旅行者に、美術館は國庫にでなくて、藝術の友に、製作は購入者にでなくて彫刻家に屬することになるであらう。

權力！それは主としては人々が彼等の創造することのできない何物かを望むからである。公衆は何人に喝采するか？群衆の波の中を勝ち誇りつゝ馬上の、または車内の人が會釋しながら迴る。彼は彼が誰れであるかを忘れるまでに夢のう

ちに坐する。口と耳とが遠ざかり、夜眠りに就くと彼は彼の神とともに、彼の家來の最末者のごとくに全く孤獨なのである。愛だけが權力を孤獨から救ふことができる。しかし權力者の悲しみは、彼が彼から何ものかを望む人々の擧を愛と誤ることである。

所有にむけると同樣に、權力においても、たゞ必要なのは責任的創造であり、そして創造は權力を必要としない。そこには權力の領域に活動の區域が、支配の位置に責任が、陶醉の代りに保護が代る。

權力渇仰者と所有貪慾の熱情は無目的であり、從つてまた無果實である。それは實用的にも觀念的にも非實在性なのである。

人間についての無殘な無識が依然文明を支配してゐる間は、彼の額に墮落の印を刻み、そして彼の言葉と態度が一見して卑賤と精神的死滅とを示してゐるやうな人々が、尊敬と信用との道が彼の前に開けてゐるのを見るであらう。これに反して蛇の智慧を缺く高潔な心の人々は輕蔑され、拒絶され、運命に虐げられ、不名譽な最後を遂げるに至るであらう。かくのごとき殘虐的盲目が行はれてゐる間は、貪慾がその無恥と、虛僞と、狡猾と、厚顏と、多辯と、阿諛との慣用手段を恣しいまゝにするであらう。そして彼がその目的を達した時には、智慧と、策と、力との模範として喝采されることが續くであらう。しかしこうした機械化のうちにあつても力の無制限に横行する現代にあつても、彼はこの種の所謂成功以上に一歩も出ることはできない。彼は客觀的創造をなしとげることはできない。彼は世界に奉仕することはできない。彼の所有は增大し、彼の權力は擴大するであらう。しかし彼が最後に欲求するものは彼の把握することのできないものである。責任ある權力の最後の殿堂はそれの忠實な僕に、放棄の力に、想像の創造力に屬するものであるからである。

この、機械的世界における二つの主要素、權力渴仰と所有崇拜とが、永遠的のものでないと主張したなら、それは輕率な獨斷なのであらうか？またそれの死滅を望むだとしたら、それは僭越のことなのであらうか？若しもわれ〳〵が認識と倫理的意思とによつて今日の罪惡と傳統的奴隸制度とからわれ〳〵を救ふことができると主張することができないとし

たら、そこには道德的夢想者にとつては、たゞ一つの撰擇、靜かに且つ直に世界から隱遁することとの一途が剩されてゐるのみである。

如何にしてこの古い人間性を變へることが可能であるか？

人間の歷史は、善と惡との長い繼續を經驗してきた。人間の犧牲、老人の殺戮、幼兒遺棄、骨肉相姦、偶像崇拜、仇討、あらゆる種類の性的惡行の來往を見てきた。凡ての時代に情熱や、罪惡や、愚やが人間のうちに眠つてきた。しかしそれの凡てが覺醒もさせることができるし。また統制することも可能である。それが卑しきものである時には恐怖をとほして、貴きものである時には靈をとほして、若くは道德的意識をとほして、個人によつて、社會によつて、統制されてきた。われ／＼の時代は指導の理想を缺く。新らしい世界觀、あらゆる分裂を統合するの能力ある世界觀が求められてゐるのである。自由意思が創造しないものは認識が、普遍的評價判斷が、創造するであらう。今日は社會の良心がたゞ虛僞と臆病とを侮蔑してゐるものを、明日は權力渴仰を、所有崇拜を、享樂慾を、嫉妬を、虛榮を、卑しむるに至るであらう。世界が解放されて、そしてそれの自由が構成的且つ創造的に、あらゆる靈魂に實現される。

若しも誤れる歡喜の二つの主要動力を除くことができるとしたら、われ／＼は人間の病める肉體に慰安をもちきたすことができるであらう。黃金への强烈な信仰、凡ての人々をしてその所有を防禦し隱蔽し、そして所有の獲得をもつて生活の神聖なものだとするの信仰が終りを告げる。空氣と水は不可缺のものであるが、しかし自由であり、喜んで供給され、喜んで分與される。何となれば何人もこれ等のものに缺乏しない限りはそれへの情熱はなく、何處にもそれを蓄積しようとするほどの愚者はなく、また何人もそれを獲得しようとして苦勞するものはないからである。不渴の泉から水を汲むように、若しもわれ／＼が生活の所要費用を平靜に適度に汲み取るようになるならば、黃金への信仰は跡を絕つに至る。(註十)

(註十) Kommenden Dingen, S. 182-191

六

來るべき時代は、輕蔑を知らないであらう。卑しみの感情は神の尊嚴に對する冒瀆であるからである。人々は肉體的にも靈的にも奴隷である人間を卑しみもしない苦るしめもしないで、愛の心をもつてそれを高める。少年の時から奴隷的の人は責任を課されることの代りに、そして責任を課するに足るまでに啓蒙される。彼は彼が眞理に向つて戰ふに至るまでは責任を委せられはしない。溝浚らひの職業は、雜談家や厚顏者よりは遙に尊敬される。衣服の流行や、享樂の方法や、生活の貴族的諸形式やは最早や尊敬されなくなるであらう。

如何に世の中に採用されてゐる一般の習慣が人心のうへに巨大な力をもつであらうかは、狹隘なそして非靈魂的な「紳士」の觀念の行はれてゐる國土の一例によつても知ることができる。そこには數百萬の人が作法の規律に服し、非紳士又は無作法だといふことで非難される。未來の先驗的義務及び要求の時代ではかくのごとき「貧しい藝術」によつて規律されることはなく、人々はたゞ問ふであらう。何が人間の靈魂に價ひし、且つ一致するかと。經驗的な、主智的な、功利的な義務、性質、職業、才能または權利を意味するようなあらゆる標語、今日の時代を支配するものは、明日は蒼然たる古色と化する。

われ〱は今や最後にして且つ嚴肅な試驗に近づきつゝある。われ〱は人間の意思の齒車を動かす强大な動力は永遠不動なものだと思ふてきた。しかし虛榮や、見せびらかしや、廢物や、所有やの渇仰は終りを告げる。

若しも地上の社會が人間の惡しきまたは愚ろかな衝動（トリーブ）のうへに組織されるものだとしたなら、そは滅亡した方が増しである。しかしまた若しも世界の永遠の道德（エヴホゲ、ジツトリツヒカイト）の破るべからざる信條に坐するならば、生活のために、惡事の必要のないことを知るであらう。

凡ての創造はそれ自身のために行はれた時に貴い。凡ての活動はそれが欲情の火と恐怖の鞭とによつて導かれる時に、それ自身において用ゐられ且つ充分でなくて、たゞ他の目的物のために存在する時に、無意義である。昔の職匠時代には、勞働が製作品に對する驚嘆すべき、父らしい、崇高な愛をもつて行はれた。今日の目的的職業（ツヱツクゲヱルベ）の大工業制度のもとでは、貨物はたゞ賣るためにだけ製造される。昔の職匠の美的精神は今日の機械の力の前に時勢後れなものとし

て卑しめられる。

しかし若しわれ〳〵が今日の利得のための卑しき生産物から眼を上げて人間生活のほんとうの意味を把握しようとするならば、たゞ創造的生活（schopferisches Leben）のみが、ある他の目的のためにでなく、それ自身のために事物のなされる生活のみが、價値あることとなされるに至るであらう。ほんとうの藝術家はたゞ創造の情熱と愛とのために、ほんとうの研究家は知識慾と組織的精神とのために、ほんとうの政治家は意思の力と思想の强要とのために、彼の勞働に服する。原因と利慾との二つの主人に使へる仕事は、たゞ一つの主人、原因にのみ奉仕する自由の仕事によつて置き代へられるの日が來りつゝある。

今日高等な創造的職業における指導的精神としての原因に對する愛の自由精神が、あらゆる勞働の指導精神となることが可能でないであらうか？　この地上には愛によつてなされ能はない、精神と意思とによつて高貴にされない一物と雖も存在しないのである。人間の性質は人間の職業のごとくに變化ができる。そは生れながらの軍人と牧師とを造るのみではなしに、天成の印刷屋、自轉車乘り、將棋指し、速記者を造る。われ〳〵は相續からの自由、欠乏からの解放、職業撰擇の自由をえなくてはならぬ。この要求が滿たさるなら、このうへの暗愚な動機、專制家の貪慾と恐怖とがなくなりそして人々は飢えと貪りとによつてゞはなしに、愛によつて生活することができるであらう。

指導し支配しようとする人間の衝動は、今日においても必要ではない。利得しようとする意思が經濟生活のほんとうの仕事をなしとげる力でないと同じく、單なる權力への意思は、支配のほんとうの仕事をなしとげる力ではありえない。無用な支配者はその地位が最も薄弱である。そは暴君の地位よりも不安定なのである。虚榮は致命的な弱點である。眞理と必要とへの尊敬が沈み、そして人と物とは自己目的であることから單なる手段へと陷する。しかし若し人々が原因への奉仕とともに、利己的な動氣に鼓舞されてゐるなら、人々は方向を喪ふであらう。實にその一生を己れの經歴を造ることの憐れな仕事のために捧げてゐる人にとつては、世界と生命とは天帝の花園ではなくて謀叛と陰謀との板敷きの舞臺である。彼の眼は最早や純清な想ひに、彼の手は强い力に、彼の心は子供らしい天眞爛熳に歸ることはできない。

若しも彼の心が彼自身の生活と幸福とにのみ注がれてゐるとしたら、どのような才能の人であつても、神の試練に堪えることはできない。

野心によつて、嘗つて最後的なものが造られたことはない。彼自身のためにでなくて、對象物のために生活する人たけが物質への狂熱をもたらす。ノートルダムとエルフルトにおける劇的欲求のためにではなく、帝王的權力のために、ナポレオンは殘忍となつた。

たゞ責任だけが支配を要求し、またその要求を肯定される唯一の力である。それは決して勳章のために支配を求めるのではない。それは決して彼と彼の喜びとのために權力を求めるのではない。責任ある支配(verantwortliche Herrschaft)とは奉仕である。しかしそれは我儘な權力を許容する神秘的な專制神への奉仕ではない。責任ある支配は××を奴隷に、奴隷を××にする。奴隷を支配することを望む人は、彼自身が走り步るきの奴隷である。「彼に自由に仕へ、彼が自由に仕へる人は、自由である。」

專制主義の喜びは自己尊大、人間の劣情、安逸、華美、名譽及び嫉妬の喜びである。責任からくる喜びは危險、勞働、苦るしみ、及び創造における喜びである。犧牲的創造(オープフェルンデスシャッフェン)は活動的愛、われ／＼の先驗的特權の最高の保障である宇宙の法廷の前に立つ人は、「私の幸福は創造的愛(シャッヘンデス、リーベ)である」と述べる。

責任は人間の動機から名譽探しへの卑しい力を除くことができる。野心はたゞ弱者と愚者とが偉大な機會を濫用するために存在し、責任への意思は能力と撰まれた少數を意味する。何となれば凡ての人は彼の爲しえられるものを、また眞摯にして非利己的なものを愛するからである。

新社會道德は、決して空想ではない。

來るべき時代においては、最早や何人も貧乏の狀態に陷れられることはできない。從つて何人も富に無頓着になるであらう。今日行はれてゐる厚顏やせか／＼しさは、たゞ失望と破壞とから免れるために必要であつた。個人的の利己心のための無慈悲な追及は、やがて世界的に蔑しめられるに至る。購入者の貪慾と、金儲けのための狂奔が跡を絕つ。勞働

は嚴肅に且つ尊嚴となり、そしてわれ〳〵の時代の回憶は過去の古着市として後の人々の眼に映ずる。有害な贅澤と疫病的の歡喜とは、最初に都市から、郊外から、そして巴爾幹、最後に熱帶地方から消えるであらう。そこにもこゝにも、女黑人のように、虛飾に飢え、樣々の色彩の着飾りや、香水を見せびらかせて高慢に往來を行く婦人は、クツシヨンや寢臺で人の眼を眩惑させてゐる婦人は、その愚ろかさの最後の犧牲に微笑する女は、彼女等が何をなしてゐるかまたほんとうに何をなすべきかを悟るであらう。窓硝子から、家具から、衣服から、あらゆる粗野のぴか〳〵が消える個人的の富裕は、最早や世界的な、當然な、推賞すべき目的としての存在を失ふ。贅澤は稱讃でなくて、たゞ憐れみの驚きを起すに過ぎない。技術的の進步は人生の目的に奉仕し、機械は人類への奉仕者として、物質を統制するための助手として、勞働を精神化するために、人間を動物的の仕事から救ふために、そして世界の增大する人々のための奴僕と化する。

今日の社會では、人間關係の心情は阻隔と敵意とである。人々は彼の知らない何人とゝも話し合ふことを欲しない。外國人は利害の念から生れる刻薄とそして虛禮とをもつて迎へられる。金錢關係では、善性（ゲミユートリツヒカイト）はありえない。知り合ひの間では、滑稽なほどの丁寧な會釋が換はされるが、しかし敵意は經濟的爭鬪からその間に根ざす。人間が、今日盜賊と殺人に對して保護されてゐるように、住宅難と飢餓と貧困と病氣とに對して保護されるなら、社會的敵意への是認は存在の理由を失ふ。用心の最も安價なるもの、猜疑は、今日では處世上の第一の教訓である。われ〳〵は久しい間多辯家や、商賣人や、政治屋や、欺僞師によつて欺かれて來た。しかし人間が心配と貪慾とから解放される時は、人々は自制、自尊、自信の人となる。若しも人々が純粹な幻想に慣れ、その隣人を眞にあるごとくに見ることが出來るならば、人は互に信賴し、互に尊敬し合ふに至るであらう。猜疑の短見的臆病がなくなり、われ〳〵は互に顏と顏と見合せそしてお互が兄弟であることを知ることができるであらう。

貪慾と野心との焰のもとに、社會的敵意はいよ〳〵增大される。兄弟と兄弟、國民と國民、階級と階級とが相戰ふ。あらゆる人間の問題は、「俺のもの」「お前のもの」といふ闖入者のために紛亂される。如何なる政治家も、今日は國民

を公明正大な目的へと導くことは不可能であり、正義への内的衝動を與へる意志の統合をもちきたすことは不可能である。

富の分解と侮蔑とのみ、世襲の廢止、永久の負擔者と永久の絞取者との廢絶のみ、そして生ける、自己更新的な有機體のうへに立つ人間社會の創造だけが、深い道德的意識から根ざす新社會の、靜かではあるが驚嘆すべき變移だけが人間と國民との同胞の戰に適する。地上の樂園を創造するがためにではなく、人間の存在を安慰にし、勞苦を除くがためにではなく、また單なる正義のためにでもない。世界が物質のために滅びてならないとしたら、永遠の義務のもとに世界が更に新らしい、强い生命、共同體と靈魂との爲に、神の意を滿たすがために、新らしい戰が戰はれなければならぬ。

人間の最も内部的な生活感情はソリダリテの感情となる。今日では禁ぜられてゐないものは許容されるとなされ、凡ての人々は許された權利の最極大まで追及しゐるが、來るべき日に、人々は社會的有用なもののために、その力のあらん限りを盡すであらう。生活は恐怖と貪慾とから解放され、冷やかな計算に隷屬することなく、解放された意思は、自己破壞的な目的に仕へることはない。われ〳〵はわれ〳〵の生活の目的である崇高な目的のために、神の意のために、責任のために、靈的實在への精神のために、來るべき日を活きる。

經濟學も社會學も、應用倫理學以上の何ものでもない。國家も、經濟組織も、また社會も、單なる利益の表徴以外のものでないとしたら、また若しも生産者と消費者との武裝し若しくは武裝せざる結合體であるに過ぎないとしたら、それは滅亡に價ひする。靈的生活内容だけが價値ある。

評價の標準は、何がより善きか、何がより惡しきかではない。何が賞讃されべきか、何が輕蔑されべきかではない。何が將來に繋るか、何が過去にかゝはるかである。何が責任へ、何が安逸へ導くかである。何が生命を增進するか、何が死へ導くかである。

そこにトランツンデントへの道がある。そこに創造的情熱、眞理、實在及び認識への道がある。物から、人から、自我からの解放。事物のための事物への原理、愛のための愛、感謝、犧牲。こゝに人道へのほんとうの通路が橫はる。（廿一）

(註十一) Ebenda, S. 204-217

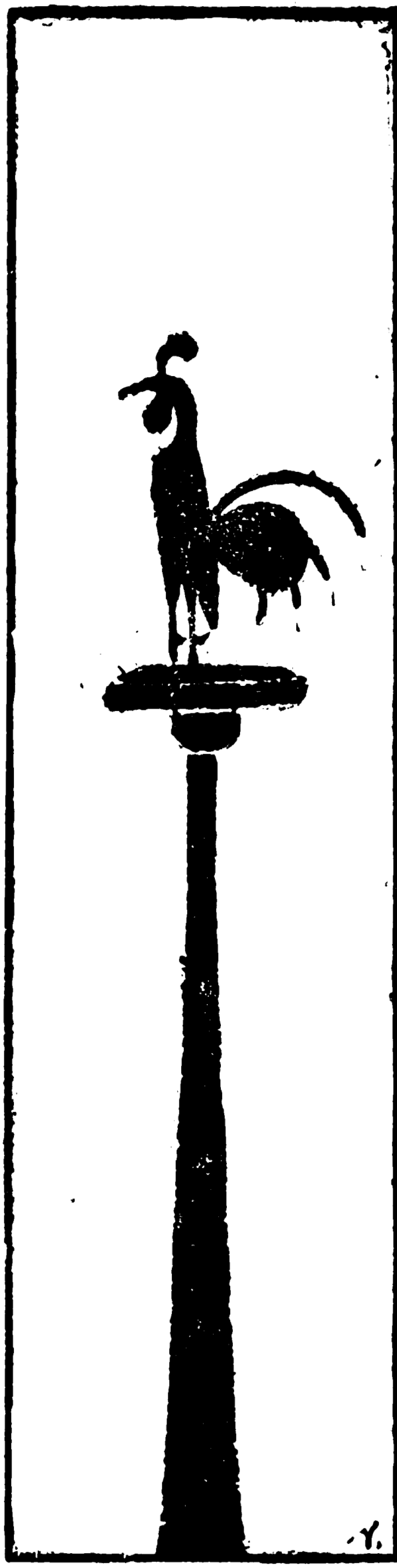
七

人間性の不變！　こうした言葉が、金持ちによつて、貴族によつて、未來に信仰をもたない人々によつて、虚言家によつて、幾度となく繰返されてきた。疑もなく笑と涙、愛と憎惡、快樂と苦痛とは常に古るくしてまた新らたである。それにもかゝらわらずブツシ人とパプア人とは原始人の紀念として今も尚ほ生きてゐる。基督出でゝ人間の存在を二つの時代に刻んだ。三世紀の間は西歐では人間性を變へるために過ぎた。四世紀間の闇黑な時代に、人間性は新らしいブルヂア人へと移つた。

自然は人間を群として樂園へ驅るのでないことは勿論である。今日でも尚ほ石器時代の人が殘つてゐるごとく、明白も尚ほ智的人間が殘るであらう。しかもそは最早や指導的ではないであらう。變化とは指導的評價の再整である。

來るべき日は、最小の努力によつて最小の効果を奏するものゝ勝利の時代ではない。權力と幸福との代りに、神と正義とのための道德の支配する時代の響が、泥亂のうちに、聞えてゐるのである！。(註十二)

(註十二) Ebenda. S. 216ff.



ボルシエヴヰズムの『資本主義への降伏』（其二、完結）

福田徳三

引用書目

19. Sergej Dnjeprow, Die Krise des Bolschewismus. Berlin 1921.
20. The Economist. Vol. XCIV. No. 4101—4104. London April 1, 8, 15, 22. 1922.
21. Die Volkswirtschaft Sowjet-Russlands im ersten Vierteljahre 1921.
22. Die kommunistische Internationale, No. 19. Sinowjew, Alte Ziele..........neue Wege. (Ueber die proletarische Einheitsfront). S. 1 ff.

23. Kulischer, Das Wesen des Sowjetstaates. Berlin 1921.

24. Larin & Kritzmann, Wirtschaftsleben und wirtschaftlicher Aufbau in Sowjet-Russland 1917——1920. Berlin 1921.

25. Lenin, Zur Agrarpolitik der Bolschewiki. Wien 1921.

26. Miljutin, Die Volkswirtschaft in Sowjet-Russland. Wien 1920.

27. Pesterschetsky, Die Hungersnot in Sowjet-Russland. Berlin 1921.

28. Radek, Die auswärtige Politik Sowjet-Russlands. Hamburg 1921.

29. Russische Korrespondenz. Jahrgang II, Band 2 No, 5

Lenin, Die Vorbedingungen und die Bedeutung der neuen Politik Sowjet-Russlands (Ueber die Naturalsteuer) S. 285ff.

Varga, Die neue Wirtschaftspolitik Sowjet-Russlands. S. 355.

Der englisch-russische Handelsvertrag. S. 366.

30. Dieselbe, No. 6.

Gesetze Uber Naturalsteuer. S. 420ff.

Lenin, Zur Frage der Naturalsteur (Rede auf der A,K, K. P. R., Moskau, Mai 1921). S. 424ff.

Swiderski, Die praktische Durchführung der Naturalsteuer. S. 448ff.

Die gegenwärtige Wirtschaftspolitik Sowjet-Russlands (Resolution angenommen von der A. K. K. K. P. R., Moskau, Mai 1921). S. 453 ff.

Ossinski, Die "alte" und die "neue" Politk der russischen Kommunisten. S. 507ff.

31. Die Volkswirtschaft Sowjet-Russlands im Jahre 1910.

32. Sinowjew, Der Aufbau der Volkswirtschaft und die Sowjetmacht. Hamburg 1921.

33. Spectator, Der neue Kurs in der Wirtschaftspolitik Sowjet-Russlands (Die Politik der Sowjet-Regierung und die Zukunft Russlands). Berlin 1921.

34. Derselbe, Sowjet-Russland in Zahlen. (Das Wirtschaftsleben des alten und neuen Russland in 75 statistsche Tabellen dargestellt) Berlin 1921.

（十）

レニンが右の演説に於て提示した勞農露國の新經濟政策を具體的に斷行したのは、唯一九二一年三月以來の事である。而して其は對外的、對内的の兩方面に於て、夫れ〳〵重大な出來事によつて幕を切つて落したのである。對外的の出來事とは、一九二一年三月十六日倫敦に於て、英國の代表者ホーンと勞農露國の代表者クラシンとの間に調印せられた「英露通商條約」是れである。（書目(二九)に其全文を揭ぐ）此條約以前(同年二月二十六日)に勞農國は波斯との間に條約を締結した。英露條約と同日なる三月十六日にはトルコとの間に條約を締結した。越へて三日目の三月十八日には勞農露國、ウクライネ及波蘭間に平和條約の成立を見た。英露通商條約は全文十四箇條から成るもので、其のプレアムブルには次の如く明記してある。

『英露兩國間に平和通商と交通とを再興することは、兩國の利益上望ましきこととなるにより、而して此の目的の爲には兩國相互の經濟的及び政治的關係を將來に對して規定す可き正式の一般的平和條約の締結せらるゝまで、一の暫行的協定を兩國間に結ぶことは、兩國の利益上望ましきこととなるによつて、兩國は通商及び交通の回復に關して、以下の取極を爲せり。

此協定は、次の條件を充すことを前提とす。即ち

（第一）兩當事者の各一方は、他方に反對する行爲又は企て、及び英帝國若くは露勞農共和國の施設に對し直接又は間接に對抗する、一切の公的宣傳を、自己領域外に於て行ふことを避く可く、而して殊に、露勞農政府は、亞細亞の諸民族を、就中印度又は獨立國アフガニスタンに於て、英國の利益又は英帝國に反する敵對的行動に出でしむ可く煽動す可き一切の軍事的、外交的、若くは其外の行動又は宣傳に關はるゝ企てを避く可きこと、英政府も亦た舊露帝國に屬し今は獨立せる諸國に關しては、右と同樣の特殊義務を負ふこと。

（第二）露國在住の一切の英國臣民に對し遲滞なく歸國を許さる可きこと。又た大英國又は英帝國の其他の部分に

在住する露國民にして露國に歸らんと欲する者は同じく其自由に任ぜらる可きこと。『公けの宣傳を行ふ』なる字句は、自領以外に於て行ふ宣傳を、其何たるを問はず之を助け又は奬勵することをも含むことは自明の事とす。

兩國は、自己の代表者及び其統治下に在る凡ての人に對し、即時に以上の規定を遵守す可き必要なる命令を與ふ可き義務を負ふ。

右を約して云へば、(一)自領外に於ける一切の宣傳の廢止と(二)歸國の自由の認承との二に歸するので、殊に、英國に對するボルシエヴヰズム宣傳の廢止に最も重きが置かれ、其中でも印度、アフガニスタンに於いて、排英的、反英的プロパガンダを一切廢止することが、特に明言してある。是れは、英國に取つて、最緊要事の一に屬することは言ふ迄もない所である。否、獨り英國のみではない。一切の非ボルシエヴヰズム國に取つて、最も恐しい事の一は、勞農國の甚だ有力有効なるプロパカンダ之れである。其れが繼續する限りは勞農露國の承認は愚か、其一部的開國も望まれない事である。英露條約によつて、勞農露國は、明白に其廢棄を誓約した。而して少くとも滿一ケ年後の今日に至るまで、勞農國は誠實に此誓約を遵守した。此れがロイド・ヂョーヂをして、又並びに公正なる見識を持し、佛國の金錢又は其他のものによつて買收せられざる英國人をして、今度のジエノヴア會議に於て、佛國の我利心を向に廻して、著しく露國に對し同情ある態度を執らしめた一原因であると云ふも、決して過はないことと信ずる。外國に於けるボルシエヴヰズム宣傳の廢止とは、他の言葉を以つて云へば、世界革命の即時的促進の斷念である。此斷念は、決して、現下の勞農露國の經濟難のみが其原因たるのではない。世界の形勢の推移、殊に刻下の不景氣に壓迫せられつゝある英國を始め世界文明諸國に於ける、社會主義の趨勢と勞働運動の現狀とに關する冷靜なる觀察が、勞農國の指導者を此の斷念に導いたことは、疑を容るゝ餘地はないと思ふ。其れは、少くとも書目(二十二)(二十八)(三十)(三十二)(三十三)に揭げた彼等の明言に徴して、固く斷定し得るところである。

英露通商條約の第一條には次の如く規定してある。

『兩國は、相互に何等の封鎖を行はざる可き義務、及び合法的に、兩國の領土より他の一切の外國へ輸出し又は外國

より輸入せらるゝ商品に關して、英國と露國との間に於ける通商の回復を從來妨げたる障碍を一掃す可き義務を負ふ。又た右記の通商と他の諸外國との通商との間に何等の區別を爲さず、此種通商の目的の爲めに必要なる銀行、信用金融取引に何等の障碍を設けざる可く、此等は凡て當該國の一般立法に從つて取締らる可きものとす。

（下　略）

此く劈頭第一に封鎖の廢棄と、通商障碍の撤廢とを約したのは、右のプレアムブルに規定した宣傳廢止に對し原則として勞農露國の開國を公認したものである。勞農露國が誠實に對英宣傳を廢したに對して英國も亦誠實に封鎖を廢止した。而して英露兩國は、右條約第四條の規定に基いて、兩國通商再興實行の爲めに各委員を任命した。露國の駐英委員は有名なクラシンで、彼は英國に於て不評判であつた前委員リトヴヰノフに代つて其任を襲つたが、英露兩國通商の再興從つて勞農露國開國の第一着歩が、豫期以上の成績を擧げたのは、其殊勳主として彼クラシンに在ることは、普く認められて居る所である。而して英國政府は此條約調印を以て、事實上勞農露國を承認したものであると解釋して居るのである。唯だ露國債務の問題に就ては、右條約の附文に於て、次の如く規定した。

「以上の通商條約調印と同時に兩國は次の如く宣言す。兩國の一方又は其臣民の兩國の他方に對する、財產又は權利又は關係に關する一切の債權にして、兩國の現在又は以前の政府が引受けたるものに就ては、本條約前文に記載したる正式一般的平和條約に於て規定す可きものとす。

但し前項の一般的効力を妨げざる限りに於て、露國勞農政府は、原則に於て、露國に對して、貨財又は勤勞を供給して、其支拂を受けざる私人に對して、賠償を支拂ふ義務を承認することを玆に聲明す。此義務の履行に就ての具體的方法は、本契前文に記載したる條約に於て規定す可きものとす。英國政府は又た玆に同樣の聲明を爲す」。（下略）

露國債務の問題は、追つて取結ぶ可き正式の一般平和條約に讓り、唯だ露國は英國私人の債權に對し賠償の義務を認めたので、是れが『資本主義への降伏』の第一歩と看做されて居るのである。而して英國政府は、此條約調印と同時に聯合諸國に特に移牒して、露國債務の承認に就ては、聯合諸國の債權は些も此條約によつて影響さる可きものでないと聲

明した。是れは佛蘭西を第一として、米、日、其他諸國に對して安心を與ふる爲めで在ることは言ふ迄もない。ジェノヴァ會議は、英國の此の聲明は誠實なるものであることを證明した。

(十一)

さて右通商條約調印滿一ヶ年を閲した今日に至る其效果如何と云へば、勞農露國の完全なる開國は無論之を見るには至らないが、一部分的開國の實は確かに擧つたのを見るのである。駐英勞農國通商委員の發表する所によれば、露國購買組合が一九二一年十二月迄に英國に於て購入した商品は、其總額六百四十七萬七千九百十八磅であつて、其中重なるものゝ内譯を擧れば、左の通である。

紡織品及衣料	二・二九四・七五八磅
農業用諸機械、器具	四九三・七五四〃
機械及附屬品	二三七・〇一二〃
鋼索	八九・三九六〃
種子	三七四・七四六〃
食料品	一・三三九・二七七〃
藥品及化學製品	三三三・四四五〃
石炭	三九〇・二〇一〃

之れに對して露國から英國への輸出額は百六十萬千百十六磅で其中重なるものは左の通である。

銅	二六・三〇〇磅
亞麻、大麻、麻屑	二〇・二・〇三五〃
毛皮	一四・四〇一〃

マンガン	八・五五〇〃
油	四〇八・七五七〃
瀝青	二七・三九二〃
加里	六・〇三一〃
向日葵油粕	八・一二〇〃
木材	八四六・七二三〃
煙草	一六・四八六〃
タール	一六・二一七〃

即ち露國の對英輸出は、輸入の三分の一にも足らぬので、其不足額は主として金を以て支拂つたのである。露國の中央銀行の戰前の金保有高は一億五千萬磅(十五億圓弱)と傳へられて居るが、今日現在の勞農露國の金保有高は、恐らく五百萬磅(約四千七百萬圓)内外に過ぎまいと云ふ(書目(二十)四一〇三號參考) 然るに、對英國丈けで一ケ年に五百萬磅の金貨支拂を要するようでは、甚だ以つて心細い次第と云はねばならぬ。輸出品中最重要なるものは、木材、油及亞麻であつた。殊に木材に至つては、英國市場を可なり潤したのである。

一九一八、一九一九、一九二〇年に於ける露國の外國貿易高は書目(三十四)の『數字に顯はれた勞農露國』に就て之を知ることが出來る。即ち

輸入	一九一八年	一九一九年	一九二〇年
總額	一一、五〇〇、〇〇〇ポンド	五二〇・〇〇〇	三、七〇〇・〇〇〇
内 農具	一四〇、〇〇〇	二・四〇〇	三七三・〇〇〇
金屬及其製品	一、三〇〇、〇〇〇	六・〇〇〇	

機械類	二六七、〇〇〇	―	二・八〇〇
器具	三四、〇〇〇	五七九	二七・二〇〇
輸出總額	一、八九三、〇〇〇	五二・四〇〇	二五七・〇〇〇
内 穀物	一七二、〇〇〇	―	一・五〇〇
亞麻	二五八、〇〇〇	―	七〇、〇〇〇
木材	二一一、〇〇〇	―	三〇・〇〇〇

即ち戰後三年間露國は非常に偏した輸入超過國であつたのである。

一九二一年の外國貿易高に就ては、レニン自ら昨一九二一年十二月二十四日の演説に於て、輸入總額八三三・〇〇〇噸輸出總額一九二・〇〇〇噸と推算して居ると云ふ。言換へれば一九一八―二〇の三年の合計に比し一九二一年の輸入は其三倍、輸出は其四倍となつたのであるが、而も猶ほ依然として非常な輸入超過を示して居ることを察することが出來る。

書目（二十）エコノミスト四月十五日號七二二頁に據る

右とは反對に戰前の舊露國は常に輸出超過國であつたのである。即ち左の通り。

（單位百萬ルーブル）

年	輸出	輸入
一八九一――九五	六二八	四六九
一九〇一――〇五	九四一	六三二
一九〇六―一九一〇	一二〇五	九一〇
一九一一	一五九一	一一六二
一九一二	一五一九	一一七二

一九一三	一五二〇	一三七五

右の內對英貿易の露國貿易總額に對する百分比例は左の通りであつた。

年	輸出	輸入
一八九一―九	二五・六	二三・七
一九〇一―〇五	二二・二	一六・四
一九〇六―一〇	二一・一	一三・七
一九一一	二一・二	一三・四
一九一二	二一・七	一二・一
一九一三	一七・六	一二・八

即ち戰前の露國は英國に對しては、常により多く輸出國で、より少く輸入國であつたのである。其反對に獨逸に對しては、より多く輸入國であつた。即ち

年	輸出百分比	輸入百分比
一八九一―九五	二五・二	二六・四
一九〇一―〇五	二三・五	三五・八
一九〇六―一〇	二七・一	三九・五
一九一一	三〇・八	四二・〇
一九一二	二九・九	七五・四
一九一三	二九・八	四七・四

之を要約すれば、戰前輸出超過國であつた露國は全體として輸入超過國となり、戰前の貿易關係に於て常に輸出超過の關係にあつて英國に對して、過去一ケ年に於ては前述の如き非常な輸入超過の關係を以て、貿易を再開したのである。而して其差額は差當り金貨を以て支拂ふ外に道はなかつたのである。レニンが前掲の演說に於て金の重要を力說して居る理由は、之を以て十分に首肯せられるであらう。勞農露國の開國は確かに第一步を踏けた。併し乍ら其れは極めて畸形的のものであつて、或點から云へば、却て開國せざる以前よりも劣れる狀態を示したものである。併し乍ら逆轉は許さ不可きではない。開國の過渡變態を正當に引直すには、一度始めた開國を更に完成するは外に道はないのである。世界全體として見して其は、對英貿易の恢復と同樣に世界の他諸國に對する貿易の恢復を續行する外にないのである。世界全體として見ても亦同樣である。旣に英國によつて開かれた開國の承認を完成することは。實に世界自らが現下の經濟的自縄自縛(私は之を名つけて、世界經濟の『自己封鎖』Selbstblokade と云ふ)を解く所である。

(十二)

勞農露國新經濟政策の具體的體現の第二は對內的の出來事である。而して其は英露條約に後るる僅かに五日、一九二一年三月二十一日『現物税法』(我邦では之を『農業税』と譯する人が多い。露語の原語は何と云ふか私は知らぬし聞いても分らぬが、書目(三十)の勞農露國公認の機關刊行物には凡て Naturalsteuer としてある。是を邦譯すれば『現物税』るあつて『農業税』ではない)の布告之れである。其全文は、書目(三十)に載せてある。此税法は、第一條に『強制徵發に代ふるに租税を以てすること』と題して『農民の自己勞働併に其經濟的手段の產物に對するより自由なる處分を基礎とする秩序的にして不靜なる經濟運營を保障し、農民經濟を鞏固にし、生產力を高むる爲め、並に農民の國家に對する義務を精密に確定する目的の爲めに、食料品、原料及飼畜料を國家が收得する方法としての強制徵收を廢し、代ふるに現物税を以つてす』と規定し、第二條は『租税は強制徵收より負擔に容易なり』と題し、第三條は其徵收方法を定めて『此税は收穫高、扶養口數及飼畜數を參酌して、當該經濟に於て生產したる產物の一定比率の徵收によりて之を課す』とし、第四條には其率は累進的なる可きことを規定し、第五條に其高は春耕作以前に之を定む可きこと、第六條に其納付は法律を以て定めた

る一定期間に於て爲す可きこと、第十一條に別に施行細則を一ケ月以內に公布す可きこと等を規定してある。又た第八條は『租稅納付後の餘穀は其所有主之れを自由に處分し得可きこと』、第九條には『餘穀をも更に國家に提供する者に對しては、國家は、多量需要品及農具を交附す可きこと』を規定して居る。而してレニンは書目(二十九)及(三十)に揭げた其演說に於て此『現物稅』施行の理由、其性質等を可なり詳細に說明して居る。

『現物稅』は農業收穫に對する一の累進的現物稅であつて、家族の口數及飼畜頭數を斟酌し、且つ一デスヤチン以下の小農は全く免除せらるるのである。其見積徵收總量は穀物二億四千萬プード（一九一九―二〇年の强制徵收高は二億七千萬プード）馬鈴薯六千萬プード(同上六千九百萬プード)及び肉類千二百萬プード(同上二千三百萬プード)と計上せられて居る。强制徵收の當初の見積高は右實收高よりも遙かに多く、穀物四億二千三百萬プード、馬鈴薯一億一千二百萬プード、肉類三千二百萬プード、バタ及フエツト三千五百萬プード（現物稅高二千二百萬プード）、卵六億八千二百萬個現物稅高四億個）並に亞麻及大麻の現物稅高の八乃至十倍であつた。之れに比べれば、新稅法による稅の徵收現物高は非常に少いものであるが、併し書目(三十一)のスウヰデルスキーの計算によると、其れでも農民の總收穫の一割二分、純收穫の一割五分に當ると云ふことである。從つて勞農露國農民の新稅法による負擔は可なり重いものと云はねばならぬ。併し我々は同時に舊露國に於ける農民の負擔の如何に重いものであつたかを省みることを忘れてはならぬ。其高はプロコポヴヰツチの說によると收入の二割九厘に當ると云ふことで、而して同氏の說では勞働者の所得は三十三億千五百萬ルーブルの生產價格に對して十九億千三百萬ルーブル、卽ち四割九分にしか當つて居なかつたと云ふことである。又た有名なる統計學者ストルムリンは此の新稅に就いて次の如き數字を示して居る。農業に衣食する全人口數は一九一三年以來殆ど增減はないが、勞働に堪えるものの數は約二割減少した。耕作面地は一九一三年に比して約二割六分減少して居る。全收穫高は現勞農露國の版圖に引直し、且つ種子及其他の費用を控除すると、一九一三年には三十億プードであつたが、一九二〇年には十八億プードに激減して居る。一デスヤチン當りの收穫高は一九〇九―一三年に比すれば一割六分、一九一七―一九年に比しても猶一割減少して居る。都會勞働者の生產力は一九一三年に比して其の四割二分に

低落して居り、田舍及都會を平均すると其の二割四分に落ちて居る。換言すれば現在勞農國の勞働生産力は平時の七割六分にしか當らぬと、ストルリンは云ふ。ソコデ、國家への納附總額を全生産の二割と見ると、六割一分が國民の手に殘る勘定となる。而して其は舊露國に於ける一倍半に當るから、現勞農國民は、ツアール時代に於けるより遙に樂になつた譯であると、彼は主張して居るのである。

現税による國家の收入は次の如く計算されて居る。收穫高が一九〇九―一三年と同じだとすると、一デスヤチン當り國家の收むる所は、ライ麥七・五プードであり、收穫高が一九一四―一六年と同樣だと、六・四プード、而して一九二〇年の收穫だとすると四・二プードにしかならぬ。此最後の割で計算すると、國家の總收入額は三億六百萬プード、戰前の割合で計算すると五億一千萬プードになるのである。トコロガ、一九一一年の穀物輸出高は七億二千四百萬プードであつたから、國家は其全收入穀量を擧げても此れに應ずることは出來ない勘定であつて、而して其外に都會住民並びに元來穀物を生産すること甚だ少い地方の住民の消費を計算せねばならぬ。されば、タトヘ兇歳ならずとも、露國の穀作狀態は實に危殆に瀕して居るのであつて、レニン以下が目下の急務として農民生産の增進を力說する所以は十分に諒解することが出來るわけである。舊露國の國民經濟の根抵は農業であつたが、更らにより大なる意味に於て近き將來に於ける勞農露國の國民經濟の中心は農業に存せねばならぬのである。何となれば近き將來に於て、露國の工業が急速に恢復して、少くとも舊露國の其れにまで達することは殆んど望みなきことである。クルムリンは一九二〇年と戰前とを比較して一九二〇年の工業生産は戰前の其れに對して左の通り低落したと云ふ（參照書目(三十三)）

（戰前を一〇〇。〇〇とす）

鐵鑛	二・二五
銅	〇・六〇
マンガン	二・六〇
アスベスト	二・六〇

マグネシツト	二七・〇〇
塩	一七・〇〇
ナフタ	四〇・〇〇
石炭	二〇・〇〇
鐵道製作品	二三・〇
織布	四・五〇
機械	二五・〇〇
農業用機械	一・五〇
綿糸	五・六〇
麻糸	二五・〇〇
燐寸	一五・〇〇
木工品	一五・〇〇
ゴム製品	五・〇〇
製紙業	二三・〇〇
製糖業	六・〇〇

右に反し農業は、適當なる施設の下には數年ならずして、餘剩經濟となり得るものである。强制徵收の廢止は、農業の復興の爲めに先づ必ず爲さねばならぬ事であつた。何となれば、其制度の存する限り、農民生産力の恢復向上は到底期し得られない事は、初めから明瞭な事であるから。併し右廢止に代へて設けられた現物稅丈けで勞農國家が難局を切

抜け得ると思ふは大なる誤であるのみならず、小範圍に於てなら兎に角全國——而かも勞農露國の樣な大きな國——に亙つて現物徵收を行ふと云ふことは、事實不可能たるを示めすは決して遠い將來を待つに及ばぬことである。現物稅は甚だ無用の手數と費用とを要し、而して農民をして、價最も善き處と時とに於て其收穫を賣ることを得ざらしむるものである。

現物稅の設置と云ふ積極的の事に意味があるのではない。强制徵收の廢止、農作物國家獨占原則の放棄、農民の作物自由處分——タトへ一部的なりとも——の承認と云ふ消極的の事に大なる重要が繫つて居るのである。レニンは書目(二十九)に掲げた『現物稅論』に於て次の如く言つて居る『現物稅は極端なる窮乏により、戰爭と破壞とにより强制せられた一種特殊な『戰時共產主義』Kriegskommunismus から、一の秩序的社會主義的なる產物交換への過渡の一形態である。後者も亦人民中小農が多數を占めることによつて格別の特殊性と結び付けられて居る社會主義から共產主義への一過渡形態である。如上の特殊な『戰時共產主義』の本體は、軍隊及勞働者の需要を充たすが爲めに、事實上農民から一切の餘剩、否其れのみならず、農民の生活必要品の一部分をさへも徵收したことに存する。而して我々は農民から此等生活必要品を徵收するに、大部分は信用で、「換言すれば紙幣を與へてしたのである。此くするにあらざれば我々は荒亂した小農民國に於て、地主と資本主とに打勝つことは出來なかつたのである。然るに最有力な世界列强が絞取り者を助けたにも拘らず、我々が終に彼等に打勝つたと云ふ事實は、解放の爲めの鬪ひに於て勞働者と農民とが如何に驚く可き英雄的勇氣を示めし得るかを立證したのみならず、更に又た此の『戰時共產主義』は我々の手柄として計算し可きものであるのに、此を我々の失敗なりと稱するメンシエヴキキや、社會革命黨や、カウツキー合名會社やはブルヂオアジーに對して太鼓持の役目を勉めたものであることを示めすのである。『戰時共產主義』は、戰爭と破壞とによつて前提せられたものである。此れは決してプロレタリアの經濟的任務に相應した政策ではなかつた、又た左樣であり得なかつたのである。此れは一の暫行的手段たるに過ぎない。プロレタリアの獨裁政治を小農民國に於て實現する正當な其の政策は、穀物と農民必要工業製品との交換是れである。此くの如き給與政策のみがプロレタリアの任務に相應するものである。

此れのみが、社會主義の基礎を確立し、之を完全なる勝利に導く力を有するものである。現物稅は此狀態に達するまでの一の過渡を意味する』と。（書目(二十九)二九二頁）

(十三)

倫敦エコノミストは、勞農露國の經濟政策變革を評論して次の如く云つて居る。『最近數ケ月間に於て、勞農政府は其の經濟政策に於て一掃的變革を爲した。即ち官僚的方法を以て、露國の全經濟的並に社會的生活を左右せんとの企てを全然放棄した。勞農國の指導者等は、共產主義の實驗の失敗であつたこと、私企業と私商業の廢止は悲慘なる破產を來したことを公認するのである。彼等は今や、小農民と彼等の政權把持とを調和す可き唯一の機會は、商業の自由を回復することと、小農の收穫の强制的徵發を廢止することに存することを悟るに至つたのである』、又た云ふ、『約束と實行との間には大なる差違が存する、勞農國のは、政策變革の實行であつて、決して單に實行の見込を立てた丈けではない。此の一掃的變革を遂行するに方つて、レニン及クラシンの如き共產黨中の比較的穩和なる黨員が、極端派と激しき鬪を爲さねばならなかつたことは、人の普く知る所であるが、彼等は確かに此の戰に勝利を得た。而して事件の進行と輿論の趨勢とは明白に彼等の側に在るのである』。更らに曰く『露國の革命は、少くとも次の一點に於て佛蘭西革命に似て居る。即ち其れは小農の地位を高め、而して封建制度の殘墟の上に土地持小農の制度を確實に樹立したことこれである。』（書目(二十)四月十五日號七二二—三頁）誠に當を得た評である。嘗つてはボルシエヴキズムに對して甚しき無理解を示めした英國は、今日に於ては、少くとも其識者の一部——恐らく其れは可なり大なる一部——の間に於ては、世界中最も理解ある判斷を爲しつゝあるのである。世界經濟の根本的恢復に取つて此の正しき理解の愈々普及し行くことは、我々をして若干愁眉を開かしむるに足るのである。乍併英國には、今や、勞農露國に對しても、獨逸に對しても。而して更らに此頃になつては日本に對しても、殆んど想像の及ばぬ程無茶苦茶な暴言を吐きつゝある『タイムス』新聞の存することを我々は忘れてはならぬ。此の『タイムス』が我利一點張りに殆んど狂して居る佛國の太鼓持を勉めて、彌が上に其國民的

ー帝國主義的軍國主義的と云つても差支ないーー我利心を煽り立てゝ居る。『タイムス』を以て世界唯一の新聞、少くとも『タイムス』の論説を以て英國輿論を何時でも代表するものと思つて居る林董陸君エンド・コンパニー一派の日本のジエントルメン諸君は、今や困惑の極に陷つて居ることと思ふ。私は此等の諸君に向つては、唯だ書目（二十）に掲げたエコノミストの長文勞農批評を一讀せられんことを希望する外はない。

英露通商條約の締結と『現物稅』の設置とを發端とする新經濟政策は、對内的には、（一）農產物の全部並に或種の工業製品の私的商業を自由に解放し、極力之を奬勵促進すること、（二）小經營、中經營工業の國營主義を解除し之を私企業に貸し下ぐること、（三）小農と勞働者との連絡を促進すること等、是れであり、對外的には、（一外國資本の誘致（二）對外通商の獎勵（三）大經營工業を促進する爲め特許權を擁護すること等である。而して、其の何れの施設に於ても、エコノミストの云ふ如く一掃的に大膽に又た誠實に着々實行の實を擧げつゝあるのである。玆に於てか、メンシエヴヰキ社會革命黨、社會民主黨の人々は、之を以て『資本主義への降伏』R.kapitulation an Kapitalismus『共產主義の裏切り』Verrath des Kommunismus なりとして囂々としてレニン等を非難するのである。墺太利社會民主黨の領袖で露國の事情に精通するを以て有名なオツト・バウアーは『權力の無能』と云ふ論文を公にして『勞農露國は今やフール・スピードを以て（mit Volldampf）資本主義へゴー・スターンを掛けて居る』と罵つた。（書目（三十三）七頁）勞農露國の代表者等は、此等に對し極力其妄を辯じつゝある。書目（二十二）（二十九）（三十）（三十二）（三十三）に掲げたものは、其重要なるものである。就中、最重要にして最有力なのは、書目（二十九）の一のレニンの『現物稅論』と書目（三十一）の二の同上補論（一九二十一年五月モスカウ全露會議に於けるレニンの演說筆記）とである。

レニンは云ふ『我々の内には猶次の樣な事を公言する過に陷るものがある。曰く「資本主義は惡である。社會主義は救である」と。此くの如きは誤である。何となれば、其れは現在の社會經濟的事情の全體を看過し、唯だ其の中から二つのもののみを拉し來るものであるから。資本主義が惡なりと云ふは、社會主義の標準に照らしての話である。中古に對し、小生產に對し、小生產の割據に伴ふ官僚主義に對して、之を見るときは、資本主義は救である。吾人が小生產から

直ちに社會主義への經過を實現し得ない限りは、資本主義は、小生産及交換の基本的産物として、或度迄は、不可避なものである。其度に應じて我々は、小生産と社會主義との間の中間連鎖として、生産力増進の手段、道行、方法として、資本主義をも（殊に吾人が之れを國家資本主義の陣營に誘導するによつて）利用せねばならぬのである』『逆理の様に見へるかも知れないが、私經濟的資本主義は、社會主義の一促進者たる役目を勉めるのである』と。而してレニンは、其『現物税論』を結んで云ふ『現物税は戰時共産主義から、秩序的社會的生産物交換への過渡を意味する。一九二〇年の凶作によつて惹起された非常な破壊は、此の過渡を——大工業を急速に恢復することの不可能なるによつて——緊要の必要事たらしむるに至つた。此點から第一に、農民の地位を引上ぐる必要が起つた。之を行ふ手段は、現物税、農業工業間の交換の促進、小工業の發達之れである。此の販賣は卽ち自由商業、資本主義を意味する。此れは小生産者の割據に對し、又た或度迄は官僚主義に對して、吾人が戰ふを助ける限りに於て吾人に有用である。其度合は實際と經驗とが之れを限定するであらう。プロレタリアの權力に取つては、其れは一の危險をも包藏しては居らぬ、プロレタリアが政權と、交通機關と大工業とを確と其掌中に把持する限りは』と。（書目(三十)三〇四頁）レニンは、此論文の劈頭に於て、勞農露國に存する經濟事情を分解して、其れには五の要素があると云ふ。卽ち（一）著しく自足經濟的な家長的小農經濟（二）商品生産小經濟（三）私經濟的資本主義（四）國家資本主義（五）社會主義是れである。而して彼れは（一）と（二）とを（四）へ誘導する爲めに（三）の私經濟的資本主義を促進す可しとし、其を出來る丈け（四）の國家資本主義の支配の下に置くものであつて、他日（五）の社會主義へ至る可き素地を作る爲なりと主張して居るのである。然るに、今は（一）と（二）とが『戰時共産主義』の爲めに行詰りの狀にあるから、先づ現物税を施行して、秩序的社會主義的交換への過渡とす可しと云ひ、秩序的社會主義的交換は又た小農の數の多い爲め一種の特色を帶びた社會主義から、眞正の共産主義への過渡たる可きものであると云つて居るのである。此の階段分けは、少しく錯綜して居て、レニンの眞意を捉ふるには、稍々不鮮明な點があるが、彼の演說や論文を通讀して、私が理解し得た處を、假りに表にして見ると、粗ぼ左の如くなるのである。

	政治的	經濟的	内容	社會的
1	ブルヂオア國家時代	1 戰前	現存要素：1 自足的小農經濟　2 商品生產小經濟　3 私經濟的資本主義	階級對抗（搾取盛り行はるゝ）時代
2	ブルヂオア國家時代	2 戰時	戰爭＝封鎖	階級對抗（搾取盛り行はるゝ）時代
3	プロレタリア獨裁時代／プロレタリア國家時代	3 戰後四年間	戰時共產主義（强制徴收）（沒收）（商業の國有）（飢饉）（工業の衰頽）	階級對抗（搾取盛り行はるゝ）時代
4	プロレタリア獨裁時代／プロレタリア國家時代	4 現在	1 現物稅の施行（强制徴收の廢止）（商業の自由）（外資の誘致）　2 小農多數の爲め時色を帶びたる社會主義の忍諾　3 私經濟的資本主義の認容（小農の保護）（小・中工業の促進、工業と小農との連絡の促進）	階級對抗（搾取盛り行はるゝ）時代
5	プロレタリア獨裁時代／プロレタリア國家時代	5 近き將來	國家資本主義（餘剩は資本主義的に生ずるも其はプロレタリアの國家に歸す）（電化計畫の進行）（大工業の促進）	階級對抗（搾取盛り行はるゝ）時代
6	デモクラシー＝國家死滅	6 稍遠き將來	農工間の秩序的交換による社會主義（電化計劃の完成）（大工業の樹立）	階級消滅時代
7	國家なき時代	7 完成期	共產主義	階級消滅時代

（十四）

資本主義の人々は勿論、ボルシエヴキズム以外の社會主義、社會革命主義、並びに無政府主義の人々が、今露々として、勞農國を難じて、共產主義の大失敗なりとする諸々の事柄は、レニン並にボルシエヴキキの主なる人々の云ふ所によれば、戰爭と封鎖との爲めに餘儀なくせられた『戰時共產主義』の表現に外ならないので、穀物の强制徴收、私工業の沒

牧、商業の禁止等は、經濟上に於ては『戰時共產主義』實行の爲め、政治上に於ては、プロレタリア獨裁政權獲得の爲め不得止斷行した暫行の手段であつて、初めからその絕對的妥當を信じてやつたものでなく、唯だ歷史的正當 historische Richtigkeit を有するものとしてやつたに過ぎぬものであると云ふのである。此『戰時共產主義』なる言葉は、獨逸でも可なり屢々用られた言葉である。恐らくレニンは此の語を獨逸から輸入したのであらうが、其は造語法の巧妙を極めたものとは云はねばならぬ。私はこれに倣つて現在の勞農經濟政策を言現はす爲めに『飢餓共產主義』Hunger-kommunismus と云ふ語を以てするが最も當を得て居ると思ふものである。

兎に角『戰時共產主義』は暫行的のものであり、單に一時の正當性を有するに過ぎざるものであることは、今やボルシエヴヰキの多數は自ら之を認めて居るのである。此の認承は、少からざる道德的勇氣を要求するものである。卒直に云へば、彼等自ら其過てること――少くとも最近時に向つては――を、十分に告白したものである。故に今に於て、其功過を論議するは死兒の齡を算するに類する。今や、我々に取りての問題も、彼等に取つての問題も、共に主として其所謂私經濟的資本主義の認容によつて進み入らんとする『國家資本主義』への退却なるものが果してフール・スピードを以て資本主義へゴー・スターンを掛けるものであるか、資本主義への裏切りであるか、資本主義への乞降であるか、否か、是である。

『戰時共產主義』と云ふ造語は甚だ巧妙なものであるに反し、『國家資本主義』なる造語は寧ろ拙劣であつたと云はねばならぬ。少くとも此造語の爲めに、レニンの眞意は屢々誤解せられた。誤解するのは決して無理はないのである。乍併私は茲にもレニンの卒直と誠實とを認めざるを得ぬ。『資本主義は惡なり社會主義は救なり』と輕々に公言する者を非難した彼は、更に積極的に國家資本主義――資本主義的方法をプロレタリアの國家の下に、又其爲めに認容すること――の採用を斷言した。資本主義を惡なりと云ふは、社會主義と比較したときのことで、然らざる外のものに對しては、資本主義は却つて救であると彼は斷言する。是れは、決して勞農經濟政策の轉革を強いて辯護せんが爲めのフエヒト・アルグメント（戰鬪用の强辯）ではない。偶々以て彼が如何に正當にマルクスとエンゲルスとを理解して居るかを示す所以である。故にレニンに於ては、國家資本主義なる語を――資本主義的方法の採用の意味に於て――用ゆるも毫も狭

しい所は無いこと勿論である。併し其れが誤解の基であることは、否定することは出來ない。何となれば『資本主義』なる語は、今日に於ては、其内容甚だ廣汎なもので、獨り經濟上の一概念たるのみならず、同時に政治上の一概念である。卽ちマルクスの用ゐた『資本制生產』を意味するのみでなく、『政權が資本家階級の手に專用せらるゝ國家形態』の事をも含んで居るのである。他の語を以て云へば、資本主義とは、ブルヂオアの階級國家の下に於ける資本制生產及流通の經濟組織を意味して居るのである。是れはマルクス說の當然の歸結である。此事は『レーニンの國家理論』と云ふ拙文に於て可成詳しく論述して置いたから、今玆に管々しく繰返す必要はないが、今日の所謂資本主義とはマルクスの所謂餘剩價値が資本無限增殖の用の爲めに、而して其れは資本主義の手に於てのみ左樣に用らる可く、其懷に收められることを、其本體とすると云ふのであつて、斯く餘剩價値の絞取りが完全に又は排他的に一に資本家階級の手に歸着し得るは、ブルヂオア國家が之を保障する爲めであり、ブルヂオア國家が之を保障する所以は、其れが全く資本階級の支配する階級國家であるからだと、マルキシズムは說いて居るのである。是れ私が『資本主義』とは獨り經濟的概念たるに止まらず、同時に政治的概念であると云ふ所以である。此の政治的と云ふことは、之を經濟生活の語に翻譯して云へば、資本主義は啻に一つの modus operandi（運營方法）たるに止らず、一つの ususfructus（果實の收得）であると云ふことである。モ少し砕けて云へば、其は經營形態であるのみならず換價行程であると云ふことである。マルクスの語を轉用して云へば、資本主義は Werkprozess（作業行程）たるのみならず同時に Verwertungsprozess（價値增進行程）であると云ふこと是れである。（其詳しい說明は拙著『國民經濟講話』を見られたい）私は此の見方を其儘に受け入れるものではない、此の點に就ても、私はマルキシズムに服し能はざるものである。併し今玆に其批評を企つる必要は毛頭ない。何となれば、私は今、マルキシストたるレーニンを批評しつゝあるものであるから、彼がマルキシズムを曲解し又は誤傳するときは、私は之を指摘しなければならぬが、彼がマルキシズムの說を正しく傳へて居る限り、私は其立場に於て、彼を批評するを以て事足るのである。否左樣せねばならぬ義務を有するものである。ソコデ、マルキシズムの立場から云へば　政治的概念は之を悉く經濟的に翻譯し得る。卽ち政治形態としての資本主義とは畢竟するに、餘剩價値の收得が悉く資本階級

の手に歸着することを保障する爲めの政治形態である。現在の資本主義が必ず同時に政治的概念であらねばならぬと云ふ事は、之を言換れば、資本主義的生產及流通の一切の總括が、資本階級の手にのみ於ける資本の累積的增殖の爲めに行はれ、一切の果實の收得は資本階級の手に集中すると云ふことである。これは、マルキシズムの立場に立つ以上、誰人も之を拒否することの出來ない斷案であると信ずる。

さて斯く考察して來ると、レニンが勞農露國の近き將來の任務を『國家資本主義への促進』なりとしたことは、甚だ拙劣な言ひ現し方であつて、此言葉丈けを拉へれば、其は共產主義の裏切りなりとも、資本主義への降伏なりとも、評せられ得るので、然る限りに於ては、非難を拒むことは出來ないのである。何となれば、如何に經濟難が甚しいからとて、右の意味にての資本主義を促進すると云ふことは、明かに裏切りであり、降伏であるに相違ない。否、左樣の次第なれば、過去四ケ年間幾億の民に非常に苦しい思をさせて、勞農政治を布いたは、全く無駄な事をしたものと云はれても致方はなかる可きである。乍併、レニンの眞意は、而して又たプロレタリア獨裁政治の意義は、決して右の如きものではないことは、言ふ迄もない所である。此點は前段に引いたラツセル氏の論文にも少しく論じてある。レニンが茲に『國家資本主義』と云ふは、彼が『現物稅論』、其補論、又は其他に於ても常に繰返して云つて居る如く、『プロレタリア獨裁政治の下に於て』と云ふ明かな限定條件が付いて居るのである。換言すれば、彼が『國家資本主義』と云ふものは、經濟上のみの事であつて政治的概念では決して無いのである。即ち餘剩價値の收得、資本利益の獲得を資本階級の手に獨占する政治形態を含んで居らぬのである。

(十五)

資本主義を難ずる論は樣々あるけれども、其大多數は必ずしも modus operandi としての資本主義までも直ちに難ずるものではない、其攻擊の標的は usus fructus としての資本主義是れである。レニンが『私經濟的資本主義』と名くるものは即ち其れである。卒直に云へば Nutzniesser(果實收得者)がブルチオアのみである資本主義是れである。

レニンはプロレタリア獨裁の下に於ても猶暫時は――國家の手に於ける大工業恢復が實現せらるゝ迄は――之れも亦た已むを得ず忍諾す可しと云ふのであるが、其れは畢竟『プロレタリアの獨裁下に於ける國家資本主義』の實現を早からしむる爲めの手段として忍ぶと云ふのである。然るに此の所謂『國家資本主義』なるものに於ては、其の Nutznießer はブルヂオアではない、プロレタリアである。然あらしめヌ爲めにこそプロレタリアの獨裁政治を行ふのである。私經濟的資本主義の忍諾も決してプロレタリアの獨裁政治を侵害してまでも之を爲すと云ふのでは無論ない。即ち其の結局の Nutznießer は矢張りプロレタリアであつて、ブルヂオアではないのである。プロレタリアの獨裁政治は、政治上に於ける資本主義即ち餘剩價値の收得をブルヂオアのみに獨占することを保障する政治形態を癈し、之れに代へて其果實收得者を結局に於てプロレタリア階級とするところの政治形態であるのである。經濟上では未だ餘剩價値の搾取りを癈止することが出來ないが、政治上では、少くとも其れをブルヂオア階級に保障することは全癈せられて居るのである。

是れが現代に於けるプロレタリア獨裁の勞農政治の本體である。約して云へば、勞農政治は一切の資本主義を決して癈したのではない。否、經濟上に於ては、向後更に之を助成せんとするのである。其反對に、政治上の制度としての資本主義は、之を徹底的に癈止し終つて居るのである。されば、プロレタリアの獨裁にして破れざる限り、少くとも『資本主義への降伏』と云ふことは、夢にも云へた譯のものでないのである。であるから言葉の普通慣用例として、現在の露國に於て、タトへ國家と云ふ冠詞を付けたにしても、資本主義への促進と云ふことを、レニンが云つたのは言葉としては、甚だ拙劣であつたと評する外はないので、此點彼は少しくマルキシズムに不忠實であつたと言はれても致方もあるまい。然し其れは措語丈けの問題である、彼の主義に關する問題では毛頭ないのである。然るにラツセル氏の如く、之れから直ちに判斷して、其れは畢竟『デモクラシー』も亦社會主義の目的の一部であることを、レニン等が忘れた誤りに基くと云ふのは、其れこそ大なる誤斷、誤見である。ラツセル氏の註文する樣に、現今の如き發達せざる經濟狀態に於ける勞農露國が獨裁を捨て、『デモクラシー』を取れば、其れこそ眞正なる資本主義へのゴー・スターンとなるの外はないのである。何となれば、其れは、Nutznießer としてのブルヂオアを公認する事にならねばならぬから。

レーニン等が今忍容せんとする私經濟的資本主義、而して其れによる國家資本主義への進行とは、何れも modus operandi としての、wirtschaftliche Technik 經濟的技術、としての、Werkprozess としての資本主義である。而して其れは、私の繰返して主張する如く社會主義の經濟組織に於ても決して全然放擲せられ得可きものではない。

近刊拙著『社會運動と勞銀制度』を見られたし。猶一橋商學會に於ける私の講演『私經濟學肯定の論據』に於て私は少し詳しく此事を論じて置いた。何れ何かの折に之を公けにす積りである。

私は社會主義の時代來ることありとすれば、今日の國民經濟學なるものは、其時には根本的に變化す可きものであると信ずると共に、所謂私經濟學なるものは、却つて樹立せらるゝに至るであらうと信じて居るものであるが、其故は、經濟的技術としての資本主義は、社會主義の世に於て、決して無用に歸するものでないと思ふからである。

經濟技術としての、經營行程としての資本主義の採用は、當然に强制共同經濟の緩和を必要とする。換言すれば、レーニンの所謂私經濟的資本主義の忍諾はヴヰルブラントの所謂『自由共同經濟』への接近を必要とする。——ラパルロ條約は、一面に於て、自由共同經濟への接近を最も有力に立證したものである。露獨の握手を單に外交上の事柄と見るは、淺薄な迂見である。——勞農露國の新經濟政策の根本基調は、即ち其處にあると私は信ずる。而して其れは決して共産主義の裏切りではない、資本主義への降伏ではない。言はゞ糧を敵に籍るものである。露國は此の糧に餓へたる事、今最も甚しいのである。されば、其經濟政策を變革して其急要する所の糧を資本主義に籍るのは、元より當然の事である。無論糧を籍ることが事實に於て資本主義へ餘りに深入することになるかも知れぬ、然し又た左樣ならぬかも知れぬ。其れは來らんとする露國に取りての大問題である。唯今日に於ての資本主義への降伏と稱するのは、斷じて中らないのである。遮莫露國から云へば、現前の窮境から脱出せん爲めの此の行程としての資本主義の採用は、其れが資本主義への降伏であるにせよ、あらさるにせよ、其れが露國開國の形勢を促進し、從つて外國との交渉、世界經濟への復歸を招致すると云ふことは、世界其れ自らの恢復、世界の經濟自らの救濟の爲めに、此の上もなく希はしいことであると云ふの外はない。エコノミストは云ふ『露國が、在外露國人が讓歩を背せんとする以上の讓歩を爲す可く期待せらるゝときは、勞農政府は甚だしき難局に陥るであらう、而して此くなるときは、聯合國は、反革命諸黨に屬する頑迷なる國家

主義者に對抗して、却つて勞農政府を庇護するを以て、共利とするに至る奇態を現出するであらう』と、又曰く『反革命的勢力が失墜し、近き將來に於て鞏固なる他の政府の起るを望み得ざる限り、現勞農政府の力を鞏固ならしめ、之をして秩序を保ち、生命財產を保護せしめることは、西歐資本家の利益とする所であらう』と。（書Ⅱ（二十）四月十八日號六六三頁四月二十二日號七五五頁）

ジエノヴア會議が、此點に於て更に角序幕を切つて落したことは、我々の注意を怠つてはならぬ處である。然し其れは序幕である。勞農露國の眞の開國が實現せられるまでには、まだまだ何回かの國際會議が必要であらう、而して、其間に幾多の公判、暗鬪が交へられるであらう。併し乍ら露國の眞の開國の完全なる實現は結局必ず來ることであり、來ねばならぬことである。私は、我日本が、倫敦『タイムス』の盲讀者、佛國プロパガンダの輕信者たることを、一日も早く罷めて、先づ勞農露國の救濟と承認とを一日も早く斷行することによつて、從つて又た此の當然來る可き日の到來を一日も早からしめる可く貢獻することによつて、日本が眞に世界指導者の先鋒たることを實現せんことを切望して已まないものである。

附記

六月號十三頁に揭げたる圖の說明

收穫が消費高より少なき地方

收穫は消費高に應ずるも種類に足ずる地方

餘穀ある地方を脫せり。謹で附す。（編輯者）

先進國に於ける社會主義



バートランド・ラッセル

本章に於て、吾々は大英國、獨逸、及び合衆國の如き、先進諸國に於ける社會主義の最後の勝利の見込みを檢討せねばならぬ。是等の諸國に於ては政治的條件の外、社會主義の成功に對する一切の條件が既に存在して居る。即ち賃銀勞働者は教育あり、工業的過程に慣れて居る。大仕掛けの生產は一切の必要な設備と共に存在して居る。工業的習慣は資本主義の嚴重な學校の中で、教へ込まれた。のみならず、其等の國々が進歩したのは、或自然的利便のお蔭に外ならぬ。即ち今なほ發達してをらぬ國々に引換へて、鑛業上の富、地理的地位、氣候及び人民の氣質が悉くその進步を扶けて居る。

のである。彼等の生産方法はより能率高く、彼等は支那や露西亞が未だ經驗したことのないほど、莫大な一人當りの富を有し、隨つて彼等は絕對的飢餓に陷ることなしに、組織の崩壞と內亂とによりて生ずる、一層大なる損失に堪へることが出來る。國際的難關を措けば、是等の諸國は孰れも、自ら欲しさへすれば明日にも社會主義國となり得る國々である。けれども是等の國々に於ける資本主義の成功そのものが、社會主義の技術的條件を作ると同時に、社會主義に對する力強い願望を弱めもしたのである。自ら社會主義者と稱する人々の數が增加した點は疑を容れぬが、その信條に對する彼等の信仰の熱烈さは、その數が增加するよりも一層急速に減少したのである。

近代の工業國に於ては、政策を指定し、事實上政府を構成して居る者は大資本家である。封建的殘存者がなほ多少の權力を振つた戰前の獨逸に於てさへ、總ての貴族を一括にしたよりも、クルップやバリンのような人物の方が、遙かに重大な勢力をもつてゐた。大英國や米國に於ては、政府に對する資本家の權力は——たとへ兩國に於て共に、或制限を受けて居るにもせよ——力說する必要もないほどに著名である。賃銀や時間に關する問題の如く、勞働組合に最も重大な利害關係のある問題は、英國に於ては、常に資本家の註文通りに局を結ぶとは限らぬ。そして米國に於ては、モルガンらの希望に反して、民衆の喧嘩好きなことが、日本との戰爭を惹起せぬとも限らぬ。けれどもかような資本家の權力に就ての例外は、新聞（勿論資本家の活動の一部門である。）によつて作られる輿論とは異る輿論を作り出す所の、極めて廣汎な利害關係を喚起する問題の場合にしか起らぬので、隨つてこれは稀である。かういふ問題の數は、或は敎育が改善するに隨つて增加し、或は宣傳が巧妙となるに連れて減少するかも知れぬ。私人的資本家の競爭によつて完成せられた廣告術は、馬鹿げた提言を信仰させる新しい手腕を人々に與へた。某々の賣藥の効能をスッカリ信じ切つてしまつた人々は、何事をもすぐ信じさせられる。そこで廣告のために最も多く金を費消し得る者—即ち資本家—の利益になる意

見を彼等に採用させるために、同じ方法が用ゐられる。是等の方法に對しては聰明な懷疑主義を除くの外、何ものも永く對抗することは出來ぬ。が吾々の教育は、この聰明な懷疑主義を生むには最も不適當である。然らば形勢は絶望であらうか。吾々は、愚人を誤まる。惡漢の獨裁に永久に服して居らねばならぬのであらうか。或は又廣告の遣り過ぎが、それ自身の解毒劑として、一切の屢々反復せられる陳述に對する、健全な疑惑を作り出すであらうか。

勿論、最も淺慮な人々をまで驅つて、政府に對して愛想を盡かさせる道が一つある、××××××。××××××、××、××××××××××××××××××。×××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××××××。此事は獨逸に起りはしたが、社會主義へ導きはしなかつた。露西亞人がするように、是を以て首領達の裏切りに歸することは、此事實の十分な說明にはならない。他に何事も起る虞れがなかつたなら、平黨員は他の首領達を選んだであらう。實際に社會主義を確立しようと望んだ獨逸の共產主義者らは、國民の大多數が彼等に反對したゝめに敗北した。國民が共產主義者に反對した理由は、共產主義の價値に關する何等の抽象的な考察のためでもなく、聯合國に獨逸の經濟政策が氣に入らぬ時は、聯合國は獨逸の飢餓を延長し得、また延長することを望んだといふ事實のために外ならぬ。ボリセヰキ革命以來、若しどの國でも共產主義を採用したならば、その住民を、それが可能ならば、資本主義が復活させられるまでの間餓えしめ、利用し得る限りの最も放縱な軍隊をして、心ゆくまで姦淫、放火、殺戮、及び掠奪を恣に行はせるのが、總ての文明國間の一致せる政策である。匈牙利で行はれた實例を思へば、獨逸人が同樣の經驗の前に逡巡したのも怪むに足らぬ。若し露西亞にして獨逸に食物と軍事的保護とを與へ得たならば、獨逸の態度は恐らく大に異なつて居つたであらう。

大英國に於ても、社會主義實現の企てが行はれる以前に、吾が商業政策が根本的に一變して居らぬ限り、一切の眞面

口な企ては、これと同樣の運命に遭遇すると考へてよい。今日に於てすらも、或程度の行動が可能であることには疑を容れぬ。鐵道や、鑛山の國有も、十分の補償金を支拂ふとしたら不可能ではない。資本との最大の闘爭が避け得られるとしたならば、それは産業上の自治へ愼重に近づくことを可能にするであらう。けれどもさういふ方法は單に豫備的なものにすぎぬ。×××××、×××××××××××××、×××××××××××××××。(尤も現在の所有者に對して終身年金を與へることにはなるかも知れぬが)。資本家がこれを知る以上、彼等はどの地點かで踏み留まり、それ以上の讓歩をするよりは戰爭を選ぶであらう。これは資本家政府が勞働者を抑壓する形式を採ることゝなるかも知れず、又は勞働政府に對して叛逆する資本家の反對といふ形式を採るかも知れぬ。どちらの形を採るにせよ、米國は、その現在の氣分では、必要に應じて資本家側のために干渉するであらう。一發の銃丸をも放たずに、單に棉と麥との輸出禁止によつて、合衆國とカナダとは吾々を跪づかせるであらう。故に吾々は、現在の狀態に於ては、吾々の米國の主人の機嫌を損ずることなしには、如何なる經濟政策をも採ることは出來ぬ。これは、吾々が獨逸を取り、露西亞を封鎖したゝめに拂はねばならぬ代價の一部分である。何故ならば、若し露獨にして破産しなかつたならば、吾吾はこれほど米國に依り縋る必要はなかつたからである。

大英國が舊時の獨立を囘復し、且つ時々米國富豪の希望を排斥し得るがためには、露獨が繁榮を復活し、歐洲列強間の睨み合ひを緩和し、匈牙利、南露西亞及びメソポタミアに於て新しい食糧供給の泉源を見出し、歐羅巴合衆國を作るために、出來得る限りのことを何でもしなければならぬ。米國の資本主義は他の何處の資本主義よりも強く、米國よりの解放が進歩の第一條件である以上、これは明白に勞働黨の取るべき政策と思はれる。

佛蘭西は獨逸から出來るだけ多くの金を絞り取らうとし、排棄せられた露西亞の公債償還を要望して居るから、勿論

佛蘭西はかういふ政策にとつての最大の難關である。けれども佛蘭西は只だ金を取らうとしてゐるに過ぎないのであつて見れば、十分な金錢上の賠償さへ與へれば、佛蘭西に對して、歐洲を奴隷狀態に陷れようとする企圖を擲たせることは可能である。若し英國が佛國に對する獨逸の負債全額について責任をもつことによつて、吾々が東部歐洲を再建し、戰爭によつて殘された敵意を除くことが出來たならば、それは遣る價値のあることである。若し此種の方法を何も講ぜぬとすれば、吾々は進んで、若くは不本意ながら米國の奴隷となり、トラスト王らが必要と認める時にはいつ何時でも、米國と手を繋いで社會主義に對する神聖戰爭に參加するほか道はない。かような事情の下に於て、勞働者が採るべき適當な手段は明白である。けれども不幸にも勞働黨は權力を握つて居らず、吾が勞働者の政治家の中に、國際問題を多少なりとも理解する者は稀である。

敗戰して窮乏に陷つた國に於ては、社會主義的意見が容易に勢を得ることは獨逸の示した所であり、英國の場合にも、久しからずして示されよう。けれども社會主義の事實上の確立は――露西亞が飢饉と金持とのために遂に敗られると假定して――强くして富める國に始まらねばならぬ。若し露西亞が成功し得たならば、社會主義は西漸して獨逸や伊太利に蔓延し、更に佛蘭西にも强制せられ。結局、多少水をかけた形で英國に於て採用せられよう。露西亞は敗北しながらも、たとへ非常にむづかしいにせよ、とにかく、このような假定を可能にするだけの力と持久力とをもつてゐる。けれども歐洲の他の國民は、戰爭以來、直接又は間接に合衆國に依存してゐる。若しボリセヰキが衰へるか又は社會主義者で無くなるとかすれば、歐洲の他の國民は合衆國に諂るか、又は歐洲諸國同士の間に緊密な經濟上、政治上、及び軍事上の同盟を形成するかせねばならぬ。此後者を採るには政治家側に多少の經世家的な所があり、民衆側は古い憎しみを忘れねばならぬ。若しさういふことが實現されぬとすれば、歐洲は益々米國の搾取を受くるの外なく、殆ど歐洲全

國の民衆が社會主義者になつてしまふほどの程度に搾取を受けることもありさうなことである。けれどもそれとても、吾々が米國に從つて生計の道を立てる限りは、資本主義の倒壞を毫も近からしめるものではない。米國は世界を支配して亞細亞が繁榮し、歐洲が合同するまでは、その支配を續けるであらう。

人類の將來は次の半世紀間の米國の行動に係つて存する。若し米國が、現在の傾向と機會とによつて指示せられて居る資本主義的帝國主義の坦々たる道を行進するならば、殘りの世界は漸次に益々壓伏せられ、新世界の富と舊世界の貧困との間の溝渠は益々廣くなり、被搾取國民の米國に對する憎惡は一層高まり、遂に社會主義者の指導の下に、米國に對する一切の公債破棄を含む世界的な叛逆が起ることゝならう。かような鬪爭に際して、英國が米國側につくか、又は歐洲及び亞細亞側につくかは、想察することが困難である。それは米國人が吾が英國の友情若くは貿易を、自分の側につけておく方が有利だと考へるかどうかによつて決定する。どうなつた所で、戰爭は、最後には歐洲文明の影も留めぬほどに長引き、且つ破壞を恣にするであらう。そして米國自身も貧困に陷つて、他處では打破られた社會主義を自國で經驗することになるであらう。かくてその結果は米國に於ける階級戰爭となり、それは工業主義を破壞し、地球上の人口の約半數を飢饉と疾病とのために死亡させ、結局簡單な生活へ立戻らせることゝならう。數世紀の間、赤色印度人の生活に跡返りした擧句、米國人は第二のコロムバスによつて、メンハツタン島で弓矢を以て野獸を待つてゐる處を再び發見されるであらう。それから又新たに同じ過程を遣り直すに相異なく、同じ無駄な極致に達し、同じく悲慘な崩壞を遂げることゝならう。」

米國の資本主義がその搾取の事業を阻止せられぬ時の見込みは先づかうである。工業主義は世界統一の傾向を有し、半世紀間の成功せる投資は、合衆國をして總ての大陸の主人公たらしめるであらう。たゞ一致せる力によるの外、合衆

國に對抗することは出來ず、隨つてその壓制によつて挑發される戰爭は世界的のものであらう。今や單に個人としての資本家と無產者とがあるに留まらず、資本家的國民と無產者的國民とがある。戰爭以來、米國は一等地を拔いた資本家國民となつて居り吾々英國人は第一位から第二位に落ちた。佛蘭西は、その貯金（これは大部分濫費されてしまつた）のためでなく、その生產物が主として富者の贅澤品であるといふ事實のために、資本家的國民に屬してゐる。共產主義は恐らくシャムパンとレースとの消費を甚しく減少し、斯くして佛蘭西の金持をも貧乏人をも、等しく貧しくするであらう。獨逸は戰爭以來、無產者的國民であり、露西亞も支那もさうである。マルクス主義の階級戰爭は、萬一起るとすれば、各國に於ける資本家と無產者との間の內亂であるよりも資本家的國民と無產者的國民との間の戰爭として起りさうである。資本家的國民と無產者的國民との間の戰爭は、**國家主義的本能に何等の危害を加へず、且つ社會主義が最もよく普及する機會を有するのは、無產者的國民の間に於てゞある。故に、吾々が豫示**せざるを得なかつたような世界的**の衝突の起る、極めて重大な危險**が在るのである。

社會主義者の中にも資本家の中にも、世界的な階級戰爭に對して何等の恐怖をも抱かぬものがある。彼等はさうした戰爭は自分らに勝利を與へ、且つ其後に於て工業主義は滯りなく行はれ、各々の好戰家の趣味次第で、或は勞働者に幸福を齎らし、或は怠ける者に富を齎らすものだと確信して居る。目前に最近の戰爭の實例を目擊しながら、長い死物狂ひの戰爭が、時にはどの交戰國かに豫期の通りのものを齎らすことゝ信じてゐる人々のあることは奇妙である。最近の戰爭の結果は誰れの仕合せとなつたか。クルップか、カイゼルか、ツァーか、アスキス氏か、エドワード・グレイ氏か、ウイルソン大統領か。是等の中、一人でも、最初戰爭を起す當時抱いて居つた希望を實現し得た者があらうか。そして軍國主義の息の根を止め、又は世界をデモクラシーのために安全ならしめようとして兵籍に入つた青年達はどうであるか。

戰爭はそれを起した人々の希望とは全然無關係な、それ自身の勢を有する。理想主義的な目的のために戰爭を起すことは、一個のダイナマイトに火を點じて、その餘焰で燒パンを作らうとすると等しく愚かな事である。人民は、その理想主義的な戰爭談に現はれるほど、實際は馬鹿でない。彼等が好んで口にする高尙な話は、その憎惡と虐殺好きを蔽ふ所の、（通例無意識に著らはれる）外套にすぎぬ。平和時代には明白な野獸以外の何物でもないような人々から、戰時には高尙な感情を多く聞かされるのは此故である。

世界的な階級戰爭は、最近の戰爭よりも長く、より激烈で、より廣大な範圍に及ぶであらうから、大戰の場合に事實であつた事は、それより遙かに高度に、階級戰の場合には事實となつて現れよう。資本主義も社會主義も共に工業主義の形式であり、兩者は共に多かれ少かれ文明的な社會の存在に依るものである以上、かういふ戰爭が資本主義の確立にも社會主義の確立にも終るものでないことは殆ど確實である。さういふ戰爭が始まると程なく、殆ど總ての最も重大な製造所は叛逆者によつて爆破せられ、又は飛行器の爆彈投下によつて破壞せられ、また重要な工場を有する市邑や村落は毒瓦斯によつて窒息せしめられ、航海は不可能にせられ、結局農民以外の殆ど總ての者は戰爭か、飢餓か、疫病によつて殺されるものと假定することが出來る。生殘な者は、何のために戰爭を行はれたかを解し得ぬほどに愚鈍で無敎育であり、生產の立場から見て、敵の注意を惹くに足りぬほど些細な、時代後れの農民のみとならう。熱誠に富む新社會（戰後なほさういふものが少しでも殘り得るとしたならば）は、其等の人民が、新時代を創建するには多少貧弱な材料であることを見出すであらう。そこで世界は、彼等の敎養が再び云爲せられるまでに、一千年を待たねばならぬかも知れぬ。故に、吾々が工業的文明の將來を考察するに當つて、世界的な階級戰爭は、新世界への輝いた門戶としてゞなく、行き詰りの極致として考へられねばならぬ。吾々は、さういふ最期に達せぬうちに、合衆國が社會主義的になり

若くは少くとも、歐洲の社會主義者と資本家との鬪爭の間に立つて中立的なものとなる見込みがあるかどうかを自ら問はねばならぬ。(今日さうなりさうに思はれるように) 若し露西亞が米國資本主義の圏内に引き込まれたならば、資本主義に對する米國の信仰にして動搖せざる限り、文明の完全なる崩壞を避くる望みは少いのである。

米國に於ける生産の組織は、既に科學的社會主義が要求するようなものになつてゐる。主要な工業的生産物は高度の技術的能率を以て、且つ競爭に伴ふ浪費を殆ど完全に除去して、トラストに依て獨占的に生産せられて居る。國家が總ての實際的目的に關しては大きな取引の任を果してゐる以上、レーニンの所謂國家資本主義が既に存在して居るといふことが出來る。誰にもせよ、此説を誇張だと云ふ者は、未だ合衆國の事情に疎い者である。離婚を希望した或富豪がフロリダ洲に住みに行き、そこで極めて手輕な離婚法を通過させ、その法律の下に離婚を行ひ、さて其後、その法律を廢止させた。(註)その權力の絶頂に居つたツァーとても、教會が彼に反對したに違ひない以上、さうまでは思ひ通りにならなかつた。けれども米國に於てはさういふ例は山ほどある。次に行政を考へてみるがよい。勞働爭議の際に傭主が罷工者を撃つために私設軍隊を備ひ、罷工者の妻子の住む村落に爆彈を投ずるために裝甲列車を備ふのは普通のことである。正規の軍隊とても黄金主の命令に違背する者ではない。政府のある公式の檢査は、法律と秩序との戰士らが或判決を註文し、合衆國の軍隊が裁判所を包圍して、徹底的な亞米利加主義にとつて快い評決を得るために裁判所に大砲を向けた裁判のことを報告して居る。(これは米國の參戰以前のことである)。裁判官について云へば(大審院を除くの外)大資本家が彼等を自由に利用して來たことは、久しく世間に知れ亙つてゐたことである。そして新聞によつて製造せられる輿論は、殆ど常に新聞を支配する資本家の味方であつた。斯様に、合衆國の眞の政府は、現在に於ては、術語に慣するほど能率の高い、統一せられたる生産組織を支配する強大な大富豪の寡頭政治である。此制度は國家資本主義と名付け

本社今秋の二大計畫

肉體從ては其精神すらも緊縛せらるる現代婦人は、先づ第一に現代社會制度の本質的缺陷がどこに伏在せるやを糾明し、そして、そこに向

てよいものである。これは一つには貴族的であること、今一つには社會のためでなく、それを支配する人々の私利のために運用されるといふ二つの點に於て社會主義と異つて居る。ボリセヰキが露西亞に作らうとしてゐる制度とこれと異る所は、たゞこの第二の點にすぎないのである。(註) Upton Sinclair, The Brass Check, P.

此組織は現在に於ては或程度の不滿を惹き起すが、それとても歐洲の經濟組織ほどのことはない。大體から云つて、米國のすべての階級は、英國の同等の階級よりも、自己の狀態に滿足してゐる。この一般的な滿足は果してどこまで續くであらうか。

勿論米國人が滿足してゐる重要な理由は、彼等が繁榮してゐる點である。生活費の高いことを勘定に入れても、賃銀は概して英國よりも高い。繁榮の主要な原因を、その重要さに從つて擧げれば次のようなものだと思はれる。第一に、國が未だ人口過剩に陷つてゐない事實と共に、その巨大な自然的富源である。第二には、資本家の精力と能力とである。第三には、新興國の特徵たる保守的傳統の缺乏で、これが歐洲では容れられぬような能率の高い技術的方法の採用を可能にする。第四には、幼年時代と教育とのための豫備的費用を必要とせずにその勞力を提供する成人の大移民である。

是等一切の繁榮の原因は、時を經ると共に減少する嫌ひがある。自然的富源は或程度まで消耗せられ國は一層人口稠密となるであらう。資本家は自ら富を獲るよりも、祖先の富を繼承した人々とならう。かうなると共に、彼等は精力も能力も共に衰へて來る。民衆が靜的となるに伴ひ、保守的傳統の發生することが豫期せられる。最後に移民は今日既に制限せられて居るが、米國生れの市民が增加するに隨つて、どの道益々全人口に對する割合が少くなるに極つてゐる。是等總ての理由に關する、合衆國の現在の有利な點は、多少一時的であると看做されねばならぬ。

それにも拘らず、合衆國はなほ久しい間、歐洲のどの國よりも一人當りの富を多く有するものと期待せねばならぬ。

戰爭のために他の總ての國々が疲弊し切つた後に資本を有するといふ一事だけでも、これを保障するに十分である。故に米國にして長日月に亘る、不成功な戰爭に關係せぬ限り（さうにも思はれぬ）、來るべき數十年の間、一般的な不滿が蔓延することはあるまい。

かような思惑はあつても、なほ社會主義が漸次に普及することを期待し得る理由はある。これまで米國の氣力旺盛な人々に資本主義を歡迎させたのは、何よりも先づ米國が何人にも出世の機會を與へるといふ點にあつた。詰らぬ前身から起つて大金持になつた人は非常に多いので、精力と智力とを持つ者は何人でも金持になることを望むことが出來た。所が社會主義の成功的な宣傳には、精力と智力とが必要である。隨つてそれを指導し得る人々が現行制度の中に功業を見出し得る間は、さうした宣傳は盛んになり得ない。ルーテルにして法皇となる好個の機會をもつたならば、宗教改革が起つたかどうかは疑問である。けれども米國の資本家制度は急速に結晶しつゝあり、賃銀勞働者の列から拔け出す機會は年々少くなつて行く。それが少くなるに隨つて、トラスト王らと同樣の心的傾向をもちながら、同じ利便をもたぬ人々は、益々多く資本家制度の批評に傾き、自分より一向優れても居らぬように感ぜられる人々の手に、巨大な富と權力とが集中されることを不公平と認めるようになる。かような人々がやがて通常の賃銀勞働者にも、同じような不公平の感じを起させるようになることは當然である。

すべての大資本を有せぬ人々の見地から見れば、大財産が到底手に入らぬことによつてその光りを失ふや否や、社會主義固有の合理性が社會主義を推奬するに極つてゐる。社會主義は、米國に於ては、事業の技術的組織に何等の重大な變化をも惹起せぬ。大トラストの首腦たる資本家が、それを作つた人々の息子や孫となり、彼等が單に巨大な收入を引出して懶惰な遊蕩にそれを費消してしまふ時になると、仕事は管理部によつて行はれ、その管理部は懶惰な主人達を

卑しめるようにならう。その時代に於ては、社會主義は單に管理部員を公吏に變へ、無用な富豪の收入を傭員の間に分配することを意味するにすぎまい。いかなる傭人の階級でも、かような遣方に對して合理的に反對することは困難であらう。現在に於ては、『社會主義』といふ言葉は彼等を恐怖せしめる。それは彼等が無政府、虐殺、及び赤色の掠奪の幻影を見、無頼漢の群が彼等の住宅に侵入してその妻を國有とすることを想像し、且つ彼等は殘りの生涯をカシヤ（野菜スープ）と黑パンとで生きねばならぬことを恐れるからである。けれども人間の馬鹿さ加減はかなり酷いものであるにせよ、かような馬鹿げたことが永久に信ぜられるほどに酷いものではない。恰かも地獄業の火と同じく、是等の馬鹿げたことも、表立つて捨てられることはなしに、自然にその恐ろしさを失ふであらう。早晩、理性と利害關係とが結合して、純然たる想像的妖怪に打勝つであらう。合衆國に於ける社會主義的見解の普及は、歐洲に於ける自由思想の普及と相似たものであらう。何處に於ても政府の宣傳は自由思想に反對し、英語を語る諸國に於ては今もなほさうである。今日に至るまで、英國と米國では、實際上總ての教育には、宗教的宣傳を含み、公然たる自由思想家はオクスフォード、ケムブリッヂ及びハーヴードの二三の大學のフェローシップの外、教師の職につくことは出來ないのである。是等の例外の場所に於てさへも、無宗教は非常な引け目である。自由な意見を吐く人々に對しては、金錢上の報酬も名譽の報酬も與へられぬことが多い。ジョーヂ・メレディスはたつた一度、期限付きの結婚に贊成したゝめにウエストミンスターに葬られなかつた。（私は此事を當時のウエストミンスターの副監督から聞いた）。ノーベル賞金が平和論者に與へられたなら、何人も驚愕するであらう。徹頭徹尾、自由思想家をしてその意見を隱蔽さすべく、ありとあらゆる勢力が用ゐられる。誠實と接觸することに依て道徳的に汚染することが恐いので、僞善者のみがたゞ青年に敎へることを許されて居る。歐洲大陸を通じて、積極的な迫害と共に、實に激烈な壓迫が同じ意味で行はれたのである。

それにも拘らず、佛蘭西、獨逸及び露西亞に於ては基督教は公的に捨てられ、英國に於ては、基督教の運動は實際上僧侶と未婚婦人とに限られてゐる。そして米國に於てさへも宗教は三十年以前ほどには盛でない。此顯著な自由思想の普及は、理性と常識とに反する限り、公的宣傳が結局何にもならぬことを示してゐる。教へ込まれた事は、漸次に信じ得られぬようになり、公然それを排棄せぬ人々でさへも、もはやそれの影響を蒙らぬようになる。恐らく支那内地布敎師以外、アダムが林檎を食べたゝめに、洗禮を受けぬ子供らは地獄に落ちるといふことを信ずる者はあるまい。永遠の罰に多少の信をつなぐ者は極めて少く、その少數の者でさへ、イスカリオテのユダを除くの外、特に誰々が永遠の責苦に苦しまねばならぬと名を擧げることは出來ぬ。宗教に對する信仰は、たとへそれが形式上存在してゐる處でも、舊約聖書最初の七篇の王朝やメロヴイン諸王に對する信仰と同じく、通例活力をもたず、行爲を左右する力をも持たぬものである。日曜の競技に對して憤慨する者があれば、人々はたゞ彼等を馬鹿だと思ふだけであるが、宗教時代にはこれと同じ呪咀は、老若貴賤を問はず、平身低頭して僧侶の宥恕を乞はしめたに相異ない。此變化の全ては權力に對する理性の勝利と、金錢上の私利に對する明白な眞理の勝利によつて起つたものである。

これで極く似通つた方法で、社會主義に對する信念、又は少くとも資本主義に對する疑惑が、青年時代に於ける討論、讀書、及び權力者らの虛僞や僞善に對する嫌惡によつて個人から個人へ傳はることは豫想し得られる。十月革命以來、政府の行ふ宗教や資本主義の宣傳方法が共産主義者の製造に應用せられた露西亞――その成功のほどは知り難い――を除く外かようにして現存の社會主義的意見の團體は作られたのである。ポリセヰキ及びその感化に浴した西歐の社會主義者らは、公的宣傳に餘りに重きをおきすぎてゐる。彼等は、社會主義を一般的にする唯一の道は、社會主義者が未だ少數者である間に、何等かの詭計によつて國家の機關を奪取し、その後、廣告と虛言の反復といふ、有り來りの方

法によつて民衆を改宗させることだと信じてゐる。無意味なことを一般に信仰させるには、これより外に方法のないことは事實である。醫者が公然詐僞だといふことを曝露した藥を諸君が製造するならば、馬鹿者の外に諸君が價値ある物を賚つてゐると信ずる者はなく、馬鹿げた方法のほか、彼等の信用を得ることは出來ぬ。諸君にして、アダムが林檎を食べたがために、この面白い出來事をツイぞ聞いたことのない者は總て、慈仁なる神によつて永劫の火で燒かれねばならぬといふことを人々に信じさせたく思ふならば、諸君は彼等を若い間に捉まへて、飮酒や體育によつて愚鈍にし、彼等を考へる能力を與へるやうな書物や友人から隔離しておかねばならぬ。父親から幾百萬の富を引きついで、一生涯何一つ働いたことがなく、その時間を飮食と姦淫とに分けて費し、その收入を『節制の賜物』として引出して居る者があり、××、諸君は幼時から富者に對する迷信的な、下等な尊敬と、官憲に對する臆病な恐怖と、現存するものは全て不變であるといふ確信に導く想像力の缺乏と、そして若し可能ならば、人間の愚鈍の全智の原因たる神に對する信仰を敎へ込まねばならぬ。催眠術の力を藉りずんば、正氣の人間には到底受容れることの出來ぬやうな信條を維持するには、かやうな方法は、無くてならぬものである。けれども理性と常識とに叶ふた意見を普及させるには、さうした方法は毫も必要でない。さういふ意見は、恰かも自由思想の場合と同じく、それ自身の固有の索引力によつて、氣力あり、智識を求める心に普及し得るのである。此問題が見當違ひの誤解を一掃しさへしたならば、社會主義者が何等の不合理な議論や、呪なひ師の技術を用ゐる必要がないほど、資本家制度の愚と不正とは著明なのである。數十年間の仕事を數ヶ月に切りつめ、數代間の仕事を數年に切りつめたボリセヰキは、理性の徐々の働きに俟つてゐることが出來なかつた。けれどもさういふ急速な仕事は不安全である。もし露西亞の社會が倒れたならば、彼等が權力を握つて以來作つた改宗者は、幾分も

現在の信念を維持してはゐまい。現在の信念を作つたと同じ方法が、新しい一團の宣傳者の感化の下に、それを失はせるであらう。もし社會主義が鞏固な成功を博すべきであるならば、何處に於ても、馬鹿者を惡漢の畫策にとつての恰好な材料とする、かの愚かな輕信性に訴へずに理性に對して訴へねばならぬのである。何處に於ても社會主義者は餘りに短氣である。階級戰や、共産黨の獨裁や、一般に理性に反對して暴力の教義を奬勵したものは、此短氣である。私は決して誇張はせぬ。確かに多少の力は必要であらう。國家が法皇の手から教會を奪ふるは力が必要であつた、けれどもそれ以前に說得の仕事が相當に行はれて居つたので、極めて僅かの力しか要らなかつたのである。最後の場合に、資本家から、資本を取るには力が必要であらう。けれども社會主義によつて眞に利せらるゝ總ての人々がその事實を信ずるに至つたならば、極めて僅かの力で事足るであらう。何人も專賣特許藥の賣り手が醫者の評決を受入れるものとは思はず、法皇や大僧正が科學の評決を受入れるものとも期待して居らぬ。これと同じように何人もトラスト王らが、彼等の外になほ異論を唱へる者は無くなつた場合にもなほ、社會主義の評決に服することを期待することは出來ぬ。けれどもその時が來たならば、理性に訴へる說得が、その力で出來得るだけのことをした曉には、警察が泥棒を扱ふに要するほどの鬪爭も經ずにトラスト王らを一掃することが出來るほど、彼等は微力になつて居るであらう。社會主義の運動方針が向けられねばならぬのは、血塗れの、効果の疑はしい階級戰ではなくて、この終極である。

社會主義的意見の此合理的な宣傳が最も必要なのは、資本家的國民の首位を占むる合衆國である。けれども成功を博せんがためには、在來社會主義者の雄辯を支配して居つたのとは異る階級的區分を目がけねばなるまい。社會主義の現存の形式に多少の利益を見出すものは、賃銀の廉い工業勞働者であるが、只だ彼等を味方にするだけでは足りない。技術家のサボタージュは（露西亞で見られたように）新制度樹立當時の大切な時代の機械を麻痺せしめるものであるか

ら、技術家階級を味方にすることが必要である。米國でも左様であるが、農業家がかなりの割合を占めてゐる國では、農業家をも味方にすることが必要である。その敵對的な宣傳や妨害を防止すべく、自由業者及び知識階級の大部分を味方にすることも必要である。早熟の革命に必ず伴ふ結果である資本の破壞、産業の麻痺、飢餓、兇暴と幻影破滅を恐れる必要がないまでに、壓倒的に優勢な力をもつことが必要である。これら總てを遂行するためには、力よりも理性に訴ふべきであり、資本家が民主的に施された法律に反對する物騷な反逆者の小團體となるまでは力を用ゐてならぬことを明かにしておく必要がある。十分に多數の民衆の理性に訴へて成功を博するには、在來社會主義者の間に行はれて來た階級觀を擲ち、下級賃銀勞働者のみならず、社會主義を社會にとつての利益として主張する必要がある。階級的な物の見方を採用することは、鬪爭、壓迫、及び憎惡を育て、他の階級の成員に訴へることを不可能にする。けれども若し、私が固く信じてゐるやうな、能ふ限り個人的自由を尊重する點に注意を拂ひ、久しい禍亂を伴はずに樹立され、進歩した工業的社會のホンの一少部分以外の總ての者の幸福を增進することが出來るならば、傳統的偏見を離れて、ホンの一少部分の者以外、總ての人々が辯論の力を感ずるやうに、社會主義を說くことは可能でなければならぬ。この方法によつて、たゞこの方法によつてのみ合衆國の如き國に於て社會主義が繁榮することが出來るのである。私の考へてゐるその辯論の或部分は、本書の後章に說くことゝする。

when they are the only people who still hold out. But when that time comes, when persuasion by means of reason has done all that it is capable of doing, the trust magnates will have become so weak that it will be possible to oust them with hardly more of a struggle than the police need in dealing with burglars. It is to this culmination, not to a bloody and doubtful class war, that socialist tactics ought to be directed.

It is in the United States, as the leading capitalist nation, that this reasonable propaganda of socialist opinion is most needed. But if it is to succeed, it must aim at a different division of classes from that which has hitherto dominated socialist oratory. It is not enough to win over the less well-paid industrial workers, who alone can find any appeal of self-interest in the current forms of socialism. It will be necessary to win over the technical staff, since their sabotage (as appeared in Russia) can paralyze the machine in the first critical days of the new system. It is necessary to win over the agriculturists, in any country in which they form a large percentage, as they do in America. It is necessary to win over a considerable proportion of the professional classes and of the intellectuals, for fear of their hostile propaganda and obstruction. It is necessary to have such an overwhelming preponderance of force that there will be no need to fear destruction of capital, paralysis of industry, starvation, ferocity and disillusion—the familiar round of consequences from premature revolutions. In order to achieve all this, it is necessary to make it clear that the apeal is to reason rather than force, and that force will not be used until capitalists become a small band of turbulent rebels against democratically enacted laws. To make the appeal to reason successful among a sufficiently large section of the population, it will be necessary to abandon the class outlook hitherto prevailing among socialists, and to represent socialism as a gain to the community, not only to the wage-earners in the lower ranks of labour. The adoption of a class point of view breeds strife, oppression and bitterness, and cannot be expected to appeal to members of other classes. But if, as I firmly believe, a scientific socialism, careful to safeguard individual liberty as far as possible, and inaugurated without a long and disastrous war, is capable of increasing the happiness of all but an infinitesimal section in an advanced industrial community, it must be possible so to present the case for it that, apart from traditional prejudice, all but that infinitesimal section shall feel the force of the argument. It is in this way, and in this way only, that socialism can be made to prevail in a country like the United States. Some part of the argument as I see it will be set forth in the remaining chapter of this book.

something valuable, and only foolish methods will win their belief. If you wish to persuade people that, because Adam ate an apple, all who have never heard of this interesting occurrence will be roasted in an everlasting fire by a benevolent Deity, you must catch them young, make them stupid by means of drink or athletics, and carefully isolate them from all contact with books or companions capable of making them think. × × × × × × × × × × × × × × that a man who has inherited millions from his father, has never done a stroke of work in his life, and has divided his time between eating, drinking, and fornication, is drawing his income as "the reward of abstinence," and ×, you must inculcate from infancy a superstitious and snobbish reverence for the rich, a cowardly terror of the authorities, a lack of imagination which leads to the conviction that whatever exists is unchangeable, and, if possible, a belief in God as the all-wise cause of the follies of men. Such methods are essential for maintaining creeds which no sane man would accept without the influence of hypnotism. But no such methods are needed for the spread of opinions that accord with reason and common sense. Such opinions can spread, as free thought has done, by virtue of their own inherent attractiveness to vigorous and inquiring minds. The absurdity and injustice of the capitalist system are so obvious, as soon as the question is cleared of irrelevancies, that socialists have no need to rely upon irrational arguments or adopt the technique of spell-binders. The Bolsheviks, who have attempted to compress into months the work of decades and into a few years the work of generations, have been unable to rely upon the slow operation of reason. But such rapid work is unstable; if the Russian communists fall, very few of the converts they have made since they acquired power wil l retain their present faith. The same methods which made it will unmake it, under the influence of a new set of propagandists. If socialism is to achieve a solid success, it must appeal to reason, not to the silly credulity which makes fools everywhere fit material for the schemes of knaves.

Socialists everywhere have been far too impatient. It is impatience that has inspired the doctrine of the class war, of the dictatorship of the communist party, and generally of force as opposed to reason. I do not wish to exaggerate: no doubt *some* force will be needed. Force was needed to take the States of the Church away from the Pope, but only a very little force, because the work of persuasion had been adequately done beforehand. Force will be needed, at the last, to take the capital from the capitalists; but it will be only a very little force if all who will really profit by socialism have become persuaded of the fact. No one expects the vendors of patent medicines to accept the verdict of the medical profession, or the Pope and Cardinals to accept the verdict of science. Similarly no one can expect the trust magnates to accept the verdict of the socialists, even

faith was not buried in Westminster Abbey, because on one occasion he advocated terminable marriages. (I had this from the Dean of Westminster at that time.) Every one would be amazed if the Nobel Prize were given to a pacifist. From top to bottom, every imaginable influence is brought to bear to induce freethinkers to conceal their opinions. The young are only allowed to be taught by hypocrites, because of the moral contamination to be feared from contact with honesty. Throughout the Continent, a much more severe pressure used to be exerted in the same sense, including active persecution.

Nevertheless, in France, Germany and Russia Christianity is now officially abandoned; in England, active Christianity is practically confined to clergymen and maiden ladies; and even in America religion is far less virulent than it was thirty years ago. This remarkable spread of free thought shows the powerlessness of official propaganda in the long run, when it is opposed to reason and common sense. Gradually the thing taught grows incredible, and even those who do not explicitly reject it are no longer influenced by it. Probably no one outside the China Inland Mission now believes that unbaptized children go to hell because Adam ate an apple. Very few believe in eternal punishment at all, and even those few could not name any particular person who will suffer everlasting torment, with the possible exception of Judas Iscariot. Belief in religion, even where it survives formally, has usually as little vitality or influence upon conduct as belief in the heptarchy and the Merovingian kings. When persons fulminate against Sunday games, people merely think them silly, whereas in the Ages of Faith similar anathemas would have brought high and low, old and young, crawling on their stomachs to beg forgiveness of the priests. The whole of this change has come by the victory of reason over authority, and of obvious truth over motives of pecuniary self-interest.

In a very analogous way one may expect to see a belief in socialism, or at least a disbelief in capitalism, spread from individual, to individual by discussions in youth, by reading, and by disgust with the humbug and hypocrisy of those in power. It is in this way that the existing body of socialistic opinion has been built up, except in Russia, where, since the October revolution, the ecclesiastical and capitalistic methods of official propaganda have been applied to the manufacture of communists with what success it would be hard to say. The Bolsheviks, and western socialists who have fallen under their influence, attach far too much importance to official propaganda. They believe that the only way to make socialism popular is for the socialists, while still a small minority, to seize the State machine by some trick, and then apply the familiar methods of advertisement and frequently-repeated lies to the conversion of the populace. It is true that there is no other way of producing wide-spread belief in nonsense. If you manufacture a pill which the medical profession has publicly exposed as a fraud, only fools will believe that you are selling

telligence are needed for successful socialist propaganda; therefore such propaganda will not flourish while the men who could lead it find a career within the existing system. If Luther had had a good chance of becoming Pope, it may be doubted whether the Reformation would have taken place. But the American capitalist system is rapidly crystallizing, and the opportunities of emerging from the ranks of the wage-earners grow less every year. As they grow less, men who have the same mentality as the Trust magnates without the same advantages will tend increasingly to criticize the capitalist system, and to regard as unfair the concentration of immense wealth and power in the hands of men whom they feel to be no better than themselves. Such men may be expected in time to rouse the ordinary wage-earner to a similar sense of injustice.

From the point of view of any man not possessed of large capital, the inherent reasonableness of socialism must come to recommend it as soon as great wealth has lost its glamour by being obviously unattainable. Socialism, in America, would not involve any serious change in the technical organization of business. When the capitalists at the head of the big trusts have become the sons or grandsons of the able men who created them, when they merely draw a huge income which they spend in idle dissipation, the work will have to be done by the administrative staff, who may be expected to despise their lazy masters. Socialism, at that stage, will merely mean turning the administrative staff into civil servants, and distributing the income of the useless millionaires among the employees. It is difficult to see what objection any class of employees could reasonably have to such a course of action. At present, the word "socialism" terrifies them, because they see visions of anarchy, murder and red rapine, they imagine gangs of hooligans invading their houses and nationalizing their wives, and they fear that they would have to live on kasha and black bread for the rest of their lives. But although human stupidity is certainly immense, it can hardly be sufficiently immense for such absurdities to go on being believed for ever. Without being formally renounced, they will lose their terrors, as hell-fire has done. Sooner or later, reason and self-interest combined must get the better of purely imaginary bogeys.

The spread of socialistic opinion in the United States is likely to be analogous to the spread of free thought in Europe. Official propoganda has been against free thought everywhere, and still is so in English-speaking countries. To this day, in England and America, practically all education involves religious propaganda, and an *avowed* freethinker cannot obtain any post in the teaching profession except a fellowship at two or three of the most advanced colleges at Oxford and Cambrige, and at Harvard. Even in these exceptional places, absence of religion is a great handicap. Rewards, both in money and in honours, are largely closed to those who profess free opinions. George Mere-

which controls an admirably efficient unified system of production. This system may fairly be described as State Capitalism. It differs from Socialism in two respects: one, that it is aristocratic; the other, that it is run for the private profit of those who control it, not primarily for the profit of the community. It is in this last respect only that it differs from the system which the Bolsheviks are trying to create in Russia.

This system rouses at present a certain amount of discontent, but not so much as the economic systems of Europe. Broadly speaking, every class in America is more satisfied with its conditions than the corresponding class in Great Britain. What prospect is there that this general satisfaction will continue?

Of course the chief reason why Americans are contented is that they are prosperous. Wages are on the whole higher than in this country, even taking into account the higher cost of living. The main causes of prosperity, in order of importance, seem to be the following: First, the immense natural resources of the country, together with the fact that it is not yet overcrowded. Secondly, the energy and ability of the capitalists. Thirdly, the absence of conservative traditions which is characteristic of a new country, making it possible to adopt more efficient technical methods than would be tolerated in Europe. Fourthly, the large immigration of adults, who give their work without the preliminary expense of infancy and education.

All these sources of prosperity are likely to diminish with the lapse of time. The natural resources will be to some degree exhausted, and the country will become more densely populated. The capitalists will tend more and more to be men who have inherited wealth instead of having acquired it themselves; as this happens, they will come to display less energy and less ability. Conservative traditions may be expected to grow up as the population becomes more stabilized. Finally, the immigration is already being restricted, and must in any case bear a continually smaller ratio to the total as the native-born citizens grow more numerous. For all these reasons, the present advantages of the United States must be regarded as in part temporary.

Nevertheless, it is to be expected that the United States will continue for a long time to have more wealth per head than any European country. The possession of capital after the exhaustion produced elsewhere by the war would alone be sufficient to insure this. Unless, therefore, America were to become involved in a long and unsuccessful war (which is unlikely), no wide-spread discontent is probable during the next few decades.

In spite of these considerations, there is reason to expect a gradual spread of socialism. What, more than anything else, has hitherto recommended the capitalist system to vigorous men in America is the fact that it gave everybody a chance to rise. So many very rich men started from humble beginning that every man who had energy and intelligence could hope to become rich. Energy and in-

populations which were too stupid or too uneducated to understand what the war was about and too unimportant from the standpoint of production to invite the attention of the enemy. Enthusiastic communist (if any were left at the end of the war) would find these populations somewhat poor material with which to inaugurate the new era. Probably the village priests would get them hanged as atheists. The world might then have to wait a thousand years before their doctrines were heard of again.

Therefore, when we are considering the prospects of industrial civilization, a universal class-war must be regarded as a dead end, not as the fiery gateway to a new world. We have to ask ourselves whether, short of such a catastrophe, there is any likelihood of the United States becoming socialistic, or at least neutral in the struggles betweed European socialists and capitalists. The question is grave, since, if Russia can be drawn into the orbit of American capitalism (as now seems probable), there is little hope of avoiding a complete collapse of civilization unless the American belief in capitalism can be shaken.

The organization of production in America is already such as scientific socialism requires. The main industrial products are produced monopolistically by the trusts, with a high degree of technical efficiency and on almost complete elimination of the waste involved in competition. Indeed, what Lenin calls State Capitalism may be said to exist already, since the State, for all practical purposes, is big business. Whoever thinks this statement exaggerated knows little of conditions in the United States. Take first the legislature. A multi-millionaire who desired a divorce went to live in Florida, had a very easy divorce law passed, was divorced under it, and then had the law repealed.* The Tsar in the plenitude of his power could not have done so well, since the Church would have opposed him: but in America such instances abound. Take next the executive. It is customary in labour disputes for the emloyers to hire private armies to fight strikers, and to employ armoured trains to bombs the villages inhabited by the wives and children of strikers. Nor is the regular army unamenable to the orders of the magnates. An official government inquiry reports a prosecution where a certain decision was desired by the champions of law and order, and where United States troops surrounded the Court House and trained cannon upon it in order to secure a verdict comformable to hundred-per-cent Americanism.* (This was before America's participation in the war.) As for the judiciary (with the exception of the Supreme Court), the way in which the big interests have been able to use it has long been notorious. And public opinion, being manufactured by the Press, is almost always on the side of the capitalists who control the newspapers. Thus the true government of the United States, at the present time, is an oligarchy of energetic multi-millionaires

*Upton Sinclair, The Brass Check. p.
*

dissipated), as owing to the fact that her products are mainly luxuries for the rich. Communism would probably greatly diminish the consumption of champagne and lace, and thus impoverish the poor in France as well as the rich. Germany, since the war, is a proletarian nation, and so are Russia and China. The Marxian class war, if it ever comes about, is more likely to be a war between capitalist and proletarian nations than a civil war between capitalists and proletarians in each country. A war between capitalist and proletarian nations would do no violence to nationalist instincts, and it is in proletarian nations that socialism has the best chance of spreading. There is therefore a very grave danger of such a world-wide clash as we have been compelled to foreshadow.

There are those, both among socialists and among capitalists, who contemplate a universal class war without horror. They feel confident that it will give the victory to their side, and that after that industrialism will run smoothly, grinding out happiness for the workers or wealth for the idle according to the taste of the particular war-monger. It is strange that, with the example of the late war before their eyes, there should still be people who imagine that a long and desperate war may sometimes bring what some of the belligerents desired. For whom did the late war end fortunately? Krupps? The Kaiser? The Tsar? Mr. Asquith? Sir Edward Grey? President Wilson? Did any of these get out of the war what they went into it to secure? And how about the young men who enlisted to end militarism or make the world safe for democracy? A war has a momentum of its own, which is quite independent of the wishes of those who set it going. To start a war for an idealistic end is as absurd as it would be to put a match to a ton of dynamite in hopes of making toast at the resulting blaze. People are not in fact so silly as their idealistic war-talk would make one suppose; the noble ends that they propose to themselves are only a cloak (unconsciously worn as a rule) for their hatred and love of carnage. That is why we hear so many noble sentiments in war-time from men who were never anything but obvious brutes in time of peace.

What was true of the late war would be true in a far higher degree of a universal class war, because it would be longer, more desperate, and of greater extent. It may be taken as nearly certain that such a war would not end in the establishment of either capitalism or socialism, since both are forms of industrialism and both depend upon the existence of a more or less civilized community. One may assume that quite early in such a war all the most important industrial plant would be blown up by traitors or destroyed by bombs from aeroplanes; that towns or villages containing important works would be asphyxiated by poison gases; that navigation would be made impossible; and that ultimately almost every one who was not a peasant would be killed by war, famine or pestilence. The people who would survive would be those backward agricultural

scarcely probable. But the other nations of Europe since the war, are all dependent, directly or indirectly, upon the United States. If the Bolsheviks go under or ceases to be socialists, the other nations of Europe must either fawn on the United States or form *inter se* a close economic, political and military alliance. This latter course would require some slight element of statesmanship in politicians, and in populations some power of forgetting old hatreds. If these are not forthcoming, Europe will be increasingly exploited by America, very likely to such an extent that almost its whole population will be converted to socialism. But that will not bring the downfall of capitalism any nearer, so long as we remain dependent upon America for our livelihood. America controls the world, and will continue to do so until Russia is prosperous and Europe united.

The future of mankind depends upon the action of America during the next half century. If America advances smoothly upon the path of capitalistic imperialism which is indicated by present tendencies and opportunities, there will be a gradually increasing oppression of the rest off the world, a widening gulf between the wealth of the New World and the poverty of the Old, a growing hatred of America among the exploited nations, and at last, under socialist guidance, a world-wide revolt involving repudiatation of all debts to America. Whether, in such a struggle, England would be on the side of America or on that of Europe and Asia, it is impossible to guess; it would depend upon whether the Americans had thought our friendship or our trade the better worth securing. In either event, the war would probably be so long and so destructive that nothing would be left of European civilization at the end, while America itself would be reduced to poverty and would experience at home the socialism which had been crushed elsewhere. Thus the outcome would be a class war in America, leading to the destruction of industrialism, the death by starvation and disease of about half the population of the globe, and ultimately the return to a simpler manner of life. After reverting for centuries to the life of Red Indians, the Americans might be re-discovered by a second Columbus, hunting wild beasts with bows and arrows on Manhattan Island. Then the process would no doubt begin anew, reaching a similar futile culmination and a similar tragic collapse.

This is the prospect if American capitalism remains unrestrained in its career of exploitation. Industrialism tends to unify the world, and a half-century of victorious investments would make the United States the masters in every continent. They could not be resisted except in unison, and therefore the war provoked by their oppression would be world-wide. There are not only capitalist and proletarian individuals, but capitalist and proletarian nations. Since the war, America has been the capitalist nation *par excellence*, while we have sunk from first to second place. France belongs to the capitalist nations, not so much owing to her savings (which are largely

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx (though there might be, say, a life annuity to present holders). Since capitalists perceive this, they will at some point make a stand, and prefer war to further concessions. This may take the form of a capitalist government suppressing the workers, or of a capitalist opposition rebelling against a labour government. Whichever form it takes, America, in its present mood, will if necessary interfere on the side of the capitalists. Without firing a shot, by merely prohibiting the exportation of cotton and wheat, the United States and Canada could bring us to our knees. We cannot therefore, as things stand at present, adopt any economic policy, even in home affairs, which is displeasing to our American masters. This is part of the price we have to pay for defeating Germany and blockading Russia; for if they were not ruined we should be less dependent upon America.

If Great Britain is to recover its former independence, and be able on occasion to defy the wishes of America millionaires, it will be necessary to restore the prosperity of Germany, and Russia, mitigate the mutual enmities of the European Powers, find new sources of food supply in Hungary, South Russia and Mesopotamia, and do everything possible to bring about a United States of Europe. This would obviously be the right policy for the Labour Party, since capitalism is stronger in America than anywhere else, and liberation from America is the first condition of progress. France is, of course, the great obstacle to such a policy, since France wants to extract the uttermost farthing from Germany and to reimpose the repudiated Russian debt. But since France only wants money, it is possible that a sufficient money compensation would induce the French to abandon the endeavour to enslave Europe. It would be well worth our while to assume responsibility for the whole of Germany's debt to France, if by doing so we could begin to reconstruct eastern Europe and undo the enmities left by the war. If something of the sort is not done, we have no alternative but to become the willing or unwilling slaves of America, and join America in a holy war against socialism whenever the trust magnates may deem it necessary. The right policy for labour in these circumstances is clear. But unfortunately Labour is not in power, and very few of our Labour politicians have any understanding of international affairs.

The case of Germany has shown, and the case of Great Britain may show before long, that socialistic opinion easily gets the upper hand in a defeated and impoverished country, but that the actual establishment of socialism must begin in a country which is strong and rich, assuming that Russia is finally defeated by famine and financiers. If Russia could succeed, socialism might spread westward to Germany and Italy, might then be forced on France, and ultimately, in some watered-down form, be adopted in Great Britain. Russia, even in defeat, has a degree of strength and endurance which make such an hypothesis possible, though

becomes more skilful. The art of advertisement, perfected by the competition of private capitalists, has given men a new skill in producing belief in absurd propositions. Those who have been successfully persuaded to believe in so-and-so's pills can obviously be led to believe in anything; accordingly, the same methods are used to make them adopt whatever view is to the interest of those who have most money to spend on advertisement, i. e. the great capitalists. Against these methods nothing will prevail permanently except intelligent scepticism—the very last thing that our education is designed to produce. Is the situation then hopeless? Are we condemned for ever to a dictatorship of knaves who mislead fools? Or will the excess of advertisement produce as its own antidote a wholesome doubt as to all frequently reiterated statements?

There is of course one thing which discredits the government, even with the most thoughtless, and x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
This happened in Germany, but did not lead to socialism. It is not a sufficient explanation of this fact to attribute it, as the Russians do, to treachery in the leaders. If nothing else had been involved, the rank and file would have chosen other leaders. The German communists, who wished actually to establish socialism, were defeated because the majority of the nation was against them, not because a handful of leaders preferred power to consistency. The reason the nation went against the communists was not any abstract consideration of the merits of communism, but merely the fact that the Allies could and would prolong the starvation of Germany if they disliked its economic policy. Ever since the Bolshevik revolution in Russia it has been an agreed policy among all civilized goverments that, if any nation adopts communism, its inhabitants shall, if possible, be caused to die of hunger until capitalism is restored, while hordes of the most licentious solidiery available shall be let loose to rape, burn, murder and pillage until they are glutted. In view of what was done in Hungary, it is small wonder if the Germans shrank from a similar experience. If Russia had been able to give them food and military protection, their behaviour would probably have been very different.

Very similar considerations would apply to any serious attempt at socialism in Great Britain, unless our commercial policy were radically changed before making the attempt. Certain steps would, no doubt, be possible even now. It would be possible to nationalize the railways and the mines if full compensation were paid. It would be possible to make cautious approaches to self-government in industry, provided a first-rate conflict with capital could be avoided. But such measures are only preparatory; x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x

Socialism in Advanced Countries.

By Bertrand Russell.

In the present chapter we have to examine the prospects for the ultimate success of socialism in advanced countries such as Great Britain, Germany and the United States. In these countries, all the conditions for the success of socialism already exist except the political ones: the wage-earners are educated and accustomed to industrial processes: large-scale production, with all the necessary plant, is in being; industrious habits have been taught in the stern school of capitalism. Moreover, it is just because of certain natural advantages that these countries are advanced: mineral wealth, geographical position, climate, and the character of the people are all in their favour as against the countries which are still undeveloped. Their methods of production being more efficient, they have vastly more wealth per head than Russia or China have ever had, and therefore they can afford a greater loss by disorganization and civil war without being reduced to absolute starvation. Apart from international difficulties, any one of these countries could become successfully socialistic to-morrow if it so desired. But the very success of capitalism in these countries, while producing the technical conditions for socialism, has also weakened the effective desire for it. No doubt the number of people calling themselves socialists has increased, but the intensity of their belief in their creed has diminished faster than their members have grown.

In a modern industrial country, the men who dictate policy and in effect constitute the government are the great capitalists. Even in pre-war Germany, where feudal survivals still had a certain strength, men like Krupp and Ballin had far more influence on policy than all the Junkers combined. In Great Britain and America, the power of the capitalists over the government is too obvious to need emphasis, although in both countries it is subject to certain limitations. Questions which vitally interest trade unions, such as those concerning wages and hours, are not always decided in England as capitalists desire; and in America popular pugnacity might precipitate a war with Japan against the wishes of Messers. Morgan. But such exceptions to the power of the capitalists are few, since they can only arise over matters inspiring very widespread interest leading to opinions not dictated by the Press (which is, of course, merely a department of capitalist activities). The number of such questions may increase as education improves, or diminish as propaganda

描かれた花

有島武郎

※

色彩について纎細極まる感覺を持つた青年が現はれた。彼れは普通の寫眞を見て、黑白の濃淡を凝視することによつて、寫された物體の色彩が何んであつたかを易々と見分けるといふことである。この天賦の敏感によつて彼れは一つの大きな發明をしたが、私のこゝに彼れについて語らうとするのはそのことではない。彼れがいつたと稱せられる言葉の中に、私に取つて暗示の深い一つの言葉があつた、それを語らうとするのである。

その言葉といふのは、彼れによれば、普通に云はれる意味に於て、自然の色は繪畫の色より遙かに美しくない、これである。

この言葉は逆說の如く、又誤謬の如く感ぜられるかも知れないと思ふ。何故ならば昔から今に至るまで、畫家その人の殆んど凡てが、自然の美を驚嘆してやまなかつたから。而してその自然を端的に表現することの如何に難事であるかを力說してやまなかつたから。それ故私達は色彩の專門家なる人々の所說の一致をそのまゝ受け入れて、自然は凡ての人工の美の總和よりも更らに遙かに美しいとうなづいてゐた。而してそれがさう見えねばやまなかつた。如何に精巧なる繪具も、如何に精巧に配置されたその繪具によつての構圖も、到底自然が專有する色彩の美を摩して聳ゆることは出

來ない。さう私達は信じさせられると思つてそれを信じた。而して實際にさう見え始めた。

然しながら、暫らく私達の持つ先入主觀から離れ、私達の持つかすかな實感をたよりにして、私はかの青年の直覺について考へて見たい。

❀

巧妙な花の畫を見せられたものは大抵自然の花の如く美しいと嘆美する。同時に、新鮮な自然の花を見せられたものは、思はず畫の花の如く美しいと嘆美するではないか。

前の場合に於て、人は畫家から投げられた先入主觀によつて物をいつてゐるのだ。それは確かだ。後の場合に於て、彼れは明らかに自己の所信とするところのものを裏切つてゐる。彼れば平常の所信と相反した意見を發表して、そこに聊かの怪訝をも感じてはゐないやうに見える。これは果して何によるのだらう。單に一時の思索的錯誤に過ぎないのか。

それともその言葉の後ろには、或る氣付かれなかつた意味が隱されてゐるのか。

❀

人間とは誇大する動物である、器具を使用する動物であるといふよりも、笑ふといふことをなし得る動物であるといふよりも、自覺の機能を有する動物であるといふよりも、この私のドグマは更らに眞相を穿つに近い。若し何々する動物であるといふ提言を以て人間を定義しようとすることが必要であるならば。

彼れの爲すところは、凡て自然の生活からの誇大である。彼れが人間たり得た凡ての力とその作用とは、悉く自然が巧妙な均衡のもとに所有してゐたところのものではないか。人間が人間たり得た唯一の力は、自然が持つ均衡を打破つて、その或る點を無限に誇大するところに成立つ。人類の歴史とは、畢竟この誇大的傾向の發現の歴史である。或る時代にあつては、自然生活の或る特殊な點が誇大された。他の時代にあつては他の點が誇大された。或る地方にあつてはこの點が、而して他の地方にあつてはかの點が誇大された。このやうにして文化が成り立ち、個人の生活が成り立ち、而してそれがいつの間にか、人間の他の生物に對する優越を結果した。

智慧とは誇大する力の外の何者であらう。

✿

暫らく私のドクマを許せ。畫家も亦畫家としての道に於て誇大する。

畫家をして自然の生活を受け入れしめよ。彼れは一個の描き能はざる藝人に過ぎないであらう。彼れには描くべき自然は何所にもあり得ないだらう。自然はそれ自らにしてユニークだから。而して勿論ユニークなものは一つ以上あることが許されないから。

だから一個の藝人が畫家となるためには、自然を誇大することから始めねばならぬ。彼れは擅まに自然を切斷する。自然を抄略する——抄略も亦誇大を成就する一つの手段だ——。自然を强調する。藝人が畫家となつて、一つの風景を色彩に於て表現しようとすると假定しようか。彼れは先づ、自然に存する色彩の無限の階段的配列を切斷して、强い色彩のみを綴ぎ合すだらう。又色彩を强く表はす爲めに、その隣りにある似寄りの色彩を抄略するだらう。又自然に存す

る各の色を、それに類似した更らに強い色彩によつて强調するだらう。かくの如くして一つの風景畫は始めて成立つのだ。それは明らかに自然の再現ではない。自然は再現され得ない。それは自然の誇大だ。その仲間の一人によつて製作された繪畫を見た蠻人は、恐らくその一人が發狂したと思つたであらう。何故ならば、それは彼等が素朴に眺めてゐる自然とは餘り遠くかけ隔つてゐるから。

然しながら、本然に人間が持つてゐる誇大性は、直ちに誇大せられた表現に親しみ慣れる。而してその表現が自然の再現であるかの如く感じ始められる。かくて巧妙なる畫の花は自然の花の如く美しく鑑賞されるに至るのだ。

この時に當つて畫家はいふ「自然の美は極まりない。その美を悉く現はすことは人間に取つて、天才に取つてさへ不可能である」と。いふ心は。私達が普通に考へてゐるそのやうにあるのではないのだ。その畫家の言葉を聞いた私達は恐らくかう考へてはゐないか。自然の有する色彩は、如何に精緻に製造された繪具の中にも發見され得ない。又その繪具の如何なる配列の中にも發見され得ない。又如何なる天才の徹視の下にも端睨され得ない。それだから自然の持つ色彩は、常に繪畫の持つ色彩よりも極りなく麗はしいと。

私は考へる。その言葉を吐いた畫家自身はさう考へていつたのではないにしても、私はかう考へる。畫家のその言葉には普通に考へられてゐる、前のやうな意味に於てゞはなくいはれたのだ。自然の美は極りないといつた時、畫家は既に誇大して眺められた自然について云つてゐるのだ。彼れの言葉の以前に、畫家の誇大された色感が既に自然に投入されてゐたのだ。誇大された繪具の色彩によつて義眼された彼れの眼は、知らず識らずその色彩を以て自然を上塗りしてゐたのだ。而して自然には――繪具の色の如く美しくないにしても――色の無限の階段的駢列がある。その駢列の凡てを誇大された繪具によつて表現しようとするのは、それは確かに不可能事を企てようとすることであらねばならぬ。それ

は謂はば一段調子を高くした自然を再現することである。誇大によつてのみ自己の存在自由を確保されてゐる人間に出來得べきことではない。天才たりとも爲すなきの境地だ。それ故に畫家のその嘆聲。

✿

然るにかの青年は、色彩に敏感ではあつたけれども畫家ではなかつた。彼れは色彩に對する誇大性を所有してゐない。謂はば彼れは科學的精神の持主であつた。それ故彼れは畫家の凡てが陷つてゐる色彩上の自己暗示に襲はれることなしに、自然の色と繪具の色とを比較することが出來た。而してその結果を彼れは平然として報告したのだ。

それをいふのは單に彼の青年ばかりでない。畫家の無意識な僞瞞に煩はされないで、素朴に色彩を感ずる俗人は、新鮮な自然の花を見た場合に、嘆じていふ「おゝこの野の花は畫の花の如く美しい」と。

✿

「おゝこの野の花は繪の花の如く美しい」

畫家は彼れを呼んで濟度すべからさる俗物といふだらう。それが畫家に取つての最上の Compliment であるのを忘れつつ。

自然の一部だけを誇大したその結果を自然の全部に投げかけて、自然の前に己れの無力を痛感する畫家に取つて、神の如き野の花が、一片の畫の花に比較されるのを見るのは、許すべからさる冒瀆と感じられよう。かゝる比較を敢てして、したり顏するその男が、人間たる資格を缺くものとさへ思はれよう。

然し、畫家よ、暫らく待て。彼れは君の最上の批評家ではなかつたか。公平な、而して公平の結果の賞讃をためらひなく君に捧げるところの。

その理由をいふのは容易だ。彼れは君が發見した色彩の美が自然の有する色彩の美よりも、更らに美しいと證明したに過ぎないのだから。而かも彼れはそれを阿諛なしにいつてゐるのだ。畫家の仕事に對するこれ程な承認が何所にあらう。

✿

私は既にいふべきものゝ全部をいつてしまつたのを感ずる。青年の言葉によつて與へられた暗示は私にこれだけのことを將へさせた。而してそれを携へて私は私自身の分野に歸つて行く。

藝術家は創造するといはれてゐる。全くの創造は藝術家にも許されてはゐない。藝術家は自然の或る斷面を誇大するに過ぎない。僞りの藝術家は意識的にそれをする。本當の藝術家は知らずしてそれを爲し遂げる。而してそれを彼れに個有な力と機式とをもつて爲し遂げる。彼れは他の人が見なかつたやうに自然を見る。而してその見方を以て他の人々を義眼する。かくて自然は甞てありしところの相を變へる。創造とはそれをいふのだ。自然が創造されたのではない。謂はゞ自然の幻覺が創造されたのだ。

然しながらこの幻覺創造が如何に人間生活の内容を豐富にすることよ。何故ならば人間は幻覺によつてのみ本當に生きることが出來るのだから。

✿

自然をそのまゝに客觀するものは科學者である。少くともさうしようと企てるものが科學者である。彼れは自然の或る面に對して敏感でなければならない。而してそれを誇大する習癖から救はれてゐなければならない。

彼れは常に藝術の誇大から自然を解放する。その所謂美しくない姿に於ての自然を濫用せしめる。人間性の約束として彼れも亦何等かの方面に於て自然を誇大してゐるであらう。然しながら彼れのかゝはる學に於ては、人間の本性なる誇大的傾向から去勢されてゐなければならないのだ。

幻影の持つ有頂天を無慘にも踏み躙る冷やかな徹視。彼れ科學者こそは、謂ひ得べくは、まことの自然を創造するものだ。人間を裏切つて神に降伏するものは彼れだ。

水に於ては死水を、大氣に於ては赤道直下を、大地に於ては細菌なき土壤を、而して人生に於ては感激なき生活を。

古人が悪魔と名けたところのものは、即ち近代が科學者と呼ぶところのものだ。而して驚くべきことは、悪魔が神への降伏者であつて、人間そのものが神からの離反者であるといふことだ。

✿

然らば科學者は畢竟人間的進軍の中に紛れこんだ敵の間諜に過ぎないのか。さうだ。而してさうではない。

人間は既に誇大されたものを自然そのものであるかの如く思いこんで、それを更らに誇大することはないか。

無いどころではない。餘りにそれはあり過ぎる。人間は屢彼れの特權を濫用することによつて、特權のために濫用される。大地に根をおろして、梢を空にもたげるものは榮える。梢に大地をつぎ木して、そこに世界を作らうとするものは危い。而してこの奇怪な輕業が、如何に屢わが藝術家によつて好んで演出されるよ。

科學の冷やかな三十棒は、大地に倚つて立つ木の上にも加へられるだらう。けれども、その木はその三十棒を膏雨として受取ることが出來る。然しながらその三十棒が、梢につぎ木された大地の上にふり降される時、それは大地を暗らくする頽嵐となつて働くのだ。

人はこの頽嵐を必要としないか。

人は、土まみれになつたその梢の洗ひ浄められるのを、首を延べて待ち望んでゐるではないか。

嵐よ、吹きまくれ。

✿

科學者への警告。

君は人間の存在理由を無視するところから出發するものだ。その企ては勇ましい。

然しながら君は人間の夢を全くさまし切ることは出來ないだらう。何故ならば、人間の夢をさまし切つた時。そこにはもう人間はゐないから。

✿

二つの强い繩となる爲めには、少くとも二つの小索の合力が必要だ。

自然と接觸する所には、人間特有の誇大性を。人間特有の誇大性と接觸する所には、冷嚴無比な科學的精神を。

これが人間の保持すべき唯一無二の道德である。

クロポトキンを想ふ

＝ボルシエヰキ革命の眞相＝

大杉榮

これは、先きにアメリカ政府から本國のロシアに追放されて、暫くソギエト政府の下に働いてゐたが、遂にボルシエヰキ革命に愛想を盡かして、本年一月、漸くロシアを脱け出た、アレキサンダア・ベルクマンが、ストツクホルムからニユヨルクの無政府主義新聞『フライエ・アルバイテル・ステインメ』(Freie Arbeiter Stimme)や、イギリスの無政府主義新聞『フリイドム』(Freedom)に寄せたものである。ベルクマンは、一八九二年、と云へばちようど今から三十年前の事であるが、ペンシルヴアニア州ピツバアクの大同盟罷工の際、資本家側のそれに對する武力的鎭壓が殘忍を極め、殊に女子や子供までも虐殺されるに及んで、奮然として起つてカアネギイ會社の支配人フリツクの暗殺を企てた。そして此の二十二歳の青年は二十二ケ年の懲役と云ふ生きながらの死刑の宣告を受けた。愛人エマ・ゴオルドマン等の同志は、屢々彼れを救はうとして、監獄の中庭にまでトンネルを穿つた。其の非常な苦心はいつもちよつとした事で失敗した。が、ベルクマンは、遂に一九〇六年五月、十四ケ年の苦役の後に、ペンシルヴアニアの地獄から出て來た。

それ以來ベルクマンは、十餘年の間、愛人エマと共に雜誌『マザア・アアス』(Mother Earth)を發行して、アメリカに於ける無政府主義運動の中心となつてゐた。其の著書としては、『一無政府主義者の獄中記』(Prison memoirs of an anarchist)が、世界に知れてゐる。

アメリカが世界大戰に加はらうとした時、アメリカの無政府主義者、社會主義者、I・W・Wの會員等は、極力それに反對した。そして續いて又徵兵令に反對した。其のために數百人の

志は捕へられて、數年乃至十數年の懲役に處せられた。アレキサンダア・ベルクマンやエマ・ゴオルドマンもやはり其の中にゐた。

一九一九年、即ち一昨々年の冬、ベルクマンやゴオルドマンを始め、百數十人の在米ロシア人等は、或日窃かに一汽船に乘せられて、其の本國に逐ひ歸された。

そしてベルクマンやゴオルドマン等は、『吾々は主義としてボルシエヰキ政府の施政に反對する。しかし、吾々は今まで理想のために吾々の生涯を犠牲にして來た。が、今は革命のロシアへ行つて、こんどは勞働者のために吾々の理想を犠牲にするのだ』と云つて、ロシアへはいつて行つた。

けれども、ソヰエト政府の下に働く事が、果して『革命のため』であつたか、又『勞働者のため』であつたか、それにはベルクマン等の滿二ケ年の經驗が明かに『否』と答へてゐる。そして此の『クロポトキンを想ふ』の一文は、ロシア革命に最も深い同情を持つてゐた此の『無政府主義者が、ボルシエヰキの虐政を發いた最初のものである。

××を恐れる事はない。しかし、其の『××はどんな風にやつてはいけないか』僕等はそれをクロポトキンやベルクマンと共に、ボルシエヰキ革命に就いて學びたいと思ふものである。

猶、ボルシエヰキ革命と無政府主義者との關係に就いては、僕の近著、『二人の革命家』の中の一章『ソヰエト政府と無政府主義者』に詳しい。御參照を願ふ。

一

私はロシアへ來ると直ぐ、ピイタア・クロポトキンに就いてのいろんな噂を聞きはじめた。或者は彼れがボルシエヰキに好意を持つてゐると云つた。或者は彼れがそれに反對してゐると云つた。彼れが比較的に滿足な物質的事情の下にゐると云ふ噂もあつた。が、又、彼れは實際餓えに苦しんでゐると云ふ噂もあつた。其他いろんな噂があつた。私は其の實際を知りたいと思つた。それで私は親しく彼れに會ひたくて堪らなかつた。もう幾年かの間、私は彼れと時々の通信を交はしてゐた。が、私達はまだ會つた事はなかつたのだ。私は、始めて彼れの名を聞き始めて彼れの著書を知つたごく若い頃から、彼れの非常な崇拜家であつた。そして殊に或る一事が、其の全人格を現はすものとして、私にごく深い印象を殘して、私の愛着と尊敬とを惹きつけたのであつた。

それは一八九〇年だつたと思ふ。ユデア人の無政府主義運動がアメリカではまだ其の初期にあつた。(ベルクマンもエマもどちらも此のユデア人であつた。)私達は當時ごく少數だつた。そ

して、オオチヤド街のごく見すぼらしい一ホオルで毎週一回演說會を開いてゐた。私達は少人數だつた。併し高大な理想の熱情に燃えて、此のユデア人街の住民の間に無政府主義思想の宣傳をする爲に、（一生懸命になつて、私達の有らゆる若い精力と能力とそして私達の僅かな所得の大部分とをそれに獻げてゐた。そして私達は非常に成功した。毎週、益々多くの聽衆が私達の會合に集まつて來て、私達の革命的敎義に非常な興味を示し、そして多くは理知よりも寧ろ確信を以てではあつたがいろんな大問題が熱心に論ぜられた。私達の或者に取つては、呪はれた資本主義がもう其の極惡無道な可能の極限に達して、社會革命が近くに來てゐるもののやうに、當時思へたのであつた。しかし、此の生長して行く運動や近づいて來る社會革命に就いて、私達自身も十分滿足に解決する事の出來なかつた、多くの困難な複雜した問題があつた。私達は、ほんの短い間の來訪でもいゝから、大先生のクロポトキンに私達の間に來てもらつて、これらの多くの厄介な點を明かにして、其の知力的助力と鼓吹とを與へてほしいと思つた。それから又、彼れが來ると云ふ事は私達の運動にとつてどんなに刺戟になるだらう。

前にも云つた通り、私達はごく少人數だつた。しかし私達は皆んな、其の生活費を最低限度にまで下げて、其の幾週間の所得を又必要とあれば幾ケ月間の所得をでも、クロポトキンをアメリカ來訪に招く費用に喜んで出さうとした。最も熱心で活動的な同志等の幾多の小團體の會合で、事は洩れなく相談された皆んな熱心に此の大きな企てに贊成した。長い手紙が吾々の親愛なる師のもとに送られた。彼れを待つてゐる廣大な野のある事を彼れに告げ、そして又私達が彼れを必要としてゐる事を力說して、アメリカに遊說に來てくれと頼んでやつた。

其の返事は不承知だつた。それは暫くの間私達皆んなを意氣銷沈させた。私達は其の來訪の必要と、運動の上に及ぼす其の大きな結果とを信じきつて、きつと彼れが承知してくれるものときめてゐたのだ。が、私達が彼れに感じてゐた大きな崇拜は私達が彼れの不承知の動機を知るに及んで、殆んど彼れに後光がさすまでに高まつた。彼れは非常に來たかつたのだ——クロポトキンはさう書いて來た——そして彼れは又私達が彼れを招く精神をも深く諒察してゐたのだ。彼れは他日アメリカに來る事を望んでゐた。そして其時にかう云つた善い同志の間にゐるのは非常に嬉しい事だらうと待ち望んでゐた。しかし今彼れは彼れ自身の費用で來る事が出來なかつた。そして彼れはこんな目的のためにですらも運動の金を使ふ事を欲しなかつたのだ。

私は彼れの言葉を深く考へて見た。私は思つた。彼れの見解に

正しい。しかしそれは普通の事情の下にのみ適用せらるべき事である。彼れの場合は普通の場合ではないのだ。例外の場合なのだ。クロポトキンの其の考へは實に重大な事であつた。しかしクロポトキンがアメリカに遊説する事の重要さは、私にとつては、其の考へよりももつと重大であつたのだ。私は彼れが來ない事にきめたのを殘念に思つた。しかし彼れの動機は、其の全人格と其の人となりの全くの偉大とを、一言以て私に識したのであつた。そして私は彼れを革命家としての又無政府主義者としての私の理想と見たのであつた。

二

一九二〇年三月まで、私はピイタア・クロポトキンを訪ねる機會がなかつた。彼れはモスクワから六十ヴエルストのドミトリと云ふ小さな町に住んでゐた。當時ロシアの鐵道は最も悼ましい、狀態にあつた。たゞ人を訪ねると云ふ目的でペトログラドからドミトリまで旅行するなどゝ云ふ事は、とても考へられなかつた。が、ロンドンの『デエリイ・ヘラルド』(Daily Herald)の主幹ジヨルジ・ランズベリイがペトログラドに來た事が、私にモスクワへ行く可能を齎らした。ランズベリイは特別車を與へられてゐた。そして私は其の通譯として彼れに隨いて首府へ行つた。此のイギリスの訪問者は、暫くモスクワに滯在した後に、ドミトリへ旅する事を政府から許された。私はモスクワのほかの二人の同志と一緒に、此の機會を利用した。

『著名な人』に會ふ事はごく多くは非常な失望である。何んだか、吾々の想像してゐる畫面が實際と一致しない。然るに、クロポトキンの場合にはさうであつた。彼れは肉體的にも又精神的にも、私が彼れに就いて持つてゐた心の中の肖像と殆んどぴつたと會つてゐた。彼れは其の深切な目と、氣持のいゝ微笑みと、深山の鬚との、其の寫眞によく似てゐた。かう云ふと妙に聞えるかも知れないが、クロポトキンが室の中にはいつて來るたび毎に、何んだか明るくなるやうに思へた。理想家の刻印が著しく彼れの上に刻まれてゐて、其の人格の靈性が實際に感ぜられる事が出來た。が、私は其の瘦せ衰へて明かに虛弱な樣子に驚いた。彼れは組織的に榮養不良で、半飢餓に陷つて、そして其の年のわりには餘りに老けて見えた。

餓えてゐるロシア全國のどこの家にでもさうである如く、尤も破廉恥なコミサルや內所の投機者は其のいつもの例外であるがクロポトキンの家でもやはり、私は食糧問題がごく困難であつた事を知つた。クロポトキンは、若干の科學者や老革命家等に與へられてゐた所の、謂はゆるアカデミク給若しくはそれに當るものを貰つてゐた。それは、量に於ても又質に於ても、普通の

市民に渡される扶持よりも、餘程よかつた。が、それは生命を支へるには十分なものではなかつた。幸いにクロポトンキンは時々外國の同志やウクライナから食物の小包を受取つてゐた。しかしそんないろんなものを以つてしても、クロポトキン家（彼れの妻と娘のサアシアとは餓えを凌ぐのに餘程困つてゐた。然料や燈火の問題もやはり不斷の心配の種であつた。冬は厳しかつた。そして薪はごく稀れであつた。石油は容易に手にはいらなかつた。そして一時に一つ以上のランプをつける事は、めつたに耽る事の出來ない非常な贅澤と思はれてゐた。此の缺乏はクロポトキンには殊に感ぜられた。それは其の文筆的勞作を非常に不利ならしめたのであつた。

から云つた事は皆な、勿論私は、ソフイア・グリゴリエフナやサアシヤから聞いた。クロポトキン自身は其の生活の困難に就いては一言も云はなかつたらう。が、其の孤獨が餘程彼れに苦しかつた事は明かだ。幾度もクロポトキンの家族は、其のあたりが政府の目的の大分に徴發された、モスクワの其の家から逐ひ出された。それで彼等はドミトリに移る事にきめたのであつた。そこは首府からは五六十ヴエルストしかないのであるが數千哩も離れてゐるやうなものだつた。何故なら、それはクロポトキンを殆んど牢獄の中にゐるやうに全く隔離して了まつたのだ。交通組織の危機と當時の一般的形勢とのために、クロポトキンの友人等はごく稀れにしか彼れを訪ねる事が出來なかつた。西ヨオロッパからの報道、科學的著述、外國の出版物——總てそれらのものは手に入れる事が出來なかつた。クロポトキンは深く此の知識的交はりと精神的娯樂との缺乏を感じてゐた。

私は、一九二〇年の三月と七月とに、二度クロポトキンをドミトリに訪ねた。二度目の時には、彼れは餘程よくなつてゐたやうに見えた。そんなに瘦せ衰へてゐず、顏色も健康に、丈夫に、まめまめしく見えた。赫灼とした夏の日光が著しく彼れに効いたのだ。彼れはクロポトキンカテエジのそばの小さな花園を歩きながら、其の訪問者等にソフイアの手作りの美はしい結果である滿開の野菜畑を自慢さうに指さしてゐた。その目はきら〱と輝いて大空の澄み切つた青い色がそれに映つてゐるやうだつた、それは溢れるやうな厚意の微笑みで人を引きつける獨得の目であつた。これはクロポトキンの全人格、即ち其の人事や自然に對する慈愛と一切の生命に對する其の生來の神聖な尊敬とを瞬間に寫し出す、人間カメラのレンズであつた。

三

私達は多くの問題を論じた。私はクロポトキンがはつきりと、斷乎としてボルシエヰキに反對するのを見た。と云ふより

は寧ろ、彼自身が繰返し繰返して主張したやうに、彼れは國家社會主義や、全國に亘る暴力によつて無理押しつけにされた共產主義や、又一般にはマルクシズムやの、妥協する事のない敵であつたのだ。

クロポトキンは云つた。ボルシエヰキからはそれ以外の何物も期待する事は出來ない。彼等は理論に於ても目的に於てもマルクシアンなのだ。彼等は全能の專制國家を創る事に心を注いでゐる。十、十一月の頃(一九一七年)の彼等の革命的喊聲は、勞働者階級や農民を、そして殊には又無政府主義者等を甚だしく誤まらした。勿論無政府主義者等は、暴力の上に基づく國家や政府は、それがどんなに美はしい名のものであつても、常に不正であり惡であることを知つてゐた。しかし一九一七年には、彼等はボルシエヰキを偉大な革命的要素と見て、マルクシズムの哲學共者に固有な危險には盲になつてゐた。ロシアの無政府主義者等は革命の成功のためにボルシエヰキと手を携へて働き、相共に熱誠にそして勇敢に戰つた。彼等の幾百名は其の生命を失つた。それだのに、今はどうだらう。彼等は今迫害され、逐ひ廻され、其の一切の著想を禁ぜられ、そして彼等の多くは其の思想のために投獄され、其の或者は銃殺すらもされてゐる。そしてボルシエヰキ等は、其の國の全經濟的及び社會的生活と政府とを全く統治する事殆んど三年の今日、彼等は人民のために何をなしたか。

『私はロシアの餓え且つ滅んで行く狀態に就いて云はうとしてゐるのではない。これも決して全部干涉や封鎖のためではないのだ。國家共產主義やボルシエヰキの方法は其の少なからざる責任を持つてゐる。彼等の氣違ひじみた中央集權好き、彼等の生活上の實際問題に就いての不能――彼等の腐敗に就いては云はないとしても――そして何よりも先づ彼等の農民問題や農民心理に就いての全くの無知、これらの總てがロシアの今日の經濟狀態に大いに責任があるのである。しかし、私が今力說しようとするのは、其の事ではない。私が今殊に君に指摘したいと思ふのは、』

クロポトキンはかう云ひながら、苦痛に充ちた目で私を見た。そしてその聲は憤りに慄えてゐた。

『それは人民に對する――個人及び衆團に對する――ボルシエヰキ國家の態度だ。私は平靜にはそれを話す事が出來ない。壓迫と恐怖政策、これが、其の革命の友人等にすらも向けられるボルシエヰキの手段なのだ。彼等は今、革命を深めて行く事の代りに、たゞ其の政權を固めて行く事のみを心配して居る。彼等は、民が絕えず進步的に革命化して行くと云ふ事や、民衆の

自發心や自己表現や組織や又は其の組織間の任意の協同に最大の機會を與へてそれを奬勵する事の、革命の神髄其者を全く忘れて了つた。いや、忘れたのではない。彼等は故意にそして組織的に、其有らゆる徵候を壓迫し又撲滅さへもしてゐるのだ。これがロシア革命の恐ろしい悲劇なのだ。』

クロポトキンが全形勢を手ひどく云ひ現はした言葉に據ればボルシエヰキが革命を『管理する』仕方に就いて、クロポトキンがどれ程深く憂へてゐたかは明かであつた。彼れは他の有らゆる革命的諸政黨や諸運動を領壓する彼等の態度を批難し、殊に無政府主義者を投獄し又銃殺さへする彼等の政策を憤つてゐた。それは革命ではなくて蠻行だ、と彼れは云つた。彼れは又、ロシアの偉大な產業組合運動がボルシエヰキによつて破壞された事を詳細に話して、其の經濟上及び政治的社會上の方面に於ける不幸なる結果を指摘した。それによつて彼等は、一方に、ロシアを經濟的破滅の間際に導く事を助け、そして他方に、政治上中立的分子であつた多數の民衆を反革命になるまでに反抗させた。

ロシアの產業組合運動は、其の國の生活に、經濟上のみならず又文化的意味に於ても、大きな力であつた。その活動は製造したり、農民の企業に資本を供給したり、賣買したりする事だけではなかつた。それは又、殊に農民の間に、有力な教育的運動をしてゐたのであつた。でも、產業組合は決して革命的團體ではなかつた。それには、ごくいろんな政治的要素が含まれてゐた。しかし其の活潑な反動主義者等は一般に最高幹部の役人の中にゐたので、組合全體を毀さないでもそれを排除する事は出來たのだ。產業組合の經濟的組織は、革命のためには絕對に必要な、非常に有効な機關であつた。一九一八年一月には、產業組合はロシア全國に散在する二萬五千の支部より成り、九百萬の會員を持つてゐた。當時の其の投資金は一千五百萬ルウブルに上り、そして其の前年の取引は二億萬ルウブルを超えてゐた。此の有力な團體がロシアの有らゆる都市や、村落に實際に極めて有効に働いてゐたのだ。

ボルシエヰキは始め此の產業組合を麻痺させ、然る後に全く『整理』し破壞して了つた。これは革命の自殺であつた。それは經濟的閉止を急がせた。何故なら、ボルシエヰキ國家は食物の蒐集を有効に組織する事も出來ず、又それを適當に分配する事も出來なかつた。貴重な食物の幾百萬噸が道ばたにさらけ出されて腐つて行つた。產業組合は廢止され、地方的分配の機關は

破壞され、そしてそれに代はつた共產主義國家はさうした事に就いて準備もなく經驗もなく全く無能であつたのだ。

それに、產業組合に對するボルシエヰキ政策の此の犯罪的愚鈍は、實は其の中央集權的國家社會主義哲學の論理的結果なので、更に革命やロシアを破滅に導いたところの、幾多の他の不幸なる手段をも必然に含んでゐた。軍隊や國民の要求する食物の供給を得る事が出來ないので、ボルシエヰキ政府は直ぐにラアツヴヨルストカ即ち强制徵發の方法に據つた。それは暴行と極端な殘忍とによつて特徵づけられた、峻烈な手法であつた。それは人民殊に農民を反抗させる事に失敗はしなかつた。それはツア時代を餘りに生々と思ひ出させるものであつた。農民は最初ボルシエヰキの此の經濟政策の不正と專制とに對して抗議した。しかし、其の抗議は無駄だつた。其のあとには規則として壓迫手段が來た。訴願も、哀訴も抗議も無駄だとなつて、農民は食物の徵發に抵抗しはじめた。政府は彼等に懲罰軍を送つて、其全村食物に恐ろしい復讐をした。此の懲罰隊はいつも共產主義者やチエキスト（秘密警察員）によつて指揮され、殘忍の限りを盡した。屢々一村の全住民が鞭打たれ、百姓の家にあるものは何にもかも持つて行かれ、そして時として又全村が破壞されもした。ロシアの農民に對する此の政策は、クロポトキンの言葉に據れば、ボルシエヰズムの最暗黑のペエジであつた。

これらの事は、實に恐ろしい事であるが、私には初耳ではなかつた。私がクロポトキンを訪ふ前にも、私はいろんな方面からそれを聞いた。しかし當時私はボルシエヰキとはごく親しくしてゐた。そして私はボルシヰキの殘忍の報告が誇張され、そして其の農民政策が誤解されてゐるのだとかくに考へてゐた。

四

私は革命に對する燃えるやうな熱情と、其の可能に就いての深い信仰とをもつて、ロシアに來た。私は其の形勢の非常な困難な事を見た。干涉主義者等の絕えない脅かしを見た。封鎖の必然の結果を見た。解决を要する幾多の複雜な新問題のあるのを見た。私は私の能力の最善を此の大事業に盡さうと決心した。勿論私は、ボルシエヰキがマルクシストであり、强大な中央集權的國家の信徒である事は知つてゐた。しかし十月革命當時の其の眞に革命的な態度其の屢々無政府主義的な標榜や、其の目變的活動や、それ等の總ての事が、彼等の手引き或は單なる社會主義理論ではなく革命其者の最善の利益だと云ふやうに私に信じさせた。尤も私は、私がロシアに着いた最初の數週間にも、著しい不正と多くの不平等とを見た。しかし私はボルシエヰキ

の革命的誠實に就ての一切の疑念を打消す事に努めてゐた。私はボルシエヰキ運動の首領等と接近し、屢々彼等に會ひ、そして彼等や彼等の仕事にごく親しみを感じてゐた。私のロシア滯在が長びいて、革命の目的や努力に就いての私の考へと違ふやうに思へる事を澤山見た時にも、私はまだボルシエヰキの革命的要素と見る私の信仰に縋りついてゐた。其の矛盾に對する多くの證據を私は私自身に辯解しやうとしてゐた。私はかう信じようとしてゐた。不愉快な事實は特發的なのだ。そして其の多くは一時的なのだ。若しさうでないとすれば、それは主として危機の際の急迫な所要から生じた、革命的必要の不仕合せな結果であるところの過渡時代の避ける事の出來ない混亂に有り勝ちの事であると。

長い間慈しんで來た幻を奪はれるのは苦しいつらい事だ。私はボルシエヰキのいろんな方法や、其の壓迫の手段や殘忍に就いて、有らゆる方面から聞いた事を信ずる事が出來なかつた。信じたくなかつた。私自身の目で見た證據からでも、餘りに急いで一つの意見を作りたくなかつた。クロポトキンが私に話した事でも私の論據としたくなかつた。クロポトキンと雖も誤り傳へてゐる事があるだらふ。又其の態度も黨派的感情のために色づけられる事があるだらう。しかし、特にボルシエヰキの農民政策に就いて、私が彼れや其他の人とから聞いたいろんな事は、私自身が其の一切の事情を調査して、ファスト・ハンドでそれを知らうと云ふ私の決心を强める事に役立つた。

當時私はウクライナへ行く途中であつた。此の旅行は十分其の事情を研究する機會を私に與へるだらうと思つた。いろんな事情が特に都合がよかつた。私は革命博物館から派遣された特派隊のプレエドセダテル（委員長）であつた。私達の目的は、過去百年間に於けるロシアの革命運動に就いての有らゆる歴史的材料と共に、革命共者に就いての有らゆる有益な材料を集める事であつた。私達は私達の用に供する特別列車を持つてゐて、南ロシアを自由に旅行し廻はる權利と、行きたいと思ふ處へ行つて有らゆる生活の人々と會ふ稀れな機會とを持つてゐた。それに、アンダアグラウンド（地下）の非合法的な革命的分子や、いろんな勞働團體と接觸することが、私の特別の任務であつた。一言で云へば、ロシア革命を研究し、國內の事情を知り、勞働者や農民と接觸し、そして又監獄や婦女子收容所までも調る、ごく例外的な理想的機會であつたのだ。

此の數ケ月續いた旅行の豐富な經驗を詳細に述べる事は、到底此の論文のよくする所ではない。私はそれを、いづれ、十分に

そして完全に、出來るだけ公平にやつて見たいと思つてゐる。が、こゝで私は、私がペトログラドやモスクワで聞いた事やクロポトキンが私に話した一切の事は、私が種々なる旅行の間に卽ち最初はウクライナに次ぎには北部ロシアにそして最後には西部ロシアに見た事を較べると殆んど、何んでもない事だと云ふ事を極力語勢を強めて云つて置きたい。さう云ふのは悲しい事だが、しかしそれは總て本當なのだ。實際、もつと多くそしてもつとひどい事があつたのだ。そして今また續いてあるのだ。ボルシエヰキのラアツヴヨルストカ（強制徵發）は、最惡の皇帝政治も決して及ばなかつた程の事をしてゐるのだ。革命政府が、よしそれがマルクシストであるとは云へ、こんなにひどい殘忍と野蠻な復讐とに墮落し得たと云ふ事は、全く信ずべからざる事のやうに思へた。復讐——これだけで農民に對するボルシエヰキの氣違ひじみた政策を十分に云ひ現はしてゐる。ラアツヴヨルストカ——食物の强制徵發は無茶苦茶に行はれた。

全村々が荒らされて、其の住民がゐなくなつて了つた。私は成年の男が全くゐなくなつて了つた村々を見た。男は皆な銃殺されて、女と十四歲以下の男の子とだけが殘つてゐた。他の村々では男は一人づつ鞭打たれて、そして其の年齡には構はずに皆な强制的に軍隊に入れて了つた。或る村々では、男は『懲罰隊の共產主義者』等を幾度も經驗し、後に、山や森の中に逃げこんで、そこで謂はゆる『グリインス』草賊となつてボルシエヰキに對する復讐の容赦のないパルティザン的戰鬪に從つた私は食物徵發のために最後の麥粉までも持つて行かれ、又農民等が次ぎの種蒔きの用意に取つて置いた種子までも持つて行かれた村々を見た。法律できめられた課税以外に、牛や馬も取られ最後の家禽や毛布やぼろ〳〵に裂けた枕までも取られ、、其の村々は乾いた骨のやうに裸になつて了つた。全村々がボルシエヰキの懲罰隊の砲兵によつて、或は懲罰のために、或は近隣の農民への恐怖的見せしめのために、全滅させられて了つた。

私は『共產主義』と云ふ言葉が、民衆の心には秘密警察や不正不義や、壓迫や、暴行と同意義になつたのを知つた。共產主義者と云ふ名は、都會では一般に、そして農村ではどうでも、深い永續きのする、猛烈な憎しみを以て憎まれてゐる。それは瞞された希望と殉難とから生れた、恐ろしい程に激しい憎惡だ。

ボルシエヰキの此の農民『政策』は革命の死の鐘のやうに響く。クロポトキンが其の手紙の中や又は來訪者に繰返し繰返し力說した處の、『ボルシエヰキは革命はどんな風にやつてはいけないかを世界に示した』と云ふ言葉の如何に正しかつたかよ。

法律家が笑話集を讀んで

穂積重遠

法律家だつて笑話位讀む。讀めば勿論笑ふ。時には其の内容の切實さ深刻さに却つて涙ぐまされることもある。法律家と云へばニコリともせぬもの、法律と云へば血も涙もないものと、思ひ思はれ來つたのが抑もの大間違ひで、法律が人生の規範であり、其人生が泣くべく笑ふべきものである以上、法律は且笑ひ且泣きつゝ立法し運用し研究すべきものと思ふ。泣きつゝの研究は又の機會とし、今日は笑ひつゝ法律を語りたい。

私は江戸時代の文學が好きだが、此頃は忙しいので長いものをゆつくり讀む暇がないから、川柳とか一口噺とか云ふ樣な手數のかゝらないものを隨時に讀んで、頭腦が權利義務で化石するのを防いで居る。と云ひながらそれを再び權利義務に持つて來る所がヤツパリ法律家だと云はれゝばそれまでだが、實際さう云ふ類の通俗文學を讀むとなぜ法律と云へばあゝむづかしく説かねばならぬのだらうかと云ふ感に堪へない。一つ川柳や笑話交りで法律論をして見たいと云ふ道樂氣が起る。嘗て川柳を用ひて德川時代の離婚制度を説いたことがある。（本誌大正十年七月號「三くだり半の話」）。今度は江戸時代の笑話を使つて法律談をして見たい。笑話は便宜上左の二笑話集から採つた。

京蘂兵衛撰　滑稽類纂（明治三十二年）

和田萬吉博士編　江戸時代笑話選（大正八年）

先づ法律論の代用として役立ちさうな笑話を少し許り拾つて見やう。法律論の代表的なものゝ一つは契約論だ。契約は申込と承諾の合致によつて成立つが、申込及び承諾それぞれ獨立して契約の二分の一たる效果があると云ふ譯ではないなどゝ説明するが、左の笑話で其關係がスツカリ分る。

半分の埒あき

ある所の侍女に近所の若いもの文を付けけれども、否の返事もなし。友達聞て、貴所が兼ての事はなんと埒があいたかと問へば、半分は埒があいてあるといふ。それはどうした事ぢやといへば、さればおれは合點なれど、まだ先が合

點せぬといふた。

次に契約の申込をしたが相手方が返事をしない場合には、承諾があつたものと見るべきだらうか。『默する者は承諾と看做さる』(Qui tacet consentire videtur)と云ふ法律格言あり、實際我々の所へも入會の勸誘狀が來たり書物を送り附けて來たりして『御返事無之節は御承諾と看做可申』云々と云つて來るのがある。併しそれは原則としてはどうも無理な樣だ。斯う云ふ話がある。

初松魚

友達のところから初鰹をもらひ料理せうとおもふに、フツトおもひ出したは精進日、折角芥子までかいたのに食れぬも業腹と、鰹を持て佛壇の前へゆき、モシおやじ樣、この鰹をもらひましたがけふはおまへの御命日だから喰ひやせん、それとも又たべても大事ござへせんけりやア必御返事にァおよびやせん。

代理と云ふことが法律論中厄介なものゝ一つである。所で代理が行はれ得る行爲と代理ではいけない行爲とがあると云ふことが、左の話に出て來る。

通小町

ある御公家さまの御姫さまに忍びの文つけたれば、今宵より百夜通ふて夜毎にかよふたしるしを車の榻にきずつけよ、百夜すぎなば必ず逢はむとの返事ありしく、雨の降る夜も風の夜もかよひ／＼て九十九夜め、車の榻へきづけて立かへらんとせしところ、侍女出て袖をひかへ、お姫さまのおつしやりまする、お通ひなされて九十九夜、一夜ばかりはまけにしてあげませうほどに、爰につれましてお居間へすぐにまゐれとの事といへば、いやはや／＼との挨拶、なぜそのやうに仰有りますといへば、アイわたくしは日雇で厶ります。

それから又斯う云ふ話がある。

大晦日

大晦日の晩乞食夫婦づれにて橋の上に寢て居れば、懸取の往來ひきも切らず、女房の乞食夫にむかひて、あの通り懸金を夜徹し駈け廻り集めるも大抵の難義にてはなし、われ／＼はその苦みもなく、盆も大晦日も宵から熟睡、これを思へば乞食が遙に氣樂なりといへば、夫が、その樂は誰がさせる、みんな己がおかげだと思へ。

此話の中の『懸金を夜徹し駈け廻り集めるも大抵の難義にてはなし』と云ふのは、所謂『債權者難』なる議論である。近頃の法律論が段々債務者保護に傾ふのは大體に於て結構だが、併し債

權者だつて場合によつては隨分氣の毒なことがある。殊に債務者の債務なのに所謂ふとたまらない。それで債權者が懲り懲りしてもう金は貸さない家は貸さないと云ふことになると、却つて法律の目的に反する。例へば折角住宅難救濟の積りで拵へた借家法も、むやみに借家人計りを保護すると、家主側が家を貸し澁つたり家賃や敷金を高くしたりして、却つて住宅難を増すことにもなり得るのである。元來債權者と債務者との關係を――自分達も又側からも――仇敵關係の樣に觀るのが間違ひで社會的經濟的共同生活關係と視なければならぬ。隨つて債權者を保護するとか債務者を保護するとか云ふ問題ではなく、債權債務關係其ものゝ圓滿公平を考へねばならぬのである。

我國今後の法律問題中重要且困難なものゝ一つは長子相續制度問題である。此制度の維持論者の一つの論據は我國古來の制度だと云ふことであつて、一般にも何となくさう信じられて居る樣だが、結論の當否は暫らく留保して、少くも右の沿革論だけはどうも間違つて居る樣だ。長子相續制度は古來の制度ではなくて封建的制度ではあるまいか。即ち武家時代になつてからの然かも武家階級に限つた制度ではなかつたらうか。庶民階級では長男のみが全財産を相續するのが當然とはされなかつたらしい。斯う云ふ話がある。

讓金

引越して來た隣家の爺、大病もさし迫りて、三人の子どもへ讓金の噂を聞くに、惣領子息に金百兩、次男に二百兩、三男に三百兩とのこと。はて變つた讓金ぢや、惣領こそ三百兩で、二男三男は順に少さうなものぢやが、どうした譯ぢやと、よく／＼聞けば、借金を讓るの。

此話によると、三人の子にそれぞれ遺産を讓つたことは不思議とされて居ないので、唯だ其割合が問題になつて居る。なほ相續と云ふのはプラスの財産の相續のみでなく、マイナス財産即ち債務の相續があり得ると云ふこと〻が、此話の中にあらはれて居る。

尤も右の話の場合は遺言相續であつて、親が遺言なしに死んだ場合の法定相續がどうだつたかはこれでは分らないが、長子獨占が必然でなかつたこと〻及び遺言が重きをなしたことは暗示されることの遺言が重んじられたと云ふことについては、も一つ斯う云ふ話がある。

遺言

天の邪鬼のやうな子息め故、遺言は反けて言ふが好いと、子息を呼寄せ、もはや暇乞ぢや。死んでも必ず物入すな、菰に包み川へ捨てよ、といふて死ぬ。子息思ふやう、さて

〳〵是まで親の仰せに背いたが、一代一度の事、是ばかりは用ひずばなるまい。

扨法律學の問題として何と云つても最も根本的なものは、『法律とは何ぞや』即ち法律の定義である。從來普通に行はれた法律の定義は所謂國家命令説で、それが今日なほ隱然勢力がある樣である。即ち『法律ハ國家ノ命令ナリ』と云ふのだが、これは所謂問を以て問に答へるもので、一向定義になつて居ないのみならず、國際法を包含しない不都合である。併しそれ等理論上の缺點は兎も角も、私が右の定義を好まない最大の理由は國家は何事でも法律を以て命令し得ざるなしと云ふ法律萬能思想に導きはしないかと云ふことである。これについて斯う云ふ話がある。

火事

さる國の殿樣お屋敷近く火もえ出で御居間へうつる騒ぎ、殿樣うまれてから初めての類燒に大うろたへにて、やう〳〵御下館（おんしもやかた）へ御立退なされ、翌日みな〳〵を召し集められ仰せ出されるやうは、此後火事法度（はつと）。

類燒を防ぐ最良の策は家屋は耐火建築にすることである。又法律で防火の一助としやうとならば合理的具體的な火の用心の規則を設くべきだ。『火事法度』と云ふ抽象的命令では自火も防げず類燒も免かれ得ない先頃の『過激思想取締法案』などは『火事法度』の氣味がなかつたらうか。

斯くして我々今日の法律家の最大缺點は、それぞれ專攻の法制に通曉して居ながら、肝心の法律其ものを知らないことである。斯う云ふ話がある。

鶉

うづら好せたまふ大名あり。承りつたへ聞にまゐる者へは御料理など下され甚悦せたまふよし、お出入の宗匠衆をたのみわたくしもきつい鶉好きと申入れて曉起して行つたところさすがお大名のお手のまはりたる、朝からいろ〳〵のうまごと、酒たらふく下されのみくらひして居るうち、チ、ツクワイとの一聲、肝をつぶして、あれは何でござります。

法律家と自ら名乘りながら法律を知らず、眞の法律に出くはして肝をつぶし、『あれは何でござります』と驚く樣では情無いではないか。

法律家の今一つの病氣は、不必要にむづかしい所謂法律語を用ひることだ。そして訓で讀んだらよささうな所を音で讀む。讓渡（ゆづりわたし）と云へばよいのに讓渡（じやうと）と云ひ、立木（たちき）と讀まずに立木（りふぼく）と云ふ此點は別に論じたことがあるが、むづかしく云ふから素人にわからぬと云ふ諷刺と取れる笑話を二つ。

眼病

伊勢屋のおやかたが眼病とかでムると聞て臺所までゆき、承れば、旦那様が御眼病ぢやげにムりますが如何でござりますといへば、奥より旦那が紅のきれにて目を押へて出られ、ヲヽ助七かよう來やツた。ヘイ御眼病のお見舞にめいりやした。ヤア旦那、あなたのお目はどうなされやした。

御年玉

新玉の春、門には松を飾り、家内雜煮喰て居るところへ、大黒屋福右衞門御慶申入ます、まづ御機嫌よく御越年なされまして目出度ござりますといふ所へ、男が金杓子なげこむ。これは〳〵御年玉かたじけなうムりますといふて歸し、さて〳〵よい物をくれた、幸いだおろしてつかへと給仕して居る下女にやれば、下女持て勝手へたち、これ長助どの、江戸では金杓子を御年玉といふか。

法律家は又論理を操つる。論理固より結構だが、論理に操つられると變な結論に到達することがある。斯う云ふ話がある。

禁酒

酒もらふた溫てあるから一杯せい。イヤおれはちと願があつて、三年禁酒した。これは心もとない、合點がゆかぬ。ハテきびしく飲まぬところを見ておきやれと言つて歸る。次の夜みな飲で居るところへ酒のみに來たと言ツて來る。亭主もあきれて、それ見やれきのふの事もう破るか。やぶりはせぬが、おれもはつめいを出して、三年の禁酒を六年にして夜ばかり飲むつもりぢや。是は尤ぢやが、とてものこと十二年にして晝夜のみやれ。

法律家は好んで分類をする。所で次の話を讀むと我々法律家誠に汗顏の至り。どうも往々斯う云ふ分類をする樣だ。

矢大臣左大臣

父子して天神様へ參詣なしけるに、息子親父にむかひ、この門の兩脇にある矢大臣左大臣といふは何方が矢大臣で何方が左大臣でと聞くに、親父眞面目になり、よく覺えて居けソレ矢大臣でない方が左大臣で、左大臣でない方が矢大臣だ。

『公法でないものが私法、私法でないものが公法』『公益法人でないものが營利法人、營利法人でないものが公益法人、』いづれか『矢大臣左大臣論』ならざるべき。斯う云ふ觀念上の分類では駄目。それではどうすればよいか。次の話の樣に行きたい。

狼

狼と山犬は似たやうなもので知れぬ。これはしたり、御身はその目利をしらぬか。イヽヤ知らぬ。しからば己がおしへ

てやらうが、狼らしいやつが出たら棒をもツてぶつがいゝ。山犬ならば逃る、狼ならば、とびこんで喰ひつく。

即ち喰ひつかれる危險を冒して自分で棒でぶつて見た實驗的分類でなくては役に立たない。

法律家の一番大切な仕事――事によつたら唯一の仕事――とされ來つたのが法文の解釋である。成程法文の解釋は法律家の仕事には相違ないが、唯一の仕事でないのは勿論、もつと大切な仕事が澤山あることは、今後特に注意すべきことだらう。殊に法文解釋が所謂『文字解釋』一點張りで其法文の眞意だけさへ見へない樣では困る。斯う云ふ頗る此點に適切な話がある。

新參の使

これ歩助、この手紙を入福富右衛門樣へ持ていけ。ハイ何所でムります。なんでも此通りをまつすぐに行てな、辻番へつきあたつて聞ていけ。畏まりましたと手紙を受取、まつ直に行て辻番の椽側へおもいれつき當れば、辻番親爺腹を立て、エイ晝ひなか目が見へぬか如何したものだ。ハイ私はどツちへ行くのでムります。

「つきあたる」と云ふ文字に拘泥するものだから、不必要な衝突が起り、却つて本來の目的が分らなくなつて、『私はどツちへ行くのでござります』と云ふ有樣になる。

斯樣に法文の解釋を下手にやると飛んでもない結果になるのみならず、法文なるものが元々完全にすべてに行亙り得るものではないのだから、如何に上手にやつても法文の解釋だけではとても間に合はない。そこで例へば牛についての法律はあるが馬についての法律はないと云ふ場合に、牛と馬とは類似して居るからと云ふので、牛の法律を馬に當て嵌めることが行はれる。これが所謂『類推』であつて、頗る便利な方法だが、併し果して類であるかどうかの判斷が形式的皮相的だと、牛の角の法律を馬に持つて來る樣な飛んだ間違をしでかす。類推の仕損じの話が二つある。

八百屋

かみさん大根を一本下され。大根はムりませぬと切口上でいふ。亭主奥より出で、コレおまへは今まで御屋敷につとめたから商ひのしやうをしらぬは尤もぢやが、賣切つた物なればそれはムりませぬがこれではお間に合ひますまいかといへば、それについて外の物も賣ることがある、挨拶がかんじんじや。アイずゐぶん心得ましたといふ所へ、かみさん長芋を下さい。ハイ長芋はきれましたがつくね芋では如何でムります。長芋がなくばつくね芋で間に合せませうと買てゆく。又かど口へ、モシ山葵をくださいといふて來

る。ハイ山葵はきれましたが生姜ではどうでムりますム生姜ではちとかゆひがせうことがない、間に合ひにして置けとこれも買て行く。亭主、それ見やれ、人に無理はない、物のいひやうで買て行くわサ、いつでもさう氣をきかせたがいゝと云ふ所へ、モシかみさん布海苔を一枚くんなさいといへば、ハイ布海苔はきれましたがたゝみ鰯では如何でムります。

吝い奴

隣家の太郎左ほど吝い奴はない。砥石を借りにやれば、此方に來て研げと云ふ。薪割を貸せと言へば此方へ來て割れとぬかす。彼奴ほど割詰な奴は無い。さりとは人を莫迦にする。何でも此方へ借りに來たらば、言返してやるべい。と思含んで居けるに、或時太郎左の處から人が來て、御無心ながら少しの内梯子を貸して下さりませと云うてくる、亭主聞きて、をゝお易い御用でござる、此方へ來て上らつしやいと言やれ。

元來類推を用ひやうと云ふ考へは、文字解釋一點張りよりは成程五十歩か百歩か進んで居るが、併しやはり法文がなくては解決出來ぬと云ふ舊來の考へ方に囚はれて居るのである。そこでさう法文其ものに執着せずに、法文がある場合にも根本の條理に遡それを批判し、法文がない場合には、強いて類推などを試みずに、直ちに條理即ち事物の本性に從つて問題を解決しやうとするのが、法律學の新しい傾向である。即ち社會現象としての『活きた法律』を摑まうと云ふ所謂『社會法學』の行き方であつて、誠にさうなくてはならぬ所、行き詰つたと思はれた法律學の新生面がこゝに開ける次第だが、扨てこの社會現象の現實的觀察が中々以て容易な事ではない。此觀察が皮相淺薄で、次の話の樣な殿樣觀察では何にもならぬ。

さすがは

吝り大名の家老職の諫言もとゞかず、此上は鷹野をすゝめ百姓農作の體を御目にかけんと、まんまと鷹野に出でしがかねて百姓に農作かまひなしとふれたれば常の如くはたらき居けるを、殿さまつくづく御覽なされて、さて館へ歸りたまひしが、家老を早速めされ、けふ鷹野に出ではじめて百姓のていたらくを見るに、甚だ苦勞をなす事ぢや、われ是までの奢は只先非をくゆるなり、よく／＼百姓が困窮するかして、けふも一吹の煙草を二人して喫むで居た。

そ法律の社會學的研究の材料として統計が用ひられる。統計の效用は今更云ふまでもないが、併し統計も亦早呑込すると飛んだ間違が出來る。次の話は其邊の諷刺になりさうだ。

藪醫者

ある人名醫を尋ねて頼まんと、名高き醫者といふには殘らず尋ね行きて見るに、どの醫者の玄關にも二十人三十人或は五十人六十人づゝ幽靈が居て、此醫者故に非業の死を遂げしことの怨めしやと叫く。此人膽を潰し、さて〳〵醫者には上手の無いものといへる。是は何でも幽靈の少い程が名醫らんと、處々方々の醫者を尋ぬれども、ちつとかそつと幽靈の居ぬといふは無く、せん方つきたゞ處に、とある新道に怪しげな竹の打付格子をしつらへし醫者あり。此醫者の門口にばかりはたつた一人の幽靈が居る。かの男、これこそ誠の名醫なるべし、一人さらゐは匙違ひも有りさゝなもの、廣き世の中にたつた一人の幽靈の居るはこゝばかりと感心して、案内を請はんとしけるに、かの幽靈此男の袖を控へて、もし、およしなせえ。此醫者は昨日から始めて、昨夕私が殺されました。

要するに諸方面から材料を充分に蒐めねばならぬことだが、次の話の樣に其出所に權威がなくては役に立たない。

煙草入

古代の裂れにてたばこ入を數々こしらへ自慢を言ふものあり。望て見れば如何にもおもしろき裂あり。まづこの錦はいから結構なきれさうにムりまず、これはいつ時代のきれでムります。それは寶盛が直垂のきれさ。いかさ さうもムりませう、又この蝶のちら〳〵見えますは。それこそ曾我五郎が半切のきれでムな。シテまたこゝに白地に赤いところの見えまするは。そりや牛若の大口のきれ、其赤いところは齋垣のもやうのきれたのでムる。さてよつお集めなされました、如何してからは聚りました。みんな人形屋でもらつて來ました。

扨て法律の社會學的研究は、深くなくてはならぬこと勿論だが、廣く亘ることも亦大切だ。

雪

小僧よ、庭の雪はどれ程積つた。物さしでさして來い。小僧口小言を言ひ〳〵さして來る。どうだ知れたか。あい、深さは一尺と五寸、幅は知れませぬ。

此話の樣に、雪の深さが一尺五寸であることを究めると同時に、其下に深い大地があることを知らねばならぬが、更に廣々した雪の『幅』を見落さなくては、銀世界の美を語ることは出來ない。法律を法律として――殊に一民法典なら一民法典だけを――研究するのは比較的むづかしいことではないが、法律を社會現象とし、廣々と見渡さなくては法律の眞の美しさを知り

得ない。併しそれは中々以て『小僧の物さし』で即座に計れるやうな生やさしいことではないので氣永に研究を積んで結果を待たねばならぬ。斯う云ふ話がある。

金のなる樹

金のなる樹をもつて居ると聞いて智音の人來りて、根を分けて下されといろ／＼所望すれば、こなたは欲の深い人ゆへ進ぜ難し、たとへ金がなツても待兼て靑い内にむしらるゝであろといふた。

併し氣永にと云つてものんきになまけ／＼と云ふ意味でないこと云ふまでもない。不斷の努力を要する。

武士の嗜

ハイホウ／＼脇へよれ／＼といふ所を聞ぬふりで供を割るゆへ若黨が捕へて突戻せば惡口するゆへ、もう堪忍がと拔放す若黨の刀が赤錆ゆへ、旦那が見附て、平生の嗜がわるいから耻をかく、ドレ鎗をと取つて拔た所が同じく眞赤。コレ見ろ嗜でもこの通りだ。

此話を讀んで私自身『嗜んでもこの通』の感に堪へない。

斯くして氣永に併し骨折つて法律の研究を進めて行きたいと思ふが、其際常に人類共同生活圓滿の爲めと云ふ法律の根本目的を忘れたくない。法規の一部分に熱中して全局の大目的を忘れるのが、從來の法律學の陷り易かつた誤りであつて、我々法律家は次の二つの話の目的の忘却の馬鹿々々しさを笑ふ資格がないかも知れぬ。

大屋

貸店の札を子どもが惡戲にはがす。度々に及べば、大屋との案じを付けて厚板に貸店と書いて釘にて丈夫に打附け是なら二、三年はこらへる。

走くら

どろばう命限りと逃るを跡から韋駄天で追かける。十四五町かけければ互ひに息きれ傍なる茶屋へかけ寄つてものをもいはず二人ながら水をのみて休むサア／＼よくば逃ろ、おッかけやう。

『かける』と云へばも一つ二つ面白い話がある。

かける名人

追かける名人あり。ある時盜人をおひかけゆく。むかうから友達來り、なんだ／＼。どろぼうを追かける。その泥坊はどれだ。アレあとから來る。

馬ぎらひ

遠乘のお供を仕れと度々の御意、此度はさら／＼臆病も押へられず、是非無く乘つて出るや否や、此馬車に驚いてむ

しやうに駈出す。久平死身になつて鞍坪へかぢり付いて行く向うへ、近付の男來かゝり、馬の上へ聲を懸けて、これは久平どの、何方へお出なされます。されば此分では何處へ行かうも知れませぬ。

此第一話は頗る從來の法律學殊に我國の法律學に當てつけがましい。法律學は一面に於て確かにエライ發達をした。餘り發達し過ぎて眞の法律——即ち我々の社會の我々の法律——を遙か後ろに追越してしまつた形である。そして法律家は、第二話の下手な馬乘りの樣に、所謂『論理法學』『概念法學』の馬に任せて飛ばして行くが、『此分では何處へ行かうとも知れませぬ』と悲鳴をあげる有樣ではあるまいか。否、悲鳴をあげればまだよいが、あつぱれ馬の名人と得意になられては始末が惡い。

扨て最後を斯ふ云ふ話で結びたい。

ぶせう

田舍親仁都會へ出ての歸るさ、風呂敷包をせおひ懷手して堤づたひに來るに、甚空腹になりければ、包の中の握り飯出して喰はんと思へども、折角懷手して居るにそれも面倒と思ひ居る向ふより、これも空腹らしき男、菅笠をかぶり大きな口をあいて來りしかば、さだめて飢じき故ならんと思ひ　モシ旅のお方、わしの包を下して握り飯を出し、ソシテ口へ入れて下さらば、御禮心にあなたにも一ツ二ツは上げませうがといへば、たび人、そんな手間があるくらひならこの笠の紐をむすびます。

此話はかなり有名な話と謂ふが、笑話としての價値は兎も角、實に現在の社會狀態の諷諭として適切ではあるまいか、何だか物足らぬ空腹な樣な、そしてどこか笠の紐が緩んだ樣な氣持がする。其空腹を充たすべき握飯は背負つて居るし、笠の紐は手近にぶら下つて居るが、誰もぶせうで握飯を取出し紐を結び直す一擧手一投足をしない。法律學についても正に其通りだ。我々法律家たるもの、口をあいて懷手をして居ないで、現實の握飯で概念の空腹を充たし、法律と云ふ我等の笠がグラ〱せぬ樣に條理の紐を引締めずばなるまい。

詩二篇

石原純

海

一時間まへに陽が沈むで。
ヴィーナスが右手に寶玉のやうなひかりを
しづかな波のうへに落としてゐます。
この弓なりのいりうみのまんなかには
きらきらとしろい光りがきらめいて、
けふむゆかの月が
そのうへにあさやかにかゝつてゐます。

人工的な町のひかりを離れて
くらい海濱の渚へと私は歩むで來たのでした。

さくさくと深い濱の砂が
私のげたを埋めやうとします。
潮のひいてゆくあとの
くろく濕つた平砂の
しつとりとした軟らかいこころもちを
私はじつと體感して
この夜のおほうみに向つてゐるのです。
ああ、なんといふおほきな自然のすがたでせう。

私の背後をおほきく包むだ大地が
くろい岬のかげを
兩側から突き出してゐます。
ひつそりしたこのあたりの光景のなかに
ひとり倦むことを知らないで
潮の響がゆつたりと操返してゐます。

あかばむだ三つ四つの漁船の火が

うごくかと見えて、またいつまでも
おなじ遠方に停滞してゐるではありませんか
私の眼にはそのさゝやかなまたゝきも
すべての意志を超越した悠劫の
ひかりのやうにうつるのです。

左り手の水平線に小さく浮いてゐる
一つのくろい島蔭から
にはかにほとほとと音たてゝ、
發動機船があらはれて來ました。
はるけくも導かれてゐた私のこゝろが
ふとよび戻されて
いま浸つてゐる久遠の世界のなかに
須臾(しゆゆ)な現實さを
みなぎらずやうに思はれるのでした。

私のあしもとへも

潮がだいぶ近くさしよせて來ました。

初夏

いつも初夏(しよか)の陽(ひ)のかゞやく新綠の葉かげにたつと、
私はあのあるぶすの聳ゆるくにの
うつくしいみづうみの畔りの
かすたにいのこんもりした並樹を幻覺します。

軟らかいしなやかな廣葉のかさなり合つた
その並樹のかげの街路椅子にすわつて、
しろ煉瓦のいへのならむでゐる
山腹(さんぷく)のみどりの膚をながめながら
よそながらの藝術をあぢはふやうな
その淡い感觸を

たよりないところの
なぐさみにも想ひ描くのです。

すがすがしいよそほひをした東歐生れのひとりの女が
やはり冥想的なもののさびたかほで
そのとき私のそばに腰かけます。
すつきりとしたせいの高い
沈默なすがたがいひ知れぬさびしさを
私のたましひに與へます。

氷雪を頂いたあのたかい山脈の影像が、
またあをあをとかゞやく綠樹の背景が
悠久にしてまた倏忽な自然のすがたを
私にひそかにさゝやくのでした。
おそらくは、彼女の孤獨なこゝろにも
彼女の常住する悲哀と鄕愁とを忘れさせて、
この慰心の環境に

ひた觸れさせずにはおかなかつたことでせう。

しかし、しかしこれはひとつの幻覺です。
私はいまむしろひたすらな現實を趁うて
溫國のあかるい新綠のもとに力づよく息づきます。

人間の交渉の
あのゆるなやましさをあゆみ超えて、
その奥ぶかい究みにもとめられる
親しい切實さを直感します。
生き〱とした細胞液のみなぎつてゐる
新綠の葉が
私の思想の背景としてよりは、より近く
そのまゝに私の心になるのです。

「大臣待遇」セン・カタヤマ

堺　利　彦

一　自傳と晩年の光

ブルジョア通信の報ずる所に依れば、片山潜君は目下、モスコウに於ける第三インタナショナル本部の執行委員として『：……』を受け、『世界的大人物』の一人として『五大强國』の一たる日本を代表してゐるのだそうだ。

丁度この時、改造社から片山君の『自傳』が發行された。『自傳』は同君の『生立ち』から、『印刷職工時代』『豪酒時代』等を經て、アメリカに於ける大學生活時代に及び、更に『十三年振の歸朝』『社會生活の序三分』を叙し、日本に於ける最初の勞働運動に着手した所まで書いてある。『自傳』の編者石垣氏の言葉を借れば、此の『自傳』は『誇張したり紛飾したりする樣なことなく、眞面目に眞實を眞實として書いてる所に價値と面白味が見出される』のであつて、殊に『生立ち』の記事には『氏の淳朴な性質と眞摯な個性が、よく現はされて』居り、『自ら一個の俗人と稱する氏が』『明治四十五年東京電車從業者のストライキに關連して收監された折に、獄中で起稿した』『少年時代の追憶』で、『純眞な自然の姿を讃美した一つの詩篇とも見るべきものである。』

私が初めて片山君と交つたのは、此の『自傳』の第二卷の初に書かるべき時代で、同君の勞働運動が漸く社會主義運動に進んだ所であつた。日本に於ける社會主義運動は、片山君と安部磯雄君とに依つて起されたと云ふべきで、それ以前のはホンの先き走りに過ぎない。現に私なども、殆んど全く二君に導かれて此の運動に入つたわけである。私は先頃も一度本誌上に、日本社會民主黨創立者六人の事を書きかけた事があるが、其の時にも云つた通り、其の六人の中、木下尚江、西川光二郎、河上淸の三氏は變節して去り、幸德秋水はあゝいふわけで刑死し、安部氏は退きもしないが進みもせずに居るのに反し、獨り我が片山君のみが『……』を以て其の晩年を飾つてゐるのは、

如何にも面白い成行である。勿論『……』が面白いのではない。只そういふブルジョアの評語をさせるに至つた、同君の現在に於ける重要な地位が面白いのである。

片山君は安政六年の生れだから、今年は既に六十七歳の高齢である。此の事實は、『自傳』の記事に依つて初めて私に知られたもので、實はそれほどの年とは思ひも寄らなかつたのである。私が彼れの四回目の渡米を送つた時(即ち私が最後に彼れを見た時)は、大正三年であつて其の時には彼が稍や失意の境遇であつたに係はらず、少年以來の『辛苦艱難』に鍛ひあげた頑健な體が、まだ〱大いに用ゐるに足る事を示してゐた。前後八年を經過した今日、七十に近い彼が如何なる風貌を示してゐるかを想像するのは、私として誠に深い興味を感ずる事である。

二　伯林の一角をかすめた慧星

或人の私に傳へてくれた消息に依ると、アメリカからモスコウに行つてゐるヘイウツドなどは、もう大ぶんヨボ〱の氣味が見えるが、片山さんはどうして、まだ中々元氣なものだといふ。更にそれを裏書するのは、曾つて本誌に載せられた、富永カンテンスキーの通信である。カンテンスキー曰く「十一月六日の夜、中米から露西亞へ、伯林の一角をかすめて行かうとする慧星を見た。實際に私達は片山潛氏の事を考へると、ラジウムの燃え輝くを想ふ。露西亞に居た頃、大庭氏に聞かされた材料から想像して、齒の抜け落ちた老衰した片山さんを想像してゐた。それが遇つて見て全く此豫想を裏切られた氣がした。……「改造」に掲載された木版の肖像畫は可なり片山氏の線と感じを出して居た。だが更に血色の勝れた何だか淺褐色の感じを持つた紳士だ。黒縁の圓形の眼鏡の下から惑星のやうに鋭い瞳が對手の腹の中を射るやうに思ふ。とても本國に働いてゐる此の年輩の日本人には見られさうにもない强さと生氣が横溢して居る。…………すると片山さんは、……「君は駄目だね」と强く短かく一言して、稍や怒氣を含んだ唇を一文字に結んでしまつた。それに片山さんは浴後だつたので、額には汗が滲み、頭からは湯氣が立つて居たものだ。……再三ならず死を決した私も斯う云ふ恐ろしい人格に出合つては全く駄目だ。それに部屋には火氣が絶えて居たのと夏服を着て居たのとで、思はず身震ひを初めた。だが誤解と知れると、片山さんの態度は急に親切になつた。「私の云ふまでもなく、其れに日本人だから日本のために盡しませうよ」といふ一句を話の至る所に挾む。何だか片山さんの人格そのもののやうな言葉だ。……」

得意の片山君が志を忘れて氣を吐く光景が想像される。私は其の嬉しさの餘り、此の一節をこゝに引用する事を禁じ得ないのである。以下、片山君について私の思ひだす事共を少しばかり書きつける。『自傳』の讀者も必ず興味をもつて讀んで與れるだらうし、又もし之がモスコウで片山君の目に觸れる機會を持つならば、必ず彼れの微笑を買ひ得る事を信ずる。

三　幸德秋水の評語

先づ幸德秋水が片山君を評した言葉を紹介する。これは明治三十六年十一月の週刊平民新聞第三號の『同志の面影』の摘錄である。

▲年齡は四十五六、五分刈の頭、薄痘痕の顏、短かい鬚、古い背廣を纏ふた中背の身軀、全體に鍜鐵の如く引締つた風采を一見すれば、何人も君が幼年から今日迄で、如何に浮世の浪風と手痛き戰ひを續けたか、如何に多くの苛酷な迫害に堪へ來つたか、如何に苦痛の勞働に服して來たかといふ經歷を、髣髴として讀み得ることが出來るであらう。

▲此の鐵の如く鍜へられた身軀には、同じく鐵の如き心腸を包んで居る、若し夫れ此の鐵の白熱以上に熱せられたる時んば、其の火花は常に君の舌から、君の筆から縱横に亂れ飛んで、當る可らざる勢である。

▲米國の勞働會で、腕一本、裸一貫で遣り通して來た君は今も猶腕一本、裸一貫で、遣り通し、如何なる妨害痛苦をも物ともせずに進み行く、意思の鞏固なのと精神の强いのは驚くばかりで、親からの仕送りで學問した生白いハイカラなどの、夢にも想像せられぬ所である。

▲君の精通する所は經濟學、社會學、歷史である、而も君は決して學者として立たないで、常に勞働者の代表者を以て自ら居る、君の態度も其の生活も全く規律あり品格ある文明的勞働者のそれである、家に在つては多くの書籍圖書の狼藉たる中で、兀々として筆を取り、併つて倦怠の色を現はさぬ、否な一時寸時も働かずには居られぬかのやうに思はれる、外に出ては、予は一回も君が人力車に乘たのを見ない。

(當時は、まだ電車の出來はじめで、片山君の滅多に人力車に乘らないのが、一つの特色として目立つほどであつた。)

四　演說と文章

その頃、我黨の演說會は隨分頻繁に開かれたもので、毎月大演說會が一回、小演說會が數回、お極まりで開催された。主なる辯士の顏觸は片山、安部、木下、幸德、西川であつたが、片

山君は蓋し其の中で一番はえない演說者であつた。『君の演說は決して草案を作らない、否な多忙なる君はソンナ時間の餘裕を有せぬ、其時と場所とに應じて直ちに平生腦裡に有り餘る意見を、率直に露骨に、少しも巧みを弄しないで演說する、演說するといふよりも意見の方が滾々と湧出るのであるそして聽衆をして其熱心と眞摯の氣に打たれしめる』と秋水は右の『面影』の中に評してゐる。

木下の花やかさ、安部の品よさ、幸德の凄さ、西川の强さに比べると、片山君の演說は寧ろ平凡であつた。然し彼が方言まじりに、握りこぶしを前方へ突きだし突きだしして、『率直』な『露骨』なブツキラボウな言葉を投げつけた時には、强い感動を聽衆に與へずには置かなかつた。『米國あたりでは……』といふ彼れの口癖が、よく同志間の笑ひ話の種になつてゐた。『片山さんの演說は世界周遊演說だ』と西川君などは、よく冗談を云つてゐた。アメリカの話が出たかと思ふと、直ちにヨーロツパの話に轉じ、それかと思ふと忽ち北海道の話が出た、大阪の話が出る、九州の話が出た、先から先きに止め處がないといふ調子であつた。要するに、筋の立つた、論理の整然とした所はないが、力と熱との自然に發露した、そして折々は喧嘩腰の、勞働者らしい演說であつた。演說振りは殊に彼れの得意とする所で、二三の同志と共に殆んど日本全國を廻り盡したかと思はれる。

彼れの文章も亦た彼れの演說と似たものであつた。そして文章には演說ほどの修練が積まれてゐなかつた。英文は寧ろ日本文よりも自由であつた。然し『自傳』の文章が頗る自然の妙味を出してゐるのは、或は獄中に於ける、或はアメリカの放浪中に於ける、切實な情緒の現はれだからであらう。

五　國際社會黨大會の日露握手

彼れの生涯中、現在の『……』を除いて、最も得意であつたらうと想像される、アムステルダムの國際社會黨大會に出席した事である。其の時は丁度日露戰爭の最中であつたが、彼は我々日本の同志を代表して、アメリカからヨーロツパに渡り大會の壇上に於いてロシヤ社會黨の長老プレハノフと儀式的の握手を爲し、それに依つて、兩國のブルジョア階級が互に砲火を交へてゐる間に、兩國のプロレタリヤが提携團結する事を象徵したのであつた。

その時の彼れの通信には斯う書いてある。『十四日に大會は開かれ、和蘭の社會主義者ファン・コール氏會長となり、露國の同志プレハノフ氏及び小生は副會長に擧げられ申候。新聞紙上

にて御覧下された通り、會長の演説ありたる後、小生も一場の演説を試み申候。會長が日露のことに論及したる後、プレハノフ氏と小生が演壇に立ちて握手せし時には滿場喝采にて、實に壯觀を呈し申候。同日午後は他の同志と共に公園に於て演説仕り候』その後、彼れの作つたパンフレット『萬國社會黨』の中には、右の大會出席の事を記して、『是れ實に予が畢生の光榮とする所なり』と書いてあつた、と記憶する。今や、プレハノフは既に失意の中に逝き、其政敵たるレーニン派がソヴイエツト政府を作り、そして片山君がそこに『……』を受けてゐるのは、我々としても誠に今昔の感に堪へない事態である。

六　廢刊式の演説、夫人の死

片山君は（以上の記事からでも見られる通り）一般に剛健な粗野な、時としては無性な人として認められてゐたが、一面には又、非常に涙もろい所があつた。

明治四十一年、我々が日刊平民新聞を起した時、日本の社會黨も遂に日刊新聞を持つ事が出來たと云ふので、有らゆる同志は一齊に希望の目を輝かしてゐた。然るに其の希望の焦點たる日刊は、政府の壓迫と財政の窮迫との爲、僅かに三四個月で亡びてしまつた。その時、我々は悲壯な凄慘な氣持に溢れて、廢刊式を擧行した。社の樓上の編輯室の机の上に、大きな鉢が二つ並べられて、それに握飯と澤庵とが山のように盛りあげられた。そして四五十人の同志が其まわりに立つたりシヤガんだりして、片手に澤庵を摘み、片手で握り飯を頬ばつた。そして其の間に多くの同志が代る代る熱烈な演説をやつた。片山君は社外から我々を助けてゐたのだが、此の廢刊式に列席して最も悲壯な演説をやつた。そして演説の終りごろになつて、謂ゆる感極まつて兩眼からボロ〳〵涙をこぼし聲が喉につまつてしまつた。座は粛然として皆うなだれてしまつた。遂には啜り泣をはじめた者さへあつた。

それより少し前の事であつたが、片山君の奥さんが子供を二人殘して亡くなつた。私は或日その見舞に行つた。丁度外には誰も居ないで、片山君は獨りで椽側に腰かけてゐたが、私が見舞の言葉を述べると、彼はその素樸な顔に一點飾りけのない悲痛の色を浮べて、深い深い失望の語氣を漏らし、今にも涙がその顔に傳はりそうに見えてゐた。そんな場合に情を矯める武士流の習慣を持つてゐた私には、寧ろ意外に思はれる位であつたが、そこに彼れの眞面目が露出したのであつた。

曾て西川君が片山君の事を評して、あゝ人は栗のようだと云つた。その意味は斯うであつた。中には甘い實があるが、澁皮だ

の、厚い皮だのに包まれて、更にその上をイガで包まれてゐるのだから、誰も容易に其の甘い實に接する事が出來ない。片山君と交つて面白くない感じを持つ人が少なくないが、それはイガに刺されたり、厚い皮や澁皮に接しただけで、其の中の甘い實に接しない人なのだと。私は此の喩へを成程と感じた。

前記の『面影』の中に、秋水は更に斯う書いてゐる。『今年の夏、君は夫人が逝去して間もなく四國九州の遊説に出かけ、歸京後幾許もなく、又北海道の旅に出で、此程漸く歸京した、其間家には母を失つたばかりの五つと三つの可愛らしい幼兒が數月間、雇婆を相手にして父の歸りを待ちわびて居た、……………。』

七　『モグル』と『ガタ』

それから後の事であつたらうと思ふが、或日私は何かの用事で片山君を三崎町のキングスレー館に訪問した。此キングスレー館の事は『自傳』にも書いてあるが、階下は小いさな幼稚園になつてゐて、二階だけが住居になつてゐた。私の行つた時、片山君は階下の臺所の板の間に立つてゐた。私は何げなく玄關に上つて行くと、彼は『ヤアちよつと失敬』と云つたまゝで、臺所から出て來ようともしなかつた。見ると彼は、窓の下の鍋に向つて、立ちながら茶漬をザブ〳〵とやつてゐるのであつた。或は水漬であつたかも知れない。これはアメリカ生活の習慣からすれば別段不思議でもないのだらうが、當時の私の目には少し異樣に映じた。兎にかく彼の生活はさういふ風であつた。

彼は無趣味であつた。無器用であつた。無愛嬌であつた。頑固でもあり、偏屈でもあつた。彼れの下に集まつてゐた若い連中などは、彼れの事を『モグル』と仇名して居つた。『潛』の字を『ヒソム』と讀む代りに、わざとさう讀んだのであつた。別に『ガタ』といふ仇名もあつた。『片』を濁らせた所に、多少の惡口的滑稽味を持たせたのであつた。

彼れの二度目の奥さんには私も每度會つたが、誠に温厚な、そして美しい婦人であつた。粗野な片山君にはチョット似合のわるい位の人柄であつた。その奥さんに出來た子も、誠に可愛らしい、目の涼しい娘さんであつた。私は今、その母子の運命も、先の奥さんの男の子の事も、全く知らない。只だ先の奥さんの娘さんが、片山安子といふダンスの名人になつてゐる事だけを聞き知つてゐる。

片山君の今のロシヤ生活が如何に愉快であり滿足であるにせよ、家庭的の意味に於いて多大の寂寞がある事は、想像に餘りがある。

八　思想的態度の變遷

片山君は最初ドイツ流の社會民主々義を取つてゐた。イギリスからケヤ・ハーデーが來た時、片山君の立場は正にそれと一致してゐた。日本社會黨の間に左翼と右翼との爭ひを生じた時、片山君は其の右翼の代表者であつた。我々の間に謂ゆる『分派爭ひ』の續いた間、私は片山君と對抗する立場に在つた。從つて一時は多少、感情の疎隔した場合もあつた。

私が千葉の監獄から出て來た時、片山君は電車ストライキの煽動者として收監されてゐた。彼が千葉監獄から出獄した時、私は彼を迎へに行つた。大逆事件は一時全く我々の運動を中絶させたが、それと同時に從來の『分派爭ひ』をも帳消しにしてくれた。私は其の後また片山君と交る事が出來た。彼が稍や失意の感を抱いて最後にアメリカに行つた時、私はそれを横濱に送つた。

其の後、アメリカに於ける片山君の態度は段々左傾した。そして遂に今日の立場に歸着した。老いるに從つて右傾するのが世間の通例であるのに、片山君は獨り其の例外を示してゐる。私は此の日本社會主義の大先輩、大長老の、晩年の榮えに對して、無限の歡喜を感ずるものである。『自傳』の第二卷以下が早く欲しい。

文藝管見（六）

里見弴

第四章　内容と表現

第四節　内容

文藝の「内容」が、私の謂ふところの、人の裡の「己」に相當するものであることは、既に述べた通りだ。姑くも、繰り返して云へば、先天のもの、みづ子の魂的のもの、それが「他」を攝取し攝取して、肥え太つたところのもので、細い意味が失はれて了ひさうな言葉だけれど、ひと口に云つて了へば、「人格」だが、それの大小高下によつて、作品の内容的價値は定るのだ。

玆で、いや〳〵ながら使つて了つた「人格」と云ふ言葉が、或は持ち來すであらうところの誤解を除き、且は私の云はんとする意味を、更にはつきりさせるために、少しく話を横道に逸らさなければならないが、「人格が立派だ」と云ふことを、たゞ謹嚴端正な、四角四面な、所謂道學者然とした人物と釋られては困る。さうなると、餘りに後天の、致養的要素が多くはいり込みすぎる。「人」の條で詳しく述べた通り、もと〳〵「己」と「他」とを區別するのが無理で、どこからどこまでを、「己」と呼び、それ以外を「他」と名づけると云つた風に、確然たる區劃がたてられるわけのものではないが、たゞ「己」的傾向の要素と、「他」的傾向の要素とを認めて、（それは私の主觀で、決して客觀的存在を主張するのではない）假に姑く二分しての話だから、玆に「人格」なら「人格」と云ふ言葉を撰んで、その二つの傾向を併せ含んだ意味に通用させればそれでいゝわけだけれど、私のうけるその言葉の感じでは、いま云ふ如く、餘り

に後天の、教養的な、即「他」的な意味が多すぎるやうに思はれるのだ。勿論、それが間違ひであることは知れ切つた話で、「人格」と云ふ言葉には、先天の、みつ子の魂的な、即「己」的要素が十分に含まれてゐるのが、その本來の意味でなければならない筈だけれど、世間普通に、氣輕く用ゐられる場合、つい前に云つたやうな感じに流れ易いところから、立派な人格、と云へば、すぐ「修養ある士」が思ひ描かれることになるのだらう。そこで、茲では、素質、教養、相伴つて立派な人を思ひ描くやうに、餘計なことながら、特に御注意を願つて置く次第だ。

そこで、「人格が作品の内容だ」と、誰でもが云ふ口の、ごく平凡な言葉を云ひ切るまでに、私は實際、嘘のやうに永い間、神經衰弱の患者のやうに迷ひ易く、遅疑し、躊躇し、時には全く當のつかない暗闇に鎖されて了つたりして來たのだ。それは、私が觀て、人として輕蔑したいやうな作家で、立派な作品を創つてゐる例が、あとから／＼と現はれて來ては、私の堅りかける信念を、例へば海岸で、慰みに築いた砂の提防を、打ち寄せる波が　つて行くやうに、ひとたまりもなく崩して了ふからだつた。さう云ふ例は、ちかづきの小説家にも、畫家にもあつた。また外國人ではダヌンチオ、オスカア・ワイルドなどが、大した理由もなしに、私には、さう云ふ感じで考へられる例になつてゐた。ところが、それらの例が、だん／＼に私から消えて行きだした。と云ふのは、さう云ふ場合の私は、二つの點のどちらかで、必ず誤算としてゐたことを發見するやうになつたのだ。「二つの點で」と云ふ一つには、輕蔑すべからざる人格を、淺墓にも、安く値づけて觀誤つてゐた場合、他の一つは、さしたるものでもないのを、非常に立派な作品のやうに、買ひ被りに觀誤つてゐた場合、或は、兩方の觀方が、ともに間違つてゐた場合、必ずこの三つのうちだつた。と云つて、總ての例が、この方定式によつて片ぱしから綺麗に解決し盡された、と云ふわけではない。まだ未解決の分もあるが、それは私に、その人を、或はその作品を、正しい値に於て觀るだけの眼力がない故だと思ふやうになつてゐる。かう云ふ概念的な、すなはち危險な推理を敢てするに至つたには、然し、たゞ他人の觀察だけではない。自分のことを、――殊に多少とも自ら矜持するところある點に就て語るのは、いかゞかと思はれるけれど、この推理が、私にとつてさほど危險に感じられないと云ふ意味を述べるためには、歩みは遅いながらも、私の人格的發達が、世評の如何に拘らず、漸次作品をよい方

へ導いてゐる、との信念が生じ、その根蒂の上に、前に云つた他人の觀察が積り重つて、かくは考へさせるのだ、と、不遜を省ず、露骨に云つて了はなければならないのだ。

いま私は、少しの曖昧もなしに、「人格が作品の內容である」ことを信じ、且つ稱へる。何年來の迷ひが晴れて、正直に云へば、――すなはち愚かしく聞えることを厭はずに云へば、誠にいゝ心持である。

問題が近よつた序だから觸れるのだが、谷崎潤一郎氏の考へ方だ。論文でも感想文でもない「小說」のなかゝら、或る思想を引出し、勝手にそれを作者の固持するものと看做して、作者相手にかれこれ云ふのだから、もとより亂暴きはまつた話で、正當な仕方でないのは承知してゐるけれど、そこは平常の知遇に免じて貰ふとして、ほかにも一二あつたと思ふが、代表的には「金と銀」に看られる思想、――人格陋劣な藝術家でも、正しい人物である藝術家を、作品の上で、凌駕して行ける、藝術の世界では、人格の高下などは問題ではない、と云ふやうな考へ方だ。これは、本當に「と云ふやうな考へ方」で、作品としては、そこにいろ／＼と微妙な入組があつて、かう概念的に、而も安ツぽく摘み出されては、きつと谷崎氏も不愉快だらうと察しるが、まあ苦笑ひで讀んで貰ひたい。一體この思想は、どつちかと云へば舊式だ。昔の名人上手に遺されてゐる逸話などによくあるやつで、甚五郎が實生活上の薄馬鹿で、どう云ふヘマを演じたとか、ベルレーヌが稚兒さんを騷いだとか、東西古……今はあまり聞かないが、兎に角さう云ふ話は澤山のこつてゐる。やまと新聞だつたかに連載され、後に三冊本になつて出た「名人奇人」などを讀むと中々面白いのがあるが、忘れツぽい私は、いま例を擧げやうとして考へても、一つも出て來ないけれど、藝術など云ふ言葉の出來ない前には、名人氣質と云ふやつで、とかく人物と作品とが飛び離れてゐる具合を珍重したものらしい。珍重したればこそ、無理に名人にもつて行つてなすりつけたやうな怪しい逸話も大ぶん遺つてゐるのだらうが、つまり「人格が作品の內容だ」などゝ云ふ、きまりきつた、考へやうによつては打算的とも云へる思想では面白味がないので、「藝道ばかりはまた別でして」と、一種別世界のことに考へて置きたかつたに違ひない。その方が慥に詩味がある、ロマンテイツクだ、いかにも「藝道」を談じるに適はしい趣が湛ふ。また實際に於ても、天才は氣違だと云ふくらゐだし、「藝術家」などゝ御大相に云

はれもしず、大して金にもならなかつた時代に、一意藝道にいそしんで、後世に謳はれるほどの名人上手になるくらゐな人物なら、多少とも風變り(エクセントリツク)だつたらうとも思はれる。ところで、唯物史觀的な今の時代では、小說家などの仕事は、事務だ、營業だ、――いゝ惡いは問はないとして、またその天禀(りん)も別として、かう云つた考へ方を臆面もなく發表した新時代の代表者は、恐らく菊池寬氏だらう。これは然し、前時代の氣質(かたぎ)に對する反動と看て看られないことはない。その芽は、既に十年も前に、俺が小說を書くのは、女郎が客をとり、俥夫が車を引く氣持と少しも變つたものではない、などゝ放語した正宗白鳥氏にきざしてゐる。そのまた十年も前に、戀をするのは、鼻をかむと同じやうなことだ、どつちも紙が要ると云へば更にいゝ、と云ふやうなぶちこはしを云つた齋藤綠雨氏がゐる。戀にしても、「この道ばかりは格別」と云はれて來たものだが、とかくその「別もの」扱ひが氣に食はない時世が來たのだ。戀が鼻をかむくらゐのことになり、小說家の仕事が俥夫同樣の有樣となり、それから上は云はずもがな、中產階級までが癪の種となつて來たからには、行くところまで行つて、「別もの」全滅、萬里寸草なく、一度さばさばと、赤土の大平地になるのもいゝかも知れない。――それからそれへと、益々脫線して了つたが、藝術家が風變りな性分であることに少しの支障(さしつかへ)もなく、隨つて、奇行狂態を演じようとも一向かまつた話ではない。私などは、自分の常識的なのに、むしろ業(わざ)を煮してゐるくらゐだが、「風變り(エクセントリツク)」と云ふことは、時に不道德ではあらうとも、無道念と云ふことにはならない。かう云つて來ると、今度は、道德と云ふ言葉、道念と云ふ言葉に、いま私が託してゐる內容を述べなければならないことになる。茲に使つた「道德」は、謂ふところの道德を指すので、世間並の、あゝはしろ、かうはするな、と云やつ、それにはいくら觸れても構はない、と云ふほどの意味だ。次に「道念」とは、求道の念で、迷ひつゝあらうとも、虛無に考へやうとも、死に角目を瞑(つぶ)るまでは、己の生きて行く道を求める念だ。そこには、「みつ子の魂」もあり、同時に今日(こんにち)の「生活」を成すところの思想もなければならない。さう云ふものなしで、――空々寂々、醉生夢死の間から、決して立派な藝術が生れようとは思はれない。谷崎氏の所謂「金」が、空々寂々な人物として描かれてゐるとは云はないが、あゝ云ふ作は、惡くすると、「よき藝術家たらんとするには、須く陋劣な人格者たるべし」と云ふ宣傳のやうに、若い人々のあたまに響かない

とも限らない。あの作が雜誌に出た當時の老婆心が、そして作者に對する非難の心持が、何年か經つての今、ふとした隙間からこみ上げて來たまでのことだ。作の動機としては、作家素質論傾向の氣持が、一番に動いてゐたことは解つてゐ、その點、いつぞや菊池氏の作家凡庸論に對して一矢を報ゐた私として、不贊成などのあらう筈はないのだが、どうかすると私は、柄にもなく社會經綸家的な、世のために憂へるやうな根性が出るとみえて、そんなことがいまだ氣に懸つてゐた次第だ。とんだ引き合に出された谷崎氏にこそいゝ迷惑だが、こゝまで讀んだら、氏はきつと噴き出されたに違ひないから、それでまアまけといて貰はふ。

　要するに私は、「人格」―でもなんでも、この場合に適合しさうな言葉なら、他のどれとでも、いつなん時でも置き換へるに躊躇しはしないが、假に人格として、そこに素質と教養とが、同じほどの重さで、分量で考へられてゐなければ氣がすまないのだ。だから、相手が素質論を固持するならば、私はむきになつて努力、勉勵の肝要なことを說くし、同時にまた、どんな凡庸な人間でも勉强次第で出來るものゝやうに論じる人があると、とんでもない話だ、と云ふ意氣込で駁論を持ち出さずにはゐられないのだ。

　解り切つた話で、立派な藝術を目安にして云ふならば、素質でも、教養でも、立派であるほどがいゝにきまつてゐる。立派な「人格」から、立派な藝術が生れることは、更に喋々の言を費すに及ばないところだ。

（この節　未完）

（今月は家庭に取込があつて時間が得られず、長く書けなかつた。その上あたまも悪く、脱線から脱線に終つた。來月こそ「内容論」の本旨にはいる）

愛すればこそ

谷崎潤一郎作

◇四六版◇定價壹圓六拾錢
◇最上製◇　送料拾七錢

崇高なる藝術品に打たれる時、私達は最上の喜悅
と滿足とを覺ゆる。「愛すればこそ」の題目は早くも

谷崎る

志賀直哉著

小説 壽々

秋の澄み渡つた朝空の如き透明な筆の持主である作者は何と云つても現代小説界の大巨匠であり、そして最高權威である。日本の藝術を語るものは先づ第一に氏のしみ〴〵した作品を味ふべきである。そしてそこに眞の藝術は存在し、そしてそこに藝術の殿堂はある。

四版　定價貳圓八十錢　送料十七錢

野上彌生子著

小説 小説六つ

女流作家も多い、しかし野上夫人に比すれば總べての作家は果して比較になるだらうか「本書は實に夫人が半生涯に於て發表せる粹中の粹たる六篇を抽出したる名著である、その作風の堅實にして一句、一字も忽にせず堂々として眞摯の風に滿つることは論ずるまでもない。

三版　定價貳圓五十錢　送料十六錢

東京市芝愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

世界的三選手の競技觀

技術上より見たる英米の庭球

熊谷一彌

緒言

歐洲に於ける庭球の覇者として從來より誇り今も尚ウインブルドンの光榮ある永き歴史を有する英國の庭球と新興國にて旭日の勢力を以て何物を征服せずは止まない慨のある米國のそれと對照して見ると自ら國民性の現れが庭球と云ふ單なる戸外運動裏に現れて居る。即ち前者の保守的と後者の突進的との相違が、打球それ自身に誰にでも分る樣に明白な處が頗る面白い。

英國の狀態

元來英國の國技はクリツケツトとテニスだと稱せられ約十五年前までは世界の覇者を以て任じ他の追從を許さなかつたのであつた。當時彼の有名なドハチー兄弟の名は雷の如くに四隣を震憾せしめ彼等の向ふ處敵なく歐洲大陸は全く猛虎の群羊に臨むが如く米國に亘りては全米の選手權も立どころに彼等の掌中に歸すると云ふ風で何處の國も英國に向つては齒の立つ者なく獨り雄名を恣にして居た。實に英國の最も利益とする處は天與の恩惠であつて夏暑からず去りとて冬も少時期の間濃霧に惱さるゝの外はテニスに不可能の程寒くもなく練習は殆ど一年を通じて出來得る之は其發達の如何に重大なる影響を與ふる物であつて其例は現に米國太平洋岸(加州)より名手續出するのに見ても分る、此他に他國の持つて居らぬ得點を有する、抑も所謂、テニスはローンテニスであつて習慣上大きな仕合は芝生で行はれるの常であるが、通常此芝生を完全に育てるのには尠からぬ手數と費用とを要する然るに英國では地味の工合上か氣候上か此の芝生が容易に成育し然も嚴冬尚青々として居る是は實に驚く

可き事で且つローンテニスマンに取つて是位利益するものはないのである。米國に於ては芝生のコートはシカゴ以東に限られ而も期間は六月より九月迄で甚だ短日月の間のみ使用に堪へる、太平洋岸の名手が東方に行つて芝生のコートに慣れる迄は三年を經過しなければ物にならぬと云はれて居る程に芝生のコートの存否はテニスのゲームの向上に關係がある英國の對岸の佛蘭西の選手中には技倆上時に英國の選手を凌ぐ者も間々輩出したけれども英國に來ると何時も成績が擧らないのは佛蘭西に芝生のコートがない爲めが有力な原因の一である。此利益を獨占して居る英國が古來覇權を占めて居た事は怪むに足らない。

以上の事由の本に英國がテニスの發達に對して他國の有せざる天惠の保有に依り久しく事實上の覇權を掌握して居たのであるが世の中の事物は之をして永久に優者の地位を保たしむるには移り行く時勢の變遷に應じて先きから先きにと舊を捨てゝ新を採り以て之に適應せしめるのが最も大切である。

英國人は此重大な事實に對して毫も他を顧慮しなかつたのは今日の衰態を招いた一大原因である過渡期に於けるテニス術には其處に幾分の改良す可き點が隱れて居りそは經驗と科學的研究に依つて早晩發見せられ其の發見の曉には一大改革の起る可き事を英國人は從前の自負心の惡癖を發揮して徒に舊習を遵奉し其の日暮しに安んじて居たのである。

米國の狀態

米國のテニスは最初英國を通じて輸入され千九百年にデュソイト、デービス氏が國際仕合に彼の有名なデービスカップを提供した頃より俄然として勃興した、然し其頃は未だ當の敵たる英國に對し形の上丈けは伯仲之成績であつたとしても常に押され氣味でドハチー兄弟に向つては殆ど顏色なき有樣であつた。

然し乍ら米國は新興國で進取的で彼等の所有する、理想は萬の物に世界一を冠するに在る、ドハチー兄弟に蹂躪されたのは却つて其后に於ける奮起を促す絕好之刺激劑となつた、ドハチー兄弟が天下無敵之勢で右往左往する間に隱忍自重して其の間何等かの新機軸の發見に努めた、果然其努力の効果は空しからず今日も尙最良の武器として傳れるアメリカンザーヴイス、故にアメリカンプレイと稱するネツトゲームの新戰法が現れた、此新戰法の發見が完成せられると共に彼我の地位は漸く顚倒し今日に於ては既に數段之相違を成績上に示して居るのである、

前述之如く米國には芝生のコートを造るに適應した場所はシカゴ以東の然も紐育ボストン間の小地方に限られて居る其他の地方は氣候風土の關係上芝が適當に發育しないので土のコートか或はアスフワルト、セメント等で造つてある、又芝生の成育

する場所でも十一月から三月頃迄は寒氣の爲め葉が枯れ四月から五月中は若芽の爲めに使用に堪へないで練習の出來得る期間は僅々四五ケ月位である、かゝる不便を忍ばなければならない、米國人は尠からざるハンデキャップを負ふて居るのにも拘らず今日では遠く英國人を追ひ拔いた事が既に一つ奇蹟であらねばならぬ、彼等が理想に達する迄の倦まざる努力が遂には天の利に打ち勝つて奮鬪の力が如何に怖る可きものなるか、吾々に敎へて與れたのである。

ゲームの相違と其關係

然らば英國人のゲームの仕方と米國人のそれとを比較して其得失を述べて見るに英國人は所謂バックコートゲームと稱せらる、常にサーヴィスラインを界として其後方に立つて球を扱ふゲームを行ふ、此種のゲームを行ふ時は相手の打つた球が飛んで來る迄には通常十二三間位は距離がある爲めに多少の餘裕が出來て割合に容易に打ち還せる傾向あり且つ餘程際どい處を狙はない限りは一點を取るのに成功しない、故に此種のゲームを行ひ慣れた人は自ら輕々しき失策をせず敵の失策を待つ策戰に出るのが通例である、且つゲーム中の大部分がバックコートに立つて居る關係上體力を要する事も比較的に少く年齡に影響を與ふる事が鮮い英國人としては年齡上に於けるテニス全盛期が三十五六より六七迄の間にあるのは一に此間の消息を物語るものに外ならない、即ち廿代では未だ若く經驗も不足勝ちで從つて失策多くゲームに於て自滅之場合多き爲め成績思はしくなく三十を越してより熟練と經驗に依つて漸く全盛期に達する傾向があるのである現に英國人でテニスマンとして有名な人々の內ゴアー、リチー等四十五才以上で然も中々劣へず今も尙若い人々の間に這入つて相當に名聲を保つて居る又パーク・キングスコット・ライセットの如き英國屈指のプレヤーの年齡は凡そ三十五才以上である。そして個人としての選手之壽命は長い、是は年齡の如何が餘り關係しないからである、米國人のネットゲームは英國人の如き消極的なゲームに正反對して全然積極的で徹頭徹尾攻勢に出る、乃ち機會有る毎に猶豫を與へずネット際迄、前進して負けるか勝つかの一六勝負を試みるのである、而して之を試みるには身體を輕快に動かし頭腦を鋭敏に働かす必要あり且つバックコートのゲームに比して數倍の努力を要する。此の二つの條件を基としてネットプレイの可能不可能が論ぜらる可きものなる以上は第一に年齡は比較的若く耐久力に富む者を肝要とする、故に、熟練や經驗には富んで居ても年齡の多い人は最後迄の持續力に缺點を有する爲め其方より破綻を發するので結局ネットプレヤーの全盛期はバックコートプレヤーより

年齢の點で若くならざるを得ない、故に米國の一流のプレヤーの全盛期は二十六才より二十九才迄と云ふ統計になつて居る。

米國では三十五六才以上で一流の人も稀にはあるが其人はネツトプレイを得意としない人でネツトプレイの得意な人で三十四五才以上の人は殆ど無いのを見ても分る。故に一人の全盛期が僅に二三年に過ぎないと云ふ事は如何にネツトゲーム其物が劇烈で人體が久しく之に耐ふる事が出來ないかが分る、米國の一流のプレヤーの顔觸れは之が爲めに常に新陳代謝が速に行はれて居る。

ゲームの得失

然らば此處に問題となるのは前述のアメリカ人のネツトゲームとイギリス人のバツクコートゲームとの得失である。此の問題は是迄再三ならず理論家に依つて議論せられた處で之を詳細に專門的に述べるのは長くなるので省略するが要之コートの種類プレヤーの體格を考慮した上で論ず可きもので今假に英米人の平均體格に芝生のコートを標準として觀察する時は現今の定論としてはネツトゲームの方が明かにバツクコートゲームに優つて居るのである、卽ち自己の守る可きコートの廣さ長さ六間半の幅四間半に對する平均身長五呎十吋の體格を有するプレヤーがネツトプレーをするに適當の場所たるネツトより約九呎離れたコートの幅の中央に立つて防げばバツクコートより打ち出す球の狙ふ點は兩端に於て約九呎宛及び頭上を越すロツビングでそれ丈けではバツクコートに立つて戰ふ方が有利だと思はれる。然し相手にネツトに立たれる折にはバツクコートより平凡な球を打てば必ず逆襲を受ける怖れある爲め常に速球か或は相手のラケツトの屆かない樣な球を打たなければならない、從つて斯る際どい球には失策が伴ふの常であるが故に此處に初めてネツトゲームに有利な事を認められる。特にネツトに立つて打つ人はボレーが得意である爲めにボレーで打ち返された球は早く元に還つて來て次の球を打つ備へを立て直す暇が少い場合が多くなり。相手に乘せらるゝ機會を與へると共に失策も之に正比例するのである。

バツクコートに立つ人はコートを守るに就ては全能力を有し殊にロツビングに對しては何等痛痒を感じない得點があるけれども前述の如く相手がネツトに出て來た場合に憂慮と焦燥と時間に制限されるの結果として現今の理論にてはネツトゲームはバツクコートゲームに優ると云ふ事に定まつて居る。

以上の理論は大體のもので殊に英米人の體格を標準としたのであるから日本人に之を全然適用する事は出來ない且つ土のコートに於ける理論は別のものとして考へなければならぬ、

之に就ては又詳述す可き他日の機會を待つて居る、

乃ち今日の理論に於てはネツトゲームはバツクコートゲームに勝つて居る事は明白で此原則に支配せらるゝの結果が英米兩國のプレヤーの技術に隔りを生じた一の重大なる原因である。

今日で英國一流のプレヤー位の技術を有して居る米國のプレヤーの數は三十指に餘る位であるのに見ても略其間の消息を知り得るのである。

結論

唯此處に注意す可きは前述の如くゲームの方法の相違に依つて以上の區別が出來た事は明白であるがネツトゲームは積極的であるが爲めに身心を劇しく使用する結果プレヤーとしての壽命が短かい、如何に丈夫な人でも久しきに耐ふる事が出來ない米國人の偉大な、體格を以てしても全盛期は二三年を出ない位である。之に反してバツクコートプレヤーの生命は比較的長く十年十五年と續いて居る人も少くはない、卽ち餘裕を以て戰ひ身心を勞する事が少いからである。

然しながら現今の理論ではネツトゲームの方が遙に有利であるから若し世界に覇を占むるには是非共ネツトゲームを奬勵し且つ多くの後繼者を養成して壽命短かきプレヤーの繁き新陳代謝に應ずるの準備しなければならない、現に米國の一般は此の主義を遵奉して怠りないのである。されば今後米國が覇權を他に奪はるゝ場合は必ずや此點に缺陷する時である事を疑はない、

英國は現在の處如何にしても昔の全盛を恢復する氣運が見えない。英國人が持ち前の自負心を除去して新戰法を研究し併せて後進の養成、庭球技の奬勵に全力を注ぐに至るは遠き將來の事でそれ迄は米國の足本にも及ばざるのみならず他の後進國にも壓倒せらるゝに至るであらう、

キューをとりて

山田浩司

何しろ私が當初獨逸に行つたのは別に撞球の修業に出掛けたのではなく、中學を出ると直ぐ、天晴學問で身を立てる積りで幼少の時分から不絶御世話になつてる帝大の松岡博士のお伴をして醫學專攻を目的に伯林へ行つたのでした。所が遠い異國の大都に友達は少し、淋しくはあり、所在なさによく同地のカフエーエクイタブルに遊びに行つたのです。伯林第一流の球突場で四十臺許りの球臺が竝んで上品な紳士が熱心な態度で研究に余念なしといふ有樣に私は唯もう何とはなしに學校の事などは忘れて球の方に引き付けられて仕舞つたのです。而して玆で初めて大キナ球臺、小サナ球、而してボークライン——つまり世界的撞球術の洗禮を受けたのでした。

ボークラインは初めての事ではあり、工合の惡い事夥しい、平均三、四點位の出來で二、三流所の素人にさへよく負けた。併し一年程熱心に稽古して居る裡に段々上手になつて、もうアマチユアーには私に勝つ者がない樣になつた。斯樣調子で進步が比較的急速であつたので、カフエー、エクイタブルの主人をはじめ、球で出來た大勢の紳士の後援で、當時伯林へ來て居たオーストリアの選手ブルノー氏と、試合をする事になつたのです。同氏の六千點に對する私の四千點、卽ち二千點のハンデキヤツプを貰つたのでしたが幸に五千點に對する私の得點四千點で勝利を得ました。何しろ年はイカズ初めての時の舞臺、後援して吳れるのも外國人なれば、相手は更に外國の選手、頼にスガル・キユー一本、心細い事甚だしい、頭はクラ〳〵する。目は眩む、體は固くなる、手先は慄える、徹頭徹尾夢中で試合を終つたのした、平均點は九點でした。

それから二ケ月許りしてブルノー氏から、復仇戰を申込んで來ました、前とおなじ條件で。

併し此時に大分自信も出來、試合の經驗も得たので割合に虛心平氣で相手になる事が出來ました、平均點十二點かで對勝ちをしました。

夫れから更に半年、ミツチリ練習の末、伯耳義へ撞球旅行に出掛け、居る事半歲、再び伯林へ歸來すると球友の熱心な盡力で、佛國の有名なアドリチヤン氏と試合をする事になりました、ア氏の三千點に對して私の二千五百點卽ち五百點のハンデキヤツプを貰つたのでしたが、試合の結果は四ツ違の對勝ちで私の勝利に歸しました平均點二十點。

此時分私の進步は面白い程急速で自分も夢中になれば、後援者も乘氣になつて熱心に奔走してくれました、而してアドリチヤン氏を負かして半年目に世界選手の一人佛國のカシニヨル氏と顏が合う事になりました。勿論此時は對の勝負で結果は一勝

一敗、平均は二十七點でした。

此カシニョル氏は實に近代の名人で、其上品な而して美妙な突き振りに恐く世界に其比を見ないでせう。私はマツセー、ナアーシング等に於て殊に此人の感化を受けましたが。惜しい事に數年前物故しました。

カシニョル氏と對等の勝負をするといふ事はやがて全歐羅巴に敵がないといふ事で、虚名、實力に伴はない譏りは免れませんでしたが、獨乙、佛蘭西、伯耳義等の後援者の慫慂と米國よりの丁重な招聘で終に一千九百十二年の冬紐育に於て開會せらるゝ、世界選手大會に赴く事になりました。

日本を出てから已に年、多少は技術の進歩もあり、試合の經驗も得て所謂舞臺度胸も大分出來て來たのですが、何分今迄の獨乙、佛蘭西若しくは歐羅巴の選手大會と違つて世界の大舞臺ではあり、殊に私を後援して呉れるのは獨乙を中心として佛蘭西邊の熱心家で、或意味に於ては米國に取られた世界選手權を歐洲を代表して取り返しに行くのですから、此勝負如何しても負けられぬと、行李匆々大西洋を横斷したのです。

船の上では勿論練習は出來ず、一層神經が過敏になつて、九日の航海に殆ど食事の味を覺へなかつた樣な狀態でした。

紐育へ初めて着いた旅客は皆あの高ゐ建物、忙し相に奔走する群集に氣を呑まれるのですが、私もオツトリと落ち着いた歐羅巴から此豆を煎る樣な混雜の裡に投げ込まれて全く憫然して仕舞ました、船酔のヒヨロ〳〵する足を踏み締め〳〵世界第一の球具製造會社、ブランズキツクに來て見ると試合は兩三日中に初まるといふ、練習する遑もあらばこそやがて當日は來ました。

讀者の多數は御存知でせう、其時分米國第一流のホテルであつたアスターの大廣間二階、三階を打ち拔ゐて芝居でも何でも出來る、裝飾善美を盡した晴の舞臺、夜會服の貴女、紳士が大勢見物の裡で、當時の選手ハツピー氏をはじめ、世界的選手十人許りが互に顏を合せたのでした。胸の踴るを不覺なんて微溫的な形容詞では迚も當時の私の熱情を表す事は出來ませんでした。航海前後の事情からして私の其時分の心理狀態は一に同情ある誌友諸氏の御推察に任せます。

さて試合が始まると私は又不鮮驚かされた、第一に氣候の相違で第二は會場の相違即ち廣大な高ゐ天井の下で突くのと狹い(比較的)所で突くのとは全く感じが違う、第三に而して一番私の驚いたのは球の突き方の歐羅巴と米國では非常に異う事であつた、言ひ換へれば、活潑な、勇敢な、更に粗野なヤンキー氣質を其撞球に目出したのでした。

人の氣質は撞球によく表れる。私は試合の第一日に米國の國民性を見せ付けられた。

歐羅巴の撞球は上品である、閑雅である、美妙は其特點である。米國のは朴訥である。勇敢である、强健即ち勝負に勝つといふ事に全力を濺ぐ、極端な例ではあるが佛のカシニヨルと米のスロツソンの技を對照してもよく判る。一週間の試合に龍虎相搏ち戰雲濛々の裡からハツピーが最良の成績で選手權を出て來た私は第二席であつた全勝は一人もなく、ハツピーも私との試合に唯一の黒星を取つたのでした、選手權爭奪に私は見事に失敗した而しハツピーと最初の組合せに勝つた事は私には十分の報酬であつた、夫が私が獨乙で佛のカシニヨルと突いた少し前、カシニヨルはハツピィに負けて世界の選手權を米國に運び去られたのであつたから私は少くとも敵に一太刀怨んだ譯であつた、此大會に私が獨乙から來たといふ事と英語が下手で獨乙語を交ぜて談をして居たなどの事情で在米獨乙人の聲援は異郷に放浪して居た私には涙の出る程嬉しかつた、而して玆に初めて在米日本人の後援も出來て私は非常に心丈夫になつた、

其後伯林へ歸つて獨乙の選手ブルノーと試合に二回共大勝した而して獨乙に於ける選手試合の最高球は其時私しが出した、二百九十五といふのが今尙記錄になつて居る。

佛國のカシニヨルとの決勝戰をするとの事で準備中此程の歐洲の大戰が勃發したので終に同氏の生前決勝の機會がなくなつて仕舞つた。

爾來十餘年、私は米國で或る時はハツピーと或はシエーフアーと或時はサツトンと、及び其他の人と全米國を模範仕合に遍歷する事十余回、面白い事、可笑い事種々の經驗を得ましたが余り長くなりますから機を見て更に書かして頂きます。

私の最高球は四百四十七でモーニングスターと模範試合の時に出來ました、世界のトーナメント即ち世界選手權爭奪試合の記錄は三百八十五でコツクランが持つて居ます。

アルペングリユウエン

槇有恒

フアウルホルンの頂の靜寂の中に自分は立つてゐた。そは或る七月のゆふべ、果てもなく重疊の山岳は展開してゐる。足もとの小花の咲き亂れた豐かな色彩が次第に夢のやうに遠ざかると、深い溪谷を隔てゝ廣大な、雪の群峯が斜陽を浴みて白光と化してゐた。壯嚴なそのベルナーオーバーランドを望んで私は新らたなる驚異を眞面に感じて立たなければならなかつた。

怒れるシュレックホルン、その右に峻秀孤高のフインスターーアールホルン。それより袖を連ねた氷の斷崖のフイシヤーヘルナー。そして力の張り切つたアイガーの直截的な岩壁、又左端にはヴエッターホルンの純白のピラミッドが豪魁な赤褐色の懸崖の上に輝く。アイガーの蔭に半ばかくれたメンヒの巨大なる圓頭、そして其の奥に端麗な姿のユングフラウ。それより遠く奥へ奥へと櫛齒の如く峨々たる連峯が碧い空に踊り狂ふ。而も凡ゆる鋭き交錯の山峻は影と光とを鮮かに彫り出してゐる。

下のグリンデルヴアルトの谷は然し既に蔭深く憩ふて、ヴエルヴエットの如く見ゆる唐檜の森の邊りより藍色の炊煙が立ち昇つてゐた。

さらに西を眺める。空一帶に純藍の色は褪せて黄色の薄暮が次第に擴つて行く。震ふ透明なエーテルが澀味の多い矛ない空氣の流れに蔽はれてゐる。そして其色彩が山や谷やまたその間の野を一樣になすつて各自の特性を消して緩やかな大きな、うねりを見せてゐる。尤もその、うねりの中のゼギスヘルナーにしてもレーデルグラートにしても皆オーバーランドに較べては千五百米以上も低い。只ニーセンの美しい尖頭丈けが默然として强い自我を表はしてゐる。ブリエンツの湖は空色を其儘に高して凝視してゐるやうに靜かだ。

その西のツーンの湖水は光を溢れるやうに反射して鏡の如く輝く。眼を遠くに運べば運ぶにつれて、起伏の全景は模糊として互ひに解け合ふてゐる。日光を浴みた山の蔭に在るブリエンツの村は湖水の口に嚴粛に休んでゐる。その村の邊りより、たそがれは徐ろに這ひ登つて山腹の森や牧場は其處此處に點在するシヤレ（小屋）などを灰白色の靜けさに圍つて終ふ。而してユラの緩るく打つた線に今しも眞紅の日輪が懸つた。

刻一刻と音も無く沈み入れば空に一段の光彩が發して一筋の黄金の雲が棚引く。何處ともなく遙かより小娘の歌がかすかに而も魂を捕はれたやうに漾ふて來ては又消える。

In Grindelwald den Glekchren by,
　Chund eis der Tod-Gottwilchen!
Hie wei mer o vergraben syn
Im Frythof bi der Chilchen.
O chlagid nid bin yser Lych!

Der einzig Ort ist d's Himmelrych,
Wa's ysereín no besser gfalld
Wan hie im schenen Gri:delwald!

歌は止んで靜かさに深み行く。私は再びベルナーオーバーランドの全景を見かへつた。

暗蔭き溪の彼方に、アイガーやシュレツクホルンや其他の連峯は薔薇色に彩られて、まざまざと浮び出でた。これこそ人の稱ふアルペングリトウエンである。岩壁も厚い層の積雪も頂も氷河も赫々として燃えた。そしてその輝きの失せた濃赤紫が一瞬毎に山巓へと昇つて行く。赤が褪せて紫が勝つ、只頂のみは焔と化してゐる。然しそれも暫時、最後の呼吸を引取る如く、谷からの暗さは鮮やかな命の彩を消して終つた。そしてその急激に變はりし氷雪の蒼白の姿よ。一時の前迄は映光に踊つて聳立の壯嚴と誇とを壇にせる幾十百の峯々は荒寥たる屍となつて薄暮と共に殘つた。生は去つて氷劫の沈默に歸へつた。而も再び峯々は、かすかなる微紅を帶びた。恰も愛人が其臨終に最後の笑みを浮ぶる如くに。かくて凡ては壯重な寂光の中に靜止した岩蔭の花も、樂しげに囀づる小鳥も、牧場の牛も、人も家に愁ひの平和に入つて只に飄々乎として寒風のみが山頂に叫ぶ。

私の胸に名なき不安が忍び入つた。そして古い傷手の如く痛む。

移り行く森羅萬象

映光は、あはたゞしくも去つて消えた。その映光の如くに人々も凡ての都も去つて行つた。そして自分も果た宇宙そのものも又滅び行かんとしてゐるのであらう。然るに生きとして生ける者の熱に病む者の渴するが如くに追求する命の泉は那邊に在らうぞ。幸福がそれであらうか。享樂が夫れであらうか。それ等は的なき放浪の求め得ぬ幻影ではなからうか。希望と云ふ。そも亦、その幻影の幻影にはあらざるか。宇宙の本然は一切の上により高く聳えてゐるのではなからうか。晝と夜とを超越するところ。幸と不幸との喜びと嘆きとより自由なるところ。凡ての人間的なる羈絆より解脫するところ。其處こそ吾等の精靈の神と均しき凱歌を擧ぐるところではなからうか。

Go on to Death, you who must die!
Go and suffer, you who must suffer! you do not live to be happy. You live to fulfil my Law. Suffer; die. But be what you must be—a Man.

Romain Rolland.

私は山頂の小屋に入つた。暖いストーブの周りに人々が集つて興じ合つてゐた。そして星多い深い黒い空は無限に打ち續いて、萬能の造物主に對する永久の讚歌を唱ふ。　完

婦人運動の新傾向

無産婦人の運動へ

平林初之輔

男子と女子との間に生理的の區別があることは醫學博士の議論をまつまでもなく誰にでもわかることとである。けれども、この生理的相違——例へば女子の腦髓が何瓦輕いとか、女子の乳房や骨盤が發達してゐるとか其の他これに類似した細目をいくら列擧して見たところで、女子は男子の所有物でなければならぬとか男子の奴隷でなければならぬとかいふ結論がひとりでに生れて來るものではない。この種の議論は女子の現在の奴隷的境遇、若しくはかゝる境遇に女子を陷れてゐるところの現存制度を維持し、擁護する目的のために、ことさらに、支配階級によりて構へられた議論である。

舊思想家や御用學者は男子と女子との間に生理的或は心理的區別があることとさへ證明すれば、それで女子が男子に隷屬すべき理由の證明にもなるのだと考へてゐる。併しそれは支配者の論理であり、征服者の論理である。吾々は他の論理を採擇しなければならぬ。

今日の如き婦人運動、婦人の社會的解放運動は生理上の問題は全然無關係である。それは純然たる制度の問題である。生理的には何等の相違のない無産者が有産者に支配されてゐる事實を見てもそのことは明瞭である。吾々が支配者と被支配者との關係を先天的生理の問題や知能の問題として論ずるのは、既に支配者の戰術に一歩を讓つたものである。勞働者と官吏とに民法の試驗をして見て、官吏の方が答案が上出來であつたら、勞働者は『先天的』に官吏より知能の劣等なものだから、勞働者が官吏に支配されるのは當然であるといふのが支配階級の論理

である。女子は子供を生むために骨盤が大きく、乳房が大きいのだから女子は子さへ生んで育てればいゝといふのが征服者の論理である。吾々はそんな議論に耳をかたむけてはならぬ。よじその反對を證明して見たところで大したことではない。

ところが一頃はやつた所謂男女同權論其の他の新しい女の運動はこの程度の『自覺』から生じた運動である。これが『性的自覺』と稱せられるものである。制度はそのまゝにしてをいて、男女間には優劣はないといふやうな、それ自身に於て無意味な主張を大上段に振りかざした運動が、婦人參政運動、治安警察法改正運動として最近吾が國の表面にあらはれた婦人運動である。

男女間に優劣がないといふやうな主張は無意味だ。優劣を比較するには標準がなければならぬ。體力とか知力とか何か標準がなければならぬ。そして標準によりては男女間に著しい優劣のあるものがある。併しこの種の優劣が支配の是認にならぬと同樣に、この種の優劣の撤廢が支配の廢止にもならぬことはわかりきつてゐる。女子を男子の奴隷としてゐるのはかゝる優劣關係ではなく、父長的家族制度と私有財産とを根幹とする今日の社會秩序そのものなだ。この秩序の埒内で婦人解放の實をあげんとするのは、資本主義社會の內部で勞働者を解放せんとするのと同じく、到底成功する見込みのない、自分の影とかけつくらをするやうなものである。普通選擧で勞働者の自由が買へぬと同じやうに婦人參政權の獲得で婦人の自由は買へない。こゝに於て婦人運動と勞働運動とは、新しき社會秩序を眼ざして進まねばならぬといふ點に於て共通點がある。眞の婦人運動が無產婦人の運動でなければならず、更に無產階級運動そのものでなければならぬ理由はこゝにある。……………、…………のみが婦人問題を解決する實際上の力をもつてゐるのである。而して…………………する可能性を有するものは…………のみである。しかも新しい秩序は今日の秩序から必然に生れんとしてゐるのだ。

無產階級の社會秩序卽ちコミュニズムの社會に於ては家庭の團欒が破壞されると非難する人がある。併しながら大部分の家庭からその『團欒』を破壞したものは資本主義である。資本主義社會に於ける多數者卽ちプロレタリヤは團欒を樂しむべき家庭をもたぬ。封建時代に於ける人と人との間のセンチメンタルな關係を、露骨な現金關係に置きかへたものは資本主義に他ならぬのだ。家族制度の墓穴を掘るのは家族制度それ自身に外ならぬのだ。

アレキサンドラ・コロンタイは『共産主義と家庭』といふパンフレットに於て資本主義の家庭破壊の径路を次の如く語つてゐる。

『――吾々の見なれてゐるやうな家庭に於ては家計を維持し妻子を養つてゆくものは夫である。妻は家事並に子女の養育に従つてゐる。けれども、既に過去一世紀間に、資本主義が優勢で、工場及び、労働者を使役する其の他の資本家的企業の數が急速に増加してゐる凡ての國に於ては、かゝる慣習的の家庭の形態は次第に破壊されて行つた。家庭の慣習及び道徳は周圍の一般生活條件と同時に形成されつゝある。急速に家庭の慣習を變化するにあづかつて最も力のあつたものは疑ひもなく、賃傭労働婦人の一般的増加であつた。以前には男子ばかりが家庭の支持者であると考へられてゐた。ところが五六十年以來吾々はロシアに於て（他の國ではもつと早くから）資本家制度が婦人をして家庭外、戸外の仕事を求めるべく餘儀なくしたことを見た。

男子の賃銀は家族の必要を充すには不十分なので妻も賃銀労働をせねばならなくなり、母も工場事務所の門を叩かねばならなくなつた。而して労働婦人職業婦人の數は年と共に増加した。世界大戦前の統計によるとヨーロッパ及びアメリカに賃傭労働婦人の數が約六百萬に上り、戦時中にはこの數は頓に激増した。これ等婦人の大半は既婚者であるが、彼等の家庭生活がどんなものであるかは容易に推察できる――妻と母は屋外へ一日八時間――往復時間を入れると十時間労働に出てゐる家庭生活だ！家族は必然的に等閑視される。子女は母親の世話をうけずに成長じ、危険な街路へ出て一日の大部分を暮すのだ。――資本主義社會に於ては、婦人は三重の重荷を脊負はされてゐる。即ち男子と同じやうに働き、夫に事へ、子女の世話をしなければならぬのだ！』

これが、資本主義社會に於ける無産者の家庭なのだ。これがその破壊を惜しむに値ひする家庭だらうか。ブルジョアジイは、反動的國粋論者と聲を合せて美しき家族制度の保存を云々する。しかしながら『美しき家族制度』や團欒を楽しむべき『家庭』はブルジョアのみの専有物だ。プロレタリヤには舊い意味の家庭がない。それを壊したのは資本主義そのものに外ならぬのだ。

新しい家族關係、新しい男女關係は、一般的の新しい社會秩序と同様に今日の社會秩序から必然に生れるのである。それは復古的のものではなくて前進的のものである。資本主義によ

りて取りのぞかれたセンチメンタルな被物で家庭を再び包むのではなくして、新しい基礎の上に社會生活を築きあげるのである。新しい社會に於ては古い意味の家庭は古い諸制度と同樣にもう必要でなくなる。それどころか却つて障害になるのである。

此の新しい社會秩序に於て婦人は如何なる地位を占めるか、婦人の境遇に如何なる變化が起るか。

先づ第一に資本主義社會では一戸毎に別々に行はれてゐた臺所の仕事が主婦の手から社會の手に移される、勞働婦人は僅かばかりの餘暇を面倒な臺所仕事にさかなくてもすむやうになる洗濯だとか針仕事だとかいふこまごました仕事も同樣に社會の手で行はれるやうになる。これだけでも非常な時間の經濟だ。これまで百人の主婦をわずらはしてゐた仕事が十人足らずの手でできるやうになる。これは今日の社會のカフエや料理店や公衆食堂で吾々が現に目撃してゐる所だ。只だ今日では金持ちの人だけしか浴することの出來ない恩典が新しい秩序の下では凡ての人に及ぼされるといふだけだ。

次に子女の養育が社會の手に移される。これも左程驚くにあたらない。今日の資本主義社會に於ても、子女の教育は學校で行はれてゐる。新しい秩序はこれに一歩を進めるだけのことだ。

次に男女の社會的地位は全く平等になる。それは父長制度、私有財産制度の廢止と共にこれに基く男女間の不平等がのぞかれるからだ。妻の絶對無權利の服從を基礎とする夫婦關係は、双方共に自由獨立な、對等の權利と義務とを有する夫婦關係に置きかへられる。勞農ロシアの婚姻法や離婚法は既にこのことを實證してゐる。今日では對的空想としてのみ描かれてゐる自由戀愛が新しい社會では現實の男女關係となるのだ。

要するに、…………は今日の社會の一切の不合理をとりのぞき、既に人類全體の幸福を保障するものである。自由も平等も正義も愛も……………………吾々は現實のものとして語り得るのである。婦人問題の解決は即ちこの新しい………の樹立に外ならぬ。婦人運動の目標はこの…………に外ならぬ。

既にして婦人運動の目標が今日の社會秩序に代ふるに新しき社會秩序をもつてするにありとすれば、婦人運動がその効果を最も有効ならしむる方法は、無産階級大衆の運動と提携するより外にない。それがために婦人運動は、今日の如き階級對峙の社會に於ては無産婦人の運動となるより外に道はない。無産

婦人の階級的運動となつて婦人運動はゝじめて孤立した運動でなくなる。はじめて階級戰爭に於ける有力なる一勢力となり、新社會促進の一大動力となる。パンカーストが婦人參政運動から共產主義運動に加はつて萬國…………の先頭にたつに至つた徑路は、やがてブルジョ……………………示すものと言へるだらう。（六月十日夜）

現代婦人問題の意義

村松正俊

個人主義は一つの主義として成立し得ない。何となれば、主義は特殊的であつてそれが普遍化されやうとするところに存する。之に反して普遍的なるところのものをそのまま命題としたところで決して主義にはなり得ない。余が一個の人間であるとはいへる。しかし人間主義とはいへない。人間主義と名づける限り、これは特殊性を有してゐるべきである。この意味に於て個人主義もそれだけでは一主義となり得ないのである。それは個人とは結局あらゆる人間がその個を有するといふに止まるからである。主義としての個人主義は、それが個人を認めざるところ、我は個人の存せざるところから、個人を救ひ出すところに存してゐる。さうしてそれは正しく個人解放を意味するものである。

解放とは消極的である。それは團結主義と相對抗する。團體の名の下にあらゆる個人の自由の阻止されたのが個人主義を成立せしめる最要な原因であつた。生活は一つの種族の生活であるそれは個を認めないと共に、すべての生活の目標を團體即ちその一種族に求めてゐる。それが團體主義の主な支持點であるしかもそれが全然生活に即してゐる限り決して僞でない。それが自然生活の第一の目的なのである。ただ人間に意識生活の生じたことが不幸の源である。意識生活は自然生活から別にはなれて一つの生活の可能を數へた。ここに於て個の生活が初まるのである。さうして個人主義が自然生活に對しての主義として成立するに至つたのである。

意識生活は結局個人にかかる。これが個としての生活を知る

とき、少くとも「意識なき」團體主義に對して反抗し、それから自己を救ひ出さうとする努力を開始したとは、けだし當然の成り行きである團體が意識生活をするかしないかは姑らくおく。少くとも人間生活に於て古代の歴史は團體生活が個人の意識を無視してゐたことを教へてゐる。それは團體生活に意識があつてもなくても、個人に對しては同樣であつたのである。その故にその個人に對して交渉するところのない生活が、個人としての生活をはじめた個人にとつての最大の妨害となることは言をまたないであらう。その故に解放が叫ばれ、個人主義が主義として起るやうになつたのである。

しかしながら解放とは消極的な理想であり、個人主義とは元來主義として成立せるものであり、これはもしも團體生活が個人生活を認容するならば卽ち消滅せしむべき理想である。さうして人間生活が科學的に明にされると共に、個人主義の眼前が定まつて來また解放の範圍が限られて來た、解放は自由を求める。しかも自由はいづこにも存してゐない。ここに個人主義と自由主義と結局してその最後の逃場なる藝術、文學の世界に退いたのである。さうして現代の社會科學の示すところは、心理學に於て、生物學に於て、經濟學に於て社會學に於て、人間が團體としての生活に服すべく、さうしてそこには自由もなく、解放もないことを宣言したのである。それは、古代の社會科學なる哲學、政治學、倫理學の教へるところと正しき反對をなすものである。

ここに於て人間は、一方に於て個人主義を固執し、自由を要望すると共に、他方に於てそれの不可能を認めざるを得ず、團體生活、社會生活の成立を認めざるを得なくなつた。そこに現代意識生活に於ける種々なる問題が提出されてゐるのである。その解決はいかにされるのであるか。それは團體生活を正當に認めると共に、それの意味を個人主義的に變ぜしめることである。そこに團結の意味が古代と現代と大にことなるのが知れる國家のために個人をすてるか、個人のために國家をすてるかは古來の問題であつた。しかし意味をかく變ずることによつて、その疑問はすべてに消失したのである。卽ちこの時個人主義の發生を正當に理解すと共に、生活の本能としての團體生活を承認することによつて、團體の意味も、個人の意味もことごとく一元的に解決されるやうになつたのである。

現代婦人問題の主要點は疑もなく、最初の解放の段階であるこの時人間生活史に於て、すでに數百年前に解決されたことなのである。それは婦人の解放の外の何物でない。解放とは何の解放であるか。婦人が男性からの解放である。それは果してどれ

だけの意義をもつのであるか。

生活が全體であるとするならば、婦人も一個の個人としてはすでに個人主義の成立と共に、解放された譯である。しかしながら事實は決してさうでない。婦人は未だ個人としての意識生活を有してゐない。即ちそれは全としての生活展開の一部を占めることが出來なかつたのである。換言すれば婦人は未だ一個の個人としてまだ存在してゐなかつたのである。然らば今日に於て、時代遲れとはいひながら、それの解放の叫ばれるのもまた異とするに足りない。ただかかる意味に於てのみ婦人問題は決して今日の主要なる問題となり得ないのである。即ちそれは生活全體についてはすでに過去の事實であつて、今日の生活展開の上に何らの歸與するところがないからである。これが今日の問題となるためには單に今日の社會生活に加はることより外にないのである。否しざる限り、これはつひに婦人のみのことであり、同時に時代錯誤の問題として止まるのみである。

個人主義はこの最初の形に於ては、團體生活の破壞を目的にした、目的にしないまでの結果としてさうなつた。最初の團體生活はもとよりそれによつて破壞されるべきである。しかし現代の社會生活は最初の團體生活でない。團體生活に段階があるごとく個人主義にも段階があるべきである。最初の個人主義を今日の社會に移入することによつて、或は反つて社會の混亂を招くことがある故に婦人問題もそれの最初の個人主義的色調をとり去るべきである。

婦人問題が何故にかくも久しく最初の團體主義に固着し、今日に至つてはじめて最初の個人主義を求めようとするやうになつたのであるか。それは婦人が特に生殖生活と關係が深いからである。個人主義は生殖から反離する。男性は生殖生活以外に生活をもつ、これが意識生活である、婦人は生殖生活に生活を有してゐない。團體生活を維持するものは婦人であり、それに反逆するのは男子である。生活そのものからいへば男性は滅ぶべきものであり、女性が生活そのものの保持者である。それはしかし女性を社會生活に於ける優者の位置を占めさせはしない。却つて意識生活の發達に伴つて反對の現象を呈するのである。意識生活は生殖を否定する。さうして現代社會生活は、現代個人主義とひとしく意識生活の一表現である。しかも意識生活は必らず性慾生活に頼らなければ存在しない、さうして性慾生活は婦人の欲するところである。然らば團體主義が婦人によつて支持されてゐたのも無理はないと共に、あらゆる婦人問題もそこに根柢をおいて考察すべきである。それは生物學的見方でなければならない。

婦人の解放は承認すべきである。しかも一たび個人主義の時代が經過したる現代に於てそのままの形で再現されることは却つて生活展開の妨害となるものである。もしも女性が性慾生活に執るべきであり、さうして團體生活を支持すべきものであるならばそれは、速かに最初の個人主義をはなれなければならない。しかも生活全體が最初の團體主義をすててゐるがために、婦人と雖も最初の團體主義に固着してはならない。それは個人主義を建立してのち、新たなる美味に於ける社會生活に入るべきである。さうしない限り、現在に於ける婦人解放に何らの意義をもたないものとなると共に、生活全體に對してそれを混亂せしめるのみである。もし婦人問題をして有意義に徹底せしめ、その有するところの諸問題、即ち結婚、戀愛、參政權、等を正しく解決しようとするならば、直ちにその新たなる社會生活に入るべきである。これぞ婦人問題の主要なる解決の鍵である。

創造した愛

小牧近江

あなたはブルジョアの家庭に育つた。僕もブルジョアの家庭に生れた。そして、親たちはあなたと僕を結婚させやうとする。そうすれば一切が解決されるものと思つてゐるらしい。それは温い親心ではあるが、それは明かに間違つてゐる。それをふたりで證明しやう。

あなたと會ふまで僕は結婚といふことを深く考へたことはない。そんなものはどうでもよからうと思つて來た。僕は戀愛を否定した。それを信じ得るものは幸福だと思つて來た。その程度に結婚といふものを解釋してゐた。こんど話が持上つた時、あなたが、僕を多少理解されてゐることを聞いて、僕は一つ母をよろこばしてやらうと思ひ立つた。そして、單純にそれではと言ふ運びになつた。

僕は自分の思つてゐる當前のことを當然に言ふだけで、ちつとも自分の思想は危險でないと思つてゐる。あなたは、僕に、單國を愛するかあなたを愛するかと問はれる時、少くも僕は明白に即答し得る夫になりたい。あなたは、社會政策といふとは斷ら

しい貴婦人たちの言ふことで僕らの歩まうとする坂はもつとはげしい坂であることを理解された。で、僕らはこの結婚をふたりの意志のみで決したいことを申合せて別れた。

あなたは非常に緊張されてゐた樣子であつた。父はあなたにより以上の愛嬌を求めた理由がわかる。しかし、その際、愛嬌などの場合ではなかつた。二つの理性が對立してゐたと言つてもよかつた。僕らには愛の中には理性が存在せぬものだといふことを信ぜられない。あなたが初めて會つたのにかかわらず臆面もなくいろいろの質問をされたことを氣強く思つた。

父はあなたと僕の結婚によつて家庭上に不幸がもたらしはしないかと心配してゐる。その眞情を察してやつてもらひたい。親は自分の子どもを愛する。だから人の親に自分の子どものことで心配をかけさせたくない。

ふたりの結婚には何等ロマンチックなところがない。だから若いあなたは多少物足りなく感じらるるであらう。しかし、僕は結婚後の二人の幸福といふことを深く考へる。その時、世間は問題ではない。少くも二人の結婚は資本主義國家のために子どもを殺されぬ幸福を得たい。

……………

婦人の解放とは貴婦人の言ふことだ。あなたには思想のため、主義のためならば家庭を破壊する自由がある、そうしなければならない。

ブルジョアに生れたればこそ、僕らはブルジョアに反逆しなければならない。ブルジョア生活にはあまりに矛盾が多い。形式的結婚もその一つである。ふたりだけの意志で作つた新らしい家庭に矛盾の少ない生活を見出さう。そしてそれを僕たちふたりで創造した愛としやう。

小泉氏論文の正誤

前段所載山川氏の批評に答ふる文中一個所間違つたことを書いたのを取消し度い。それはリカルドオとマルクスとを比較した條下にある事である。即ちリカルドオの場合には利潤率平均の爲めに價格と價値とが一致するのに、マルクスの場合には利潤率平均の爲めに價格（生産價格）が價値から離反する、これが此二者の相違であると書いた迄は無事であつたが、たゞマルクスが氣になる事を云つて居ると云つて「樣々の生産部面の商品が、其價値にて賣られるとの假定は云ふ迄もなく、價値は價格が其周圍を旋廻する引力中心點であつて、此點に於て價格の騰落が平均せらるゝ事を意味するに過ぎぬ」と云ふ一句を、態々原文まで添へて引用したのは全く餘計な事であつた。此一句は氣にするには及ばないのである。マルクスは此場合利潤率の平均と云ふ事が行はれぬものとすればとして、議論をして居るので、玆に所謂價格は生産價格でなくて、市場價格であつた。これは前後の聯絡と切離して此一句を見た爲めに仕出來した間違で申譯はない。たゞ少許り辯解らしい事を書かして貰へば、これ丈けの事がある。それはマルクスも初めの頃はリカルドオ等と同樣に自由競爭利潤率平均の爲めに價格が價値（勞働量）に引着けられると考へて居たので、其の考へが後まで殘つて居て、上の引用句に現はれたのではないかと云ふ頭が私にあつた事である。即ち「賃勞働と資本」（カウツキイ版）の二二―三頁を見ると、價格が生産費以上に騰貴すれば、資本が其産業に流入し來つて價格を引下げ、價格が生産費以下に降れば其反對の事が行はれる、而して生産費を決定するものは勞働量があるとの意味が書いてあり、而して上の引用句に類似の句が盛にこれと關聯して用ゐられて居るのである。併し斯う云ふ事を書いても間違は依然として間違たることを改めるものではない。右の一點は何と評されても仕方がないのである。

超然内閣批判

加藤内閣に對して私の感じた事

堀江歸一

加藤内閣の成立したと云ふこと丶、閣員の顔觸れとは十一日の夜遲く、或る人から聞きましたが、之に對して私の先づ第一に感じたことは、日本は自分の屬して居る國でありながら、隨分變な國だと云ふ一事であります。何故に私が日本を變な國だと考へたかと云へば、

第一、世界の風潮が文化主義で國政を律しよう、平和政策で民生を進めようとして居る場合に、態々是等の主義政策に理解のない、少なくとも無理解と思はれる現役軍人を擔ぎ上げて内閣の首班とすること、

第二、唯從來貴族院に議席を持つばかりで、國民の前に政見を發表したことのないような人達を國務大臣に選叙して、閣員の椅子を充たし、殊に内閣と國民との間を没交渉にしたこと、

第三、原内閣成立の際には、始めて我が國政黨内閣が組織されたと云つて、滿足して居つた政友會が今度高橋内閣が沒落する場合には、政權の反對黨に移ることに對して、百方妨害を加へ、政權を邪道に導いたこと、

第四、立憲政治が標榜され、在野黨として從來政府反對の地位に立つ政黨がありながら、政權が其政黨に移らず、却つて前内閣の閣僚として、秕政の責を分擔す可き者の掌裡に歸したこと、

が現はれたからであります。

然し斯る奇怪なる現象の起つたことに就ても、其れ〴〵原因があります。今日の如き時代に、軍人が首相として内閣を組織

する、然も其軍人の政見や思想は國民に理解されて居らないと云ふのは、我國民の一部に依然として軍人尊崇の氣風があるからであります。加藤と云ふ人は日露戰爭の當時少將か大佐で、艦隊の參謀長を勤めて、世間に名を知られた人であります。今度加藤内閣の閣員と爲つた人々の經歷は餘り深く知りませんが、當時既に社會に於て相當の地步を占めて居つた人もありませう。今日は加藤と其れ等の人と地位が逆轉し、一方は首相で、他方は閣員と云ふに至つては、日本は何としても尙武國であり、軍人萬能國であると云ふ感を懷かざるを得ません。

憲政會の無力に至つては、沙汰の限りであります、又其不人望も驚くの外ありません。憲政會が憲政の逆轉に憤つて、擁護運動を起さうとしても、誰れも應じる者がないではありませんか。憲政會が在野黨として、民望を繋がうとするからには、何故モツト其大を成すことを工夫しなかつたであらうか、尾崎島田と云ふが如き、何と云つても第一流の人物殊に民衆の間に輿望ある人物を排斥して、顧みないと云ふ有樣であつては、憲政會自ら政權に遠ざかつたものではなからうか、憲政會の工夫す可き所でありませう。

憲政會の無氣力にも呆れますが、政友會の猾智を弄することにも驚きます。加藤が内閣を引受けさうにも爲いと分つた時に政友會の領袖等が斯くては政權が憲政會に移るかも知れないと恐れ出して、加藤に引受けを強要した態度は何たる醜態でありませうか、其の間に陰險なる術策の弄されたことは、幾何でありませうか。原は政友會は陰謀では倒れぬと揚言して居つたさうです。成る程陰謀では倒れなかつたが、陰謀で政權の讓渡しをした事實は明瞭であります。原も亦地下で我意を得たと云つて居りませう。

然し加藤内閣が成立したゞけでは、其功罪を斷ずるを得ない。此内閣は何事を爲すであらうか。私共の望む所は政友會内閣の秕政を片秕から除却することに外ならないが、新内閣の内田、山梨、大木が殘つて居る上に、首相自身が閣員であり、新閣僚は盡く御用黨たる研究會若しくは政友別働隊たる交友俱樂部の出身者であり、殊に援助と稱しつゝ、政友會が監視の眼を放つて居つては、秕政一新の如きは思ひも寄らぬことではなからうか。其れなら秕政一新は姑く措き、從來政友會の着眼しなかつた所に向つて、何か新施政を試みるとする、考の立て方に依つては、其道もあらうが、閣員中能く新思想を理解して、國民思潮の向ふ所を指導し得る人があるであらうか、過激社會思想取締法の制定を斷念する位が關の山位の所ではなからうか。然し若し加藤が日本海々戰當時に現はしたと稱される沈勇を外面に

現はし、政友會の首根ッ子を締め付けて、庶政を刷新する、綱紀を廓正したならば、加藤も亦一個の士人として見上げた者と云はれませう。司法權を活用したならば、政友會の横暴を制する位の事は出來さうに思はれます。高橋內閣は閣內不統一の責を負うて辭職したと自ら稱しますが、是れは非を飾る言であつて、政策に行詰つたのと、民望を失墜したのと、双方に責められて、倒れたことは疑なき所でありますから、政策刷新は當然の事であります。唯加藤や他の閣員に其れだけの能力があるかどうか疑問であつて、隨つて政友會に強請られて、利權を與へたり、施政を蹈襲したりして、纔に政友會の援助を受け、一時の安を偸まうとするのではありますまいか、是れは與味を將來に繋ぐ所であります。

日本で內閣が元老準元老と云ふ老人共の配慮を持たないで、組織されるのは、何時の事であらうか、世間が國務大臣と云ふ者をモット輕く見る、大臣に爲つた者も公共の奴僕になる精神を持つ、而して三十歳位の靑年が手輕に、又氣輕に大臣に爲ると云ふやうな時勢の來るのは、何時の事であらうか、大臣に爲ると、家族の寫眞から、日常の茶飯事まで新聞紙に掲載され、人々に噂される、日本は何としても立派な官權國であります。

只今夕刊(十二日)を見ると、加藤內閣の成立した報道を得て、株式市場は人氣鎭靜の趣きを呈したと云ふことである。是れは加藤內閣であれば、大體政友會の政策を蹈襲するものと見縊り、目先き何等の變化の生じないことを豫斷した結果であらう。然し目先き何等の變化を生じないと云ふことは、果して今日悲境に沈淪しつゝある經濟社會に早く恢復振興の機運を開く所以であらうか。私は現狀の無變化は即ち現狀の繼續を意味するものであつて、經濟社會全體の局面から考へて、利ありとするを得ない。消極政策で荒療治を施すことが却つて經濟社會の有利なる展開を期する道と考へられるのである。

政治現象に普遍の事實

長谷川如是閑

政治は理論に基かないで、實力に基くものであるとは、實際政治家や政治學者の能く口にする所であるが、これは丁度、世間の人が、自分達の地位は實力によつて得たのだと主張するやうなもので、その「實力」といふ言葉には脚註を必要とする。異常の小量を有するすべての人間が横綱になるとは定つて居らぬ、惡智慧を持つたすべての人が金持になるとも定つて居らぬ。まして社會的の種々ある制度や機關の出來上るについて、それを構成する個人なり集團なりの實力が何れ程働いてゐるかは甚だ問題なのである。

如何にも、政治の發生には、何等かの意味での實力を持つたものが、政治的勢力の基礎を爲したといふ事實がある。然しそこで「實力」といふのは、その政治的制度の構成の上にだけ働く力について云ふことであつて、云はゞその特殊の制度を作り上げる機械作用といふ意味のものである。言ひ換へれば、その政治組織を出來上らせるに有力であつたといふまでゞあつて譬へて云へば、或る家が金持ちになつたについて、その家長なり使用人なりが、その家を富ます爲めに有力に働いたといふことである。この場合に、その家を富ます爲めには、家長なり使用人が、無學であることを必要とし、破廉恥であることを必要とし、狡智であることを必要とし、又はその反對に一種の馬鹿であることを必要としたならば「實力」とは、彼等が無學、破廉耻、狡智、然らざれば馬鹿者であつたことを云ふのである。政治は、此意味に於て「實力」に據るといふのは事實である。

政治の發生に於て、又は一政治時期の段落に當つて、英雄、豪傑乃至悧巧者が現はれて、所謂實力を發揮したことは歴史の示す通りである。然し彼等が有したと云はれてゐるその「力」なるものは、全く彼等の活動する「政治」といふ範疇に於てゞあつて、人間的生活の上に、個人又は集團が有ち、又有たねばならないところの力ではない。云ひ換へれば、その「力」は「支配力」であつて「生活力」ではない。だから人間は、彼等の所

謂實力なしで生きて行ける場合によつては、なしの方が却つてよく生きて行ける。生活者と政治者との人間的沒交渉といふ現象——それは如何なる時代にも存した現象——はそこから起る。だから、今では堅實な生活を採らうとするものは政治を嫌ふ。これは、今ばかりではない。昔にもあり、太古にもあつた生活者の心理狀態である。

此事を考へてから、今の日本の政治狀態を見れば、「政治」といふことが、一般日本民族の頭の上の、高い〳〵空の上で、天國の芝居のやうに、人民と沒交渉に行はれてゐるのに何の不思議を感ずる必要はないのである。

政友會内閣とか憲政會内閣とかいふものが出來た時に、政治は人民の政治になつたと云はれた。すると忽ちにして、非人民的の官僚内閣が出來、今度も中間内閣とかいふものが出來た。「中間」とは、人民の政府と次の人民政府との間に、暫らく仲繼ぎに存在する政府といふ意味であるといふことだが、一體誰れの手品で、そんなものが出來たり潰ぶれたりするのであらうか。「元老」がそれをするといふ。元老は全く自分の思ひ付きから、茶室でも作る時のやうな氣分で、政府を作るのだらうか。然らば、千家流にするか遠州流にするかといふことを何うして定めるのだらうか。——そんなことは一切人民には判からない。若しわからないことはないといふ人があると、此度其の人は、人民の生活と沒交渉の仕事をしてゐる一種の人と即ち所謂政治人である。

政治の發生的事實によると、政治人は生活の體驗者であつた。生活の體驗者でない政治人が出來たのは、征服即政治といふ事實が出來上つて後のことである。即ち征服人即ち政治人といふ事實が成立したのである。而して此の事實が、その樣式に於て、今日まで引續いてゐるので、今日も亦、政治人は一種の征服者で——軍事上の意味の征服者でなくとも——從つて生活の體驗を離れてしまつてゐる人である。此度の政友會内閣も貴族院の人々によつて倒され、それと安協して新内閣が出來上つたといふことであるが、その倒した貴族院の人々は、多くは資本の利子や政治的手數料で生活してゐる人々で、生活の體驗によつてパンを得てゐる人達ではない。即ち多數人民の生活法と全く違つた生活の立場を採つてゐる人々である。——政友會内閣そのものだつて、その點で別段變つた所はなかつた——さういふ人々が、次第に人民の生活そのものゝ體驗による政治に推化しやうとしてその方向を採つたといふのが、所謂近代的の政治傾向なのであつて、各國ともそれによつて、たいしたことではなくとも、多少とも昔の征服人即政治人の組織を變へつゝ

進んで來たのである。けれども、それもその人々それ自體のうちから出た進化ではなく、彼等が迷惑とする生活者の大勢に支配されて已むを得ず取つた歩調であるから、出來得べくんば、あらゆる機會に於て、立ち停り、逆行するのである。ヨーロツパには、戰時に征服的行動の復活が極端に行はれた結果、その精力で、逆轉が流行したが、日本のは、必ずしもさういふ精力でもなく、在來の勢力の燃え殘りが焔を立てたに過ぎないであらう。

各國とも、所謂立憲的進行に多少の脫線ブリを示してゐないものはないが、日本のは、脫線と云はんよりは、これが却つてピツタリと軌道に合つた進行なのである。戰時中社會主義の勢力の甚しい勢で政治に侵入したのに脅かされたイタリーなどに、多少似た芝居が行はれてゐるらしく思はれるが、それでも流石に少しは違ふらしい。一番よく日本のそれに似て、さうして世界の「政治」的進行のフイルム式極端化を見せてゐるのは、例のヒユームの狀態であらう。フユームの憲法議會がヲボロ條約に從つて、多數を以てフユームの自由市なる決議をしてツアネラを首相に選擧したのは、イタリーも認めた所だつたが、フユームに居る例のダヌンチオの兵隊やイタリー軍隊組や又ファシスチの徒黨等は「公安委員會」たるものを設けて、その名稱と正反對に、市廳を兵隊で襲擊したが、市の警官に擊退されたので、此度は港に在つたイタリーの砲艦を奪ひ取つて、その大砲で市廳を砲擊したので、何等防禦のない市廳は、仕方なしに白旗を掲げた。するとダ軍とフア軍は市廳に進入して、或る士官は、ツエネラの額の所にピストルの筒口を押付けて、辭表に署名したと稱して、ツエネラも仕方なしに署名すると、此度はフユーム立退の覺書に署名させて、海上へ追ひ出してしまつた。飛んだ公安委員會もあつたものだ。ところがイタリー愛國連中に仲間割れが出來て、ダヌンチオ及イタリー軍隊組の兩軍隊派が一緒になつて、フアシスチ中心の公安委員會の計畫に反對して、又候軍隊を以て市廳を圍んで、今度は公安委員會を追ひ出して、自分達の頭目カブルナ大尉をデイクテターにした。

各國の政治現象を此フユーメのそれに似てゐるといつたら、多くの人は抗議を申出づるであらう。然し此のフユーメの現象が、決して政治現象そのものゝ基礎的性質と矛盾するものでないことは、各國の政治現象の歷史が明らかに示してゐることである。矛盾しないのみか、その事實がそのまゝ政治現象として歷史の頁に屢ゝ現はれてゐる。だから此の事實そのまゝでなくとも、此事實の基礎的性質をそのまゝに基礎的性質として、各

國の政治的權利の爭奪が行はれてゐることが考へられ、又事實の上に見出される。而してそれは過去の事實ではなく、今日の事實なのである。

フユーメに於けるダヌンチオ組といひイタリー軍隊組といひファシスチ組といひ、何れもそれはフエーメをイタリーのものにしやうとする連中で、フユーメ人にとつては國籍上外國に屬するものであるから、その人々の立場は比較的明瞭に區別される。いひ換へれば政治が人民の生活と沒交渉な階級的權利の爭奪の爲めに行はれてゐるといふ現象が比較的判然と觀取される。然し同じ現象は、同國人同士に於て在り得ることであり、亦現に在ることであるといふ事は、この現象の基礎的性質が、同民族中の階級的生活に於て常に現はれてゐることを見ることが出來れば、少しも疑ふ譯に行かないのである。

然し誤解されては困る。これは、合理的な政友會內閣が、不合理的の「力」で潰ぶされた、といふやうな事を云つてゐるのでは決してない。近代政府に現はれた所謂政黨は――政黨の名によつて政治的權力の破壞を企てる非政治團體は別として――決して、貴族や官僚の徒黨と本質的に差つたものでないことは、立憲政治に關する理論的幻像を見破ることの出來るものゝ一樣に知つてゐるところである。日本に於ける社會組織の進化も、その點に於て、何處の國とも變りない方向に進んでゐる。イギリスに於て、似寄つた利害を有つ階級が、自由、保守兩黨に分れ、日本に於て似寄つた利害關係を有つ階級が政友會憲政會などゝ別れてゐるのは、その昔似寄つた利害關係を有つた武門階級が、源氏平氏などゝ分れたのと、何處で違ふかは問題なのである。

加藤・市來・前田・水野

崎山良將

○槇兵衛に屈せずして總理まで漕ぎつけたと云へば、先づ講談ものか、中學雜誌には持つて來いの初號活字ものだが、しかし

政治現象に普遍の事實

長谷川如是閑

政治は理論に基かないで、實力に基くものであるとは、實際政治家や政治學者の能く口にする所であるが、これは丁度、世間の人が、自分達の地位は實力によつて得たのだと主張するやうなもので、その「實力」といふ言葉には脚註を必要とする。異常の小量を有するすべての人間が横綱になるとは定つて居らぬ、悪智慧を持つたすべての人が金持になるとも定つて居らぬ。まして社會的の種々ある制度や機關の出來上るについて、それを構成する個人なり集團なりの實力が何れ程働いてゐるかは甚だ問題なのである。

如何にも、政治の發生には、何等かの意味での實力を持つたものが、政治的勢力の基礎を爲したといふ事實がある。然しそこで「實力」といふのは、その政治的制度の構成の上にだけ働く力について云ふことであつて、云はゞその特殊の制度を作り上げる機械作用といふ意味のものである。言ひ換へれば、その政治組織を出來上らせるに有力であつたといふまでゞあつて譬へて云へば、或る家が金持ちになつたについて、その家使用人なりが、その家を富ます爲めに有力に働いたといである。この場合に、その家を富ます爲めには、家長な人が、無學であることを必要とし、破廉恥であることを必し、狡智であることを必要とし、又はその反對に一種の馬鹿であることを必要としたならば「實力」とは、彼等が無學、破廉恥、狡智、然らざれば馬鹿者であつたことを云ふのである。政治は、此意味に於て「實力」に據るといふのは事實である。

政治の發生に於て、又は一政治時期の段落に當つて、英雄、豪傑乃至悧巧者が現はれて、所謂實力を發揮したことは歴史の示す通りである。然し彼等が有したと云はれてゐるその「力」なるものは、全く彼等の活動する「政治」といふ範疇に於てゞあつて、人間的生活の上に、個人又は集團が有ち、又有たねばならないところの力ではない。云ひ換へれば、その「力」は「支配力」であつて「生活力」ではない。だから人間は、彼等の所

…ふ人があると、此度其の人
…一種の人と即ち前…

○播兵衛

…て酒ぎつけたと言へ…

崎山良

それ以上の値打のないのが、友三郎君の身上さ、思想的に見た彼は全くの零だ。

○華府でクレマンソーや、ハーヂング等の老耄たちと渡り合つて、それほど營養不良振りも見られなかつた加藤だそうだが、しかし、それもただそれだけの身上だ、實を云へば、華府で切り廻はしたのはヤング加藤だ、ヤング加藤とは加藤寛治のことだ、彼は寛治のやうに若い血が流れておるぢやなし、全く枯木の姿だ、先づ拾得、寒山の下受位は出來そうなものだが。

○しかし、物事に對する批判の間違のないことは達磨と比較になるまいが、今の政治家としての離れ業は達磨が第一で、樞兵衛と新平とがその次だらう、達磨の思ふやうに改造内閣が成立すれば軍閥にも面白い芝居を打つたかも知れないのに爾余の達摩や野田なぞはあまりに平凡過ぎて問題にはならない、

○彼は漢學者の子だけに、何事にも小心翼々として軌道を歩くばかりが其の能だ。經綸の閃きは一瞬だとてありやしない。華府でも醉の受身をやつただけだ。彼は財部の伎倆は認めつつも、今まで中央に拔かないのは――樞兵衛――彪の勢力の合體を恐れるからとの噂もある。

○市來は芋だ、先づ松方の番頭と云へば間違なしだ、これも加藤と同じ小心ものの好夫婦だ、未成品だけに此以上の批評はない。市來が松方及び薩摩の代表で、内田と水野は清浦派だ。西園寺の巾着が一人も入閣しなかつたことはおもしろい。

○前田御用掛も遂に遞信大臣となつた、十萬石から老中となつたのだからエライ御出世だ、さぞかし花柳界あたりでお持てになることでせう。

○大木・前田が思ひ切つて研究會を軟化させたことに依つて政友會は中々迂闊な行動がとれなくなつた、憲政會に城を明け渡すいまいましさに、七重の膝を八重に折つて加藤に川崖を促したザマは原が生きていたら泣くだらう。清浦翁に政友會のお歴々が参詣するやうでは、大政黨の威重とか信用とか、モウ問題ではない、政友會の眼下には、藩閥も、官僚も、立憲もありやしない、唯だ内に餓えたる狼の如きものだ。浅ましく、いたましい、この研究會内閣を招致した罪は一から十まで政友會が負擔すべきだ。

○それから、それに上をかけるのは高明の熟柿主義だ、憲政會も今のままで行けばもう瓦解するより他に途はない、ナマジイ金持のお坊チヤンあたりを探してくるからこんなことになつた、安達や、武富では天下が取れそうにない。

○鎌田も前田と同じく永い間政友會内閣に忠勤を抽んでた論功行賞であらう、彼は慶應を率ゐ、岡野は中央大學を、水野は日本

大學をそれ〲代表してゐる、それからとて慶應、日本、中央が悉く官僚政治に低頭したとは受取れまい。鎌田と大木はいくらか官僚離れはしている。ノンビリした長閑さがある。

○しかし、何と云つても内田で外務大臣がつとまるのだから、先づ〲日本も安泰だ。永劫に磐石だ。だが、この頃の地震では磐どころか山まで動きだすからナ。

○水野は床次に比して少しの遜色はない、行政にかけては却つて一枚上手だらう、岡喜七郎の交迭したことだけは帝都二百萬の人民が殘らず慶賀するだらう。そして中橋、元田のやうに品の悪い大臣がない代りに、脱線家がなくなつたことはいくらかさびしさを感ぜしめる。

○加藤が國民の期待するやう仕事の出來ないのは殆んど既定だ、アマリ侮辱の感はあれど、それに加藤を廻る水野、前田、市來にも何等期待することは出來まい、ただ鎌田と、岡野が中橋、大木に比べてまし〲位の處がおちだらう。

誰でもよからう

室伏高信

一

加藤友三郎といふ人は、頭がよくて人格が立派な軍人（いくさにん）である。といふ評判である。或はそうなのであらう。何にしろ大隈内閣の時は政友會征伐の責任を分つべき閣員であつたが、寺内伯の内閣に居殘つては憲政會征伐の責任を分つべき閣班に列し、それで融通自在、責任なぞといふ七面倒な觀念に囚はれるようなこせ〲したところがなく、寺内がやめれば原、原がやめれば高橋と、日本最近のあらゆる名宰相に仕へて多年、「幸に大過無かつた」のであるから、僅に頭もよく、人格も立派な政治家であるに相違ない！　また頭が悪るくて人格のよくない高橋是清に比べて一段も數段も上の人間であるに相違ない！　それに海軍のサーベルは陸軍のに比べると短いには違ひないがし

かし、短かくてもまたサーベルに違ひないとしたら、海軍の軍人を總理大臣に戴いてゐる日本國民は、萬々一アメリカあたりと面倒な事態を起ずやうなことがあつても、枕を高くして眠つてゐることができよう」。これで先づ日本も安心だ。

二

ある人は超然内閣だといつて非難してゐるやうであるが、貴族院にも衆議院にも、多數黨を控えてゐる友三郎内閣が超然内閣だとはどうしても受取れないじあないか。無論政友會からは表向き一名の黨内大臣をも出してゐないには違ひないが、しかし元田や中橋の黨内大臣を追出してまでも友三郎内閣の成立のために黨内の智者愚者が狂奔したほどの熱心ぶりを示した以上、そして將來に於いてもこれを導きこと懇しきこと押しなべて擁護するといふ證文をとられてゐる以上、この内閣が政友會のほかに超然としてゐる風流内閣であるとはどうしても思はれないではないか。要は頭が惡るくて人格がよくない高橋の代りに「頭のよくて人格の立派な」友三郎宰相を仰ぎ、元田や中橋のやうな黨内平和の攪亂者、總裁閣下に齒向つた不逞大臣を追拂つて金箔付きの政友會員鎌田榮吉や水野錬太郎をもつてきたのであるから、この内閣の少くとも片脚は、政友會のうへに立つてゐる。無論政友會は、將來この内閣に對して、連帶責任を負はないといひ出すではあらうが、どうせ一蓮托生主義で御拂ひ函となつた元田、中橋がゐなくなつた以上、縱令純粹の政友會内閣ができても、政友會の中から一蓮托生などと野暮なことをいふものはないであらうから、それだけでは友三郎内閣が超然内閣だといふの理由とはならない。そのうへ日本の憲政の神樣にも燒きが廻つてゐること既に久しく、「憲政よりもずつと御利益の多い」「サーベル」の擁護に改心してしまつた以上またこの外に萬年御用黨の實業議員の一團が狛犬のように控えてゐる以上衆議院は空前の大多數でその内閣のための喝采機關となつてゐるわけである。それに貴族院でも、そこの最大多數黨は如何に無能議員の揃ひであるとはいへ、頭一つが一票であることに代りはないし、それが多年の間是々非々主義の一枚看板を押し立てゝ、時には惡意の是々非々主義（即ち非々非々主義）を、時には善意の是々非々主義（即ち是々是々主義）の使ひ分けを演じ近頃の殿樣が決して「馬鹿殿樣」でないことを證明してきたのであるが、今度は更に進一歩して、「貴族院の本領」は研究會の御殿樣の御意のうちにあるといふ大原則を定めて立つた以上、貴族院にも、兵隊の數は揃つた筈である。貴衆兩院に、縱令大部分は傭兵であつて叛逆の場合には逃げ出す恐れのないことはないが、どうせ友三郎その人が、一度總理大臣の椅子に坐り、

そして二、三の大臣病患者の病氣が治りさへすれば、それ以上の大それた非望を抱いてゐないことも分つてゐるから別に悲觀するにも當らない。大臣の顔觸れについても彼れ是れの批評はあらう、これもどうせ世界を通じて第一流の人物は政治家になつてゐないのだから、日本だけ矢釜しくいつても仕方がない。市來でも、荒井でも、もつと見すぼらしい人物だつてかまはない。大臣になる人間は常に二流三流若しくは第四流の人物だといふことを國民がよく承知してさへゐればいゝのである。國民が一度こゝまで悟ると大臣病患者が激減して政治上の害惡の半分が除かれるわけである。

三

憲政會は大部怒つてゐるようだ。何にしろ政權の獲得がたゞ一つの目的で（勿論その副産物も同様に目的ではあるが）あればこそ多年黨を結んで、ある時は「獨立の生計」でなくては國が亡ぶようなことを言ひ觸らして見たり、また止めた方が利益だと思つて見たり、金には何の不自由もない日本一の大金持の女婿といふ幸福の身分をもつて、「珍品五つ」から粗品幾つ、「晝は法被の男、夜は總裁閣下」が松方邸まで罷り出で、四十八手裏表、あらん限りの手段を盡してのうへでの落第である以上、涙あるものは憲政會に同情しないではゐられまい。

そこで「憲政の常道」論になつてくる。安達謙藏と下岡忠治と誰れと彼れとがさういふ。安達と下岡にとつては、憲政の常道を説くようになつたことは、大浦兼武門下の時代に比べて慥に一大進歩である。そしてこれ等の人たちから憲政の常道論を聴かせられる國民の方は慥に進歩である、べき筈なのである。ところが憲政會に不幸であつて日本國民に幸福であることには、日本國民が彼等の馬鹿にしてゐるほど健忘症にかゝつてはゐないといふことである。彼等は憲政會の何ものであるか、若しくは何ものでありしかをよく知つてゐる。尾崎氏の所謂「玉座を楯とし詔勅を彈丸とし」た桂内閣のもとに何人が猛犬のごとくに立つてゐたかを知つてゐる。大隈内閣が辭任の時に「憲政の常道に從つて反對の首領を後繼内閣の首班に奏薦したかどうかを知つてゐる。若しくは今日の憲政會の樞機を獨斷してゐるものが如何なる種類の政治家であるかをよく知つてゐる。「憲政の常道」の臺詞だけでは國民席はもう喝采しなくてゐられるようになつたのである。

四

無論政友會は不人氣である。誰れ一人として心から政友會を謳歌するものはあるまい。政友會の黨員だつて眞逆に何の自惚れをもしてはゐないであらう。これほどに醜惡で、無定見で、

沒理想な政黨は、巴爾幹邊でも滅多に見ることはできないであらう。しかし政友會が不入氣だといふことは憲政會が好人氣だといふの理由にはならない。加藤（高明）を高橋（是淸）に代へて見たところで、岩崎家を三井八郞右衞門家に代へたにしたところで、面白くもなく可笑しくもない。どつちでもいゝ。政友會でもよし、憲政會でもよし、友三郞內閣でもよし、どうせ金持ちの執行委員會であり、民衆の壓迫者であり、金錢をもつて投票と輿論とを買ふほかには國民の群と沒交涉である以上、內閣の組織者は誰れでもいゝ。加藤（友三郞）、加藤（高明）、高橋（是淸）、犬養毅、田健次郞、山本權兵衞、田中義一、誰れでも問ふところではない。國民の望むところは誰れであり彼れであるのではない。今の國民には一人の最負役者もない。望むところはそれ等の凡てのものを一蓮托生でやめてもらふことがあるだけである。それが望みない以上、望みのあるまでは誰れが首相になつてもいゝ。國民はこれ等のブルヂョア合唱團の總崩れを待つよりほかに仕方がない。

憲政會は俺の方に輿論の後援があつたといふてゐる。加藤高明子の演說のうちにそうあつた。世界の政治史は、「俺の方に輿論の後援がある」と言ひ觸らす政治家の名で一杯になつてゐる。そしてグリーキの昔から、俺は民心を失つた政治家だといつた一人の政治家の名をも登錄してはゐない。

日本の補欠選擧は、總選擧とともに、少しも民心の歸趨を計るの道具にはならないのであるが、そしてそれはただ、投票市場で、政治黨人と有權者とが商行爲をするだけの機會なのであるが、それにしても憲政會は一昨昨年の總選擧に一敗して以來補欠選擧で民心を收めたといふ無意味な證據品さへも買入れることの出來ない敗殘の政治商の一團であるに過ぎないではないか。

五

總理大臣なぞは誰れでもいゝ。どうせ政治の根本的改革が尋常手段で望みないとしたら、總理大臣なぞは誰れでもいゝ。今の國民が少くとも國民中のよき頭腦がそう考へてゐる間は、凡庸な政治家、壓制な政治家、金持政治家サーベル大臣の勇躍時代である、今日は丁度その時代なのである。こゝが友三郞內閣の唯一の强味なのである。だから友三郞內閣は宜しくこの機會に乘じて得意のサーベルを振り廻すがいゝ。

だからまた私たちは友三郞內閣に大した反對をもしないかはりに、この內閣に何ごとをも望みはしない。望むことはただブルヂョア總崩れの意味でこの內閣が一刻も早くやめてくれることである。だからといつてまた別にこの內閣のサーベル振りを恐れ

もしない。既に寺内内閣や、原、高橋の内閣やによつてあらん限りの暴政を經驗してきたのであるから、縱令「逆轉内閣といはれてもそれ以上の「逆轉」もありえまい。先づ水野内相が床次内相の志を繼で社會主義壓迫法案をもち出す位ひが今から期待されることである。

謎の政變

山川均

此間ぢうは、内閣の一角が何とかなりそうであつたが、忽ちにして居据はりとなつた。居据はりになつたかと思ふと、忽ちにして今度は丸潰ぶれになつた。政治界のことは、何が何だかすつかり分らない。

分らぬと云へば、第一多數黨の内閣が、反對黨からの反對らしい反對をも受けずに、何故に倒れるのかゝらして分らない。高橋首相は内閣不統一の責を負ふたのださうであるが、閣員の間に、どの點に就いて政策上の意見の相異があつて、内閣の不統一を來たしたものであるかは更に分らない。

この分らぬ原因の爲に内閣が總辭職をすると、椽の下から急に痩犬が飛び出して、吾輩の多年の遠吠えで内閣は瓦解した、後繼内閣組織の大命は、須らく吾輩に降下するのが、之が憲政の常道だといふに至つては、愈々以つて分らない。

そこで愈々憲政のガダ馬車が七分通り逆轉しかけたとあつて、吉川によつて山王の猫の額ほどの空地で、國民的の大々運動が起こされたが、肝腎の國民の方では大して心配らしい顔もせぬ。之も亦た不思議である。

三日か四日思はせぶりをしてゐた加藤男も、愈々潮時を見て乘り出した。或人はペテン立ちだといふ。然し辭退せずに熟考すると答へた以上は、辭退するかも知れぬにしても、初めから辭意が無さそうに思はれる。そして決答期の延期で愈々辭意の無いことが分つて來た頃から、丁度世間では、加藤男辭意固

し』といふ評判が立つた。之も分らぬことの一つである。

それから愈々新內閣が出來上ると、昨日までの新聞の模様がガラリと一變して、平氣でおついしやうが並んで居る。之は分らぬような分つたようなことである。

○

要するに分らぬことに初まつて、分らぬことに終るのが、何時でもの政變である。政治界の出來事が分らぬことを以て終始してゐる間は、民衆が政治に興味をもつ氣遣ひがない。そして內閣の受授やその他の政變が、一定の綱領と政策とを中心としないで、人間を中心として回轉する間は民衆に政治界の事が分かる氣遣ひはない。ところが政治上の爭ひが、同じブルジョアジーの一家族のうちのいづれの一團が、直接に民衆を支配する地位に上ぼる可きかといふ、內輪同士の喧嘩である間は、政爭が政策と綱領との爭ひとなる氣遣ひはない。

新大臣の感想談といふものを讀むと、揃ひも揃つて『抱負などはてんで無い』人や、就任早々で『そんな事はまだ考へても居らぬ』人や其の省の仕事には生憎の『門外漢』や、これからぼつ〱『課長や局長から智慧を授けて貰ふ』人ばかりである。之は謙遜から出た嘘かも知れぬが、しかし此場合、假にも抱負があるとか、一定の政策があるとか言つて貰はねば辻褄が合はぬやうに思はれる。然し之は政治上の爭ひが政策と綱領の上の爭ひとなつた政治の『常道』がこの話であつて、政治がブルジョアジーの內輪喧嘩である間は、政變の中心となるものは常に人間であり、因緣である。そして政友會の落とした熟柿を、憲政會が頬張らうとすることが、卽ち憲政の常道である。一かど心得顔の人までが、政策と綱領ではなくして、人物によつて投票することが、理想選擧であると心得て居る間は、政界に革新などゝは思ひもよらぬことである。

○

政治がブルジョアジーの內輪同志の睨み合ひから、政策と綱領との爭ひとなる時は、無產階級が政治的にブルジョアジーから獨立した時である。××階級の獨立した政治的運動が生まれた時である。

民衆の多數は政治思想の上でも、ブルジョアジーに支配せられて居る。彼等にはブルジョアジーの感化から獨立した、無產階級の政治思想が、まだ明確に生まれて居らぬ。從つて民衆の多數に取つては、ブルジョアジーの世界以外には、獨立した無產階級自身の世界はない。彼等は無產階級ではあつても、思想的にはブルジョアジーの附屬物となつて居る。彼等は唯だ支配せられる爲にある——といふ事すらも意識せぬ。彼等に政治に

對する興味がなく、政治上の要求がなく、政治上の運動のないのは當然である。

民衆のうちで、思想的にブルジョアジーから獨立した人のうちにも、ブルジョアジーの政治を見詰めてゐる爲に、無産階級の政治を見落して居る者がある。ブルジョアジーの政治に對する失望と、反感と、輕蔑とが、餘りに大きかつた爲に、無産階級自身の政治の重要なことすらも忘れて居る者がある。民衆の多數は階級的に自覺せぬ爲に、民衆の少數者は階級的に自覺した爲にどちらも政治に對する興味を失つたのである。

然しながら民衆がブルジョアジーの政治を眞に棄て去つた時に、ブルジョアジーの政治的影響から完全に獨立した時に、民衆は初めて、自分自身の政治無産階級の政治のあることをはつきりと見るに相違ない。

ブルジョアジーの政治的影響から全く獨立し、ブルジョアジーの政治に對抗した、××階級の獨立の政治的運動が勃興した時に、日本の政治は初めて『分らぬこと』を中心として回轉するものではなくなつて、一定の階級的利害の上に立脚する一定の政策と綱領とを中心として開展するものとなるだらう。そして政治は初めて、分かるものになるだらう。

○

然し分らぬことで終始した今度の政變にも、誰れにもよく分つたとが唯だ一つある。それはブルジョアジーの政權の確立といふことである。新内閣が非公式の政友會内閣――この多數黨の内閣――であることを見て、『憲政常道論』者は安心して然るべしである。政權は政友會總裁の手からは離れても、決してブルジョアの手を去つた譯ではない。そして此の内閣が圓滿辭職が不圓滿辭職をしたあとは、政權は再び政友會の手に返へるだらう。小ブルジョアの階級が早老して××的の意氣を失ひ、さりとて無産階級自身の政治運動がまだ生まれて居らぬ今日のところでは之が即ち『憲政の常道』なのである。之れ以外に政權の推移が行はれよう筈がない。いづれが皆な熟柿主義である。政變はブルジョアジーの一家族のうちの『熟柿』の廻はり食ひである。憲政會がいくら力んで見たところで、熟柿主義以外には熟柿を食ふ方法はない。憲政會に向つて、政友會と戰つて政權を奪取せよとけしかけて見たところで、憲政會には政友會と戰ふ可き因緣と行掛りと、一家族の内輪に有り得る利害の對立はあつても、政策と綱領の上の相異がないからである。

政界の『革新』は唯だ××××××××。

京大の夏期講演

本學に於て來る八月一日より十日マデ第十三回講演會を開く聽講志望者は來る七月二十日限り申込まるべし。因に西田敎授の哲學講演は八月一日より五日までとのこと、但し一、聽講者の資格は別に之を定めずと雖も本學に於て不適當と認むる者は之を謝絕することあるべし、一、聽講志望者は聽講料として一科目につき金貳圓を添へ申込まるべし但し申込書には聽講科目、族籍、現住所、年齡及業務を記載し宛名は京都帝國大學講演會とすること、一、講演科目、講師及時間割等

科目

刑法の根本問題
中等教育用の一般生理、衛生講話
鐵筋混凝土構造學
木造建築構造學
現代生活に於ける電氣工學の理論／應用
理論と其應用
認識論
中央亞細亞(西域)史概論
曲線
飛行機の力學
膠質化學概要
經濟史一斑

講師

宮本英脩
石川日出鶴丸
近藤泰夫
坂靜雄
藤井厚二
加藤信義
本野亨
西田幾多郎
羽田亨
和田健雄
玉城嘉十郎
大幸勇吉
財部靜治

右の外會期中左の科外(夜間)講演を開く、聽講料を要せす)

八月一日	歐洲戰後、國際法變化の趨勢	市村光惠
八月二日	閥	岩井藤二郎
八月三日	食糧問題より觀たる我が人口問題	山本美越乃
八月四日	顯微鏡より見たる金屬(幻燈使用)	澤村宏
八月五日	植物の生殖(幻燈使用)	郡場寛
八月七日	社寺と地方文化	中村直勝

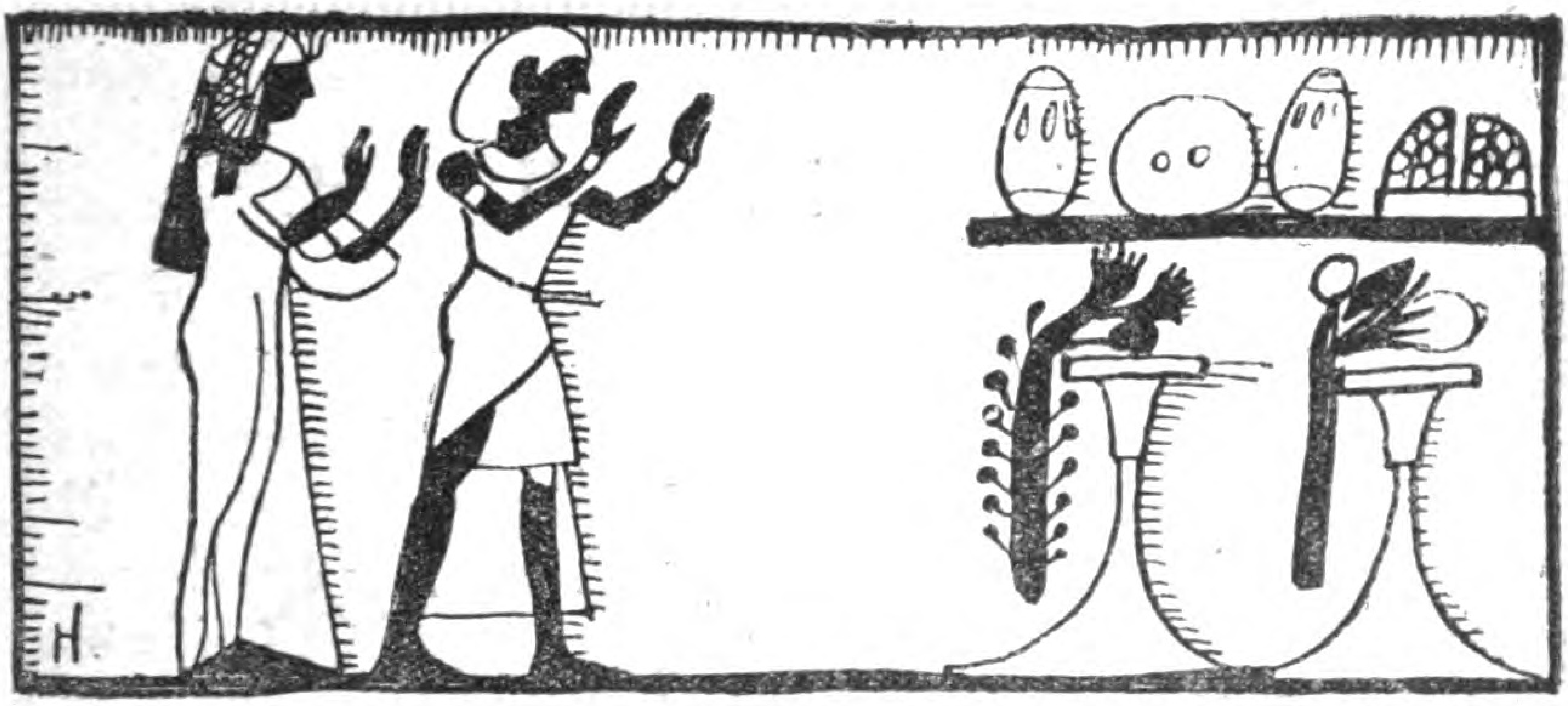
七月號創作

本牧夜話　谷崎潤一郎

美術家町の出來事　碧梧桐

或る男　武者小路實篤

頸縊り上人　菊池寛



戯曲

本牧夜話

—三幕—

谷崎潤一郎

人物

ミス・ジヤネツト・ディーン

フレデリツキ・マツイ

セシル・ローワン

初子（セシルの妻、劇中唯一の純粋の日本人）

彌生（初子の異母妹）

アレキシフ

その他ミセス・ワンダ・スズキ、その夫ヰリヤム・スズキ、ブラウン夫妻、ミスター・グルツク、ジヤネツトの養母であるスカーレツト・ホテルの女將

所——横濱本牧海岸及びその附近

第一幕

セシル・ローワンのサンマー・ハウス。——前景に美しい芝生のある庭。それに臨んで赤ペンキを塗つた和洋折衷の平家建ての一と棟。下手後方に背の低い小松が二三本植ゑられ、その向うに生垣がある。垣根の外は沙濱の道路で直ぐ海へつゞいて居る。

家は兩側にヹランダがあり、そこのガラス障子が明け放されて居て、庭の方から室内全部が覗はれる。中央に純白のテーブル・クロースを懸けた食卓、椅子五六脚、上手の壁際に食器棚、下手前方ヹランダに近く籐の長椅子、その傍にティー・テーブル、大きな棕櫚の植木鉢、……すべて、ほんの夏の間を凌ぐだけの簡單な食堂の飾り付けがしてある。後方には四枚の襖が締め切つてあつて、それを開くと奥にある隣室が見えるやうにする。庭の生垣へ寄つた方にも白いペンキ塗りの小卓と二三脚の椅子が置いてある。

夏の晩のことである。幕が開く前にフオツクス・トロツトの蓄音機の奏樂につれて、男女數人がダンスをする足音が聞える。やがて靜かに幕が上る。……と、舞臺は夜の空と同じやうに一面に暗い。そして多勢が踊つて居るのは奥の部屋であるらしく、襖が締まつてゐるので人影は見えないが、花やかな電燈の光がちらちらと戸の隙間から食堂の方へ洩れて居る。食堂の燈は凡べて消えて居て、誰も居ない。ただ飲み散らした酒やソーダ水の罎やコツプが卓上に殘されて居る。暫くの間、ダンスに熱狂する賑やかな足音が、一定のリズムを繰り返す外には、あたりはしーんとして何も聞えない。庭の松の葉越しに、生垣の向うの海の方で星が二つ三つキラキラとまたたいてゐる。

垣根の外の路を、白い服を着た背の高い太つた男——アレキシフ——が、下手から歩いて來る。そして立ち止まつて垣根に身を寄せて家の中を覗く。と、彼は直き眼の前の、庭の小卓に凭れかゝつてぢつと考へ込んで居る人影に氣がついて、輕い驚きの色を示す。それは初子である。彼女は最初から、居るか居ないか分らないやうにひつそりと、暗い中に腰かけて居たのである。色の青白い、眼の小さい、小太りに太つた人の好ささうな女で、油氣のない毛を束髪に結ひ、洗ひ晒しの浴衣を着て居る。

（アレキシフ）（垣根の外から）今晩は、……奥さん……

（初子）今晩は、……どなた？

（アレキシフ）わたしです、奥さん、わたし――あなた分りません？
（初子）えゝ、あの――
（アレキシフ）わたし分りませんか？　わたし――アレキシフ、
（初子）あゝ、アレキシフさん、
（アレキシフ）ウェイ、（佛蘭西語の「ウイ」と日本語の「えゝ」とをごつちやにしたもの）　さうです、あなた――そこで何して居ます？
（初子）なんにもしては居りませんの、――（それとなく話頭を轉じる）まあ、今晩は大さう暑うございますのね、
（アレキシフ）さうです、大へん暑い、――
（初子）風が少しもありませんのね、
（アレキシフ）ほんたう、ほんたうです、風がありません、けれども此處は少しあります。海のそばですから。私のうちはもつと暑い。わたし散歩に出て來ました。
（初子）（他の事を考へながら上の空で）　あゝ散歩に？
（アレキシフ）ウェイ、此處が一番涼しいです、……　あなたのうち、今夜も亦ダンス？
（初子）えゝ
（アレキシフ）おゝさう、……　いつもいつもダンス、ダンス、毎晩毎晩、面白いです。あなたなぜ踊らない？　奥さん、
（初子）私？――私踊れないんですもの、
（アレキシフ）踊れない？　そんなことありません、ダンス大へんやさしいです、あなた直ぐ覺えます。……

云ひながら、マッチを擦つて煙草に火を點ずる。

（初子）でも私、かうして涼んで居る方がようございますわ、
（アレキシフ）なぜですか？　あなた、獨りで淋しくはないですか？

(初子)ですけれど。此の方が氣樂でようございますわ、出來ない事を無理にしたつて駄目なんですから。──

(アレキシフ)さう？──奥さん。──あの、私少し──少し此處で休みたいです。そこへ這入つてもよろしいですか？

(初子)えゝどうぞ、

(アレキシフ)構ひません？

(初子)構ひません、どうぞ、

(アレキシフ)あゝ、ありがとございます、──

一旦下手へ隠れ、直ぐ庭へ出て來る。ダンスまだ盛んに續いてゐる。

(アレキシフ)(初子の側の椅子にかけながら奥の間の方を見やつて)あすこ。お客さん大勢居ますね？

(初子)えゝ大勢。──七八人居ます、

(アレキシフ)おゝそんなに？ 誰ですかあの人たちは？

(初子)(指を折つて數へながら)フレデリツキさんにジヤネツトさんに、山のミスタ・ブラウンとミセス・ブラウン、……

(アレキシフ)あゝミスタ・ブラウン、──知つてます知つてます、

(初子)それからミスタ・グルツクにヷンダさんとヰリヤムさん、──ちやうど七人、──

(アレキシフ)それからあなたの旦那さんと彌生さん？

(初子)えゝさう、

(アレキシフ)おゝ？ チヨツ、チヨツ、(肩を聳やかして舌を鳴らす)九人ですね、あなたなぜ踊りませんか？ あなたダンス嫌ひですか？

(初子)嫌ひでもありませんけれど、でも私見たいな日本人がやつたつて駄目なんですもの。

(アレキシフ)なぜ？ なぜ駄目ですか？ あなたの旦那さん、──ミスタ・ローワン、──あなたにダンス敎へませんか？

（初子）教へて貰ひましたけれど、わたし覺えが悪いから、どうしてもうまく出來ないんですの。

（アレキシフ）あなた覺えが悪い？　うそです、そんな事ありません。

（初子）いゝえ、私馬鹿だからいくら教はつても駄目ですわ、私が踊ると皆がおかしいツて笑ふんですもの。……

蓄音機が止まりダンスの足音止む。「あゝ暑、暑、……汗びつしよりだ」「イエース、ベリ、ホツト、ト ウナイト」などと云ふ男女の聲が聞える。同時に誰かがガラリと奥の間から襖を明ける。ジヤネツト、フレデリツキ、彌生、セシル等の往つたり來たりする姿が見える。ジヤネツトは年齢二十一二歳、猶太系の露西亞人、金髪碧眼、白つぽいコツトン・ボイルの服を着てゐる。彌生は日本人とポルチユギースとの合の子、赤いちぢれ毛で顔にそばかすのある、やゝ不恰好に太つた娘。メリンス友染のキモノに耳飾と頸環をつけ、白足袋にダンスの草履を穿いて居る。フレデリツキとセシルとは孰れも日本人と米國人との混血兒。燻り色の上衣に白いパンツを穿いて居る。以上四人ながら殆んど日本人と同様に日本語を語る。一同ほつと息をしながら、椅子に腰かけて團扇を使つたりハンケチで汗を拭いたりする。

セシル急ぎ足で食室へ出て來る。そして咽喉が乾いて溜らぬと云ふやうに慌しく卓上のビールの栓を抜き、一と息に飲んでから煙草に火をつけて庭の方を見る。

（アレキシフ）（セシルを見て立ち上り挨拶する）おう、ボン、ソワアル、ミスタ・ローワン……いかがですか？

（セシル）（冷淡に）今晩は、……グツドイブニン、……（云ひながら頻りにビールを飲む）

（アレキシフ）（手持不沙汰でモヂモヂしながら）……わたし、今此處でミセス・ローワンと話しました。

（セシル）おゝさう、どうか御ゆつくり、

さう云つて又ぐいとビールを飲む

（ジヤネツト）（奥の間から呼ぶ）セシル！　早くおいでよ！　何してるの？

（セシル）ウェイト　エ　ミニ、――今ビールを飲んでるんだ。

再び蓄音機が鳴る。ワルツ舞踏曲。

(フレデリツキ)（奥の間で）ジヤネツト！　僕と踊らう！
ジヤネツトらなづいてフレデリツキに抱かれて踊る。他の人々も踊り出す。
(アレキシフ)（セシルに）あなたのうち、いつも大へん賑かですね、
(セシル)えゝ賑かです。賑かでないのはミセス・ローワンだけです。
(アレキシフ)はは、ミセス・ローワン大へんおとなしいです、あの人ダンス好みません？
(セシル)えゝさうです、私の奥さんダンス嫌ひです、あの人は妙な人でしてね。
セシル横眼で初子を見る。初子聞えない振りをして海の方を向き、テーブルに頬杖をついて居る。
奥の間から團扇を使ひながら彌生が出て來る。
(彌生)セシルさん。どうしたの？　踊らないの？
(セシル)あゝ今、ちよつと一と休みだ。
(彌生)私にも一杯ソーダ水をくれない？
(セシル)うん、お飲み、
彌生ソーダ水の壜を拔いて飲む。
(アレキシフ)おゝ彌生さん、――今晩は、マドモワゼル、
(彌生)あら！　アレキシフさん、あなたいつ入らしつたの？
(アレキシフ)わたし、今散歩に來ました、――あなたダンス、大へん暑い、咽喉が乾きました？
(彌生)イエース、ほんとに咽喉が乾いちやつたわ、（飲みながらヂロヂロと庭の初子の方を見る）アレキシフさん、あなた姉さんとそこで話していらしつたの？
(アレキシフ)ウエイ、あなたの姉さん、獨りで大へん淋しいです。
(彌生)淋しくつたつて仕方がないわよ、自分の勝手なんだもの、（セシルに向つて極めて早口に）サポーズ　ヒース　エ

リトゥル　イン　ラヴ　ウイズ　ユア……ね、さうよ、きつと、

(セシル) ふゝん　(鼻先で笑ふ)

(アレキシフ) 何ですかあなた？　わたし英語分りません、わたし佛蘭西語、そして日本語少し、……

(彌生) 知つてるわよ、だからわざと英語で云つたのよ、

(アレキシフ) (初子に)　何ですか奥さん？　彌生さん何を云ひますか？

(彌生) 姉さんに聞いたつて分りやしないわよ、あの人はあなたと同様にまるツきり英語が出來ないの、ミスタ・ローワンの奥さんでありながら。

(初子) (依然として海の方を向きながら)　どうせ私は馬鹿だからね、お前さんのやうな悧巧な人とは違ひますから。

(彌生) 馬鹿だ馬鹿だツて云つてないで、自分から心がけて習ふやうにしたらいゝぢやないの。

(セシル) さうです、ほんたうにさうです、あなた馬鹿ぢやありません、自分で馬鹿だと思ふのが悪いんです、そしてその爲めにしまひにはほんたうの馬鹿になります。

(初子) 私なんか始めツから馬鹿ですわ、私のやうな無敎育な人間は、何を習つたつて覺えられツこはないんですから。

(セシル) さう、それならどうも仕方がないですね、あなたの好きなやうにしたらよろしい、――

短かき間。ダンス一旦止み、再びフオツクストロツトになる。

(アレキシフ) (その場を取りなすやうに)　彌生さん、あなた私とダンスしますか？

(彌生) あなたと？　あなたがダンス？

(アレキシフ) あはゝゝ、冗談です。冗談です、

(彌生) 冗談で幸ひだわ、あなた見たいなお爺さんとは此方でも眞ツ平だわ。(奥の間を覗いて)　フレデリツキさん！　さあ、今度は私とやる番よ。

(フレデリツキ) イエース　ウイズ　プレジユア。

彌生奥の間へ去り、フレデリツキを擁して踊る。

(ジヤネツト)セシル！　まあ何をしてるの？　好い加減に出ておいでよ。

セシル默つて奥の間へ行く。ジヤネツト彼を迎へて立ち上り、直ぐ踊り始める。

(アレキシフ)(初子の傍へ戻つて來る)奥さん、彌生さんあなたと大へん違ひますね。私あの人、あなたのきやうだいのやうに考へません。

(初子)それはさうかも知れませんわ、——あの人は私の妹ですけれど、あの人と私とはお父樣が違ふんですから。あの人のお父樣はポルチユガルの人なんです。

(アレキシフ)おゝさう？　あの人のお父樣ポルチユゲー？

(初子)えゝ

(アレキシフ)さう、さうですか、——それで分ります、あの人あなたと大へん違ひます。あなた——奥さんあの人好みますか？

(初子)えゝ好みます、……憎いと思ふこともありますけれど、でもやつぱりきやうだいですから、……

(アレキシフ)メイ、(佛蘭西語のMais)……あの人はよろしくないです、あの人あなたを馬鹿にします、私あの人を好みません。

(初子)だつて仕方がありませんわ、あの兒の方が悧巧なんですもの。——さう思つて居ても私時々腹を立てたりしますけれど、それもやつぱり自分が馬鹿だからなんです。

(アレキシフ)奥さん、あなた大へんやさしい、あなたいゝ人です。……あなた神樣を信じます？　教會へ行きます？

(初子)えゝ參ります、裏の服部さんの奥さんに連れて行つて頂きました。

(アレキシフ)さう、私ちやんと知つてました。あなた何處の教會へ行きますか？

(初子)公園の傍のメソヂスト教會、——

(アレキシフ)おゝメトデイスト、私わかります、大へんよろしい。あなた教會へ行きます、メイあなたの妹さん、教會へ行きません。あの人若い男好きです、ね？

(初子)どうですか私知りません。

(アレキシフ)知りません？ ウェイ、あなた知つてます、あの人——あの人フレデリツキさん大變好きです。私ちやんと知つてます。

(初子)アレキシフさん、あなたそんな事誰からお聞きになつたの？

(アレキシフ)私誰から聞きません、私よく分ります、あはゝゝゝ

蓄音器止む。奥の間の人々ダンスを止めて椅子にかける。

(ヂヤネツト)フレデリツキ！ お前彌ツちやんと頬ツぺたを押ツつけて踊つてたね、チークダンスは罰金だよ。

(フレデリツキ)馬鹿を云へ、己あ知るもんか、彌生が己に頬ツぺたを押ツつけて來るんだよ。

(彌生)あら！ さう云ふ譯ぢやないけれどついさうなつてしまつたんだわ。

(ヂヤネツト)なあに兩方が惡いんだよ、さあ二人共罰金をお出し！

一同笑ふ。

(アレキシフ)(ちよつと奥の間の方を見、ニヤニヤ笑ひながら立ち上る)奥さん、わたし又參ります、——

(初子)さうですか、もうお歸り？

(アレキシフ)ウェイ、大へんよく休みました、どうも有りがとございます。

(初子)では又入らつしやいまし、

(アレキシフ)有りがとございます、お休みなさい、(握手する)

(初子)お休みなさい、

（アレキシフ）ボンニユイ、マダム、

アレキシフ一旦下手へ去り、垣根の外に現はれる。そしてもう一遍「お休みなさい」と聲をかけながら上手へ消える。初子も「お休みなさい」と鸚鵡返しに云ひ、又ぢつと海の方を向いてボンヤリして居る。

蓄音器が鳴り始める。今度は淋しいヴイオリン・ソロのセレナーデ。一同靜かに聽いてゐる樣子。

彌生食堂へ出て來る。

（彌生）（ヱランダへ來て初子を呼ぶ）姉さん、あたしお腹が減つちやつたけれど、何か臺所に殘つて居ない？　グースベリーのパイはもうないか知ら？

（初子）あるかも知れないよ、冷藏庫を見て御覽、

（彌生）さう、ぢや搜して見よう、

彌生ヱランダを上手へ去り、直きにパイを皿にのせて匙で喰べながら戻つて來る。

（彌生）姉さん、アレキシフさんはもう歸つたの？

（初子）あゝ今、

（彌生）ほんとにいやな助平爺だつたらありやしない、あたしあんな奴は大嫌ひ、

（初子）だつてそんな惡い人でもないと思ふよ、

（彌生）うそよ、姉さんは人が好いから欺されてるのよ。うちへ來ると猫を被つて居るけれど、いつも其處のチャプ屋へ行つてキテイーを追つかけ廻して居るのよ。爺の癖にいやな奴だつてキテイーのとこでも鼻ツ摘みなんだつて。

（初子）だけど、あの人はきつと淋しいんだよ。露西亞を逃げ出して日本へ來てから、まだやつと一年足らずだつて云ふぢやないの。それに奥さんとは佛蘭西で別れてしまつて、子供だのお母樣だのも佛蘭西へ置いて來たんだつて云ふし、日本には知つてる人は一人もないんださうだから、考へて見れば可哀さうだわ。きつと心細いだらうと思ふわ。

（初子）そりやさうかも知れないけれど、あんまり親切にしてやらない方がよくつてよ、圖に乘つて仕樣がないから。

——（パイを喰べ終つてヱランダに腰かける）　姉さんは氣が付かないやうだけれど、アレキシフは姉さんが好きなのよ、それでちよいちよいやつて來るのよ。

（初子）　まさか、——そんな事があるもんぢやない。

（彌生）　いゝえさうよ、呼びもしないのに人の内へのこのこやつて來るなんて、づうづうしいツたらありやしない。今度來たら默つてておやりよ。

（初子）　だつてお前、私にはそんな氣の强いことは出來ないんだもの。

（彌生）　ふん、姉さんは駄目ねえ、——日本の女はみんな意氣地がないんだから、——

（初子）　でもアレキシフさんなんかまだ好い人だわ、本牧には惡い西洋人が澤山居るんださうだから。——此の間も刑事さんが來て調べて行つたさうぢやないか、大分此の近邊には西洋人の惡い人が居て、娘たちを欺したりするもんだから、風儀が紊れて困るとか云つて、——

（彌生）　へえ、さう？　そんな事があつたか知ら？　私知らないわ。

（初子）　何でも西洋人だと云へばお金のある立派な人だと云ふ風に思つて、しろうとの娘たちがつい欺されて、慰み物にされるんだつて、——

（彌生）　……

（初子）（低い聲で）　ねえ彌ツちやん、……こんな事を云ふと又怒るかも知れないけれど、……お前ほんたうに、フレデリツキさんが好きなのかい？

（彌生）　えゝ好きよ、好きで惡いの？

（初子）　惡いと云ふ譯ぢやないけれど、……まあ、成るべくなら考へて見た方がいゝと思ふよ。

（彌生）　ふん、……私は私で自分のいゝやうにするんだから、餘計な世話は燒かないで頂戴。

（初子）　そりやあさうだらうけれど、お前の爲めを思つて云ふんだから、……フレデリツキさんも、矢張り警察で睨

まれて居るらしいからね。

(彌生)だから私も欺されて居るツて云ふの？

(初子)何も私はさう云やあしないさ、……

(彌生)欺されるのは欺される方が間抜けなんだわ。姉さんのやうな日本人なら欺されもしようけれど、私は姉さんとは違ひますからね。……フレデリツキが睨まれて居りやあ、セシルさんだつてお仲間ぢやないの。人の世話を燒くよりか自分の亭主のする事を見るがいゝや。

(初子)だから、……私はそれを知つて居るから、……自分が今までさんざ苦勞をして來た事を思ふから、尙更お前にさう云ふんだよ。ほんとに私なんざ、人の事は云へやしない、自分がいゝお手本なんだから……

(彌生)そりやあ姉さんが働きがないからさ。西洋人の奥さんだつて云ふのに、英語も一つしやべれないで、ちつとも御亭主の心持ちを飮み込まうとしないんだもの、それで嫌はれるのは當り前だわ。

(初子)だけど、私には西洋人の心持ちは分らないもんだから、……

(彌生)私には又、日本人の氣持ちの方が分らないわ。妙にいぢけて居て、陰險で樣子振つてばかり居て！ ほんとに日本人くらゐ厭なものはありやしない！私どんな事があつたつて、日本人の所へなんかお嫁に行つちやならないから、

(初子)だつて、お前にしたつて西洋人と云ふ譯でもないぢやないか。

(彌生)さう云へばフレデリツキだつてさうよ。あの人のパパは日本人なんだから、私と同じ事だわ。

(初子)だけれどね、フレデリツキさんはあゝ云ふ如才のない人だから、そりやお前に對しても滿更ではないやうに云ふけれど、事に依ると外にもまだ好きな人があるんぢやないかね。あの人は私、ジヤネツトさんに氣があるんぢやないかと思ふよ。

（彌生）そりやあの人は浮氣だからそのくらゐな事はあるでせうさ、あつたつて私や構やしないんだ、どうせ浮氣をするくらゐな男でなけりや面白かないんだから。――なあに、いくらジヤネツトに氣があつたつて、ジヤネツトの方でフレデリツキを嫌つてる事は、ちやんと私には分つてるのよ。ジヤネツトにはね、――姉さんにはお氣の毒だけれど、もうレツキとした人が。――お前さんの旦那樣が附いて居るのよ。セシルさんはとうからあの人とおかしいんぢやないか。ほんたうに姉さんは人の世話を燒く暇があつたら、自分の亭主を取られないやうに氣を付けるがいゝ。

（初子）彌ちやん、お前そんな事を云つて、何か證據でもあるのかい？

（彌生）證據なんかなくつたつて、大概樣子で分りさうなもんだけれど、……………それが分らなけりや餘ツぽど頓間なんだわ。

（初子）どうせ私は頓間なんだから、そんな話は聞かせないでおくれ、聞いたところで仕樣がないんだもの。

（彌生）それぢや姉さんは、若しもほんたうに捨てられちまつたら、どうする積りなの？

いつの間にか奥の間では又ダンスが始まつて居る。ジヤネツトとセシルとがこつそり食堂へ拔け出して來る。そしてさし向ひにテーブルに腰かけ、ソーダ水を飲みながらそつと手を握り合つたりして、二人の會話に耳を傾ける。ダンスの足音が騒々しいので初子も彌生もジヤネツト等に氣が付かない。

（初子）捨てられたら私、………外に行く所はないんだしするから、臺所の隅にでも置いて貰つて、コツクにでもアマさんにでも使つて貰ふからいゝ。私なんぞにや其の方が相當してゐるんだから。

（彌生）まあ呆れた！　そんな馬鹿々々しい事が出來ると思ふの？

（初子）だつて、今迄にしたつて女中のやうなもんぢやないか。だからアマさんにでも使つて貰つて、いつ迄でも大人しく辛抱して居れば、少しは可哀さうだと思つてもくれるだらうし、そのうちには又戻つてくれるかも知れないしするから、………

（彌生）ふん、それがエス樣の敎へにでもあるツて云ふのね？

（初子）教へにあるツて云ふ譯ぢやないけれど、セシルの方では何と思つても、私にはあの人より外に愛する人はないんだもの。それが私の道なんだもの。

セシル、以上の話を聞きながら時々ジャネットと眼を見交してニヤリとする。そして此の時聲をかける。

（セシル）おいおい、何をしやべつてるんだい？　大分話が持てるぢやないか。

（彌生）あら！　セシルさん？

（ジャネット）うふゝゝ（くすくす笑ふ）

（彌生）まあいやだ、いつから其處にいらしつたの？

（セシル）なあにたつた今さ、——フレデリツキがお前をさつきから搜して居たぜ。

（彌生）ほんたう？——うそばつかり、

（ジャネット）ほんたうよ彌ツちやん、行つて御覧よ、お前に話があるんだとさ。

（彌生）（つんとして）さう………どうも憚りさま、

（セシル）初子！　（嘲弄的に）ミセス・ローワン！あなた其處で何して居ますか？

（初子）なんにもしては居りません、………

（セシル）そんならあなた、そんな所に默つてつんとして居るのはお客様に失禮です。みんなが愉快に遊んで居るのに、一緒に遊ぶのが嫌だと云ふなら、のこのこ庭先へ出て來ないで、何處かお客様の見えない所へ這入つてらつしやい。あなたの姿が見えるだけでも皆が不愉快な氣持ちになります。

（初子）さうですか、……どうも濟みません、……

初子、輕い眼まひを感じたらしく兩手で額を蔽ひつゝ立ち上り、座敷に上つてテイー・テーブルの上に置いてある聖書を取り、それを抱へながらヹランダの角を曲つて奥の方へ去る。

フレデリツキ奥から出て來る。

（フレデリツキ）（二人の様子をヂロヂロ見ながら）ジヤネツト！　さあもう一番僕と行かう！
（ジヤネツト）エキスキユース　ミー――今一と休みしてるんだから。
（フレデリツキ）まあそんな事を云はないでさ、（後ろに廻つて無理に抱き上げようとする）
さあお立ちお立ち！
（ジヤネツト）（身をもがいて頓興な聲で）あれエ！　擽ぐつたい！　いやよいやよ！　あれエ――あツはヽヽヽ、何するのよフレデリツキ！彌つちやんに踊つてお貰ひよ！
（彌生）フレデリツキさん、嫌だつてものを惡いぢやないの。そんな人に構はないで此方へ入らつしやいよ！
彌生無理やりにフレデリツキを捕へて奥の間へ連れ去る。ダンス盛んに續けられる。
セシル、ジヤネツトに眼配せして彼女と共に庭へ降りる。二人は今迄初子が居た小卓を挾んで腰かけ、ひそひそと語る。
（ジヤネツト）ねえセシル、お前フレデリツキと喧嘩しちやつた方がいゝよ、さうして彼奴が私の傍へ來られないやうにしておくれよ、ほんたうに厭ンなつちまふわ、毎日毎日うるさくつてしつッこくつて、仕様がありやしない。
（セシル）なあに、フレデリツキは彌生に任して置けばいゝさ、喧嘩をするのも智慧がないから。――己あその積りで彌生を内に置いてあるんだよ。あの女はフレデリツキがお前の傍へ寄つて行くと、ブルドツグ見たいに跳び出して來るんだから。
（ジヤネツト）うふゝゝ、ほんたうにあれはブルドツグね、いくらフレデリツキだつてあの女ぢや可哀さうだ。
（セシル）さう云つたつて、身から出た錆で仕方がないさ。何しろあの女は馬鹿だから、欺されたとなつたら何を仕出來すか分りやしないぜ。フレデリツキも今ぢや後悔して居るだらうよ。
（ジヤネツト）あたしだつて欺されりや何をするか知れないから、その積りでおいで。いゝかいセシル？
（セシル）いゝよ、分つたよ、――まあもう少し待つてくれりやきつと其のうちに出しちまふから。

（ジヤネツト）出す出すツていつ出すのさ？　出すなら早く出しておしまひな、あんな風にして半殺しの目に遭はして置くよりか、早く出してやつた方が當人だつて仕合はせぢやないか。

（セシル）己たちならさう思ふけれど、あの女はさう行かないから困るんだよ。さつきもお前聞いてただらう、――捨てられても何でも己の內に居たいツて云ふ、――あの調子なんだからな。

（ジヤネツト）あれはあんな事をわざと云ふんだよ。いくら無神經だつてまさか女中に使はれて、私たちの傍に居られる譯はないぢやないか。――なあに、お金の千圓もやつて出て行けツて云ひやあ、大人しく出て行くよ。日本人の所へなら、まだあれだつて貰ひ手がない事はないんだから。

（セシル）さううまく行けばいゝんだがね、――どうもあの女は眞面目であんな事を考へて居るんだから、始末に行けない。さうかと云つて、無理に追ひ出すのも何だか可哀さうなやうだし、……………

（ジヤネツト）だつて、あんな無神經な女はさう悲しくもないだらうから、可哀さうだとは思はないツて云つたぢやないか。

（セシル）それもさうだが、無神經なだけに考へると可哀さうだよ。

（ジヤネツト）ふん、そんな事を云つてたらいつになつたら出せるんだい？　出すと極まつたら好い加減に出しておしまひよ。どうせさう都合の好い時はありやしないから。

（セシル）まあ、――實際それもさうなんだ。だから近いうちにきつと極まりを付けるよ、こゝ一と月ぐらゐのうちに。

（ジヤネツト）きつとかい？

（セシル）あゝきつとだ――それからね、此の間お前が欲しいと云つた物を買つてやつて來たぜ。

云ひながらポツケツトから金の頸飾を出す。

（ジヤネツト）（頸飾を受け取つて眺める）あゝ有りがと、――此れはあの、山下町のアーサー・スミスのショオウンドウにあつたのね、（頸にかけて見る）此の間からあたし此れが欲しかつたのよ。

奥の間のダンスが止み、人々歸り支度を始めるらしくざわざわする。「おや、皆さんもう御歸り？　まだいゝぢやありませんか」と云ふ彌生の聲につゞいて、「おゝ、サンキウー、バット　イット　イヅ　トウー　レート」「彌生さん、又參ります、今夜は有りがとございます」など云ふ聲が聞える。ジヤネットその間に頸飾を外して懐に入れる。

（ジヤネット）それぢや私ももう歸らう、——又あした、

（セシル）うん、そこまで送つて行かう、

兩人座敷へ上る。同時に奥の間から一同ぞろぞろと食堂へ出て來る。

（ミスタ、ブラウン）オー、ミスタ　ローソン、アイ　エキスペクト　ユー　アット　スリート　ウマローアフタヌン

・・・・・・・・

（セシル）イエース、サンキユー。ウイ　シヤル　ハヴ　テー　パアティー。

（ワンダ）ね、セシル、きつと入らつしやい、私たちも行きますから。

（ミセス、ブラウン）そしてジヤネット、ミスタ、グルツク、フレデリツク、彌生さん、——みんな行かねばなりません。午後の三時に。プリース　ドント　ミツス　ゼ　タイム。

（彌生）そして明後日の晩は又うちでダンスよ。

（ミスタ、ブラウン）イエース、アイ　シヤル　トゥライ　チークダンス　ウィズ　ヤヨイサン。あツはゝゝ

一同笑ひながら庭に降りてセシルと彌生に握手をし、「グッド　ナイト」を告げて下手へ去る。セシルと彌生も其の後に附いて行つてしまふ。

短き間。やがてヱランダの奥から初子が出て來る。卓上のコツプや皿を片附け、奥の間の電燈を消して襖を締め、ティー・テーブルの上にスタンドを運んで、それに明りを付ける。それから、籐椅子に腰かけ、持つて來た聖書を開いて、極く小さな聲で音讀する。長き間。彌生が下手から戻つて來る。醉つたやうな風つきで、どつかりとヱランダに腰を下して考へて居る。初子は尚暫くの間熱心に讀んでから、静かに顔を上げて眺める。

（初子）彌ツちやん、どうしたの？　何處へ行つたの？
（彌生）ちよいと其處まで。――フレデリツキを送つて行つたのよ。
（初子）さう。……
（彌生）さう云へば今、そこの海岸でセシルさんに會つたつけ。ジヤネツトと二人で何かぺちやくちやしやべつてたわ。
（初子）……（何か云はうとして、下を向いて默つてしまふ）
（彌生）どれ、あたしお風呂へ這入つて來よう、――もうぬるくなつちやつたか知ら。
（初子）よごれて居るけれど、まだ這入れない事はないだらう。
（彌生）さう、それぢや這入らう。

彌生、くさくさした樣子で溜息をついて立ち上り、ヹランダを上手へ去る。
初子、再び聖書を讀み始める。短き間。…………幕。

第二幕

第一幕と同じ場面。數日を經た或る日の午過ぎ。
食堂はきれいに片附き、つきあたりの襖は締まつてゐる。庭の生垣の向うには青い空と海が見える。フレデリツキと彌生とが籐椅子に並んで腰かけてゐる。フレデリツキは海水着の上に大きなタオルを纏ひ、彌生の膝の上にある英語の本を覗き込んでゐる。彌生は第一幕と同じやうなメリンス友染の單衣を着て、甘へるやうにフレデリツキに凭れかゝりながら、其の本を朗讀する。――

（彌生）
"At King-te-chin in China
At King-te-chin in the far East of the Eighteen Provinces of China
Where all day long the porcelain factories belch corded smoke,

And all night long the watch-men, striking
the hours on the'r lizard-skin drums," ……………………………………

(フレデリツキ)そうそう、中々お前は發音がいゝ。

(彌生) (二三行飛ばして先を讀む)

"At King-te-chin in the heart of brooding China,
Lives Chow-Kiou,
White as milk in a tazza cup,
Red as a pear-tree just dropping its petals,
Happy as the Spring-faced wind.
Chou Kiou," ……………………………………

ちよいと… 何よ此のチユウ・キユウツて云ふのは？――

"Chou-Kiou,
For whom the wild gese break their flight,
And fishes seek the darkness of thelower waters.
Chou-Kiou," ……………………………………

（フレデリツキ）チユウ・キユウツて云ふのは支那人の娘の名なんだよ、まあ後でゆつくり讀んで御覽。
（彌生）それぢや此の詩は支那人が書いたの？
（フレデリツキ）いゝや、アミ・ローエルと云ふ亞米利加の女詩人が書いたのさ。ちよいと變つた面白い本だよ。
（彌生）むづかしい？
（フレデリツキ）なあに、そんなにむづかしかない。
ジヤネツトとセシル、海水服を着けて奧の間から出て來る。
（ジヤネツト）（エランダに出て）セシル！　私のスウイミング・シユウを捜しておくんな。
（セシル）オーライト。
庭に降りて椽の下から游泳靴を捜し出し、彼女の足に穿めてやる。
（彌生）（わざと二人に氣が付かぬ風をしながら、フレデリツキに）さう、どうも有りがと、それぢや暫く借りて置くわよ。むづかしい所があつたら敎へてね、
（フレデリツキ）（横眼でチラとジヤネツトを見つゝ）うむ、………
（セシル）（靴を穿かしてやり、立ち上つて二人を見る）何だい、それは？
（フレデリツキ）アミ・ローエルのリジエンヅさ、君讀んだらう？
（セシル）うん、讀んだ。――彌生、此の間貸してやつた有嶋武郎の「或る女」はどうしたい？
（彌生）えゝ讀んだわ、面白かつたわ、――此れを讀んぢやつたら、「カインの末裔」を貸してね。
（セシル）うん、貸してやらう。――（ジヤネツトを顧みて）どれ、ちよつと一つ浴びて來よう。
（フレデリツキ）此れから海へ這入るのかい？　そろそろみんなやつて來やしないか？
（セシル）なあに、まだ大夫だ、
（ジヤネツト）（庭の生垣の方へ行つて待つて居る）セシル！　早くおいでよ、

云ひ捨てゝ先にスタスタと下手へ去る。セシル直ちに彼女の跡を追うて去る。
（彌生）（二人が居なくなると直ぐ本を伏せて）ね、御覧よ、私が云つた通りぢやないの、――
（フレデリツキ）何が？
（彌生）二人共もうすつかり夫婦氣取りでいゝ氣になつて居るぢやないの。
（フレデリツキ）ふゝん。（不愉快を紛らす微笑）
（彌生）ね、だから駄目よ、あきらめちまつた方がいゝわよ、
（フレデリツキ）何がさ？
（彌生）あなたはまだジャネツトに未練があるのよ、ね、さうでせう？　そんなにとぼけなくたつていゝわよ。
（フレデリツキ）ふゝん、……もう未練なんかありやしないさ。
（彌生）さう？　そんならいゝけれど、未だに何とか思つて居るんだと、馬鹿を見るわよ。まあ、もう一と月も立つて御覧なジャネツトが内へ這入り込んで來て。姉さんは追ひ出されるやうな事になるから。
（フレデリツキ）お前のシスーは承知したのか？
（彌生）承知したつてしなくたつて、さうさせられてしまふわよ。此の間もジャネツトと二人でそんな相談をして居たつけ。
（フレデリツキ）そりや相談はして居たらうが、さうらまくは行くまいと思ふぜ。
（彌生）なぜ？
（フレデリツキ）兎に角ミセス・ローワンは戸籍上米國人になつて居るからな。離縁をするにしても中々手續きが面倒だよ。それにセシルは追ひ出したいと思つても、親父が承知するかどうかな。
（彌生）セシルさんは親の云ふ事なんか聞く人ぢやないわよ、第一あんなに夢中になつて居るんだもの。
（フレデリツキ）だがセシルだつて慾はあるよ、――親父も今ぢや經育で大分財產を作つたと云ふから、喧嘩をしたら追

産が貰へなくなつちまふぜ、あの親父は熱心なクリスチヤンだし、ミセスに對しては同情があるんだから、離緣だなんて云へばきつと怒るだらうだらう。セシルだつて考へて居るさ。

(彌生) けれどお父様はセシルさんが姉さんを貰ふ時には、反對したツて云ふぢやないの?

(フレデリツキ) そりや貰ふ時には反對したさ。けれど貰つて見るとあの通り大人しくつて忠實だもんだから、すつかり親父の氣に入つてしまつたのさ。考へて見るとセシルも勝手な男だよ、貰ふ時には大騒ぎをして、歌麿の初子だとか、浮世繪式の美人だとかつて、己たちにまでさんざのろけたもんだがね。

(彌生) 姉さんもあの時分には少しは綺麗だつたけれど、今みたいになつてしまつちや嫌はれるのは當り前だわ。何しろあの人は教育がないから駄目よ。それに性質がいぢけて居て妙にひねくれた所があるから。

(フレデリツキ) セシルがあんまりイジメるからだよ。だから段々あゝなつて來たんだよ。可哀さうに、追ひ出されたら行く所はありやしないぜ。それに後釜へジヤネツトを入れようとしたつて、あの女の素情が分つて見ろ、とても親父が承知するもんかよ。——まあ、己はさう睨んで居るがね。

(彌生) ふん、さう睨んで内々それを望んで居るのね?

(フレデリツキ) 望んで居ても居ないでも、事實がさうだと云つて居るのさ。邪推をしちやあいかんよ。

(彌生) お氣の毒様! さううまくは行きませんから!— 何と云つたつてセシルさんはジヤネツトを放しツこないわよ、あの鹽梅ぢや遺産ぐらゐ棒に振つたつて驚きやしないから。

(フレデリツキ) ふゝん、(得意げに笑ふ)だがさうなるとジヤネツトの方で何と云ふかな、——遺産がなけりあ喰付いて居たツて無駄だからな。

(彌生) そんな事があるもんか! ジヤネツトだつて本氣で惚れて居るんだもの。

(フレデリツキ) 惚れてるだけなら、何もあんなに結婚をしたがりやしないさ。ジヤネツトの腹は己にはちやんと分つて居るんだ。

（彌生）どんな工合に分つて居るの？　セシルさんには慾で惚れて居て、ほんたうはあなたに氣があるツて云ふの？

（フレデリツキ）まさか、己だつてさう己惚れて居やあしないさ。セシルの方が男ツ振りもずつと上だし、己みたいな醜男は疾うに振られちやつたのさ。

（彌生）ふん、うまく云つてらあ！　振られたつてまだ氣がある癖に！

（フレデリツキ）うそをつけ！　そりやあお前の邪推だよ。

ヱランダの上手から、初子がエプロンを着けて出て來る。

（初子）彌ツちやん、ちよいとお前手傳つておくれ、お茶の支度が間に合はないから。

（彌生）（姉の方を振り向きもせず、面倒臭さうに）えゝ今、

（初子）あの、サンドキツチが出來たからね、切つてお皿へ附けて頂戴。

（彌生）えゝ、今行くわよ。

初子上手へ去る。

（フレデリツキ）どれ、己もそれぢや其の間に泳いで來るかな。

（彌生）行かなくつてもいゝわよ、此處に居らつしやいよ、まだ話があるんだから。

（フレデリツキ）お前早く手傳つておやりよ。獨りであんなに働かして置いちや氣の毒ぢやないか。

（彌生）ぢやあね、今日はゆつくりして行かない？　どうせ晩まで遊んで居たつていゝんでせう？

（フレデリツキ）いや今日は少し、夕方から用があるんだ。

（彌生）何か約束でもあるの？

（フレデリツキ）少し會社の用事があつて忙しいんだ。

（彌生）會社の用事が？――あなたにしちやあ珍しいわね。

(フレデリツキ) 己だつてたまには忙しい事もあるさ。此れでも一人前の技師なんだから、あまり輕蔑してくれるなよ。

(彌生) だけど、會社の用が夜あるなんて可笑しいぢやないの?――どうせロクの用事ぢやぁないんでせう?

(フレデリツキ) いやほんたうだよ、ほんたうに忙しいんだよ。ほら、此れを御覽、(ティー・テーブルの上に置いてある一ポンド入りの藥罎を取つて見せる) 此れは今日會社から持つて來たんだがね、此の藥を使つて實驗しなけりやならない事があるんだよ。今夜のうちに内で試驗をして、明日の朝までにその結果を報告しなけりやならないんだ。

(彌生) 何?その藥は?

(フレデリツキ) 此れは硫酸の濃い奴さ、

(彌生) 劇藥?

(フレデリツキ) あゝ劇藥だね。此れが頬ツぺたへでもはねかゝつたら、顏中火傷したやうに爛れて、皮膚の色が變つちまふね。

(彌生) へえ、いゝ事を聞いた、――それぢやその藥をジャネットの顏へでもぶつかけてやつたら、どうするか知ら?あなたは困る?

(フレデリツキ) 己よりかセシルが泣くだらうよ。

(彌生)あなただつて泣かない方ぢやないでせう? ちよいと其の罎を貸して頂戴(手をさし出す)

(フレデリツキ)(彼女の手を避けながら罎をテーブルの上に戻す)お止し、お止し、うつかり此の藥に觸つたら手が臺なしになつちまふぜ。

(彌生) いゝわ、臺なしになつたつて。あたしの手なんかどうなつたつて、誰も困る人はありやしないわ。――だけど、そんなにいつ迄もジャネットの事ばかり思つてると、私ほんたうにぶつかけてやるわよ。

(フレデリツキ) 止しておくれよ、ぶつかけるのは構はないが、己が飛んだ係り合ひになるからな。

(彌生) ジヤネツトよりか、あなたはセシルさんに打つかけてやりたいの? ねえ、さうでせう?——幾らかくれたら私代りにやつて上げてもいゝけれど。

(フレデリツキ) さうだね、先づ千圓で請け合つてくれりやあ頼んでもいゝね。セシルは男ツ振りが自慢だから、此奴をかけられたら參るだらうよ。——

初子が盆の上に茶器や菓子皿などを載せて出て來る。そしてそれを食器棚に置く。

(初子) 彌ツちやん、濟まないけれどそのテーブルの上をきれいにして、此れを(食器棚の抽き出しからテーブル・クロースを出す) 敷いて頂戴。もうそろそろ三時だから。

(彌生) あゝさうね、サンドヰツチを切るんだつたわね、

(初子) サンドヰツチは私が切つたからいゝの。テーブルの方を手傳つておくれ。

(彌生) さう、

彌生立ち上つてテーブルを拭き始める。初子再び臺所へ去る。

(フレデリツキ) さあ、その間に一つ泳いで來よう、みんなやつて來たら教へておくれ。

(彌生) えゝ、教へて上げるから成るべく近所で泳いでらツしやい、セシルさんの邪魔をしないやうにして。

(フレデリツキ) ふゝん、

フレデリツキ、苦笑ひしつゝ海岸へ出て行く。

彌生、テーブルを拭きながら何か考へてゐる。そしてテイー・テーブルの所へ來て硫酸の罎を取り上げて見る。眼元に意地の惡い微笑が浮かぶやがて其の罎を手早く食器棚の中に隱し、テーブルを拭き終り、テーブル・クロースを懸けて居る。初子が臺所から、もう一と組の茶碗や皿を盆に載せて來る。彌生と二人でそれらの食器に一つ一つ布巾をかけたり、食器棚からコツプや匙を出して列べたり、いろいろお茶の準備をしながら下の會話を續ける。

(初子) あゝ、今日はほんたうに暑い日だね、あたし何だか頭がぐらぐらして、……………ふいと立つと眼まひがして仕樣

がない。……

（彌生）さう？　そりやきつと貧血を起してるんだわ、又此の間のやうに倒れるといけなくつてよ。

（初子）なあにそれほどでもないんだけれど、……

（彌生）サンドキッチはどうしたの姉さん？

（初子）まだ。——お客様が揃つてから持つて來ようよ、蠅が居て仕様がないから。……セシルは海へ行つてるの？

（彌生）えゝ、二人でね、

（初子）あゝ、又何だかぐらぐらする、……

眼まひの發作を感じ、兩手で額をおさへる。短き間。

（彌生）どうしたの？　困つたわね、

（初子）いゝえ、何でもない、……もう直つちやつたわ、

再びものうげに働き始める。

（彌生）姉さん、……何か姉さんはセシルさんに云はれたんぢやないの？

（初子）いゝえ、……なぜ？

（彌生）でもね、そんな事で心配したのでそれが體に觸つたんぢやないかと思ふから。

（初子）なあにあたし心配なんかしてやしないよ、——心配したつてなるやうにしかならないんだから。

（彌生）それぢや姉さんは、もう仕方がないとあきらめて居るのね？

（初子）彌ツちやん、その話は止しておくれ、私はもう何も考へない事にして居るんだから。——人はどうでも、自分さへ正直にして居ればいゝんだよ。さうすれば神様がきつと救つて下さるだらうから。

（彌生）ふん、よくそんな事が云つてられるわね。姉さんだつて私だつて、——みんなジャネットが居るからなんだ。セシルさんもフレデリッキも、何處がよくつてあんな女に大騷ぎをするだらう。

（初子）さう云つたつて仕方がないやね、ジヤネツトさんはあの通り器量よしなんだから。

（彌生）あんな女は西洋人にはザラにあるわよ。

（初子）だけど、あの人たちにはその西洋人のところがいゝんだよ。——ほんとにまあ、西洋人と云ふ者はどうしてあんなに綺麗なのかしら？　色が拔けるやうに白くつて、姿がよくつて、——私なんか恥かしくつて側へも寄れやしない。

（彌生）西洋人だつてあれはラツシヤン・ジユウなのよ、まあ穢多みたいな者よ、

（初子）そんな事はよく知らないけれど、何でも露西亞人だらうぢやないか。

（彌生）だから露西亞のジユウなのよ、ジユウなんて云へば西洋へ行けば誰も相手にしやしないんだ。スカレツト・ホテルのお上さんの兒だつて云ふけれど、ほんとの兒だかどうか分つたもんぢやありやしない。きつとシベリヤあたりから買つて來たんだわ。

（初子）まあ、彌ッちやん、お止し、——そんな事を云ふもんぢやない、聞えると惡いよ。

（彌生）聞えたつて構ふもんか！　ぐずぐず云つたら私彼奴と喧嘩してやるから。うんと彼奴を懲らしめてやつて、世間へ顏向けが出來ないやうにしてやるから。——ほんたうよ。姉さん、そのくらゐな事はしてやつたつていゝんだわ。

（初子）まあ、詰まらない、止しておくれ。——喧嘩なんかしてくれたら、私が仲へ立つて困つてしまふよ。

（彌生）何も姉さんの爲めを思つて云ふんぢやないのよ。私は私でジヤネツトに恨みがあるんだから、——いざとなつたら何をするか分らなくつてよ。姉さん見たいにいぢけて居るのは大嫌ひだから。

（初子）ほんたうにお前は氣が強いんだね。お前の半分も氣が強いと、私も人に馬鹿にされないで濟むんだけれど、……

（彌生）（テーブルの支度を終り、氣を換へて云ふ）姉さん、もう此れていゝの？　まだクリームとお砂糖が來てゐないわ。

（初子）そんな物は私が今持つて來るから、——もうそろそろお客樣が來さうなもんだね。

（彌生）（壁の間の時計を覗いて）もう十五分で三時よ。セシルさんやフレデリツキを呼んで來ませうか？

(初子) あゝ、呼んで來たらいゝだらう、

(彌生) ぢや、ちよいと行つて來るわ。

彌生庭へ降り、海へ出て行く。

初子、臺所へ行つてサンドヰッチや菓子や果物などを二三度に運んで來る。それからそれをテーブルの上に並べ、蠅を追ひのけながら新聞紙を被せ、ほつとした形でエプロンを脱いで籐椅子に腰かける。と、そこに新聞が置いてあるので何氣なくそれを取り上げ、讀むともなく讀んで居る。間。

暫くして、アレキシフが不意に庭先へこつそり步いて來る。

(アレキシフ) 今日は、奥さん、

(初子) 今日は、——まあ、私どなたかと思ひましたわ。

(アレキシフ) (帽子を脱いでハンケチで汗を拭く)大變暑いですね、

(初子) ほんとうに今日は特別ですわ、——まあお掛けなさいまし。

(アレキシフ) 有りがとございます、(ヱランダに腰かける)奥さん、あなた顏色がよくないです。——あなた、體が惡いですか？

(初子) えゝ、少し……

(アレキシフ) おゝ、私大へんお氣の毒です。あなた二三日前、此れでした。(卒倒の身振りをして見せる) あなた此れ、——倒れました。

(初子) まあ、よく御存知ね、

(アレキシフ) ウエイ、私あのう……彌生さんに聞きました。私大へん心配でした。そして私、今日お見舞ひに來ました。

(初子) 有りがたうございます、別に大した事ぢやありませんでしたの。そんな事は私始終あるんですから、……

(アレキシフ) チヨツ、チヨツ、(肩を聳やかす)困りますねえ、大へん悪いです。……

間。

(アレキシフ) (モヂモヂしながら)奥さん、あなた今、獨りだけ?

(初子) えゝ、みんな泳ぎに行きましたの。

(アレキシフ) わたし、……わたし今、海岸であなたの旦那さんを見ました。あなたの旦那さん、あの人と一緒でした。あの、スカレツト・オテルの別嬪さん、……あなた分ります?

さう云つて、ニヤニヤ笑ふ。

(初子) えゝ、ジヤネツトさんも一緒なんですの。

(アレキシフ) あなたの旦那さん、あなたを嫌ひます? そしてあの人を愛します?

(初子) どうですか私そんな事は知りません。

(アレキシフ) ウエイ、あなた知つてます、あなた心配。あはゝゝゝ。

(初子) 私、——心配してゐも駄目ですから、——ただ神樣にお任せして居ます。

(アレキシフ) おゝさう、それ大へんよろしいです。若しも神樣を信じますならば、あなた今に幸福になります。

(初子) ………あゝ、(微かに溜息を洩らす)私——ほんたうに幸福になるでせうか?

(アレキシフ) ほんたうです、奥さん、——あなた今は苦しまねばなりませんです、けれども後に幸福です、私さう思ひます。……

間。初子悩ましげに兩手で顔を蔽ふ。

(アレキシフ) 奥さん、……あなたの旦那さん、あなたに出て行けと云ひますか?………さうではないですか?

(初子) そんな事を云ふこともありますけれど、………でもほんたうに云ふのだかどうか分りませんの。

(アレキシフ) 彌生さん、ほんたうだと私に云ひました。私あの人から聞きました。あなたの旦那さん大へん悪いです、――あなたを追ひ出します、――

(初子) 彌ツちやんがそんな事を云ひまして？

(アレキシフ) ウエイ、私あの人から聞きました。――

(初子) あの人はね、セシルが私を追ひ出して、ジヤネツトさんと一緒になればいゝと思つて居るんです。さうすればフレデリツキさんが自分の方へ來るかと思つて。

(アレキシフ) おゝさう、あなたの妹さんも大へん悪い、みな悪い人ばかりですね。

(初子) ……

(アレキシフ) ……奥さん、ミスタ・ローワンが若しもあなたを追ひ出したならば、あなた何處へ行きますか？あなたのお父さんとお母さん、何處に居ますか？

(初子) もう死んでしまひましたの、私何處へも行く處はありません。

(アレキシフ) おゝさう、あなた大へん困ります、……奥さん、あなた行く處がありませんならば、どうぞ私の内へ來て下さい。私大へん喜びます、どうぞシエ、モア、――私の内へ、――

(初子) (顏色を變へる) アレキシフさん、私を馬鹿にしないで下さい。私はミスタ・ローワンの妻です。私死んでもセシルの側を離れません。幸福でなくつても構はないんです。

(アレキシフ) あはゝゝゝ、奥さん、あなた怒りました？ わたし冗談を云ひました、あなた怒つてはいけませんです。

(初子) アレキシフさん、どうかもう歸つて下さい、お願ひですから。

(アレキシフ) あはゝゝゝ、冗談です、あはゝゝゝ、(立ち上る)

ジヤネツトとセシル戻つて來る。アレキシフが居るので、眼を見交してニヤリとする。

（アレキシフ）（うろたへながら）おゝ、ボンジユール！　ムシユウ・ローワン、

（セシル）（ひどく氣輕な調子で）やあ、今日は。

（アレキシフ）（ジヤネツトに）ボンジユール、マドモワゼル、

（ジヤネツト）今日は、

アレキシフ近寄つて握手を求めさうな樣子をする。兩人知らぬ顏してすたすたと庭を上手へ歩み去る。

（アレキシフ）（何となく氣まずい心持ちで）奧さん私歸ります、………左樣なら。

（初子）（つんとして橫を向いたまゝ）左樣なら。

アレキシフすごすごと行つてしまふ。

直ぐ入れ違ひに彌生、フレデリツキ、ブラウン夫婦、ヷンダ・キリヤム等が庭へ這入つて來る。

（彌生）姉さん、皆さんが入らしつたわよ、今そこで會つちまつたの。

（初子）（立ち上つて）あゝさう、――どうぞ、どうぞ皆さんお上り下さいまし。先程からお待ちして居りましたの。

人々座敷へ上る。海水服のフレデリツキだけは庭を上手へ去る。

（ミスタ・ブラウン）今日は、奧さん、（握手する）あなた大變忙しい、

（初子）まあ、ブラウンさん、ようこそ、――

一同順々に挨拶する。

（ヷンダ）ミセス・ローワン！　セシルさんとジヤネツトさんはどうしましたの？

（初子）あゝ今參ります。今まで泳いで居たもんですから、ちよつと風呂場へ參りましたの。（彌生に）ねえ、彌ツちやん、私今お茶を入れたり何かしなけりやならないから、その間皆さんに奧で待つて居て頂くやうにね。

（彌生）あゝさう、それぢや皆さん、此方で暫く待つて居て下さいな。直きに支度が出來ますから。

彌生、一同をつれて奧の間に這入る。初子は食器棚から紅茶の罐を出して、土瓶に紅茶を入れて居る。

ジヤネツトとセシルとが服裝を改めて上手エランダから出て來る。

(セシル) もうみんな揃つたんだね、

(ジヤネツト) あゝ、泳いだせゐか、私お腹が減つちやつたわ。

(セシル) さうだらう、己も御同樣だよ、——初子! 早くして下さい!

(初子) えゝ唯今、

云ひながら、もう一つとの土鑵に紅茶を入れる。

(ジヤネツト) (奥の間を覗いて大きな聲で) ヷンダさん來て居る?

(ヷンダ) えゝ、

(ジヤネツト) あなた昨夜、グリー・クラブのジヤズ・バンド聞きに行つた?

(ヷンダ) えゝ、あなたどうして來なかつたの?

(ジヤネツト) 私? ちよつと用があつたもんだから、………

云ひながら奥の間へ這入る。セシルもその後に附いて行く。

フレデリツキ、ワイシヤツにパンツを着けて出て來る。籐椅子の處へ來てそこに脱ぎ捨てゝあつた上衣を着る。ふと、藥鑵が見えないのに心付いて、キヨロキヨロしながら考へて居る。初子、土鑵を二つ提げて臺所へ湯を注ぎに行く。

(彌生) (奥から顏を出す) 姉さん、まだ?——

(フレデリツキ) (眼配せしながら小聲で) ちよいと、ちよいと來ておくれ。

(彌生) 何よ?

(フレデリツキ) (恐ろしく眞顏になる) ちよいと、——ちよいとまあ此處へ來てくれ。

(彌生) 何よ? 何だツたらさ、——

不承無精に傍へやつて來る。

(フレデリツキ) お前、あれを何處かへしまつたかね？

(彌生) えゝ、しまつたわ、

(フレデリツキ) 何處へ？

(彌生) 何處だつていゝぢやないの、後で返して上げるから。

(フレデリツキ) お前、まさかあんな物でいたづらするんぢやないだらうな？

(彌生) ふゝん、そんなに心配しないだつていゝわよ。

(フレデリツキ) 詰まらない事をすると、己あ決して承知しないぞ。

(彌生) 承知しなけりやどうでも勝手になさいな、どうせ私はあなたに嫌はれて居るんだから。

(フレデリツキ) 馬鹿！ お出しッたら！

(彌生) いゝえ出さない。いづれ返して上げるけれど、もう少し預かつて置くわ、あなたのほんたうの心持ちが分るまでは。

(フレデリツキ) お前、己を脅迫する積りなのかい？

(彌生) 脅迫なんかしやしないわよ。脅迫されて居ると思ふのは自分に惡い事があるからなんだわ。あなたが人を欺したりしなければ、何も心配な事はないのよ。——ね、分つたでせう？ 私だつてそんな亂暴な事はしやしないから、まあ安心して居らッしやい。

(フレデリツキ) 分つた、分つた、もうお前には降參したよ、

(彌生) いーッ (本心から憎々しげに齒を剝き出して睨める)

(フレデリツキ) よ、お返しお返し、……お前の云ふ事は何でも聽くから、……本當に己が惡かつたから、……後生だから、……

初子土瓶を提げて戻つて來る。フレデリツキ仕方なしに默つてしまふ。

(初子) 彌ァちやん、お茶が這入つたから皆さんをお呼びしておくれ。

(彌生) あゝさう、(奥を覗いて) 皆さん、お待ち遠さま、さあどうぞ、——

一同出て來てテーブルに就く。正面にジャネツト、その向つて右側にセシル、左側にフレデリツキが腰かけるやうになる。初子と彌生とは、一番右の食器棚の前の椅子を占める。

フレデリツキは絶えず不安な様子をして居る、そして内々彌生の動作に眼をつけて居る。

(彌生) (初子と共に一同へ茶を注ぎながら) さあ、皆さんどうか上つて下さい。サンドヰツチのいゝ方はサンドヰツチ。それからパイのいゝ方はパイ、、

(ミスタ・ブラウン) 私兩方いゝです、兩方たべます、あはゝゝゝ、

(セシル) サンドヰツチは何があるんだね？

(彌生) チーズにソセエジにキウカンバーにサラダ、………どうぞ孰れでもお好きな物を取つて下さい。

(ミセス・ブラウン) 奥さん、此のお茶は大さう結構ですわ、——

(初子) まあ、さうでございますか、………(淋しく笑ふ)

(彌生) ウヰリヤムさん、あなたパイはいかゞ？

(キリヤム) イエース サンキユー、それアツプル・パイですか？

(彌生) ノー、ストロベリーに櫻ん坊よ、あなた孰方がお好き？

(ウヰリヤム) おゝ、ストロベリー、プリース。

(ヅンダ) まあ、此のパイはシナモンが利いて居て大へんおいしい、——奥さん、あなたが料理しましたの？

(初子) えゝ、何ですかほんたうに下手ですけれど、………

(ミスタ・ブラウン) 下手ではないです、奥さん大へん上手です。

(セシル) えゝさうです、ミセス・ローワンは料理が非常に上手です。(わざと片言交りに云ふ) 私の奥さん、外の非駄目、ただ料理だけ、大へん上手、コックさんのやうです。

(ジヤネツト) お止しよ! アレキシフの眞似なんかするのは。

一同初子に遠慮して低く笑ふ。

(彌生) ジヤネツトさん、まあ何を呻つてるの? 物をたべてる間だけ唄はお止しなさいよ。

ジヤネツト、サンドヰッチを行儀惡く喰ひかいてたべながら、爪先で床を蹈みつつ小聲で鼻唄を呻り始める。

ジヤネツト返事をせず、嘲けるやうな眼でチラリト彌生を見、そして又平氣でつづける。

(フレデリツキ) ミスタ・ブラウン、あなたいつ上海へ立ちますか?

(ミスタ・ブラウン) 明日、明後日、………明後日の次ぎの日立ちます。朝の八時。

(フレデリツキ) ウイズ　ミセス　ブラウン?

(ミスタ・ブラウン) さうです、そして上海に一ケ月、香港に一ケ月、九月日本に歸ります。

(セシル) 上海は何處のホテル? アスタ・ハウス?

(ミスタ・ブラウン) ノー、パレース・ホテル。あなた上海知つてます? (ジヤネツト頷く) 此處ナンキン・ロード、(手で圖を描きながら) 此處バンド、此のコーナーにパレース・ホテルあります。

(ジヤネツト) えゝさう、私知つてるわ。

(ヴンダ) それぢや九月まで會へないんだから、あしたの晩みんなで何處かへ行きませうよ、ねえセシル!

(セシル　さうだ、それがいゝや、明日みんなで花月園へ行かうぢやないか。

(ミセス・ブラウン) おゝ、アイム　ベリ　ソオリー。明日の晩はテンプル・コートのボールに約束がありますの。

(ミスタ・ブラウン) さうです。——明後日の晩なら、花月園よろしいです。

(彌生) あら、私も行きたいわね、セシルさん、行つちやいけない?

(ジヤネツト)(獨り語のやうに)明後日の晩はスペシヤル・ダンスだから、夜會服のない者は這入れやしない。――ねえ、ヷンダさん、さうぢやなかつた？

(ヷンダ)えゝさう、たしかさうよ、――

(ジヤネツト)着物がなくつて斷はられたりなんかすると、ほんとにいゝ耻ツ晒しね。よくそんなのがあるけれど、‥

‥‥‥‥

彌生、むつとして沈默する。

(ミセス・ブラウン)さう云へばミスタ・グルツクはどうしたでせう。あの人も誘はうぢやありませんか？

(ジヤネツト)駄目よ、グルツクさんはセシルと喧嘩しちやつたの。そしてセシルばかりぢやない、私たちの事をひどく惡く云つてるんだつて。

(セシル)さう、明後日は日曜だからね、日曜にダンスに行くなんて云やあ、ミスタ・グルツクは眼を丸くして怒りますよ。

(ミセス・ブラウン)まあ、どうして？

(セシル)あの男は變た男でね、耶蘇教に凝り固まつてるもんだから、安息日には內ン中にぢつとして居なけりやいけないツて主義なんです。兎に角あれは變つて居ますよ、我れ我れのやうな不良な男女とは、もう附き合つてくれないさうです。あはゝゝゝ、

(ジヤネツト)何云つてるんだい！　ミスタ・グルツクは僞善者だよ、ねえ、さうぢやないか。あんな人とはもう此方でも附き合つてやらないがいゝよ。

(ミスタ・ブラウン)安息日に遊んだらなぜ惡いですか？　おかしいですね、私あの人馬鹿だと思ひます。

(彌生)(ふいと云ひ出したやうに)クリスチヤンは日曜に休むけれど、チユウの安息日は土曜日なのね。あれはどう云ふ譯なんだらう、――フレデリツキさん、あなた譯を知つてる？

（フレデリツキ）（イヤな顔をする）知らんね、僕は。

（彌生）横濱にはジユウの商人が澤山居るのよ、そして土曜日にはみんな店を閉めてしまふの。――ジャネットさん、あなた譯を知つてるでせう？　知らない筈はないんだから。

　さういつて、ちつとジヤネツトを睨みつける。一同顏色を變へる。短き間。

（ジヤネツト）（悠々と櫻ん坊を咬みながら彌生に冷やかな一瞥を投げ、急にセシルに向つて云ふ）セシル！　お前あのポルチユギースを出しちやつとくれよ、傍に居られると汗ツ臭くつて氣持ちが惡いから！

（彌生）何だつてジヤネツト！　もう一遍云つて御覽。

（ジヤネツト）何だつていゝんだよ！　お前なんか引ツ込んどいで！　（ぷつと櫻ん坊の種を吐きかける）

（彌生）畜生！

　いきなり立ち上つて珈琲茶碗を打つける。同時にジヤネツトも猫のやうにすばしつこく身を起し、皿やコツプを手當り次第に猛烈に投げつける。「イフ　ユー　ゴー　オン　フアイテイング、ゲツタウト！」と誰かが叫ぶ。「止せ止せ！」「何亂暴するんだ！」などゝ云ひながら一同頻りに止めやうとするが、餘り勢が激しいので制し切れない。彌生、隙を覗つて身を屈めるとたんに食器の棚の下から硫酸の壜を取り出し、それを振り上げて向つて來る。

（フレデリツキ）あツ、ジヤネツト！　あぶない！硫酸だ硫酸だ！

　狂氣の如くジヤネツトに抱き附き、身を以て彼女を庇ふ。

（彌生）フレデリツキ！　畜生！　なぜ退かないんだ！さあ、ジヤネツトをお出し！　ジヤネツトを此處へお出しツたら！………シベリヤ生れのジウなんかに馬鹿にされて溜るもんか！　さあ！　邪魔をする奴にや誰にだつて打ツかけてやるから！

　云ひながら壜の栓を拔き、瞳を据ゑて狙ひを付けつつジリジリと詰め寄る。フレデリツキとジヤネツト眞青になる。セシル後ろから飛びかゝつて彼女の肘に縋る。

(セシル)(哀願するが如き調子で) 彌生！ お前何するんだ！ 後生だから止してくれ！ ジヤネツトを勘忍してやつてくれ！……彌生！ 止してくれツたら！

初子、此の場の騷ぎに再び眩暈を感じたらしく、喧嘩の始めからぐつたりと椅子に凭れて眼をつぶつて居る。そして此の時ふらふらと立ち上り、平氣で彌生の傍によつて彼女の手にある罎を攫む。

(初子)(落ち着いた穏やかな口調で) 彌ツちやん、お前こんな物を持つてどうするんだよ、皆さんに御心配をかけちや濟まないぢやないか。さあ、私におよこしなさい、さあ、彌ツちやん、――

云ひながら、それが劇薬であるのを知らないらしく大膽に奪ひ取らうとする。

(セシル) 初子！ 馬鹿な事をするな！ あぶないツたら！

彌生、爭ふ拍子に自分が硫酸を浴びさうになり、思はず手を放す。初子、力餘つて罎を持つた手を後ろへ跳ね返す。そのはずみにさつと藥液が迸り出てセシルの顔へ一面にかゝる。セシル「あつ」と叫びながら打倒れる。

(初子)(罎を持つたまゝ夫の傍に跪く) あなた、どうなさいましたの？ 藥が眼へでも這入りましたの？……まあ！ (顔を覗き込んで始めてびつくりする) それぢや此の藥は……

(セシル)(呻きながら怒號する) 馬鹿！

いきなり罎を取つて初子の顔へ投げ付ける。

(初子)(滿面に藥を浴び、氣が遠くなつて微かな聲で) あゝ、濟みません、濟みません、

さう云ひながら失心したやうに突つ伏す。人々恐る恐る傍へ寄つて來る。

(ジヤネツト) どうしたのセシル！ 藥が顔へかゝつちやつたの？

(セシル) ジヤネツト！ 今己の顔を見てくれるな、彼方へ行つてくれ！

(ジヤネツト)(ちよいと覗いて見て薄氣味惡さうに顔を背け、フレデリツキに囁く) もう直らないかしら？

(フレデリツキ) うん、……まあ直るまいね、

（彌生）（昂奮して獨語のやうに繰り返す）馬鹿！　姉さんの馬鹿！………眼ツかちにでも跛ツ缺けにでもなるがいゝや！　自分が餘計な手出しをするから悪いんだ！　馬鹿！　大馬鹿！
それから力なく椅子に腰かけ、氣抜けがしたやうにぼんやりしてしまふ。………幕。

第三幕

第一場

場面前と同じ。第二幕より三箇月ほど過ぎて居る。秋の夜の十一時頃。その鈍い灯影を横顔に受けて、ぢつと頬杖をついたまゝ、セシルが深い笠の附いた電燈のスタンドが、中央の卓の上に据ゑてある。うす暗いのでよく分らないが、その顔には恐ろしいひツつりとどす黒い斑點が出來て居る。短き間影像のやうに身動きもせずに居る。
初子が奥の襖から出て來る。彼女も同じやうに醜い相に變つてゐる。

（初子）（恐る恐る聲をかける）あなた、もうお休みになつたらいかが？………
（セシル）………（矢張りぢつと動かずに居る）
（初子）ねえ、昨夜もおちおちおよらなかつたやうですから、………
（セシル）………
（初子）あなた、………もう十一時過ぎましたから、………
（セシル）うるさいから默つて居て下さい、寝たければ先へ寝たらいゝです。
（初子）私は寝たかありませんけれど、………

間。初子、テーブルの上に置いてあつた佛蘭西刺繡の道具を取り、夫の傍に腰かけてしよざいなさゝうに刺繡を始める。

（セシル）初子、――

（初子）はあ、

（セシル）あなた彼方へ行つて下さい。そんな見ツともない顏を私の前へ出さないがいゝ。

（初子）はあ、

立ち上つて籐椅子の方へ行き、そこに腰かけて、覺束ない明りの下で猶も刺繍を續ける。やゝ長き間。

垣根の外を人影が二つちらちらする。立ち止つてそつと家の中を覗き、やがて聲をかける。

（彌生の聲）今晩は、………姉さん、

（アレキシフの聲）今晩は、………まだ寢ないですか？

（初子）まあ、アレキシフさん、………今時分どちらへ？

（彌生の聲）今こゝを通つたらね、明りが見えたもんだからまだ起きて居るのかと思つて、聲をかけたの。這入つてもよくつて？

（初子）えゝあの、――（セシルの顏色を窺ひ、躊躇する）

（彌生の聲）セシルさんはもうお休み？

（初子）いゝえ、まだ、――

（彌生の聲）さう、――ちよつと這入つてもよくつて？

（初子）（仕方なしに）えゝ、

彌生とアレキシフとが連れ立つて庭へ這入つて來る。二人はすつかり夫婦氣取りである。彌生は金のかゝつた、けばけばしい洋装好みのなりをして居る。

（初子）今晩は、――何處かへ行つていらつしつたの？

（アレキシフ）ウエイ、今夜わたしたち。東京へ行つて來ました。

（彌生）帝劇へ露西亞のオペラを見に行つたもんだから、大變おそくなつちまつて今歸るところなの。これでも一と踊見殘して來たのよ、ねえあなた、――

（アレキシフ）ウエイ、しかし私たち充分見ました。

（初子）まあ、それはようござんしたわ、

さういつて、又氣兼ねをするらしくチラリとセシルを見る。セシルは二人がやつて來てから成るべく顏を見られまいとするやうに。

暗い方へ首を向けてゐる。

（彌生）（セシルを見て）セシルさん、今晩は、

（アレキシフ）今晩は、ムシユウ・ローワン、

セシル、默つてうなづく。

（彌生）まだ寢ないんですか？

（セシル）うん、

（彌生）（なだめるやうに）もう好い加減に寢たらいゝわ。

（セシル）………

垣根の外を、男の聲と女の聲とが唄をうたひつゝ通り過ぎる。唄が次第に微かになりながら暫く聞える。セシルぢつと耳を澄ます。

（彌生）あゝ、………あれはフレデリツキにジヤネツトだわ。今夜のオペラの唄をうたつてるんだわ。

（アレキシフ）ウエイ、………あの人たち、今歸ります。

（彌生）さうよ、きつと、（初子に）今夜私たち、帝劇で二人に會つたの。

（初子）（ハラハラしながら）あら、さう、

（彌生）そして、歸りの電車も一緒だつたの。――一緒どころか、つい私たちの鼻の先に腰かけてながら、とうとうしまひまで知らん顏をして、一とツ言も口を利かないのよ。まあ、何てづうづうしい人たちなんだか、………

セシルふいと立ち上つて。座に堪へざるもの丶如く奥の間へ行つてしまふ。彌生氣が付いて言葉を控へる。

（初子）あの、セシルの前であの人たちの名前を云ふといけないんだから、此れからは氣を付けてね。

（彌生）さう？――セシルさんはまだジャネットの事が忘れられないのかしら？

（初子）そりや、忘れては居るんだけれど、矢つ張り名前を聞かされると好い氣持はしないんだよ。あの人の身になつて見れば隨分口惜しいだらうからね。

（彌生）口惜しいと思ひ出したら、私だつてどんなに口惜しいか知れやしない。そりやあの時は私もセシルさんも惡かつたけれど、始めツからの事を云ひやあ、あの二人の方が私たちより惡いんぢやないか。だいに警察ぢや私とセシルさんを罪にしといて、あの二人を放つて置くなんて、そんな馬鹿な話があるもんぢやない。

（アレキシフ）彌生さん、あなた、どうぞその話止めて下さい。………（初子に）奥さん、私ほんたうに困ります、此の人いつも此れを云ひます。

（初子）ほんたうよ彌ツちやん、もう其の話は止しておくれ。

（彌生）私、考へるとフレデリツキの奴が憎くツて憎くツて、顏を見たら打ん擲つてやろうと思つた事もあるんだけれど、でももう此の頃ぢやそんな事は思つちや居ないわ。あんな人間を相手にするだけ損だと思つて、憎いなんて事は忘れるやうにして居るの。

（初子）さうだとも、ほんたうにそれがいゝんだよ。セシルだつてそれは分つて居るんだから、そのうちにはきつと氣持さが直つてくれるよ。ただね、あの人たちが少しは遠慮してくれるといゝのに、あゝやつて此れ見よがしに此の近所を出歩くもんだから、それで時々思ひ出すんだよ。私いつそ、アメリカへでも連れて行つてしまひたいと思つたんだけれど、二人ともこんな風をしてまさかさうも出來ないもんだから、………

（彌生）なあに、此方で逃げ出さなくつたつて今に向うで逃げ出すわよ。近いうちにあの二人は上海へ行くんだつて。

（初子）さう？　ほんたう？

（彌生）さうだつて。そんな事があるわ。――きつと此の近所に居たたまらなくなつたのよ、何ぼ人間がづうづうしいからツて、あゝしてのめのめと居られる譯がないぢやないか。上海へでも何處へでもさツさと行つちまふがいゝさ。
（初子）あの人たちは私たちと違つて、何處にでも廣い世間があるんだから、本當にさうしてくれるといゝ、さうしたらセシルだつて、今更悧いも口惜しいもありやしないんだけれど。
（彌生）だからさうなれば、何も此方で逃げ出す事なんかありやしないわ。私たちもずつと横濱に居る積りだから、姉さんたちも此處の家に居らつしやいよ。ねえ、さうした方がいゝわ。セシルさんだつて、さう云つちや何だけれど、亞米利加へ歸つたところでやつぱり肩身が狹いんだから、それよりかまだ日本に居た方がいゝと思ふわ。さうして姉さんと仲好く暮らすやうにしたらいゝのに。――
（初子）（伏目がちに）さうなれば私、………セシルには濟まない事をしたけれど、それより外に望む事はないんだよ、………さうして一生、………死ぬまで暮らす事が出來ればそれが一番仕合はせなんだから。………
（アレキシフ）奥さん、あなたきつと幸福になります、ミスタ・ローワンあなたを愛します。私さう思ひます。あなたそれを信じなければいけませんです。神樣はあなたを捨てませんです。
（初子）はあ、私信じて居りますの。
（彌生）セシルさんは此の頃どう？　少しは姉さんに優しくする？
（初子）いゝえ、………前よりも一層根性がねぢけて、意地が惡くツて仕樣がないの。………だけどそれもまあ今のうちは仕方がないわ、どんな人だつてあんな目に遭へばさうなるだらうから。
（彌生）私なんか一と月も監獄へ入れられたつて平氣だつたけれど、セシルさんには辛かつたと見えるのね。男ツて者

はさうなると案外弱いんだから。

(初子) ほんたうに、彌ツちやんのやうだといゝんだけれど、………セシルはあの通り見え坊だからね。此の頃ぢやめつたに訪ねて下さる人なんかないけれど、たまに誰方か來て下さつてもこそこそと奥へ隱れてしまふし、一と足だつて門の外へ出る譯ぢやないし、一日内に閉ぢ籠つて居て、一と言も口を利かない事があるの。だけど、出て來てからまだ一週間にしきやならないんだから、それも無理はないと思ふわ。きつとそのうちに追い追いと直るわ。

(彌生) さうよ、きつと直るわ。セシルさんに取つちや、何と云つたつて姉さんより外賴りにする人はないんだもの。

(アレキシフ) (時計を出して見る。) 彌生さん、大へんおそい、十一時半です。——

(彌生) あら! もうそんな?

(アレキシフ) ウエイ、私たち、歸らねばなりませんです。

(彌生) 姉さん、それぢや又來るわ。

(初子) あゝ、いろいろほんとうに有難う。

(彌生) セシルさんにも宜しく云つてね、

(初子) あゝ、今にもう少し機嫌でもよくなつたら、ちよいちよい遊びに來ておくれな。——アレキシフさん、どうかあなたも入らしつて下さい、私ほんたうに、彌ツちやんがたつた一人のきやうだいなんですから。

(アレキシフ) ウエイ、よろしいです。私やはり同じ事、私日本にたつた一人、私の國露西亞今ありませんです、日本わたしの國同じ事、そして彌生さん私の妻。

(彌生) 姉さん、それぢやお休みなさい、

（アレキシフ）お休みなさい、奥さん、

（初子）お休みなさい、

アレキシフ、初子と握手し、彌生と腕を組んで去る。

初子、襖の方へ行き、そこを明けて奥の間を覗く。

（初子）あなた、もうお休みになつたの？――

間。返辭がない。

（初子）あなた！　何處に居らつしやるの？　あなた！　セシル！

云ひながら奥へ這入り、間もなく戻つて來る。

（初子）まあ、何處へ行つたんだらう、セシル！　何處？　返辭をして下さい―

ヹランダの上手へ行き、直ぐ戻つて來て庭へ降り、垣根に身を寄せて夜の闇を見る。

（初子）セシル！　セシル！

頻りに叫び續けつゝ遂に庭から外へ出て行く。遠い海岸の方で、夫の名を呼ぶ彼女の聲が暫く聞える。それが次第に消えると共に舞臺暗くなる。

第二場

スカレツト・ホテルのジャネツトの部屋。――向つて左側の壁に寢臺、右側にドーア、後方に窓二つ、窓と窓との間に化粧臺、臺の上

花瓶、壁間に裸體畫の額が懸つてゐる。天井に眞紅の笠のかゝつた、赤い電燈がともつて居るので、部屋全體が薄紅く見える。

時刻は直ちに第一場に續く。ジヤネツトがナイト・ガウンを着て寐臺に腰かけ、煙草を吸つてゐる。フレデリツキはタキシード姿で帽子を阿彌陀に被、片手に外套を抱へて細身のステツキを衝きながら、部屋の中を往つたり來たりする。

（ジヤネツト）いゝぢやないか、泊つて行つたつて。

（フレデリツキ）今日は一旦歸るとしようよ、さう遊んでばかりも居られないから。

（ジヤネツト）なぜ？　何がそんなに忙しいんだい？

（フレデリツキ）いろいろ用が溜つてるんだよ、立つ迄にすツかりそいつを片附けて行かなけりやならないからな。

（ジヤネツト）いくら忙しいツたツて夜は差支へないぢやないか？

（フレデリツキ）ところがさうは行かないんだよ、晝間になると頭がボンヤリして睡くツて仕樣がないんだ。何しろ此處ンところ毎晩だからな。

（ジヤネツト）ふん、あんまり惚れられちや迷惑かい？

（フレデリツキ）どう致しまして！　あはゝゝゝ。

（ジヤネツト）それぢや明日の晩は來る？

（フレデリツキ）うん、明日は來るよ、今夜一と晩だけ、――一と晩ぐらゐゆつくり寢なくつちや遣り切れないから。

（ジヤネツト）ぢや、勝手におし！　さツさとお歸り。

（フレデリツキ）おい、怒つたのかい？　怒つちやいかんよ。――だから早く上海へ行かう、その積りで己はせツせと支度をしてゐるんだよ。

(ジヤネツト) 行くのはいゝけれど、うちの太ツちよの方はどうしてくれるんだい？ お金をやつてくれなけりやとても私を放しやしないよ、逃げて行つたつてきつと上海へ追ツかけて來るから。

(フレデリツキ) 分つてるよ、立つ迄にはちやんと話を附けて行くよ、――それからお前のスティーマー・トランクは明日の朝屆く筈だぜ、昨日鞄屋へ頼んどいたから。

(ジヤネツト) トランクばかり屆いたつて、お金を早くしてくれなけりやしようがりやしない。セシルの方がお前より餘つぽど氣前がよかつたツけ。

(フレデリツキ) 馬鹿にするない、己だつてさう見くびつたもんぢやないんだ。

(ジヤネツト) あゝ、ほんとに早く行つちまひたい、もう横濱なんか嫌な事ツた。――

(フレデリツキ) 今夜のやうな事があるからな。

(ジヤネツト) 何さ？ 今夜のやうな事ツて？――私あんな女は恐かないよ、向うが平氣なら此方だつて平氣なもんさお前は恐いだらうけれどね。

(フレデリツキ) いや、己は實はぎよツとしたよ、つい此の間牢から出て來たばかりだのに、あんまり意外だつたからな。

(ジヤネツト) さう云へばお前あのなりを見たかい？ 一體まあ何てんだらう、まるで氣違ひぢやないか。あれであの爺と一緒に平氣で廊下を歩いてゐるんだから、馬鹿ほど恐ろしい者はありやしない。

(フレデリツキ) ふん、全くだね、だがあれで己も助かつたよ。あの馬鹿の事だから、監獄を出たら何をやり出すか分らないと思つてたんだが、出ると直ぐにあの爺を摑まいたんだから驚くぢやないか。尤も孰方が摑まへられたのか分

らんけれどね。

(ジャネツト) きつと何だよ、馬鹿は馬鹿なりに考へたんだよ。あんな爺でもなけりや誰も相手にする者はありやしないから、丁度似合ひの夫婦だよ。世の中ツてものはよく出來てらあ。

(フレデリツキ) あはゝゝゝ(笑ひながら腕時計を見る) 冗談ぢやない、もう十二時だ、それぢや明日の晩來るぜ。

(ジャネツト) あゝきつとだよ、來ないと承知しないよ。

フレデリツキ扉を明ける。ジャネツト戸口へ行き、ドーアの蔭で彼を抱きしめる。

(ジャネツト) それぢや明日の晩、――

(フレデリツキ) あゝきつと、

フレデリツキ去る。

ジャネツト化粧臺に腰かけてちよつと顔を映して見、それから寢臺に這入り、仰向けになつて煙草を吸ひながら、英語の繪入雜誌をひろげて見る。が、直ぐに又それを放り出して眠ながら煙草を灰皿に捨て、手を伸ばして枕もとの壁にある電燈のスヰッチを切る。

短かき間。カタリと云ふ音がして扉が明く。ジャネツト、音がすると同時にスヰッチを捻り返して、すつくり身を起す。

(ジャネツト) 誰?――(部屋の外に立つて居る人影を認め、俄然として金切聲を上げる)

あツ、セシル! 誰か來てくれ!

セシル驅け込んで來て手早く扉をしめ、寢臺を降りて逃げ出さうとするジャネツトの前に倒れるやうに跪き、兩手をひろげて彼女の膝に縋り着く。ジャネツト寢臺に臀餅をつく。

(セシル) ジャネツト! 後生だ! 大きな聲を出さないでくれ! 己は決して亂暴な事をしに來たんぢやない。己は

お前に賴みがあるんだ。……なあ、ジヤネツト！　お前定めし厭だらうが何卒己を助けると思つて、……いつかの約束を聽いてくれ、もう一度己の物になつてくれ。

ジヤネツト身をすくめて恐ろしげにセシルの顏を視詰める。そして猶も逃げ出さうと悶えつゞける。

（セシル）なあ、ジヤネツト！　己はこんな顏になつちやつたがそれでもお前の傍に居たいんだ。賴むから己と一緒になつて、……此の體を己に抱かしてくれ。（激しく彼の女の全身を搖す振る）此れは己の物なんだ、此の手も、此の腕も、此の脚も、みんな己の物なんだ。フレデリツキが取らうとしたつて此れは己の物なんだ。……

母親が慌しく這入つて來る。酒樽のやうに太つた、眼玉の大きい物凄い女。

（ジヤネツト）（母親を見て急に氣が荒くなる）マアザア！　早く此奴を追ひ出しとくれよ！　畜生！お放しツたらお放しよ！（平手でびちやびちやと擲り付け、足で滅茶滅茶に蹴る）お前なんかにや用はないから出て行けツたら！

（母親）まあ、ローワンさん、お放しなさいよ、うちの娘を掴まへて何するんだよ、

ジヤネツトを助けて無理やりにセシルを突き放し、二人の間に割つて這入る。

（母親）まあお前さん、一體今時分何處から這入つて來たんだい？　用があるなら晝間おいで。（云ひながらつくづくとセシルを見る）尤も其の顏ぢやあ、晝間來られても困るけれどね。

（セシル）お上さん、何卒ジヤネツトを僕に下さい、僕はあの兒を貰ひに來たんだ、欲しけりやお金は幾らでも上げるから。

（母親）さうさね、お前さんを旦那にするんぢや、百萬圓も貰はなけりやあなりますまいよ、此の兒が可哀さうだからね。

(ジヤネツト) そんな事を云つてからかつてないで、早く追ひ出しちまつておくれよ。今時分人のうちへやつて來やがつて、づうづうしいにも程があるぢやないか。此の館は己の物だツて、人馬鹿にしてらあ。顔を見ただけでもぞツとすらあ。

(セシル) ジヤネツト！　一緒になつてくれさへすりやあ己はどんな事でも聽く。旦那と思つてもくれないだつてサーヴアントでも奴隷でもいゝんだ。よう、ジヤネツト、己はそれでも澤山なんだ。一緒に外を歩くのが嫌なら己は一日内ン中に居て、お前の顔だけ見て居てもいゝんだ。ジヤネツト！　頼むから己の云ふ事を聽いてくれッたら！　己を可哀さうだと思つてくれッたら！……こんな顔になつちまつたのもみんなお前の爲めなんだと思つて、……

(ジヤネツト) 何だつて？　私がお前をそんなにしたつて？

(母親) ローワンさん、お前さんまあ飛んだ事を云ふぢやないか。貰ひ懸りでも附けに來たのかい？

(ジヤネツト) お前がそんなになつたのはお前のお上さんが馬鹿だからさ。恨みがあるなら内へ歸つてあの女に云つておやりよ、私に云つたつてお門違ひだよ、アイムベリーソオリーだけれど。

(母親) さあさあ、ローワンさん、いくらお前さんがそんな事を云つたつて無駄なんだからね、好い加減にして歸つておくんなさい。——さあ、ローワンさん、歸らなけりや警察へ電話をかけるよ。

(ジヤネツト) 電話をかけた方がいゝよ、もう一度監獄へ行きたいんだらうよ、——

(セシル) ジヤネツト！己はお前を人にはやらない！

突然立ち上つて母親を突きのけ、ポケツトに摑んで居たピストルを出してジヤネツトに亂射する。ジヤネツト寢臺の上に倒れる。

（母親）あれツ、畜生！　何するんだ！　誰かきとくれ！　早く！　早く！

云ひながらピストルを奪ひ取らうとする。格鬪の間にピストルの端が電燈に打つかり、球が切れて室内暗くなる。

（セシル）（ニヤニヤ笑ひながら）お上さん、もう放したつて大丈夫だよ、此れで僕は澤山なんだ。

母親思はず手を緩める。セシル自分の蟀谷にピストルをあてゝ打ち、床に倒れる。母親麻遽に走り寄つてジャネットの屍骸に觸つて見る。

初子がホテルのボーイと二人で這入つて來る、暗いのでうろうろして居る。

（初子）あの、セシルは居りますでせうか？

（母親）誰だい？　お前さんは、——

（ボーイ）ローワンさんの奥さんですよ、今訪ねて來られたんです。

（母親）あゝさうかい、お前さんの御亭主は死んぢやつたよ。

（初子）あゝ——

危く倒れさうになり、ボーイの手に支へられる。

（母親）死ぬのは自分の勝手だけれど、大事な内の娘まで殺して行きやがつたんだよ、ほんたうに呆れた奴ぢやないか。——（ボーイに）お前、早く警察へ電話をかけとくれ。

（ボーイ）はあ、——奥さん、あなたシツカリしなきやいけませんぜ、大丈夫ですかね？

（初子）有りがとございます、もう大丈夫ですから何卒私に構はないで、——

ボーイ初子を置いて出て行く。初子、靜かにセシルの屍骸の傍に据わる。

母親、心づいて電燈を調べ、球を外して取り換へに行かうとする。ふと戸口の所に立ち止まつて、初子の姿を心配さうに見返りながら。

（母親）お前さん、しつかりして居なけりや困るよ、今直きに警察の人が來るだらうから、――

（初子）はあ、

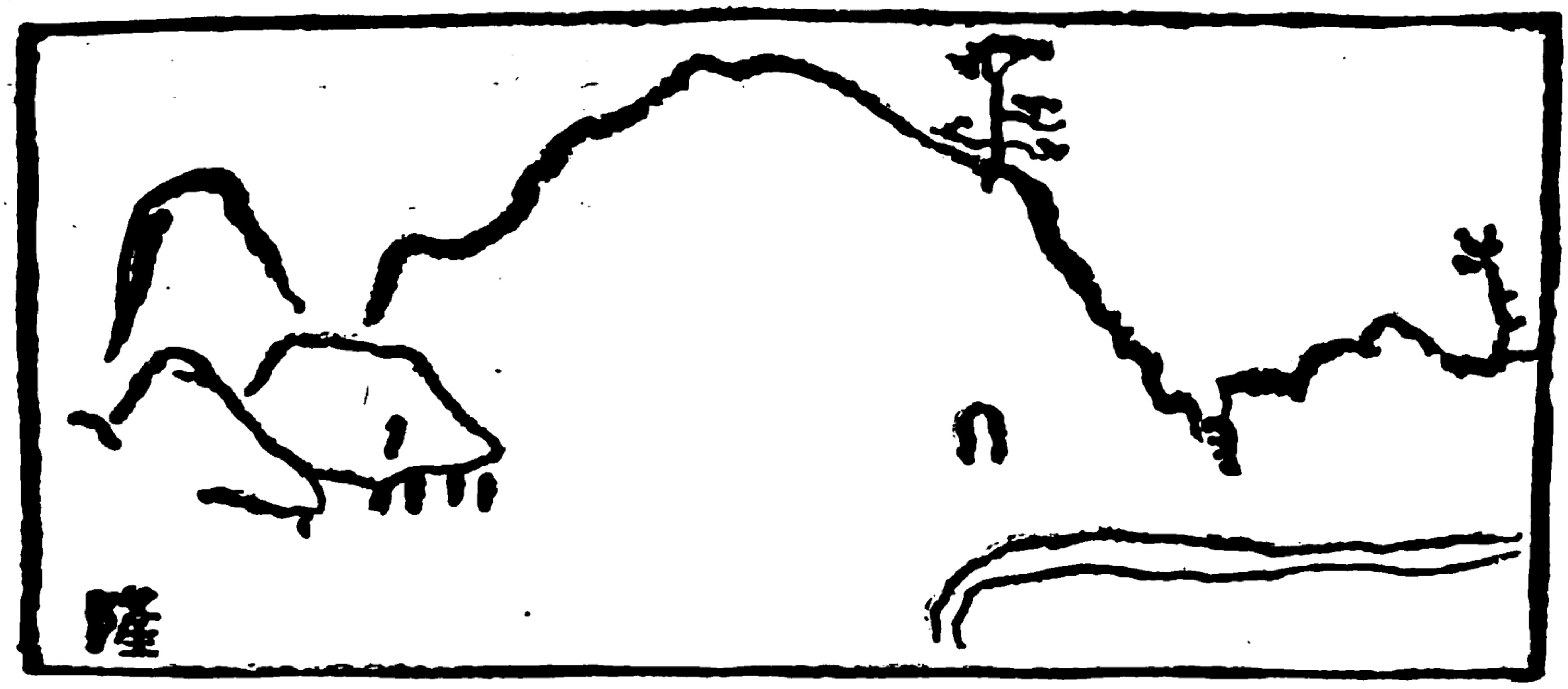
（母親）又此處で自殺でもされちや迷惑だよ、」

云ひ捨てて出て行く。

（初子）（母親が出て行つたのを知らずに）私そんな事はしやしません、神樣がお召になる迄は。――

初子、兩手で涙を抑へつゝ夫の屍骸の側にうづくまり、長く長く動かずに居る。

（幕）



美術家町の出來事

○

碧梧桐

もう七十日も降らないといふ旱りの穩やかな晴れがつゞいた。橡によく似たマロニエの筋張つた葉が、ドス赤いから〳〵な枯葉になつて、コンクリートの上を音立てて走つた。其の中には、すつかり、裸體になつて、黒く煤けた幹から七月の土用芽をカツ〳〵に吹いてゐるのもあつた。プラタナスは大方其の古い皮を振ひ落して、青い生ま〳〵しい肌を、人間のヤケドの跡のやうに見せつけてゐた。

モンパルナス行きの電車の女車掌の、色氣も素氣もないガサツな素振りが、職務の重荷の爲めに虐げられてゐることを思はせた。

やつとT君の住む町の番地を見つけて、銅山の坑の入口見たいなトンネルになつた門をはいると、胸に白いエプロンを掛けた、下宿屋の女房と言つた風な太つた女に會つた。マダームと呼びかける位のお世辭は心得たものだつた。T君はそこらのカフエーにゐる筈だ、と言つて、一人の下男に案内させてくれた。

町の廣場に向いたドツパナの椅子にゐる背ろ姿で、すぐそれと見出し得たことが、何だか心淋しい出來事だつた。

紹介者の名刺を出して、初對面の挨拶もすました時に、これはいけない、と思つた。T君の直ぐ左側にゐた女がT君と親しみのある二人づれであることを知つたからだ。女の眼のふちを黒く彩つた下品なお化粧ぶりは、すぐ古いお馴染のそれ者であることを思はせたからだ。T君は委細かまはず、眞に無頓着に、相手がどう感じてゐるだらうとか、どう思つてゐるだらうとかいふ懸念も躊躇もない樣子で、私の女房です、と引き合せた。女房といふ言葉の響きにしばらく馴れなかつた私は、それをT君の細君だと意識するまでには、可なり長い時間を要した。同じ容色の持ち主であつても、それをそれ者と見るのと細君と見るのとの混亂が私をどぎまぎさせた何だか身のいらない握手をしてしまつた。かねて噂に聞いてゐた節操問題が、其のヒロインを前にして新たな問題味を提供した。其のヒロインをまぢ〳〵正視してゐるのは堪へなかつた。却つてT君の落着いた別にとり亂してもゐないなひ靜かな樣子が、次第に私を平靜に導いた。

三人で近くのレストランで夕飯を食ふことにして、カフエーを出た。長い髮を肩へ撫で下ろした、ボロ〳〵のズボンを穿いたいゝ年配の男が、T君に挨拶して過ぎた、あれは今こゝで有名な彫刻家ですよ、とT君が言つた。本郷の西片町が博士町であるやうに、美術家町としてのモンパルナスの夕ぐれの空氣は澄んだしつとりした、往來の人までが、何か考へに耽つてゐるやうだつた。

胡瓜もみなどを食つたあとで、アーチチョークの食ひかたを丁寧に敎へてくれた。「こんな安料理でも、一等のレストランでも、そんなに味は變りやあしませんよ、ね、なか〳〵甘いでしよ、一等のレストランでは、オーケストラの音樂賃が肉にかけてあるから」T君の始めから馴れ〳〵しい、幾分甘つたるい、やさしい鈴をふるやうな調子で、どこか人に押しつけるやうな粘りを持つた言葉の特徴が、段々私を其の側へ引きつけた。印象にも殘らないなひ雜談で賑つて往つた。T君は私との話の要領を一々細君に飜譯してきかせるのを、自分の役目のやうにすら〳〵と運んだ。私が英語しか話さないといふので、記憶の底から、單語を喚び起して、細君が直き〳〵私に話しかけたが、それがわからないと言つて笑つたり、もどかしがつたりした。

いつの間にか、この二人を繋いでゐる糸の緩められたり緊めつけられたりする、情愛の濃淡の動きを、第三者として、

觀察しようとする私になつてゐることを見出した。私は努めてそれから逃れようとした、初對面のT君に、私が批評眼を向けてゐることを感づかれるのが苦痛だつたからだ。けれども、何事にも口を挾んで、T君を私の物にすることを妨げようとする細君の前では、私の頭の空虚を充たすものが無ければならなかつた。ともすれば、T君の肩や二の腕に手をかけて話す妻君のしなや、私のゐることを忘れ得ないT君の應對ぶりに、冷やかな視線を向けるのだつた。

○

フォーリー・ベルゼールの入口で、切符の買方などにドヂを踏むべき理由を持つてゐないT君が、何か番人と言ひ合つては當惑顏をしてゐる。さうして私に向つて「君、切符を二枚買つて下さい」と言つた。「イエ、私が白いカラーをつけてゐないてんで、ぐづ〲いふですよ」と附け加へた。「ねえ、呑氣に遊びに來る寄席なんでせう、カラーも何もあるもんですか、一つ文句を言つてやつたんです、ナニ、大丈夫ですから、君切符を……五フランの立見ですよ、そこそこ、その賣口ですよ」と更らに語勢を強めた。私はこの簡單な事實、小さな衝突によつて、新らしい世界を見せられるやうに思つた。

踊子や唄ひ女の出る寄席といふよりか、肉的色彩の濃厚な一種の歡樂場でさへが、正しくつけた白い襟――日本で言へば袴か羽織――を入場の條件とする空虚な禮儀作法に囚はれてゐる習慣そのもの、ナニ切符さへあれば、押しても入場し得る元氣とづう〲しさを鼓舞してゐるT君の反抗的氣分そのもの、それが晝よりも明るい華やかな電燈の下で、綺羅を飾つて出はいりするつゝしまやかな觀客の前に、容赦もなくさらけ出されてゐるのだ。T君の手製だといふ、赤い筋の通つた黒いシャツの幅廣い襟をうしろに折つて、そこへ無造作にネクタイ――それも黒い何かの切れの端かも知れない――を卷きつけた格好は、戰爭當時の恐怖を再現する無政府主義者の具象化であつたかも知れない。ハンチング（鳥打帽）を勞働階級の標號と見る西洋では、少くもT君の風彩は、最低賃銀に甘んずる宿なしであつたかも知れない。思ひなしか、T君がこの節胸の奧底に祕めてゐる人知れぬ悩みの塊りが、何處にか迸發しようとする苦しい悶へさへが仄め

ぐのだつた。

　私の買つた二枚の切符は、案外無雜に入口を通過した。もう總てを忘れたらしいT君は、幕なしに、ひつきりなしに變つて行く舞臺を、今度は正面から見ると美しいの、今度は成るべく近くで見ませうのと言つて、二階の天井で押しつけられてゐる立見場をあちこちした。そこには肉の强烈な匂ひが淀んでゐるのだつた。其の匂ひを追ふ男の群れが垣を作つてゐるのだつた。T君はさういふ光景に馴れてゐるのか、さういふ渦卷きに浸るのを避けようとしてゐるのか、態とらしくもなく無關心に過ごしてゐるのだつた。尤も一切がT君の淡い淋しい筆には乘らない畫幅の展開であつた。

「ビールでも飲みませんか」と言つてホールの方に私をつれて、先づ賣場の前の脚の高い椅子といふよりも、猿のとまり木と言つた方がうつてつけな臺に腰をかけながら、「こゝがいゝですよ、又た乙な味がするもんです」、と言つた。私も不格好な風をして、其のとまり木の上に、落着かない尻を据ゑた。私は前夜バル・タバランの踊り場で、散々からかつた女を十フランのチップで甘く追ひ拂つた記憶がありくと浮んだ、私もそれ位な手段を心得たかと思つて、自分でをかしい位でした、とかいつまんだ話をすると、T君は「それは上出來でしたね、それで澤山ですよ」、愉快さうにニコくしながら、「併しバル・ダバランはいゝですね」と瞼の下にしよぼくした眼で物を探ぐるやうに、其の夜を徹する歡樂の焰の燃え立つた、釜の中の湯のたぎるやうな熱閙な光景を追ふのだつた。

「ところで……」と言ひよどんで、私を見詰めた眼は鋭く輝いてゐた。T君の頭には一刹那に想ひ出の火から水へ、狂瀾から死水への急變が來たらしい。「イヤ何でも……こんなところでお話する……」何か口の中でモグくして、丁度そこへ通りかゝつた媚を賣る女に話しかけた。女はすぐ其の側に吸ひよせられて、表情の技巧のありたけを見せた。「昔はよくこゝでこんな女を相手にして、會話を勉强したものですよ、イヤ實際ベルツツの學校で高い月謝を出すより三フラン——戰爭前は立見は三フランでした——ですつといゝ實用の言葉を、といふと少し怪しいかも知れないがね、よく覺えたものですよ」と私を顧みてT君は冷やかな笑ひを口元に見せた。「が、同時に又た、僕達のやうになると、もう其の必要はなし、總てが淺はかなつまらないものです……マチスがナチユラリストになるつていふ時代だからな、と言ひや

ア、今度はピカツソを尋ねましよ、あいつは勞働者のやうな筋太い腕をしてゐますよ、面白い獨身者です、獨身者はダイアゴナル、といふのが彼の口癖です、ダイアゴナルはフホーカスを通るといふのが其の理由さ、面白いでせう、夫婦の生活は、さう圓周なんでしよう、中心、焦點には遠いつて、どんなに惚れて來る女でもかまつちやゐない……」段々高潮して來るT君は其の反對に段々冷やかに落着いて來るのだつた。其の話の腰を折つて、T君の阿彌陀にかぶつた帽子をかなぐり捨てゝ、女はすうつと往つてしまつた。T君の前髪を眉の邊まで梳き下げた饅頭のやうな頭がむき出しになつた。と同時に、或る淋しさに襲はれてゐるやうな、おびえたT君の全身が、とまり木の上に露出してしまつた。

○

一方の壁によせて、手製らしい木の脚の低いベッドがあつた。シートは鼠色に汚れてゐた。其の枕の上に二三段木の棚が釣つてあつた。十七世紀頃の瀬戸物や、西班牙の土細工や、大理石の小さい首などが其棚の上に、よせかけてあつたり、ころげてゐたりした。主人が其の瀬戸物の模様が古雅でいゝと自慢してお客に見せる時は、いつでも其の手が埃りで黒く染んだ。ベッドの足の方には長持を兩切りにしたやうな木のトランクが据えてあつた。それを開閉する時には、いつでも鍵をつかつた。それ程主人には大切な製作の一部がしまひ込んであつた。不作法なお客はよくこのトランクに腰をかけた、外に腰をかける椅子といふものがないから、お客も仕方なしに小さくなつたつもりで、隅を選んで腰をかけるのだが、主人は如何なる時でも、それを尻にすることを拒んだ、さうしてお客の腰をかけるのを咎めようとはしなかつた。ベッドと向き合つた窓の下に、何か使つたものか、日本の足で踏む米搗杵のやうな、四角な木が何かの仕事盤のやうに植えてあつた。主人は其の事歴を語るよりも、俺も今に彫刻でアッと言はせて見せるから、といふ氣焔の前廣告のやうに、手づくねの人形や蝋燭立てなどを、其の杵の上に並べて、お客の鑑賞に便にした。小さく小じんまりはしてゐたが、又た小汚なくしめつぽかつたこの部屋の中に、赤と白の棋盤縞のカーテンが、主人の得意な色調を破つてけば〳〵してゐた。實際そのカーテンでも無ければ、サロン・ドートンヌの無鑑査會員としてのT君のアトリエとして

の權威は何處にも見出されなかつた。イヤお世辭をヌキにすれば、其のカーテンのあるが爲めに、僞物師の畫工の仕事場めいてゐるのでもあつた。けれどもT君が、十年の間、こんな日光もさゝない穴倉のやうな中に屛息して、それで、美術界の新人として立つてゐる心境が羨望されるのだつた。土龍藝術と一口にケナしてかゝる者もあつたが、それはT君の物的な方面に、細君の援助のあつた嫉妬の聲だとされてゐた。日本の麒麟が、巴里のドンキーである事よりか、土龍藝術は、自分の手で自分の道を拓いて行く力と眼を持つてゐた。

T君はよくする鬱さ晴らしの、糸の一本ないマンドリンを抱へて、ベツドの上に寢ころんで、シヤノアーあたりで覺えた猥褻な此頃の流行歌を小聲で口ずさんでゐた時、ガラスの取れた窓から覗き込んだ私の姿を目敏く認めた。自分でドアを開いて私を迎へた素振りは、いつになく取り亂してゐた、睡眠不足らしい疲れただるさが目立つてゐた。不器用な本箱めいたものゝ中から刻み煙草をつかみ出して、それを紙に卷く手つきが、私の目を惹いた。私にはとても吸へない安煙草なのだが、紙の兩側にはみ出した卷き餘つたやつを、丁寧にちぎつてもとの箱へ納める丹念さに敬服させられたのだ。自由なといふより放縱な、亂暴なといふより主我的なT君の個性暴露も、こゝに落着く、こゝに生活の根を下ろすが爲めには、成るべく自我を傷けない方面から、ぢり／＼と妥協を强ひられる。妥協を强ひられるよりか、こちらから妥協性を持つて行かなければ生活の端緒も見出されない、其の十年の社會苦が、この安煙草を卷く手つきにも根强く宿つてゐるのだ、といふことが私を暗く淋しいものにした。

ドアをノツクする者があつた。一旦はいつたからだを、私のゐた爲めなのだらう、くるつと廻つて又たそゝくさと出て往つた。細君でもあらうと思つてゐた私は、それが矢張私と同じ同胞の青年であつたのに、意外な眼を見開いたのだ。雲の中ではためく稻妻のやうに、何か銳い刄のあるものが私の頭の中をツツと突き拔けた。

「まアいゝぢやないか、オイ、君も噂さしてゐたYさんだよ。」

T君の言葉は例の鈴を振るやうなやさしさで、如何にも落着いた調子だつたが、青年は答へもせずに、外はしんとしてゐた。私は强ひて何氣ない振りを裝うとしたのでもなかつたが、かねて一度は觸れて見ようとした問題が、今料理を

する俎板の上に乘つてゐるやうな氣もして、好奇と同情と客觀的批評と主觀的相談のこんぐらかつた感情が胸に詰つた。

「M君は……あなたのうちにゐるんですか」

瀨ぶみをするやうな一語も、T君にはもう總てが私に知られてゐる、事實の一切が呑み込まれてゐる其の片鱗とも響いた。

「さうですよ、どこかアトリエを見つけたとも言つてますが、まだ僕の厄介になつてゐるんです……M君の來た時分、私も隨分世話をしたんです、自分でこんな生活をしながら、人の世話でもないとお笑ひになるか知れませんが、どうかと言つて縋つて來りやア、僕だつて萬更涙のない人間でもないからね」

T君はこうまでスラ〳〵と言ひつゞけて、煙草に火をつけた。思ひきり烟を吸ひ込んで、又た思ひきり吐き出した。總てをもう投げ出してゐる態度だつた。

M君と妻の關係に就いても、實は昨晩遲くまで、最後の言葉を與へるまでに話し合つたのだ、と言つて事の起りから、それと氣づいた後の中途の波瀾や、自分の態度や細君の心持までを、たゞ二三度會つた風來のお客である私の前に、少しの詐りも隱くすこともなしにさらけ出しのだつた。一寸と足をかけた舟が大海に乘り出したやうな狼狽を感じてゐる私はお構ひのない、大膽な赤裸々な告白なのだ。

今ではもう成るやうしかならない、と或るあきらめをつけてゐるものゝ、其の痛手の生ま〳〵しい始めは、どれほど一人で苦悶し煩惱したか、T君の放縱な半生の生活にも全く別た世界が降つて涌いたのだ。世の中にたゞ一つ拘束のない性慾の世界と信じて來た其の痛切な反證が自己自身を傷けたのだ。自己の經驗を延長して、相手を容るす理智は働いても、傷けられた痛みの事實を打消すには餘りに力弱かつた。

其の苦悶を訴へる叫びが、やがて私に向つての大膽な告白ともなるのだ。自分一人の胸の奧に秘めて置くことの出來

ゝ、其の叫びを痛切にきく爲めには押してその方へ向つて行かねばならない。後ろへ逃げを張る事なしに、前へまともに面してゐなければならない。

「二月も前の事です、M君も惡かつたとあやまつた、妻も以後を愼しむと誓ひました、けれども矢張ずる〳〵べつたりです、僕も一旦は二人を許しました、そりやアさうでせう、人間に過失を認めないわけには行きませんから、でも、なんでせう、過失を意識して後はもう罪惡です、私もぼんくらになつていつまでも罪惡を公認してはをれませんや、自分の女房の罪惡補助人である名譽を荷ひたくはありません……ゆふべも妻に言つたのです、僕との愛がなくなつたのなら、ね、この事實は愛のないことを何よりも確實に證明してるのだと、それなら綺麗に別れよう、M君にくれてやらう、それで僕自身には何の文句もないと、けれども妻は、僕と別れる位なら死んでしまふとそんなことを言ふのです、涙で泣き張らしたさういふ時の眼つきは、畫よりも彫刻ですね、」

T君はさう言つて淋しい微笑を見せた。私も釣りこまれてほゝ笑んだ。

「M君態度？　どう考へてるかといふ、エ、まるで駄目……エライことと言つてるのさ、私は少くもM君の恩人だと言つていゝ言はゞさういふ資格があると信じてます、恩を仇で返すやうなことは、普通の日本人なら恥辱だと考へてゐる、と言ふと、自分はそんな日本人ぢやない、イヤ日本人であることを恥辱だと考へてる……まるでヤケと二人づれぢやありませんか」

T君は久しく口にしなかつた故國の俗諺を言つたことが、一種の功名であるやうな誇りを見せて、こまかに肩をゆするのだつた。

「グラースを食ふてんですが、二階で、一處にあがりますか」

ドアの外で聲がした。それがドアに聲をブツつけるのだつた。

「ア、食つてもいゝ、食ひませうツて」

T君はしばらく考へて、から壁をかへして、私に一處に行けと目くばせをした。

T君はこのアトリエの前の中庭を圍んだ、同じ建物の二階を別に間借りしてゐた。

「二階の裝飾も一度は見て下さい」

今まで何を話してゐたのかも忘れたもの丶やうに腰をあげかけた。何かしら强い渦卷きに引込まれてゐた私は、一人置き去りにされたやうな拍子ぬけがした。もう何もかも話してしまつたらしいT君の樣子が不思議でならなかつた。

上敷のない石の階段をコツ〳〵上つて行く踵の音が一つ〳〵耳の奧を突き上げた。私は問題のM君と細君とT君の間に流れてゐる暗い重々しい氣分の中に立つ新たな好奇と恐怖の念が湧くのだつた。冷たい堅い石段が、一層其の恐怖を映るのだつた。T君は踏み馴れた階段だと言つた風に、私のさきに立つて輕く素早く一氣に上つてしまつた。私が問ひもしない事實を大膽に話し出した時と、グラースを食はうといふ氣になつたT君には、頭の動きかたの劇變があつたのだ、前のT君と今のT君は全く別人格なのだ、私はさう思ひつ丶後につゞいた。

細君は愛想よく私を迎へた、私の雅號をもう覺えてゐて言ひにくさうに發音したりした。M君は細君が引き合せたので、それにも挨拶した。T君は「どうです、この……」と部屋の木材の現はれたところを、强烈な赤と靑とで塗り分けた裝飾の意匠を指さした。勸められるま丶に、一番い丶椅子に腰かけた。机を食卓がはりにした白い切れの上に、氷菓子が四人分と、コツプとが揃へてあつた。私は總てを無意義に平靜に見よう聞かうと努めねばならない程、騷がしくどきまぎしてゐた。細君はつか〳〵私のうしろに立つて來て何事かを言つた、T君がそれを取りついで、お約束の畫を見せませうか、と言つた。

私のうしろに、裏向けになつた十號二十號位のカンバスが寄せかけてあつた、細君は一つ〳〵それを表向けた、陰影のない單純化された年增や娘の半身像がそこに並んだ、人間が人形化された新しい描き方だつた。「どうです」とT君が言つた。私はとりとめた批評らしい言葉も口に出て來ない「矢張女の作ですね、女らしい弱さがい丶ですね」と口からの出まかせを、T君は細君に取りつぐやうだつた。

「サロン・ドートンヌでも、人のまねをしないところが、いゝつて言はれてるんです」
　T君のこの言葉は、自分の女房の贊辭のやうに響くのだつた。私がこの中どれでも一枚欲しい、と言ひ出したので、話は畫料の上に花が咲いた。細君がはしやいだ調子で話すのが、私には通じないので、筆と鉛筆を持つて來て書いたのによると、B細君の名――は一インチ角が僅かに一フランであるが、T君は十フラン、マチスは二百五十フランの單位だとのことだ。それも畫匠の引きとる値段であるから、顧客にはそれ以上で賣られるのだといふことだ。それはやがて、マチスを借りて、B細君の畫も、市場に或る價値を持つ吹聽でもあつた。少くも私の耳にはそのやうに響いた。けれどもさういふ吹聽の仕方は、巴里人としては謙遜な消極的のものだつた。
　皆が氷菓子の皿を持つた、ヂンジアか何か飲みものがコップに注がれた。
細君は、私に向いて又た何か新らしい話をしかけるのだつた。T君の譯によると、かういふ顏の扮裝は、日本の方にどういふ風に享けとれるか、といふのだつた。私は改めて細君の顏を見直さねばならないよりも、もう疾くに享けとつてゐた不愉快な心持がむら／＼と湧いた。此頃流行してゐる黃色い白粉に、例によつて黑く目ぐまを取つた、暗く鈍い、壁に泥を塗つたやうな顏だつた。ヴール・バアルなどでよく見かけるラテン系の道具の揃つた顏でさへ、黃色いお白粉で、皮膚を不透明にし、其の美である艷を打消してしまふことは、無意味な好奇の流行の醜其のものだつた。B細君の顏が其の流行とどういふ關係にあるか位は、かりにも美術家で立つてゐる自己に明らかな筈だ。「日本にそんな顏のつくりはないから」私は吐き出すやうに言つて、其の大きな顏に引きずられさうな私の視線を反らした。かねて西洋の女から享けてゐた感想や、特にこの細君から得た印象や、T君との間の問題などが一時に冷笑と侮蔑と憐憫と憎惡のこんぐらかつた感情となつて私をいらだゝせた。かういふ類の女性と、折れ合ひを保つ習慣に馴らされない、男性としての長所と美點とを銷磨されない、自分の幸福を祝福するのでもあつた。
「此頃日本の短詩界に出てゐる、新らしい主張をしてゐる、あの、Aといふ男、あの男を御存知ですか」
　今まで默つてゐたM君が、別な沈んだパスで始めて話しかけた。私がM君の顏を熟視したのは、眞にこの言葉をきい

てからだつた。延びた髮をうしろに撫でつけて、日本人にしては白い廣い額をむき出しにした、落着いた深みのある眼と緊つた無駄を言はない口とを持つた顏は、心持蒼みを帶びて黑索に耽つたあとのやうな疲勞を見せてゐたが、それでもこのモンパルナスのカヘエーの女らに、プリンスとして騷がれたといふ品のある陷揚さを見せてゐた。黑いズボンの上に、折襟の白いしやつを着た無造作な服裝だつた。私は不圖「日本人であることは恥辱だ」と言つたといふ其の言葉を想ひ出して、日本人でないから、姦通でも何でもする、といふ考への矛盾を心で笑つた。さうして、頭のいゝ、過渡時代に容れられない靑年の自由を欲する心が、不良少年を生むのだ、不良少年とは繋がれた悍馬の別名だ、綱を斷ち切らんが爲めには、總ての觸れるものを嚙み又は蹴るのだ、一切が反抗的で復讐的であるのも其爲めだ、けれども、其の綱を解く者さへあれば、却て柔順な有爲な靑年に還るのだ、と言つた平生考へてゐることが刹那に念頭に浮ぶのだつた。Cといふ靑年畫家が、巴里に來て始めて自由な安息な世界を得たと言つて、酒も飮めば女も買ふ、到頭其の酒と女の爲めに不治の病を得て、死ぬるまで酒と女を放さなかつた、其の單なる遊蕩氣分でない深刻な心境までが同時に往來するのだつた。

「イヤ知りません」私は今こゝで、このモンパルナスの美術家町の貧乏な畫家の、四角に幾何學的に區切れた住居で、日本の詩の話などをする强ひて作つた氣分になれない意を仄めかした。靑年はそんなことには無頓着だつた、私をつかまへれば、自分の思つてゐることを言ふ外には何も知らなかつた、それが靑年の自由だつた。大きく髮を後ろへ掻き上げた。

「私は日本にゐる時、あなた達の俳句、あなた達の何とか言つた雜誌、あれの愛讀者の一人でした、けれども、さういふと何ですが、何だかまだ物足らないもの、もつと突込んで欲しいとでも言ひますか、何かありました、こちらにおいでになつて、又た別に御感想でもありましたでせう?」

「サア、まだ別に……」

「私もあゝ言つた詩の境にをりたいのです……一體蕪村と芭蕉とはどちらがエライのですか」

は少し腹立たしくもなつた。

「こゝでそんな話はやめませう、氣乘りがしないぢやありませんか」

「イエ御尤ですが、併しあなたに又たいつお會ひ出來るかわかりません……だから少しでよろしいのです、ほんの少し、蕪村と芭蕉の區別、どちらがエライ……」

「さうですね、芭蕉は詩人味が勝つてゐる、蕪村は職工味が勝つてゐるとでもいふのですか」

「では、芭蕉は眞劍であり、蕪村は遊戲氣分だと仰しやるのですね……よくわかりました、さうですかね、私もぼんやりそんな氣がしてゐたんです、あの奧の細道とか言つた記行は愉快なもんですね」

「そんなにエライのですか、芭蕉は…あの元祿時代のでせう」

T君も私を中心とする話題にはいることの興味を唆られたらしい。

「奧の細道は、芭蕉が一生を詩に依托した努力の結晶ですよ、奧の細道其のものよりも、芭蕉があれを書かうとした、又た書いてゐる時の心境が羨ましいですね」

「藝術の文字なり色なりに現はれた效果よりも……その心境といふと……大なるインスピレーションで、一點に凝集してゐる時ですね」

M君と私とが話し合つてる間に、T君は何の話題であるかを、心配氣な細君に話してきかせるのだつた。夫婦の親さが、そこに溢れ出るのだつた。

「けふは、やつと内に居つたな、この間から二三度も來たぜ。」この坐には新顏のK君がノックもしないではいつて來た。T君は早速自分の唯一の親友だと言つて紹介した。大きな口から並びのいゝ齒を見せた、明るい屈托のない人だつた。私は、T君と好一對の、矢張巴里女の音樂家を細君にしてゐる畫家のK君のことを、人の話でよく知つてゐた。

「君が來ちやア、又た賑やかになるぜ」T君が言つた。

「なんで」K君は言葉をT君の方へ投げ出して、細君の方へ向きながら、何かを話し出した。

「ハヽヽ」T君はいきなり此人にもこんな大きな聲が出るのかと思ふやうな高笑ひをした「あの話はよせよ、つまらない、イエ、この間Kと寫生に出かけて、ボアの水の中へ落つこちたつまらないことなんです、オイ、そんな話よりか、ベルリンの女房からよこした亭ノロの手紙の話でもしろ」

「まア待てよ」K君は細君との話をつゞけて、おしまひに二人でアハヽヽヽと笑つた。私までが、今まで沈んだ締めつけられるやうな氣分から遁れた緩やかな華やかな氣分になつた。

「何か書いてる」

「イヤ、まだ」

「M君、君はどうだ」

「………」

「どうも期限が來ないと書けないもんだ、矢張人間には束縛が必要なんだ」

「女房を野に放つた一人者はね」

「馬鹿言へ、さういふ君……イヤ君と言やア、ことしは審査員になるんだね」

「どうだか」

「サロン・ドートンヌもあんな頭の古い連中が多くちやアイカんね、一つ大革命をやるんだね」

「ことしは君を會員に推薦するんだ、何とかなるよ」

「ウン、頼むよ、ね」

T君とK君の會話は水が流れるやうに進んだ。これから秋の展覽會の話が、細君をも交ぜて一しきりはづんだ。日本の詩の話をするよりか、呑氣で樂だつた。

「今ね、芭蕉や蕪村の話が出てゐたところなんだ」
「そりやア面白いね、一體どういふ要領だつたんだ」
「M君は却々其の道に精通してるんだ」
「ハアM君がか……M君、僕にも一つ其のロースを御馳走し給へ」
話が又たもとへ還りさうなので、私は時計を出して、もう夕飯の時刻だから、そこら散歩しようと言つた。T君とK君と私の三人は、それから間もなくモンパルナスの藝術料理屋の卓に就いてゐた。私は、けふの出來事が豫期に反した方面に展開して往つた跡を振り返つて、Tといふ人、Mといふ青年、B細君の心持、それらが私が外から概念化して見てゐたよりも、もつと實質的に明らかにされたのを知つた。さうして機會さへあれば、この問題の渦中に入り得る鍵を握つたやうに思つた。

○

モンマントルの夜も大分更けてゐた。とあるカフエーの路傍の一卓を占領した三人は、何を飲むでもなく、空ラなコツプを前にして、いつまでも話してゐたいやうな氣で、落着いてゐた。踊り場通ひの女が、三人に微笑を送りながら、キヤツキヤ騷いで過ぎた。T君の服裝と、K君のお河童に切つた頭とは、それらの女の好話題だつた。
「戰爭時分は隨分呑氣だつたね、戰爭後人氣が荒くなつて、我々まで生活の事を考へるやうになつたから堪らない。」
「あの時……隨分馬鹿だつたね、一臺荷車を買つて、それにナケナシの道具を積んで、ニースまで逃げるつもりだつたからね。
「さうさう、まるでヂプシーのやうに、併し考へが奇拔でいゝ、今はそんな智慧はもう何處を押したつて出やしない……時にあの時分の君の女、あの氣の狂つた女、ありやアどしたい、死んだかい」
「俺も考へると、隨分女房孝行なんだね、あいつ、あのタイピストだつた女は、よく阿片を買ひに連れ立つて往つたも

のだ、何だか暗いシーンとした町で、ピー〳〵と口笛を吹くと、其の二階で同じやうにピー〳〵と應じるのだ、實際怖わかつたよ、それほどにしても阿片を飲まなきやア、まるで癩でも病つたものゝやうだつた」

「巴里にはあゝいふ恐ろしい暗黒面があるのだ、だから表向き華やかに飾る必要があるのだよ」

「あいつが或晩まるで死んだやうになつた事があるんだ、つめーたくなつてね、僕ア一晩中その側で寢てやつた、だつて寒い時分部屋を暖める事も出來ないんだ、俺の體軀で暖めてやるより外方法がないんだ」

「奇抜ではしやぎで、天才的で面白い女だつたね……それにしても今の女房にまだ未練があるのかい」

「さう言はれりやア、僕だつて日本人並みに、ちつとも未練はないと言ひたくなるぢやアないか」

「もう駄目だぜ、脈はないんだよ」

「生活問題があるんだよ、僕と別れてから、どうして暮らすか、そこが不安なんだ、で若しその不安が取除かれたら……と君は言ふだらう、併しさうした處で、すぐ離婚書にサインするかどうか……」

「勘定高いのと腋臭くさいのは、お互ひによくわかつてる、、、そりやアもう四五年も共同生活をつゞけて來た人間ぢやないか、僕の婦なんさア、淋しくつてヘステリツクになるつて、此頃毎日手紙ばかりよこしてるが……」

「俺の前で、今の俺の前で、妻ノロはいゝ面あてだね」

「イヤ、さうぢやないんだ……僕のいふこと皆きけ、僕の婦の話をするのは、つまり性慾關係をいふんだ、ね、わかるだらう、僕は何も君に性慾上の缺陥があるといふのぢやないんだ、僕はたゞ君が老いたといふことを言ひたいんだ、彼女の滿足する程度に君が應じ得たかどうか」

「つまらない！　それがどうしたといふんだ」

「まア夫婦とも美術家であるといふ體裁の裏面にも……何もそれが馴なことぢやないぢやないか、人間の性慾は立派な事實ぢやないか、慾求の最大なるものぢやないか、

一議もさうぢやないとは言はない、これがどうしたといふんだ」

「君もわからないね、君が社會の人として顔を出せば出す程、君としての慾求が轉換して行くんだ、つまり十のエネルギーのものなら、其の二三分が他に移動するのだ、巴里女は、それを人間の老いだと思つてるんだ、自分への愛が減退したと考へるんだ」

「そりやアさういふこともあるか知れない……けれども、若し女が他の若い男に惚れたとしたら、どうもしようがないぢやないか」

「惚れる……惚れる惚れないは絕對の感情なんだから、そりやいくら亭主の權威で壓迫したつて駄目さ、けれども其の惚れる、といふやつが、何處かに缺陷があるからだと思ふんだ、二人で一杯に惚れやつてゐて見給へ、そこに水をさす間隙はないわけぢやないか、一つのものを二つに割くことはラブが許さない」

「君はさう、そりや一つになつてるだらう、君らの爲めに祝福する光榮を……」

「さう茶にしちやアいかん、が、兎に角君は、この秋の製作を終つたら、イタリーにでも旅行するんだね、しばらく息ぬきに、さうすりやア自然に解決がつくよ」

「イヤ、僕もね、ロンドンにをつた頃、ある惡事を働いたからね、今其の報ひが來てるんだと悲觀してるんだ」

「全く昨今の君には同情する、つまらなく淋しいだらう、けれどもくよくよして其日其日を送つてるなア、尚更ら下らないからね、もつと眞面目に眞劍に、この問題、君の意思をきめようぢやないか」

「僕はもうちやアんときめてるんだ、もう辯護士を賴むことも……」

「まアさういふ表向きの事はどうでもいゝ、僕のいふのは、君の意思なんだ、あの女に對する君自身の感情だ、と言つてこれを白と黑とどちらかにしろと言はれても、さうはつきりはしにくいがね」

「或る場合は强く、或る場合は弱く、何だか自分で自分がイヤになつちまふよ。」

「矢張それが人間なんだね、全く人の事ぢやない、僕自身の問題のやうな氣がして、ぢつとソファーで考へ込んだりするんだよ」

「イヤ、君がゐてくれるんで、どれだけ助かるか知れないよ、實際感謝してるんだ」

「あのMといふ男の心理が僕にはわからないよ、下らない男だねえ」

「功利主義なんだ、自分の利益の前には、何物も犠牲にし得るだらう」

「功利主義と言つたつて、あんまり感情を無視してるぢやないか、あいつの面見ると毆ぐりたくなるよ」

「さうばかりでもない、あの男も何處か可愛相なところがあるよ、あの男の身にもなつて見りやアね」

「馬鹿に反省の態度だね……げれどもあの男が本統に君の女房に惚れて、この女でなけりやア……といふのでもあるまい、若し美術界に出ようといふ功利主義からなら、そんな虚僞な感情で、畫なんざ描けるものか、まるで一個の食人鬼だ」

「日本には彼の住む餘地がなくて、こゝまで流れて來たんだ、年は若いし、俺ら程に經驗もないんだ、君だつて、熱烈な惚れかたをする女があつたら、今でもどうだかね」

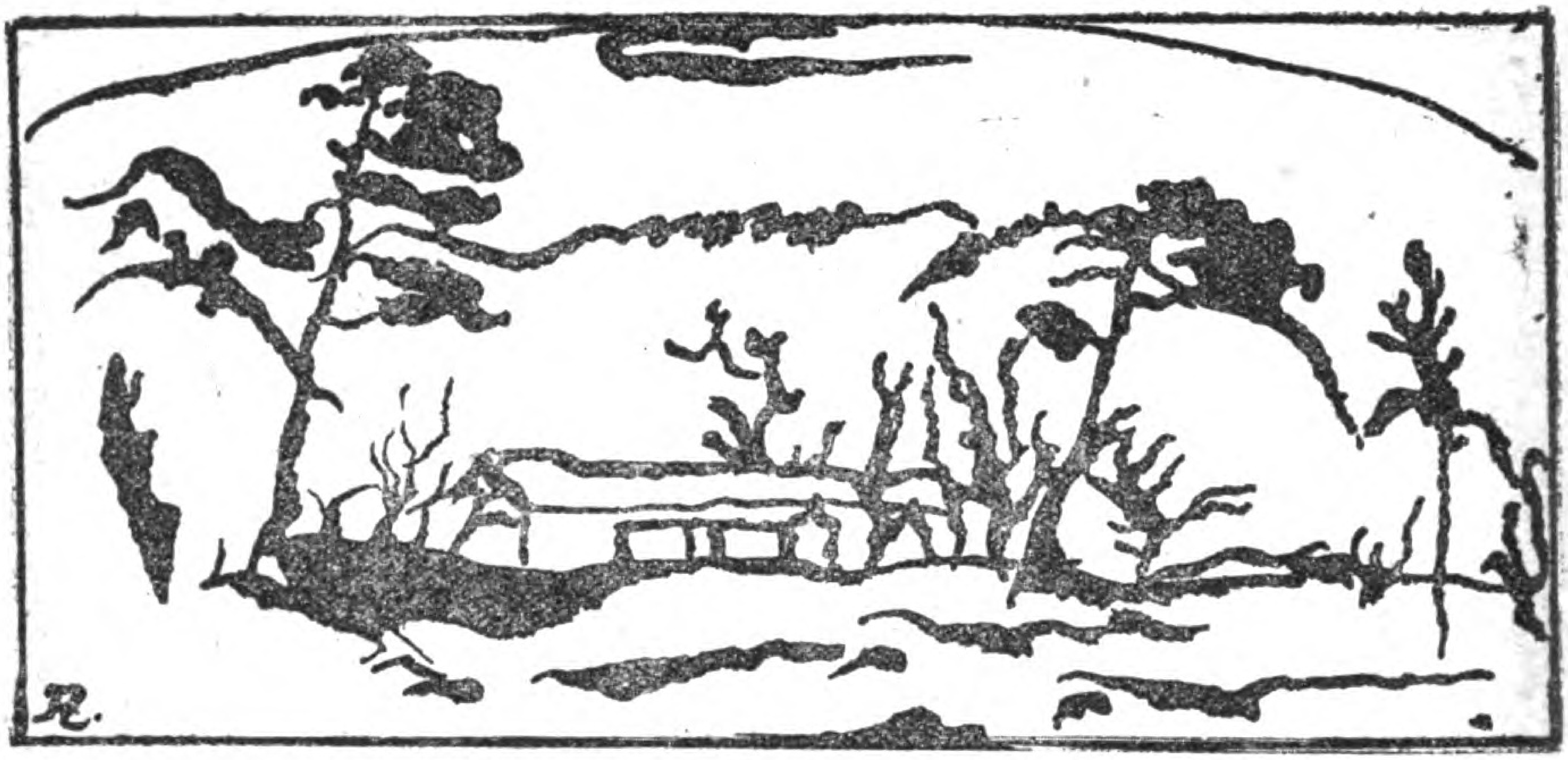
「不幸にして君の女房は俺に惚れなかつたよ、そんなことは實際問題だ、假定からの出發は御免被る」

「併しそこに十分な信用がある君にもないからね」

「そりやア俺も人間である間はね、併し本統のことを言やア、何だか今の俺には、どんな女が出ようとさ、どう惚れて來たつて、ビクともしないやうな氣がするんだよ、俺もさうなると、少々老いたんだね」

二人の問答はこゝで打切られた。しつとりした夜の露が袖に下りたやうなしめつぽいさが身にしみた。私はこの問答を味ひながら、とぼ／＼一人でオペラの方にあるいた。時々靴にかゝるマロニエの落葉にも心がおのゝくのだつた。さうして一つの事件にまつはる人間の頭の働きは、複雜で微妙で、やたらに入り組んでゐて、縦にも横にも或るは斜めにも織り込まれた種々相であるとの平凡な歸結に到達した。

——大正一一、六、一〇——



或る男

武者小路實篤

一二三

雜誌を出す前に兄が一度是非三宅雪嶺氏の處へ行つていろ〳〵のことを聞いてくるやうに彼に云つた。彼は行つたつて駄目だと云つた。先方の雜誌は賣れるにきまつてゐる雜誌だ、こつちのは無名な人許りの雜誌だから樣子を聞いたつて參考にはならないと思つた。それに先輩をもつのは廣花生でこりた。しかし兄は一度でいゝから是非ゆけと云つた。

三宅夫人は彼の叔母と親友で、その叔母が彼の家に住んでゐたので、時々來られた。又彼の從妹達の和歌の先生でもあつた。

それで彼は一度切りゆかない、そして教はつたと云ふ恩を感じない約束で雪嶺氏の處へゆくことにした。日がきめられて出かけた。

逢つて氣持のいゝ方なので默つてゐても、氣持はよかつたが、話すことはなにもなかつた。兄にすゝめられたから行つたので、元々聞きたいことは何にもなかつた。雪嶺氏は一度演說を聞いてすきだつた。又樗牛のかいたもので厚意をもつてはゐた。しかし話したいことはなかつた。夫人はあとで叔母の處へ來た時、無口な人が二人よつたのではがゆかつたと云つた。

夫人は彼に「あなたは一度切り來ないとおつしやつたさうですが又おいで下さい」と云つて下さつたが。彼は「又上ります」とは云へなかつた しかし來たことはよかつたと思つた ともかく氣持がよかつたから。しかし何にも役に立つとは聞かずに、ぽつ〳〵話て歸つて來た。何にを話したか彼は一つも覺へてゐない。どうせ碌なとは話さなかつたのだらう。

一二四

彼は夏目さんを日本で一番尊敬してゐた。そして多くの批評家が夏目さんの惡口を云つてゐるのに腹を立てゝゐたので、白樺の第一號に夏目さんの「それから」に就て批評をかくことにした。元よりそれにはいく分の商賣氣もあつて友にすゝめられたからでもあつたらう。ともかく彼は「それから」を愛讀し、代助の主觀に多くの同感を感じた。又「それから」にあつかはれた自然と社會の關係なぞにも批評したい興味を感じた。

「自然の命に背くものは内に慰安を得ず、社會に背くものは物質的に安定を得ない」

「自然に從ふものは社會から外面的に迫害され、社會に從ふものは自然から内面的に迫害される。人の子はどうしたらいゝのだらう」

「終りに自分は漱石氏は何時までも今のまゝに社會に對して絕望的な考を持つてゐられるか、或は社會と人間の自然性の間にある調和を見出されるかを見たいと思ふ、自分は後者になられるだらうと思つてゐる。」

なぞと彼はかいてゐる。それは又彼にとつての問題でもあつた。

一二五

雜誌は金をかけずに賣れる方法をとる必要があつた。四圓づゝ十何人が一年ためたにしろ、その内にはちやんと出さない人もあつて四五百圓位い切り金はなかつたらう。ともかく少しでも多く賣れる方がよかつた。それで交換廣告をたのめる處にたのんで見ることにした。

木下は佐々木さんの弟子だつた關係から「心の花」と交換廣告をすることをたのんで心地よき承諾を得た。

彼は彼の友人で高村（光太郎）君の友人でもある今戸君を通して高村君と知りあいになりお互に厚意をもつことが出

來てゐたので、高村君を通してスバルと交換廣告をしてもらうことをたのんだ。そして心地よき承諾を得てよろこんだ。その後彼がまだ世間から輕蔑され無視されてゐる時、一番始めに公然と彼を賞めてくれたのは高村君であつた。彼はそのことを今でも思ひ出すと感謝してゐる。

それから正親町が何かの關係で「新小説」と交換廣告をすることをたのんだ。四頁と一頁でよければしてもいゝと云ふ返事だつた。彼等は一寸侮辱されたやうにも思つたが、それも當然な條件だと思つたので、よろこんでたのむことにした。一年程たつて四頁を三頁にへらしてもらうことにした。

白樺が出る時彼等はあまり大きな期待はもたなかつた。彼は發刊の辭の最後に「十年後を見よ」とかいた。しかしそれは少し表面滑稽にしてかいた。

いよ／＼出來た時はうれしかつた。そして彼は自分の「それから」の評があるので遠慮しながら尊敬の意を示したハガキをそへて夏目さんの處に白樺を送つた。恐らくよんでもらへまい。返事はなほもらへまいと思つてゐた。處がまもなく彼は夏目さんからのハガキを受けとつた。其處には、

「拜啓白樺一號御惠送にあづかり拜受。卷頭の「それから」の評まだ熟讀はいたさず候へども、直ちに一寸眼を通し候。拙作に對しあれ程の御注意を御拂ひ下され候のみならず、多大の頁を御割愛下され候事感佩の至に候、深く御好意を謝し申し候。御批評の內容はまだ熟讀を經ざる事故何とも申上かね候へども、所々首肯に當り候處も多き樣に存候。中にも「それから」が運河だと云ふのは恐らく尤も妙なる譬喩ならんと存候。それからのとめ方の御辯護もあの通りの意見にて候ひし。先御禮迄草々」

彼はそれをよんでおどり上つてよろこんだ。すぐ志賀に電話をかけてハガキをよんで聞かせ自慢した。志賀も大よろこびしてくれた。

その後「生長」を送つた時、夏目さんから「それからの當時の御批評は私にはいゝ記念であります。御禮申します」とかいてあつた。彼にとつても夏目さんのかのハガキは彼にある自覺を與へた。その後まもなく草平氏から夏目さんの

代理として朝日の文藝欄に何かゝくやうに電話がかゝつた。彼は夏目さんにある處まで認められたことを知つてうれしく思つた。

白樺は思つたよりも賞れた。その上思つたよりも世間から賞められた。

「この調子でつゞけてほしい」と心の花にかいてあつたのを見た時、彼はこの調子ぢやたまらない。もつとづゝとよくならなければ心細いと云つた。

志賀や正親町の創作はわりに世間で認めてくれた。何か新しいものを待つてゐた時と、雜誌の數がまださう多くなかつたのと、お坊ちやん達だと云ふことが注意をひく原因ではあつたらう。だが實價がなかつたとは云へまい。正親町はその時既に三十で、志賀は二十八で、彼は二十六で、木下が二十五だつた。當時問題になつてゐた人々は彼等と同年輩の人が多かつた。彼等は早く出すぎはしなかつた。武郎さんはもう三十を越してゐた。里見、柳は二十二三であつた。一番若い郡は二十一だつた。

白樺は新しい運動を起す爲に出たものではなかつた。たゞかいたものを發表したいのが目的だつた。發表した結果については自信があるやうでなかつた、ないやうであつた。

彼等は社會へ出て、社會の人達に恐ろしい人のゐないことを知つた。彼は寒い風を恐れた。しかしそれはまもなく彼等の顏にふきつけたが、それはより賢い人間からではなく、より愚かな人間からであつた。彼等は次第に自覺と、確信を得つゝあつた。

彼等は井の內の蛙だつた。その時分は何となく大海を恐れた。大海には自分達の知らないことを知つてゐる、恐ろしいものがゐるはづだと思つてゐた。處が大海に出て見て始めて彼等は自分達が井戸の內で、大海を買ひかぶつてゐたことを知つた。

「井の中の蛙大海を知らず」

この言葉は彼には反對の意味をもつた。」

「だから大海を買ひかぶりすぎてゐた」

一二六

二號に彼は「ある家庭」と云ふ三幕もの丶脚本を出したが、元より反響はなかつた。楠山正雄氏に輕蔑されただけであつた。

その後、彼は「生れくる子の爲に」と云ふ短いものを出して、魚住折蘆と中村星湖に人格を疑はれ惡罵された。之は彼には隨分ひどい打擊だつた。中村氏の方はそれを程氣にならなかつたし、又あとで何かほめられたこともあつたが、魚住氏は評判で自分の知己になつてもらへるかと思つてゐたゞけになほ腹をたて丶、馬鹿な奴だときめてしまつた。その不快と淋しさは半年程つゞいた。之以後惡口を云はれて彼はさう長く參つたことはなかつた。從つてさう長く腹をたてる必要はなかつた。

その後志賀も魚住氏に不快な惡評を喰つてすつかり腹を立てた。しかし一たいに志賀や正親町は彼程、批評を氣にしなかつた。彼は惡評をうけると自分が文學をやる資格がないのではないかとつい疑ひたくなつた。實際彼のかくものはあまり彼自身であり、世間に通用出來ないもの丶やうな氣がした。殊に當時の文壇には通用しないものだつた。平面描寫は彼にはとても出來ないものだつた。その他彼は當時、認められてゐるものとは凡そ緣のないものだつた。其處に彼は自信を持つてはゐたが、同時に不安を感じないわけにはゆかなかつた。この感じはその後四五年つゞいたらう。そして段々自信の方が強くなつた。

彼は當時を思ふ毎によき友を多く持つてゐたことを感謝する。

彼はその時の感じを「空想」と云ふ對話の内にかいた。それは兄の畫家が惡口云はれたのを妹がなぐさめてゐる對話である。

彼はその内にかうかいた。

「妹。だつてお兄さんがあれを出品なさる時、世間の奴、この繪を見てきつと惡口云ふだらう。この繪の價値はわから

ないだらうからな！とおつしやつたでしよ。」

兄。それは云つたさ。しかしまるで豫期してゐない所に敵が出たのだからね。僕のあれを出して攻擊されると思つたのはあの點ではなかつた。物好きだ、新しがつてゐる、輕薄だ、才でやつてのけてゐる。そんな攻擊はされる心算はなかつたのだ。僕は寧ろ不器用だ、筆の使ひ方を知らない、色が不快だ、餘りにむきになりすぎてゐる。藝術品じやない。と云ふ攻擊を待ちうけてゐたのだ。（中略）本當にさう見へるならば自分の精神の力と云ふもの、自分の人格と云ふものが疑はれてくる。

妹。そんなことはありません。あの繪に感心した人があるじやありませんか。

兄。感心してくれたのは親友と素人だ。ひいき目で見る人と、繪のことのわからない人だ。」

妹。それだつて、あの繪の精神がわからないのですもの 底の力と表面だけの力の見わけの出來ない人なのですもの、あの繪に何處に輕薄な處があるでしやう。

兄。それはおれだつてないと思ふ。あの畫のどの一ハケでも俺は全心で書いた。全心の力を筆さきにあつめて書いた。しかしおれの全心の力が存外弱いものかも知れない。」

之が彼にとつての最大の不安であつた。しかし彼はそれでとまつてはゐない。

「妹。妾にもわかりませんわ。しかしきつとさうよ。時がたつとわかるわ。だから今惡口云はれた方が氣持がいゝわ。

兄。僕もさうも思ふのだ。惡口を云はれない時は自分の作が平凡なのだと心細くなることさへある。」

妹。どうしてさう他人の批評が怖いの。

兄。僕には僕をはなれて公平に僕を見ることが出來ないと思ふから。それに他人相手の仕事だからね。

妹。しかし眞價はいつかわかるわ。」

兄。その眞價が時々心配なのさ。

妹。眞價通りにとられゝばいゝぢやありませんか。」

兄。さうだね。本當にさうだね。しかし眞價を自分は買ひかぶつてゐるからね。

妹。買ひかぶつてゐるのかどうかわかりませんわ。妾、お兄さんは自身をもつと買ひかぶつていゝと思ひますわ。

兄、お清さん有難たう。お清さんがゐてくれるのでどれだけ氣丈夫か知れない。……」

彼は無理解と輕蔑、侮蔑に十重廿重にとりかこまれる時、彼を信じてくれる少數の人がそれをつきぬけて進む力を彼に與へてくれた。彼は自分の知己を辱かしめやうとは思はない。進むより仕方がない。

彼はまだ自分より賢き人に輕蔑されたことはない。それに反して自分が輕蔑する人々よりは常に輕蔑される。それではいくら反省力の弱くない彼でも更に勇氣を燃やさないわけにはゆかない。今に見ろ。彼はさう思ひ、又さう云ふ。そしてなほ馬鹿にされ、なほ自信を得る。

一二七

その夏、夏目さんが病氣して胃腸病院に入つてゐた。彼は夏目さんの「門」のことを、一寸いくら夏目さんのものでもよみつゞけられないと何かにかいたので、夏目さんから手紙をもらつた。それには少し誤解があつた。彼はいくら夏目さんのものでも、と云ふ意味で夏目さんにたいする尊敬は示してあつた。しかし惡い例にとられた夏目さんは氣にして抗議の手紙をもらつた。それで彼は辯解の手紙をかき、その上逢ひに出かけた。

そして夏目さんの處に集つてゐる若い人達四五人と、夏目さんの話てゐる處に入つた。夏目さんは皆と實に心おきなく話てゐるのが氣持がよかつた。そして彼も夏目さんの病氣のことを忘れて氣樂に話せたのをうれしく思つた。夏目さんは彼のことを「色彩の強いものを愛する人だ」と皆で話してゐたと云ふ意味のことを云つた。

それだけが、彼には忘られなかつた。それから夏目さんがわざ〳〵立つてアイスクリームをたのんでくれたのもうれしく思つた。

自分は逢つてなほいゝ感じをもつたことをうれしく思つた。——

「色彩の強いものを愛する」この言葉は彼には半分うれしく半分不服のやうに聞いた。實際夏目さん達も半分不服な意

味でさう云ふことを云ひあつてゐたのだらう。「門」のぢめ〳〵してゐるのを彼がよろこばなかつたので。しかし彼は精神を生々させて讀めるものを求めてゐたのだ。精神を半分御留守にしないとよめないやうなものを喜ばなかつたのだ。

「門」は自然派の人達がよろこんだ。それだけ若かつた彼には不快だつたのかも知れない。その後ちつとも讀みなほさないから、「門」はいゝものか、よくないものか彼は知らない。當時は途中でいやになつてやめたのは事實だ。そしてそれはもつと燃えてゐるもの、もつと生々したものを、若さの力を生かしてくれるものを求めてゐたのは事實であらう。

一二八

その時分有島生馬が西洋から歸つて來た。それで白樺主催で南薫造氏と二人の展覽會をすることになつた。暑い盛中、毎日朝八時から、午後五時頃迄上野に通つた。そして皆に逢ひ、一緒に公園の中を皆と散歩したり、會場をうろついたりした。入場所が多いとよろこんだ。そして名の知れた文士がくると、のぞきに出かけた。白秋が來た時は、當時白秋の詩の好きな人が仲間にゐたので、殊に皆のぞきに出かけた。

會場に飲食店を出して、アプサントなぞを置いて得意になつてゐたのは今思ふと一昔の感じがする。

泡鳴が其處に來て事務室の隣りだつたので、聞へよがしに大聲を出して、よたまいだから仕方がないのであらうが、皆に輕蔑されたこともあつた。

泡鳴は白樺のことを「毎月三百圓づゝ損するならもつと特色のあるものを出すといゝ」と云つたと云ふことを、又聞きして皆と笑つた。毎月百二三十圓切り金をかけない雜誌が三百圓損するのはむづかしいね。特色を出すたつていろいろ變化して見せるわけにもゆかないぢやないか。意識して出した特色、そんなものは糞喰へだ」

中中鼻息が强かつた。白樺は當時定價は十八錢だつた。百二三十圓で薄い雜誌ではあつたが千冊つくれてその上、少し廣告料も出せたのだから一昔の話になる。

白樺は千部つくつた時は二三百餘つた。それで一度七百にへらしたら全部賣れ切れた。二百も賣

のがともかく七八百は始めつから賣れたので彼等はよろこんだ。展覽會もしまいにはさすがに通ふのにあきて來た。三週間位いやつたのであらう。しかし展覽會は一つの活氣を與へた。終つた時にはほつとした。

しかし當時のことを思ふと彼は南君に厚意をもつ。快活な氣持のいゝ人だつた。まもなく文展の寵兒になつたので、彼等から離れることにはなつたが、水彩や、小品には中々奇麗な趣味のいゝものがあつたやうに覺へてゐる。當時彼が一番ひどく惡口を云はれた小說をほめてくれたことは今でも彼は感謝する。

一二九

ロダンの誕生日が傳記によつてちがつてゐた。彼達はロダンの七十才の誕生日にロダン號を出したいと思つてゐたが、誕生日がわからないので困つてゐた。それで有島がそのことをかいてロダンに誕生日の正格な處を教へてもらうことにした。又その時寫眞を出したいから寫眞を送つてもらへれば實に嬉しいと云ふことをかきそへた。

ロダンから返事はもらへないものと思つてゐた。處が或日有島の處に返事が來た。皆大さわぎして有島の處に出かけた。

手紙と寫眞が來てゐる。その寫眞には有島に譯してもらつたら、こんな大きな文句がかいてあつた。

「有島君、

佛國より日本に交誼を致す。

最微なる或は最大なる實在、例へば太洋、雲嶽、草木、昆蟲の精靈を窺視し得たる日本の藝術は又吾が踏む道なり」

又手紙の方には

「日本の雜誌白樺が私の七十回の誕生に際して、私の製作の研究に、其號を全部を献して下さると云ふ好意ある考を持たれた事について私はうれしく思ひ、又有り難くも思ひます。心から御禮を申し上げます。

御申越に從つて私の寫眞の中の一枚を御送り致します。共に數行をかきつけました。

私の生月日は十一月十四日です」

そして最後に鉛筆で浮世繪と自分のデッサンと交換したいやうにかいてあつた。

興奮しないでゐられるだらうか。

彼達は一方恐縮しないわけにはゆかなかつた。ロダンに買ひかぶられてゐるやうに思つたから。しかし彼等には自分達より純粋にロダンを崇拜する仲間は他にはあるとは思へなかつた。

すばらしい浮世繪を買つてすぐにも、送りたかつた。しかし彼等には金の自由がなかつた。

ロダン號だけは出來るだけ立派なものにしたかつた。

それで彼等仲間以外の人のものをたのむことにした。そして氣持ちよく承諾して下さつた人に感謝した。彼はあとで論爭はしたが、木下杢太郎氏の原稿が來た時隨分よろこんだ。武郎さんの原稿には感心した。

南君に表紙をたのんでそれがよく出來たので皆よろこんだ。ロダン號が出來た時の皆のよろこびは大したものだつた。彼や志賀や柳はそれを手に手にもつて有樂座に呂昇を聞に行つたが、呂昇はそつちのけになつて興奮してゐた。近所の人はさぞ迷惑したらう。

白樺の存在はその時分から世間にはつ切りして來た。その後彼等は五圓づゝ金を出しあつて、ロダンに送る浮世繪をさがしだした。

一三〇

その内に彼は二十七になつた。彼は依然として彼女を戀してはゐたが、彼女にはまるであはなかつた。その後も高島さんに行つてもらつたが思はしくなかつた許りでなくあきらめる方がいゝだらうと高島さんも云ひだした。

しかし彼はあきらめなかつた。

「お目出度き人」には彼女が工學士と結婚したやうになつてゐる。しかしそれはつくりごとで、彼は彼女が結婚したか、しないかも知らずにゐる。

この時彼は、始めて女といたづらをした。（二人の男とは前に彼はいたづらしたことがあつた。そのことはかきたくない。このこともかきたくないが、かゝないとあとの關係上困るのでかく）その女は彼の處にゐる女中だつた。むしろ醜いと云ふ方が本當だつた。しかし何處か男の心（性慾？）をさそう處があつた。そして彼の性慾はいろ〳〵の意味で解放されたがつて來た。

彼はもう性慾をさう罪だとは思はなかつた。彼の周圍には道樂するものが多くなつて、彼も暗にすゝめられた。「無車が道樂しないのは惜しい」とその仲間は云つた。彼の女にたいする好奇心は昔から弱くはなかつたが、段々強くなつて來た。たゞ用心深い臆病な彼の性質がそれをさまたげてゐた。處がその女は既に男を知つてゐた。男のことで彼の家にくる前の家でしくじりをして彼の處に來た。彼はそれを知つてゐた。

彼は一人でねてゐた。彼の室は他からはなれてゐた。その女中が毎晩、彼の所に蒲團を敷に來た。彼はその女を愛してはゐなかつた。しかし彼の性慾はその女をさへ求めるやうになつた。彼はあとで參ることをよく知つてゐた。しかしある晩、彼は遂にその女が蒲團を敷に來た時、その女が戸棚から蒲團を出さうとする時、彼は前後の考を失なつた、そしてそばに何げなくよつた。

熟し切つてゐた果物が一寸指がさはつてもおちる樣にさはるのを待つてゐた樣にその女は彼に身をもたれかした。

二人は一言もしやべらなかつた。接吻もしなかつた。愛してゐると云ふことはそぶりにも言葉にも見せなかつた。彼はたゞ性慾だけでその女を求めた。之が彼には實に心苦しかつた。彼は自分が僞善者に見へて仕方がなかつた。又さうより他取りやうがなかつた。一人で自分をけがすことを絕對には打ちかてなかつた彼は、今度はもつと醜いことを二人でしてゐるやうに思つた。彼は何度後悔し、神の前に謝罪したらう。しかし彼はその機會があると打ちかてなかつた。彼は懺悔の意味でから云ふ詩をかいて、白樺に發表した。

「我を憎め」と云ふ題だつた。

「我は汝に感謝し及び汝に謝罪し

汝を憐む。
汝、謙遜なる汝よ。罪なき汝よ。
我が愛し得ぬ汝よ。

「我は自己の運命と良心と名譽を傷つけてまでも、
禁斷の果をぬすむものに非ず。
我は罰をさけられるが故に
禁斷の果をぬすむものなり、
人々よ、我をいやしめ
我を鞭打て
卑劣なる我を鞭うて。

「かくして我はなほ戀人を思ふ。
我は自己の卑劣を憎む。
高きに憧れて罰を恐るゝ
卑劣なる自己を憎む
人々よ我を憎め
「あれだけは」と思はれつゝある我に
　この行爲あるを憎め。

罪あるものを
罪なきものも我を憎め
汝等は我を憎む資格あり
そは我が爲に愛なり
我は、汝等に憎まれることによつて
自己に憎まるゝことを助かるなり
我を憎め

我は汝等の前に、罪人として立つ
しかも我は傲慢なる罪人として立つ
我を憎め！
我を愛するものも我を憎むものも
我を憎め！」

彼はこのまゝ東京にゐると自分が益々墮落しさうな氣がした。それで武郎さんの處へ手紙を出して、北海道へ暫くゆきたいと思ふと云つた。武郎さんからいゝ室の見つかつたことを知らせてくれた。それで彼は四月の末に北海道の札幌に行つた。

彼はその前「お目出たき人」を本にして出した。その時分白樺には百枚以上のものはのせる餘地がなかつたので。今度は本屋が全部ひきうけてくれた。そのかはり印税は初版は一文も入らない約束で。

一三一

今度は札幌に行く時、彼は小樽にゐるお貞さんに逢ふことはあまり考へてゐなかつた。しかし札幌について武郎さん

に逢ふと、ついた翌日が農學校の運動會だと云ふことを聞いた。それを聞くと彼はすぐお貞さんのことを思つた。もう他のことは彼の頭になくなつた。お貞さんに明日は逢へるだらうと云ふことが彼の頭を全部占領した。お貞さんの夫の弟が農學校に入つてゐることを彼は知つてゐた。そして運動會のやうな所にゆくことを實に好きだつた。お貞さんはきつとくるだらうと思つたのだ。

その時札幌に彼と同級だつた神田さんが來てゐた。神田さんは簡單な小屋をつくつて住んでゐた。彼は豐平川の川岸の林檎畑の內にある一軒の家の室をかりてゐた。武郎さんの家も同じ川岸にあつて、彼の處から三四町はなれてゐた。武郎さんは運動會の委員をしてゐて急がしかつた。それで彼は神田さんと一緒に翌日運動會を見にゆくことにした。彼は翌日の天氣のことをのぞんだ。そして東京へお貞さんが來てから二三年たつた今、お貞さんはどんなにかはつたらうそして自分に不意に逢つたらどんなにおどろくだらうと思つた。

彼はお貞さんがこの世に生きてゐて、逢はうと思へばいつでも逢へるのだと云ふ事實を今更にはつ切り知つた。

翌日はいゝ天氣だつた。彼は神田さんと午後運動會に出かけた。そして來賓席の方を見た。しかし一目見ればわかるはづのお貞さんは來てゐなかつた。彼等は入口に席をとつて人の出入りを注意した。運動會はそつちのけであつた。世話好きで、他人のことを自分のことのやうに思ふことのすきな神田さんは彼と同じやうに熱心に搜してくれた。だが見つからなかつた。彼等はぢつとしてゐられなかつた。いたる所を注意してさがした、だが見へなかつた。子供が出來たので矢張り來られなくなつたのだらう。彼はさうあきらめながらも、もしかと云ふ氣はなくなせなかつた。見物は入つたり出たりした。競技は益々すゝんで、應援が盛になり、日はだん／＼くれてゆく。彼等はとう／＼あきらめなければならなくなつた。しかしそれから彼はお貞さんに逢ひたい氣が強くなつた。

始め武郎さんなんかのやつてゐる夜學の先生にでもしてもらはうかと云ふ氣があつた。しかしそれを云ひ出す前に彼はお貞さんのことが頭につき出した。逢つてもそれは淋しさを新にするにすぎないことを知つてゐた。しかし逢ひたい氣持はます／＼强くなつた。

彼は毎日神田さんに逢ひ、一緒に札幌の町を歩きまわつた。札幌は丁度春だつた。櫻や梅や桃や林檎が一時に咲いてゐた。彼はまもなく病氣になつた。彼はよく水がのみたくつても、水をもつて來てくれる人がないので、二時間、三時間、辛抱することを强いられた。其處に武郎さんの亡くなられた夫人が見舞に來て下さつたり、武郎さんや神田さんが來てくれたりすると助かつたと思つ。

しかし病氣は一週間位いでなほつた。彼はその時分にはともかくもお貞さんのゐる小樽にゆくことにきめてゐた。そして神田さんをさそつた、神田さんはすぐ承知した。それで五月十二日自分の誕生日に彼は小樽にゆくことにした。その朝彼は早く目がさめた。時間のたつのがまちどうしかつた。異樣に興奮してゐた。其處で彼は一氣に詩をかいた。書きあげるとすぐ神田さんをさそいに行つた。その詩は少し長いが、彼の氣持がわかるので全部書いておかうと思ふ。「誕生日に際しての妄想」と彼は題した。

「二十六年前の今日
自分は生れた、
自家の混亂してゐる時に、
叔母が不義したから殺すと云つて
その夫にどなりこまれて
祖母が氣絶した日に。
醫者はそれを見て、
さう御心配をなさらないでも
御安心です
と云つたさうだ、

自分の生れる爲めに
母の苦しんでるのを、
祖母が心配のあまり
氣絶したと醫者は思つたのだ。

母の方が祖母のことを
心配したのだ、
さうして自分は
少し早く生れた。
顏色が紫色だつたさうだ。

すべてのことは
消えて行つた、
その時生きてゐて
自分の生れたことを
喜んでくれた人は
過半死んでしまつた。

さうして自分は今日
滿二十六になつた、

人生の半分をすごしたわけだ、
何事もせず、
何事をしでかしさうな
けはいも見せずに。

我はあせる、
あせる。

父は自分の三つの時に
死んだ、
それなのに
自分の顔を見て
この兒を立派にそだてる人がゐてくれたら、
面白いものが出來るのだがと云つたさうだ。

母は自分が自分に迷つてゐる時、
この父の言葉と、
自分の星のよきことを云つて、
自分を慰めてくれる。

しかし〳〵
そは自分をあせらす許りだ、
我が頭に力はある、
されど
自分はその力を使ふすべを知らない。

自分はもう
滿二十六だ、
セザンヌ、
ホドラー、
バン・ゴオホ
ぐらいの大きい人間に自分はなりたがつてゐるのだ、
まるで小學校の生徒が大將になりたがつてゐるやうなものだ、
大きな赤坊だ、
自分の口はまだ乳くさい
自分は何時までもそんな空想をしてゐながら、
今のやうに呑氣にしてゐられるのだらうか。

汝は自己を天才と思つてゐるのか、
天才のうらにある後光が、

汝の後ろにもあると思つてゐるのか、
欲せよ、しからば與へられん、
と、汝は思つてゐるのだらう、
汝は何時までも棚を見て、
ぼたもちを欲しつゝあれば、
ぼたもちが口の中におちてくるだらうと思つてゐるのだらう。

馬鹿だと思はれないやうに、
謙遜なことを云ひながら、
大きな夢をみて他人のことを心から冷笑してゐる汝よ
早く汝自らを冷笑せよ、
意氣地なし、弱蟲、あきらめのわるい奴。

汝の父は豫言者か、
汝は運命論者か。

されど暇ある汝にとりては
それもよし、
それをかくすもよし
天才の押し賣り程みにくきものなければ、

―(或る男)―

しかし汝よ、
汝自身を知れ、
天才ならば天才らしく生きよ、
凡人ならば凡人のやうに生きよ
しからざれば汝の一生は空費されん。

凡人ならば一生を空費するもよし、
自分はさう思つてゐる、
さう思つて今迄きた。
さうして最も傲慢な道を通つて來た。
さうして他の人の着物を心配するのを冷笑して來た。
自分は裸體をもつてほこりたく思つてゐるのだ。
純金ならば鍍金はいらぬと思つてゐるのだ。

滿二十六才の誕生日にさいして
自分は今迄の自分の來た道を顧みる。
自分は何時でもその時一番高く思へたものになれる心算でゐた。
三つ兒の魂は百までだ、
この魂だけはなくなりさうもない。

かくて自分は誇大妄想狂として
この世を去るべし、
この頃さう思はれる。
しかし自分はうつろにはならぬ心算だ。
自分の皮膚を筋肉からはなさうとは思はぬ。
あるものが我をつくりしまゝをもつて自分は誇らうと思ふ、

自分は自分の醜き顔を
かくして往来を歩かうとは思はぬ
又天下の大道を小さくなつて歩かうとも思はぬ。

自分は生きる所まで生きてみる
さうして自分の謎をといてみる。

自分の謎のいやが上に大きからんことを祝福して
今日は之より小樽にゆかん。
わが第二の母ゐます所へ。

一三二

二人はまもなく小樽の町を大きな聲を出して歩いてゐた。その時分は北海道は乾燥してゐて山火事がひどかつた。札幌も小樽も空は一面に煙つてゐて太陽が月のやうに見へた。

「おや月が」と云つて太陽だと氣がついて笑つたりした。彼は小樽の町を見るのではなかつた。彼女の住んでゐる町を歩くのが目的だつた。彼等は公園の方へ行つて見たり、竪横十文字に歩いたが、お貞さんには逢はなかつた。彼等は何處にお貞さんが住んでゐるかそれも知らなかつたのだ。彼は失望して歸らうかと思つた。逢はない方が反つて迷はなくつていゝやうにも一方思つた。逢つてどうしやうと思ふのだ。しかし彼は逢はないわけにはゆかなかつた。彼は半日歩きまはつて疲れてある小さい西洋料理屋に入つた。そして其處で電話帳を調べた。夫の名が出てゐた。思ひ切つて電話をかけた。家に居ると云ふ返事だつた。電話は店にかゝつてゐたのだ。一寸電話口迄と云つて彼はわかりにくい名を敎へた。まもなく彼が餓えてゐた華な聲が電話口に聞へた。

「夢ではないかとよろこびましたわ。是非いらつして下さい」

彼は夢中になつた。お貞さんは地上に生てゐたのだ。そして逢はふと思へばいつでも逢へるのだ。彼はゆくことを約束した。

「そして道を聞いた。彼はまもなく長い通りを神田さんと歩いていつて方々で道を聞いた。とう／＼お貞さんの家についた。お貞さんはあはてゝ出て來て、彼等を室に通した。そして相變らずの親しさをもつて彼を迎へた。彼は逢ふまではこだはつてゐた。しかし逢へば昔と同じ親しさであつた。自分の方が主人のやうな氣にさへなつた。お貞さんは彼等に蒲團をすゝめ、そして夫が隣りにゐるにもかまわず本當の親しさをもつて彼と話した。彼は何のこだわりも感じなかつた。そして昔と同じやうに我儘を云つたり、無邪氣な冗談を云つたりして高笑ひした。神田さんもお貞さんの愛想がいゝのでこだわらずにゐた。

お貞さんは暫く話てから奥へ行つて子供を抱いて來た。大きな丈夫さうな子供だつた。子供は金魚の瀬戸物の玩具をもつてお貞さんの膝の上で遊んでゐた。

その後夫の人にも逢つた。大阪の商人らしい夫は、商賣の用で急がしかつた。客が來て相場の上り下りが一番の大事件として話されてゐた。彼はその夫にも厚意をもつことが出來た。お貞さん達はまだ晩飯を食つてゐなかつた。いくら

すゝめても食はふとしなかつた。

お貞さんは彼等に泊ることをし切りとすゝめたが、夫の人は相づちは打つても、乘氣らしくはなかつた。彼は泊りたかつた。しかしそれだけ歸る方が本當のやうな氣がした。

自分はお貞さんに何を求めてゐるのだ。彼はさう思ふ時、歸らなければならないと思ふ。彼等は終列車で歸ることにした。お貞さんは田舍で淋しいと見へて彼の來てくれたことをし切りとよろこんで泊めたがつてくれた。それは彼には嬉しすぎた。しかし九時すぎに彼はお貞さんの家を出た。

出るとすぐ神田さんは非常な早足であるき出した。いつも足の早いので正親町を困らしてゐた彼も中々逐ひつけない程、神田さんは急いで歩いた。彼は息を切らしてあとを追つた。

彼は神田さんが彼の初戀の女に厚意をもつてくれたことを感じてゐた。戀するのは無理がないだらうと、彼は最初お貞さんに迎へられた時から神田さんに自慢したく心に思つてゐた。だが彼は彼の方から口を切る氣になれなかつた。二人は默つて早足に歩いた。汽車には十分時間があつたのだが。

「あれでは君が參るのも無理はない。聲が實にいゝ。あんな聲の人が日本に二三人ゐたら自分の人生觀はかはる」と神田さんは云つた。

彼はお貞さんの聲がそんなにいゝことはこの時始めて知つた。さう云へば彼の兄さんがお貞さんの唱歌をほめたことも本當だつたのだなと思つた。お貞さんの喉は普通の女の人とはまるでちがつて、ふつくり丸く鵞鳥の胸のやうに出てゐた。お貞さんが「へんでしよ、聲樂家にはいゝのださうです」と彼に見せたことなぞ思ひ出した。

彼は失なはれたものゝ貴さをなほ強く感じたが、神田さんと一緒の時はまだ元氣だつた。しかし神田さんと札幌の町で別れて一人で豐平川の川べりを一人で歸つて來た時、彼は淋しさに耐え兼ねなくなつた。聲をあげて泣きたかつた。

一三三

彼はこの淋しさに打ち克つのには隨分力がいつた。やゝもすると泣きたくなつた。彼はその氣持を翌年二月に「或る

日の夢」と云ふ一幕物で再現した。

それは彼にあたる乙が夢の中で見知らぬ男甲につれられて、戀人に逢ひにゆき、一寸あつて又つれて歸られる脚本だ。彼はそれをかく時、泣けて泣けて仕方がなかつた。その最後に甲をして彼はかう云はした。

「いくぢのない奴だね。すつかり參つてゐるぢやないか。又心臓から生血でも流れ出たのだらう。君の得意な方法でその生血を生長さす力になほしたらいゝだらう。あはゝゝゝ」

彼はこゝで又死の淋しさに鍛へられた。

彼はその後もお貞さんに逢ひにゆかうと何度も思つた。しかしあつてどうしようと云ふのだ。お貞さんを奪はふと云ふのか。家庭の幸福を破壞しやうと云ふのか。それとも亦たゞ心臓に傷をつけにゆくのか。

彼はゆかないことに決心した。だが淋しさは、彼を押えつけた。彼はかうかいた。

「逐ひ出せども／＼
淋しさ我が胸に入りこむ
逐ひ出せども／＼
飼ひ犬の歸りくる如く」

彼は又かう云ふ詩をかいた。

「我はまだ
ドストエフスキーの顏より深刻なる顏を知らず。
彼の目より鋭き目を知らず、
彼の顏を見る時、
我は我が淋しさと煩悶の餘りに淺薄なるを感ず。
されば我は我が室に彼の顏をかけて、

我が淋しさと煩悶を嘲笑したし」

一三四

この時、又一つの打撃が彼をおそつた。それは、「お目出たき人」についての安倍能成君の批評だつた。それはいくら厚意をもつて見ても、之だけ切り認めることが出來ないと云ふやうな批評だつた。他の人が何とか云つて惡口を云つたが自分はそれ程には思はなかつたと辯護してゐるようで、しかも價値をまるで認めてない批評だつた。志賀からも意表外だつたと云つて來た。そして彼に勇氣を與へるような手紙をよこした。しかしよはつてゐた彼には能成君の批評は少しきゝすぎた。

自分の人格、自分の全力、自分の實價がそんなに人には安ぽくつ切り見へないのか。自分のやうな人間が文學をやるのはまちがつてゐるのぢやないか。二流や三流の文學者に切りなれない位いなら死んでしまう方がいゝ。自分はごくつぶしの人間にすぎないのか。

彼はそんな氣にさせられた。しかし彼は感謝しなければならなかつた。そんな自分にも武郎さん夫婦は實に親切にしてくれる。神田さんは自分のことのように心配してくれる。そして志賀や柳や小泉は自分を信じてくれる。彼はかうかいた。

「自分のやうに他人に嫌はれていゝ
人間は少ないと心の底から思ふ時に
他人に親切にされると
心の底から嬉しい、
涙が出てくる、
この涙あればこそ
自分は、淋しい世界に生きてゆける。

自分はこの頃淋しいのだ」

實際その時分彼は淋しかつた。そしてよく豐平川の川ぶしや、公園を一人で散歩した。

或日彼は公園を歩いてゐたら小學校の運動會があつた。彼はそれを見てゐたら、急に子供達に愛を感じて涙ぐんだ。

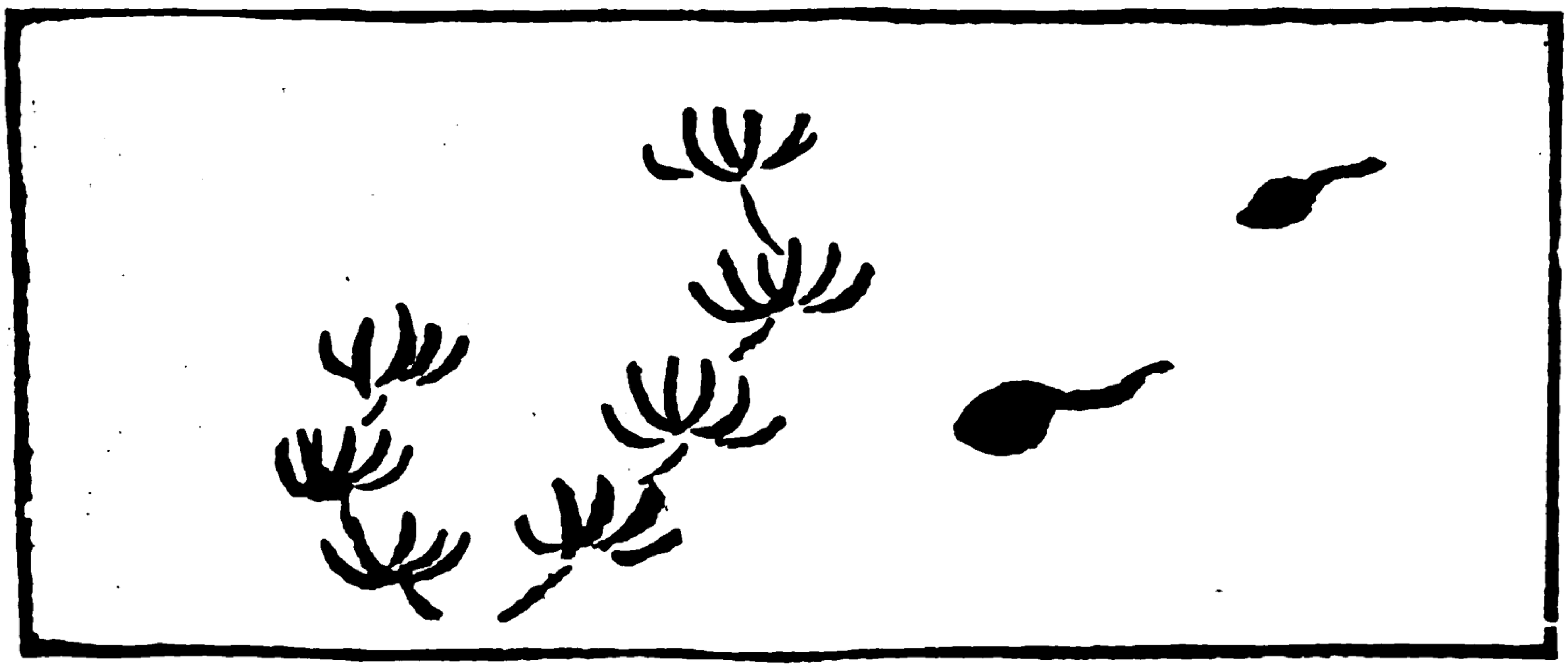
その無邪氣さ、その可愛らしさ。彼は勇氣を得た。

東京にゐる友達は彼の淋しさをかはり番に慰めてくれた。或日志賀と柳から同時にハガキが來た。

柳のには「志賀とあつて今の世に君程失望しなくつていゝ人間はないと話しあつた」とかいてあつた。

志賀のには、「後でうける復讐を君は前に受けてゐるのだ」とかいてあつた。

彼は二人にどの位い感謝したらう。彼は涙ぐんだ。知己を辱かしめたくないと思つた。



頸縊り上人

菊池寛

小原の光明院に、寂眞法師と云ふ上人が住んでゐた。何某の大納言の叔父君に當つてゐる上、學問も秀れ、戒行も拙たなくなかつたから、あつぱれ上人やとて、歸服し奉る僧俗も、數少くはなかつた。

その頃の習ひとて、上人も忍んで通つて居る兒が、五條あたりに在つた。眉目いと美しかつたが、志はさらに深かつた。一年、卯月の末つかた、ほとゝぎすが、鳴きしきる夕暮、上人は輿を、卯の花ほのじろうにほへる垣根のほとりに寄せて、久しく打ち絕えたる兒を訪ふたことがあつた。

兒は上人の顏を見ると、「夏衣」と云つたまゝ、面を伏せて、とみには物も云はなかつた。上人も、鼻じろみて、おはしたが、そのまゝ席を立つて、歸らうとした。

兒は、あはてゝ上人を、止め、

「などて物ものたまはで、歸り給ふぞ。情なし」

と恨んだ。

上人は兒の顏をのぞいておはしたが、しばしありて、

「情なしとは、わが恨むべき言の葉ぞ。稀に問ひたるわれに、夏衣と宣ひたる。必定「止めども止まらぬ春もあるものを云はぬに來る夏衣かな」の心なるべし。か

くばかり、うとんじおはする方に、などてしばしも止るべき」と云つた。

兒は、非常にかなしがつて答へた。

一存じも寄らぬことを承るものかな。「夏衣われは一重に思へども人の心に裏やあるらむ」と申す本歌の心にて、久しく打ち絶えたるを恨み申せしなり」

と云つた。

上人み氣色斜ならず、その後は志もいやまさりて、通ふてゐた。

が、生者必滅老少不定の例を、目のあたりに見するやうに、この兒が今年の九月の初に、急に死んでしまつた。病氣はひどい瘧疾であつた。典藥頭大江實房にも、私のつてがあつたので、託て貰うたし、もろ〳〵の加治祈禱も修し、おしまひには上人自身、肝膽を碎き、諸天諸尊を驚し、責めに責めて祈られたが、露ばかりも、効顯がなくて、九月五日と云ふに、ついに空しくなつてしまつたのである。

上人の嘆きは、世の常ではあつた。宛ら、掌中の玉の見る〳〵露と消え、髻しの花の忽ち、嵐に吹き折られた思がして、心地生きぬべうもなかつた。

上人は、今年六十五であつた。あまりに生き永らへばこそ、かゝる悲しき思もするのだ。いとしきものを、先き立て、命永らへて何かはせんと思つた。法師としても、僧正にこそなつてはゐないが、世の覺え、人の聞えも、限なくいみじき身であるから、もうこの上の望みはない。いとしきものゝ先立ちしこそ、早く寂光淨土へ往生せよと如來の結緣したまふなるべしと思つた。

上人は、さう考へて來ると、悲しみの心の裡にも、ほのぼのと光明が、射して來るやうな氣がして、如來の來迎とはかゝることをや云ふなるべしとさへ思つた。

上人は、いろ〳〵考へた末、三七日の間無言して、結願の日に、首を縊りて、往生せんと思ひ企てた。最初、上人はそれと、自分ひとりで、わきまへて行はんと思つたが、かくては、心變はりすることとあるべし。一定往生せんには、人

にもきこえて、おのが心のいましめともせんと思つたから、ある夜ひそかに小原の僧正なる顯眞上人を、訪ひまゐらせて、志のほどを打ちかたらつた。

僧正は、初はいと心得ぬ氣に、聞いておはしたが、上人の志の動しがたいのを見ると、あまたゝび感嘆して、「いみじくも思ひ立たれつるかな。さばかり、思ひ立たせたまふを、止めんも心なければ、思のまゝに執り行はせたまへ。極樂に往生し給はんこと、ゆめ疑はじ」と、勵ましてくれた。

上人は、心の裡が、秋の空のやうに、澄みわたる心地がした。煩惱の雲名殘なく晴れ、雜念の嵐跡を絶つて、往生の期の一日も早いことを待つて居た。

顯眞僧正は、上人の企てを誰人にも云ふつもりではなかつたが、古しへにも後世にも、ためし稀なほど、有難く尊いことだと思ふに付けても、自分一人の心の裡に、隱してゐることが、勿體ないやうに思はれ、往生の一事があつた後にあはれさる有難き生佛ならば、姿をも拜み奉るべかりしになど、諸人の怨みつらんほども考へられたので、おのづと噂が立つやうにもてなして寺中の人達に知らしてしまつたのである。

寺中の兒、法師達の驚きは、一方でなかつた。觀音菩薩の生身のお姿が、現はれたか何かのやうに、打ちどよもして口々にあがめ奉らぬはなかつた。

上人は、寺中のどよめきを外に、四五日は行ひ澄ましてゐたが、齋を參らせる兒などの、上人に對する容子が、とみに革まつて、宛ら本尊の大日如來の前にでも、出たやうに、いみじくおろがみ奉つたから、上人はかたはらいたくは思つたが、さてわるい氣持がするほどでもなかつた。ひとり給仕に出る兒ばかりではない。廊下で行き交ふ役僧や、靑法師、さてはやんごとなき上人までが、あはれ末代にも、逢ひがたき人にて、おはすかな。いみじく思し立たれたりなど、向ふざまに賞め奉つた。初は、いと面伏せに思はれたが、だん〳〵人が賞めて呉れるのが、當り前のやうに考へるやうになつて居た。

が、噂は、寺内丈に止まつて居なかつた。一人二人、參詣の人が聞き知ると、忽ち霜月の野を燒く火のやうに、忽ち

都の内にひろがつてしまつた。

「小原には、目のあたりに、極樂に往生し給ふと云ふめでたき上人おはします。行きて結緣し奉らばや」と、都の人々が、老ひも若きも、男も女も數を盡くして小原へ集つて來た。小原の僧正も、佛緣を結ぶには、又となき時と思つたので、一七日の間、往生講を催し、都の名僧を數多請じて、別時念佛を始めた。その騷ぎが、光明院始つて、空前絕後と云ふほど、いみじいものだつた。

都より小原まで、人垣を作りて詣うで來る人、日に千萬と云ふ數を知らず、檢非違使の廳より、一人の長に數多の放免を附けて、非違を警しめるほどになつてしまつた。

上人は自分の投げた礫が、あまりに大きい波紋を描いたので、少し空恐しう思はれたが、諸人にかくまで、おろがまれることの、こよなううれしかりければ、仔細に行ひ澄まして、日に五度と、數を定めて、出でゝ拜まれるのであつた。が、同法の上人の中には、出でゝ拜まれるなどと云ふことは、少しやり過ぎてゐる。いさゝか、興行めきて居て、穩當でないと云ふ非難があつたが、さばかりに慕ひまつりて、遙々と來ぬる人々を、むげに返しぬる事やあるとて、續けて拜まれてゐるのであつた。

その裡に、日が經つて、後一七日ばかりになつてしまつたが、參詣の群衆は、一日と數が增してゆくばかりであつた。上人は、初めは往生の心が、ほがらかに澄み渡つて、障害の雲の立ちのぼるべき、山の端さへないやうだつたが、僧俗男女に、あがめ奉らるゝまゝに、名聞の心は、はしなくも萠した。かくばかり、人々にあがめられて、世を過さば、いかばかり樂しくうれしかるらんと、思ふにつけても、結願の日の近づくことが、少し物憂く思はれるやうになつた。

折りしも、九月の半で、毎夜のやうに、月が澄み渡つた。これまでは、いつでも見える月、今年見ないでも、來年は見られる月だと思つて、そんなに心にも、止めて見なかつたが、一七日の後には、死ぬるべき身に、これや今生の月の名殘りと思へば、白銀の光いとゞ、冴えかへりて、あはれいやまさり、彌陀の淨土の無量光の光と云へども、これにはよも過ぎずと思ふにつけても、あはたゞしくも去る浮世の名殘が、だん〳〵悲しまれるやうになつて來た。どうせ、老

先のない身體だから、自分で往生を急ぐにも及ばなかつたのだと思つた。

その上、一番いけないことは、兒が死んだのを悲しむ心が、だん／＼薄くなつてゐることだつた。初めは、今日にも往生して、なつかしき面影を見むと思つて居たが、そんな心も、だん／＼無くなつた。その上、兒が自分の言葉にも背き、念佛なども、唱へた事のないのを思ひ合はすると、必定極樂にて、廻り合はんとも定つてゐない、そんなことを考へると、いよ／＼往生するのが、心細くなつて來た。

が、それにも拘はらず、一日一日結願の日は、近づいて來る。そして、一日一日參詣の老若男女の數が殖えて來る。

「はや四日にて、ありがたき往生の姿を見奉らんぞ。あはれ、紫の雲や虛空にたなびき渡らむ。樂の音や雲間にひゞかなむ。」

などゝ、上人の耳ちかく呟くものさへあつた。上人は、無言の業を修しながらも、いよ／＼堪らなくなつて來た。などてかくは、人々のかしましくひしめき合ふならむ。自分一人、往生の素懷を遂げようとするのに、何も他人が、こんなにざわめかなくつてもいゝではないか。これと云ふのも、顯眞座主が、自分のそつと相談したことを、公けに洩らされたのが、わるいのだと、今は心の裡でそつと、恨み奉るやうになつてゐた。

群衆は、日毎日毎增して來て、お天氣のよい日などには、坊の周圍に、蟻の甘きに付くやうに、むらがつてゐた。中には、物賣る翁さへ交じつてゐる。その人達の擧ぐる念佛の聲や讃嘆の聲が、上人の耳におどろ／＼しく聞えて來る。

結願の二日前には、これまでにないやうな群衆だつた。そのうちに、いとうつくしき女車二つまで、交じつてゐた。何某の內親王のあまりに、尊くや思はれけむ、ひそかにまゐりたまふぞと聞えて、道俗どもの、のゝしり騷ぐ聲、かまびすしく聞えて來た。

上人は、願を起した始には、心もほがらかにおはして、自分自身發心のことであるから、いさみはげみて、おはせしが、世の人に聞えて、道俗男女の、打ちさはぐまゝに、今はこれらの人々に、追ひやられて、無理矢理に首を縊らされるやうに、考へられて來て、心が鉛のやうに重くなつてゐるのである。

結願の日が、二日三日と迫るまゝに、上人は、ます〳〵悩みもだえて來た。兒に對する追慕の心などは、自分の悩みのために、もうとつくに忘れてしまつた。とにかく、今しばし生き永らへて、何うにでもならう。何か生き永らへる方法はないかしらんと考へた。天變地妖などの出でよかし、畿內中國などに、いみじき謀反人の起れよかし。都に大火事が起らないかしらん。この坊も、潰ぶれるやうな大地震もふるへかし。そんな風な大事件に、取りまぎれて、世間の人々が自分のことを、忘れて呉れゝばいゝのだがと思つたが、何うして上人の望みは叶ひさうもなかつた。世は太平が、打ち續いて、時津風枝も鳴らさず、諫皷苔深しと云つた有様で、殊に今年は稀なる豐作である。都に鬼の出る噂もなければ、小さい慧星さへ出ない。たゞ、上人がふと考へついたことは、中宮が御懷胎だと云ふ一事である。つひこの間、それに就いて、叡山や三井寺などでも、安產の御祈があつたやうである。あはれ、男皇子などの一日もはやく、產れませよかし。そのおよろこびや、そのお祝ひで、きつと勅諚に依つて、今しばらく往生を、延ばせよと云ふことになるに違ない。さうなれば、堂々と公けに、晴がましく生き永らへることが出來る。どうか、さうなつて欲しい。さう考へると、往生せんと念佛する心は、無くなつて、たゞ一心不亂に、中宮の御安產を祈つてゐた。が、いかばかり法力のおはしませばとて、まだ身もごりて六月にならぬ中宮の、などて四日五日の裡に、皇子產みまさむいと笑止であつたが、そんなことに氣が付かぬほど、上人は心狂しくなつてゐたのである。

その裡に、結願の日の前日になつてしまつた。上人は、最初自分で死なうと思つて居た頃は、死ぬのがそんなに恐くなかつたが、今は何萬何千と云ふ人の力が加つて、自分の肩や腰を押しながら、ひたぶるに「死ねよ。死ねよ」と、催促されて見ると、死ぬことが恐しくなつて、目が眩き氣が遠くなるやうであつた。そんなに集つて來る人の中には上人の弟子もあり、俗緣の人もあつた。その中に、一人位は、もう少し生き永らへてこの世の名殘りを惜しめと、云つて呉れる人が、ありさうに思つてゐたが、みんな眞面目くさつて、よにも有難氣に上人を、禮拜する丈で、上人に別れるのが悲しいからしばし止まれと云つて呉れる者はなかつた。上人は、げにも賴みがたきは、人の心なりと、ひそかにかこ

ちおはせども、無言の行を修したまへば、それとなく自分の心持を、口に出して云ふことさへ出來なかつた。たゞ、右大臣の賴文卿のみは、最後の命の綱と思つて賴んで居た。これは、上人の姉の子である上に、幼少のときは上人に就いて、學文をした上に、人となりたまひし後も、師檀の契が深かつたから、この君こそ、きつと、自分の死ぬのを止めて吳れるに違ない。さいつ頃より、熊野へ詣うでたまへるを、一日千秋の思で、歸洛を待つて居られたが、昨日歸洛あつて、今日は小原へ來ると云ふことづてがあつたから、上人はこれを彌陀の來迎よりも、ありがたく心を躍らせて待つてゐた。

午の刻ばかりに、いと美しく裝ぞくして、お見えになつた。上人は、賴文卿の顏を見ると、淚が湯のやうに、ほとび出すのを、抑へることが出來なかつた。自分の淚を見ると、屹度自分の心の裡を、いくらか察して吳れるに違いないと思つてゐたが、さはなくてあまたゝび、禮拜されたる後に、

「急き候かひありて、うれしくも、御最期に逢ひまつりしものかな。伯父君のおん姿のかうがうしきこと、生身の觀世音もよもすぎじと覺え候ぞ。あはれかゝる貴き生佛と、緣につながるこそ、賴文の過世いみじき果報なれ。なほこの上は、尊き往生の姿をも見奉りて、觀念修業のたよりともせむ」

と、いと凉しげに申されければ、上人今は盲龜の浮木に離るゝ心持して、苦しく惱しく思はれた。

その裡に、いよ〳〵結願の日が來た。上人は、前の夜心惱ましく、睡むれなかつた。たゞ、曉頃にふとまどろみけるに、坊の外に大勢の足音よと覺えて、夥しく騷きこえけり。あやしや誰やらむと、見給ひけるに、はや中門の中に込み入りぬ。庭上には、猛火烈々たる火の車を、遣り居てあつた。炎の中に、鐵の札の立てるが、おぼろに見えけるが、無間地獄の罪人とかきたり。時に、靑赤黃白黑の鬼共、大床に飛び上つて、上人を引き立てんとす。上人駭き怖れて、「こは何處へ見するぞ。年頃の戒行をあはれみて、ゆるさせ給へ」と、叫んだが、會釋もなく、掻い摑んで、火の車に抛げのせ、刹那が間、空中を翔ると見て、夢さめたり。その間の苦しさ喩ふべきものもなかつた。額には、あぶら汗が玉のやうに浮んでゐた。あはれ、死んで地獄に落ちる正しきしらせだと思ふと、上人心も肝も、身に添はず、たゞ烈し

く顫えるばかりであつた。

よしなき往生の思を起したゝめに、却つて思ひがけぬ妄執に囚はれて地獄へ落ちるのかと思ふと胸が掻きむしられるやうに悲しかつた。

その裡に、結願の朝は、シラ〳〵と明けた。前の晩から、大雨か大嵐かになつたら、それを口實に一日でも延ばすつもりであつたが、晩秋の空なごりなく晴れて、西の山の端に、あを雲が、少したなびいてゐる丈であつた。

夜が明けぬ裡から、老若男女が、廣い境内に、一杯にみちみちて、念佛の聲を擧げてゐた。その聲が、集つてゐる僧俗の耳には、いとすが〳〵しく聞えて、今にも極樂が、まのあたりに出現するやうに思はれたが、上人の耳には、夢で見た五色の鬼が、口々にのゝしり騒いでゐるやうにしか聞えなかつた。

殊に、上人が首を縊る筈になつてゐる榎木の周圍には、青法師どもが、群れつどいて、聲高く讀經してゐたが、その榎木が、上人には地獄に在りと聞く、劍の樹のやうにしか見えないのであつた。

辰の刻近くなると、群衆の有樣は潮が、滿ちて來るやうだつた。乘り捨てゝある輿の車さへ、數へがたいほどだつた。未明から來てゐる連中は、樹の蔭や坊の縁などで、割籠を開いて居るものさへあつた。かれ飯を出して喰つてゐるものさへあつた。午の刻には、群衆の數が、五萬以上に達したと、役僧達が云つてゐる。坊へ落ちるお布施丈でも、大變だらうと云ふので、僧正以下おほ欣びである。雲林院の菩提講のときの群衆だつて、この半分もないだらうとは、皆の一致した見方であつた。

正午が過ぎると、群集が少し待ちくたびれて、催促する聲が、所々に、起つて來た。今は、然るべしとて法師どもが上人を、促したが、上人は魂がぬけたやうに、本堂の一段高い所に、坐つたぎりで、返事さへしないのであつた。

所が、玆に覺正法師と云ふ同法の上人が、一人おはした。學文も、戒行も、上人と相比敵して、何事にも並び立ちおはせしが、上人が往生の志を起してからと云ふものは、上人の噂丈が、世にかまびすく聞えて、坊内での尊敬も一方でなく、今まで寂眞覺正と、並び呼ばれてゐたものが、一人は九天の雲よりも高く、一人は緣の下の土くづのやうに、聞ゐ

なくなつたので、心安からず思ひて、いかにもして、寂眞の往生を妨げんと、腹黒く企みて、おはせしが、一午の刻を過ぎて、上人が捗々しくも、仕度をしないのを見ると、今こそと思つたのであらう。さりげなく云ふのには、

「これほどの義になりて、別の仔細あるまじく候へども、凡夫の心は、刹那の間に、とかく變る習にて候へば、もし妄執も殘り、他に思召す事もあらば、仰せられよ。今は無言も詮なく候」

と云つた。日頃、快くも思はなかつた覺正法師の言葉が、上人は胸にしみわたるやうにうれしかつた。上人は、溺るる者が、藁を掴むやうに、その言葉にしがみ付いた。

「いしくも云ひたまひしものかな。われも思ひ立ちし時は、心も勇猛なりき。志厚かりし者の、とみに失せ候ひし時は、一日もとくとく臨終して、かゝるうき事も、聞かじばやなんと思ひしが、今は心もゆるみて、いそぎ死せばやとも覺えぬぞ」

と、力なく云つた。それを、聞いて居た上人の弟子の一人が、怒つた。この弟子は、年來、秘藏の弟子で、在家法師であつたから、都に住んで居たが、上人の深き志を聞いて、欣びいさんで、京から來て居たが、身分から道場では疎ぜられるので、少し不平であつたが、上人のかうした述懷を聞くと、諸人に聞えるやうに、聲高に云つた。

「ものゝ義なんどあげつらふは、定まらぬ時の事也。これほどに、のゝしり披露して、時日も定まり、結縁の人々もあつまり、往生の樣をおがまんとするに、なまこざかしき　さかしう異義の出來候こと、返す返すもあるまじきことなり。御往生さまたげんとする天魔の所爲にこそ、とくとく御行水まゐらせて、いそぎたまへ。時刻延びなんが」

上人も、かやうにのゝしられて、今はこれまでだと思つたのだらう。漸く行水をして、新しき法衣に換えて、さて榎木の下に、立つたが手足に顫ひ出で、なよ〱として、ふらめくので、伴の僧が肩を押し腰をいだいて、やつと榎木に近づけまゐらせたが、年は取つて居るし、木は高し、かねてしつらへてある梯子にも、上りかねたので、また腰を押しやう〱定めの枝の所まで、のぼらせた。老いさらばえたる法師の、人に手を取られ、足を押され、ふるひをのゝきつつ、梢にあがりたまふさま、極樂往生の尊き姿はなくて、閻魔の廳の罪人の、牛頭馬頭に追ひ立てられ、刀山劍樹に追

ひ上せらるゝに、異ならず、人々最初は念佛して、いと神妙に見物してありしが、あまりにあさましかりければ、念佛の聲もうすらぎ、いと興さめてありける。上人とみに首を縊りたまはず、何か思案して、時うつりしかば、見物どよめきて、

「今更怯れたまふか」

などゝ、靑侍などの、のゝしりければ、いよ／＼怯れたまふと見え、繩を取る手のふるひわなゝきて、繩の首にかゝりたまはざるを見て、見物は口々にのゝしり始めければ、あはてたまふと見えて、繩の首にかゝらざるに、足を踏みはづしければ、首はくびれず、大地の上に、地ひゞき立てゝ落ちたまふた。

見物どよめきて笑ひぬ。置き上りたまふかと見えしが、打ちどころや惡かつたのだらう、そのまゝ息が絶えてしまつた。

見物のゝしりさはぐこと、しばらくは止まらず。

「とにも、かくにも往生はしたまひぬ。同じ死にたまふならば、などてやまともには首をくゝりたまはざる！」

などゝ、嘲けり笑つた。

が、群集が、嘲けりの聲の止まぬ裡、西に落ちかゝつてゐた夕日が、にはかに光明をましたかと思ふと、夕燒の雲が、みな紫に輝き始めて、虛空に、そこはかとなく、妙樂がきこえて來るのだつた、すると、今まで蛙のやうに、ひしがれてゐた上人の身體から、異香が薫んじ、ほどばしつてその匂が群集の間に、充ち滿ち、極樂往生の證、今はかくれなければ、諸人嘲けりの心須ち消えて、稱名の聲、しばらくは、大地をふるはせて起りにけり。

上人の臨終の不始末で、面目を失ひ、蒼くなつてゐた小原の僧正は、この奇瑞を見ると、こよなう有難つて、衣の袖をかきつくらひながら、「必定往定せんとして、惱み苦しみたまへるをなどてか、彌陀如來のあはれと思召さらん。首をくゝらんとて、えくゝりたまはざるこそ、ありがたき臨終の相なれ。」と云つたので、並居る上人達、みな袖になみだを、ほとびらせたまふた。

編輯を了へて

◇高橋一味はとうとう辭職した、われわれはそれは嬉しくおもつてゐる、しかし後繼者にも滿足はしない、どこまで行つても滿足は理想と嘲けられるかも知れない、が、我々はそんな意味で滿足しないのではなくて、もう期待をつなぐに絕望的な意味での不信任だ、さらばといつて加藤子か犬養氏、山本伯ならどうかとの質問があるなら、それも同樣に不滿足だ。

◇曾つて政治に携はつたことのある人には總べて不滿足だ、改革、革新には總ての點において無垢純淨の人を必要とする。

◇中岡、橋本の判決を一讀した、橋本に下した判決を一讀してこよなく嬉くおもつた。

◇いくたびも督促される讀者にお詫します、志賀氏の「暗夜行路」は八月號から必ず登載しますから。

◇この夏、精神的に修養したいが、どんな方面が面白くて有益であらうかと編輯子に質問されし友人に(編輯子はガンヂの研究、ラテノウの研究もおもしろいと思ひます)

◇二ケ月半の休暇をいかに暮したらよいかと相談されたブルジョアの友人に(それは米國の一巡が一番おもしろからうダージリンで印度思想の研究もおもしろからう若しもそれがプロレタリアトならば(上野圖書館が一番安くて涼しい)

◇それから飛驒、樺太、朝鮮の金剛山も旅行するには趣味が深からう、東京近郊では高雄、羽村、池上本門寺あたりかな。

◇しかし編輯子なぞは、とてもそんなまねはできない、先づ隅田の夕涼みや、一西の鉛戯に對して自分の鬱を散ずるぐらゐのものだ、であるが、星ふる靜夜、自分をいつくしみ、はぐくんだ親たちをシートと回想して夜をふかすこともある。

◇十年前の戀、それも忙しい校正のあいまあいまに頭をもたげることもある、シテ自分の鬢には三つ四つづつ白いものが殖えてゆく、淡い人生の執着が浮んでくる。

◇校正室の額を退窟まぎれに眺めて見る、大杉氏が送られたベニスの獅、倉田氏、無想庵氏より送られたこの三種の額面が暑いこの日に自分を慰めてくれること多大だ。

◇本社記者募集の發表は來月號に延期します。

◇谷崎氏著「愛すればこそ」は帝劇で上演さるる筈だつたが、其筋の注意で上演中止、今更ながら當局の鑑識眼には泣かされる。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八十錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	增大號共不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	增大號共不要

注文の注意

本誌一頁廣告料　一等　百圓　二等　七拾圓

▲御注文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御注文は壹部につき郵稅金拾錢を申受く

▲見本御請求の向まは振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

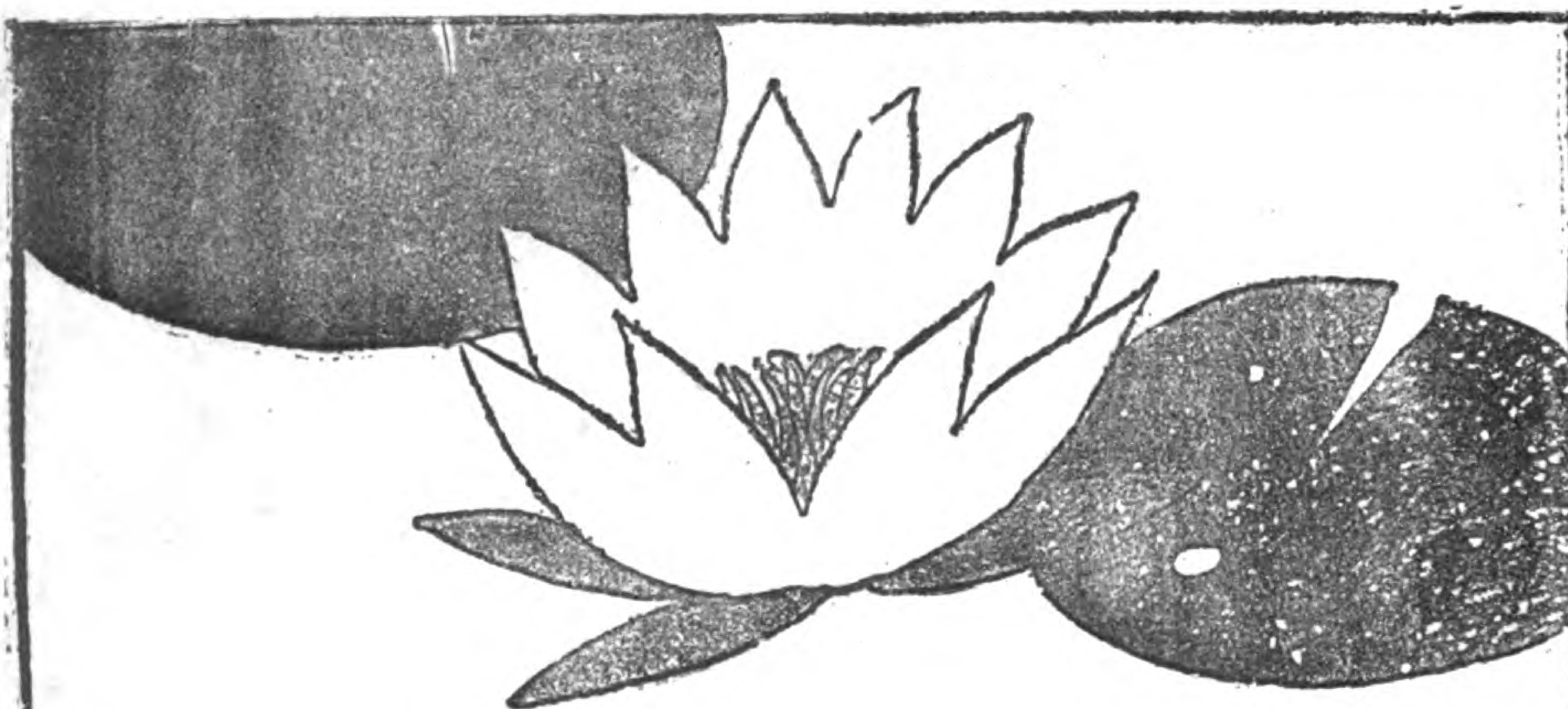
大正十壹年六月廿日印刷納本
大正拾壹年七月一日發行

七月號九拾錢

編輯兼發行者　東京市芝區伊皿子町四十番地　平田貫一郎
印刷者

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社
電話芝(長)一六三八　芝二八五四　芝四三〇三
振替東京八四〇二



◇中元格安反物賣出し（七月一日より十三日迄）

◆夏座敷用品陳列（七月六日より十三日迄）

◆運動展覽會（七月十九日より廿九日迄）

商品券　中元御贈答品として便利でよいとて非常に重寶されてゐるのは三越の商品券

◆旅行用具は三越の品に限ります各種ともお恰好な品が潤澤に揃ふて居ります

中元御贈答品は三越の品

何人にも喜ばれ、何人にも嬉しがらるるのは三越の品であります、殊に本年はお恰好品を澤山陳列して御座います

七月の定休日は二十五日だけです、十日はお盆のお買物の爲め休みましては非常にお不便と存じまして七月は休みません

三越呉服店

◆東京駿河町◆

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可　大正拾壹年七月壹日發行（毎月一回一日）
大正拾壹年六月廿日印刷納本　第四巻第七號
七月號
定價金九拾錢